

---

# ポケモン ジョウトADVENT

\*snow white\*

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケモン ジョウトADVENT

### 【Nコード】

N2015L

### 【作者名】

\*snow white\*

### 【あらすじ】

12歳になった少年 エイトが、ポケモンリーグ出場を目指してワカバタウンを旅立つ。

旅の途中では、明るく元気なお騒がせ少女や、憧れを抱く気さくな先輩トレーナー、そして、さまざまなポケモンたちと出会い、時には別れ、ともに成長していく。

そして、ロケット団につぐジョウト地方を暗躍する新たな組織とも

関わることとなり、旅には、楽しさだけでなく、厳しさや辛さも  
あらわれることとなる。

この物語は、エイトたちのジヨウト地方をめぐる大冒険である

## プロローグ（前書き）

はじめまして！この小説の作者の\* s n o w    w h i t e \*です。

はじめてなので下手なところはありますが、温かく見守ってやって下さい。

プロローグが途中でできていたので、再修正しました。

2010.8.20

## プロローグ

この世界にはポケットモンスター（通称ポケモン）という不思議ないきものがある。

昔から人間とポケモンは、互いに助け合い仲良く暮らしていた。だが、その生態には謎が多いため、たくさんの学者が研究を続けてきたのだが、未だ未知な部分が多いようだ。

そんなある日、一人の少年がワカバタウンを旅立つ……

これは、一人の少年と仲間たちの波乱万丈で過酷な旅の物語である。

リリリリリン リリリリリン……

AM 7 00 部屋中に目覚まし時計の音がこだました。

……バシッ

僕は、少し荒々しく目覚まし時計をたたき、目をこすりながらリビングへと向かった。

……ついに、この日が来たんだ。今日から僕もポケモントレーナーの仲間入りだ！

その時は、トレーナーとして旅に出ることが出来る喜びが溢れていたのだ。

しかし、これからたくさんのお出来事が僕を待ち受けているのである。

……もちろん、僕はそれを知らない

## プロローグ（後書き）

今回はプロローグだけでしたが、次回は物語がスタートします。

感想やアドバイスお待ちしております！！

**第一話 家での会話、そして旅立ち（前書き）**

今回はタイトルの通りです。

そして、主人公が初登場します あたり前でしょ（笑）



## 第一話 家での会話、そして旅立ち

僕がリビングにいくと、すでに朝ごはんができていた。

今日は、僕の好きなサンドイッチ。……でも、しばらく食べる事ができないと考えると少ししんみりしてきた。

……おつといけない。自己紹介がまだだった。

僕はエイト。12歳だ。

えっ10歳じゃないの？と思った人もいるだろう。

人は、普通10歳になると旅にできることが許されるのだから。

僕は、トレーナーズスクールを10歳の時に卒業できたはずなんだけど、お母さんから

「あと2年間はミッチリ勉強しなさい。」

と言われたせいで卒業したのはついこの間である。そんなに頭が悪い訳ではなかったのにな……。

でも、そのおかげで、ある程度のポケモンバトル知識はそなわった。

はなしをもどそう。

僕はサンドイッチを食べながらテレビを見ている。

この時間は、有名なポケモントレーナーにせまる

《ジョウト・トレーナーズ》という番組をやっている。  
今日のゲストは、ホウエンリーグベスト4のユウヤだ。  
このトレーナーは、ジョウト地方出身だから僕の周りではすっごく  
人気があるし、憧れの存在だ。……当然会ったことはないけど。

「エイト、テレビばかり見てないではやく朝ごはん食べなさい。  
い。」

お母さんに注意される。

「はい。」

返事をしたあと急いで残りのサンドイッチを食べる。

「……エイト、ついに旅立つのね。」

いきなりお母さんがいった。

2年前は旅に行かせてくれなかったけど、今は違う。ちゃんと僕を  
認めてくれているのだから。

「頑張りなさいよ。ジョウトリーグ楽しみにしてるんだから！」

へえ……一応期待してはくれるんだな。ちょっと意外。

「ゼツタイ優勝するから！誰にも負けないよ。……そしてごちそう  
さま。」

「そのいきよ……さ、ごはん食べたことだし、研究所に行つて  
きなさい。さみしくなったらポケギアで連絡していいんだからね。」

……いつてらっしやいー!」

お母さんは、力強い声でいった。あまりしんみりしないところがすごいな……。

「いつてきます。」

僕は一言だけいいのこし、家を出てウツギ博士の研究所に向かった。

「……エイトは大丈夫なのかしら。ねえ。」

お母さんは、僕が家を出てからそう呟いたので、僕の耳には聞こえなかったのであった。

**第一話 家での会話、そして旅立ち（後書き）**

ついに、主人公のエイトが旅立ちました。  
彼の旅は一体どうなることやら……。

次回はウツギ研究所へ行きますよ！

第二話 a t ・ウツギ研究所（前書き）

エイトはウツギ研究所へ向かう……

## 第二話 a t ・ウツギ研究所

ウツギ研究所には5分もたたないうちについた。さっそく中へはい  
る。

「やあ、エイトくん。まっていたんだよ。」

ウツギ博士は僕を歓迎してくれた。

「お……おはようございますー！」

僕はなにかと緊張してガチガチだ。

「エイトくん落ち着いて落ち着いて……さあさっそくこっちにきて  
ごらん。」

そんな風にいわれても落ち着けないよ……というかよけいキンチョ  
ーするよ。

そう思いながらウツギ博士の元へいった。

「エイトくんも今日から旅立つのかあ。なにかとさみしくなるねえ  
……。」

……この言葉はどういう意味でいっているのだろうか。  
僕が旅立ってしまったら、ワカバタウンの子どもが減ってしまうか  
ら寂しいということだろうか。

「そんなことより、はやくポケモンをもらいたいですけど……。」

僕は、はなしをそらすつもりでそういった。

「ハハツ……エイトくんはせっかちなだね。」

ウツギ博士は、僕をからかうようにいった。

「そ……そんなんじゃないですよ!」

僕はやけになっという。

シンオウ地方の友達、ジユンは僕の何百万倍もせっかちな!  
彼を待たせると罰金を請求されるくらいであるのだから。

実は、僕はもうパートナーは決めてきている。

僕が選ぶのは……

……ヒノアラシだ!……!

「ウツギ博士、僕は、ヒノアラシをパートナーにします!……!」

僕は、はつらつといった。

「……決まっていたみたいだね。これがヒノアラシのボールだよ。エイトくん、ヒノアラシをよーくかわいがってあげるんだよ。」

「わかってます！……よろしくなヒノアラシ。」

「ヒノヒノヒノー」

ヒノアラシは元気よく鳴いた。

「はは……うれしそうにしてるね。」

ウツギ博士は感心している。

「そっだ、エイトくん……ちょっと悪いんだけど………」

「ウツギ博士どうかしたんですか？」

僕は、ちよつと心配そうな声でいった。

「ついでといったら悪いけど……おつかいをたのめないかな？」

「おつかい……ですか？」

「うん。30番道路に僕の知り合いの『ポケモンじいさん』と呼ばれる人がいるんだ。その人から珍しいタマゴを預かってきてもらいたいんだけど……ダメかな？」

「いいですよ。ひきつけます……！」



僕は、珍しいタマゴに興味があったので、おつかいに行くことを承諾した。

「ありがとう！……それじゃ頼んだよ。」

「任せてください！すぐに戻ってきますから。」

僕は自信ありげにそういつてみせた。

そして、ヒノアラシと一緒に30番道路へ向かうことになったのであった

第二話 a t ・ウツギ研究所（後書き）

エイトのパートナーはヒノアラシです！

次回からおつかいのスタートです！！

第三話 エイトVSロリッタ軍団+ヨシノでの出会い(前書き)

ヨシノシティへ向かうエイトなのだが……

### 第三話 エイトVSコラッタ軍団+ヨシノでの出会い

30番道路に行くためには、ワカバタウンから西へ行ったところにある29番道路を通り、ヨシノシティに行く必要がある。

そして僕は、29番道路にいる……のだが、今なんとコラッタの大群におそわれている!!!!!!

「ヒノアラシ体当たり!」

「ヒーツノ!」

僕の指示で、ヒノアラシはコラッタに体当たりし、一匹目はたおすことができた。……だが、大群というだけあって数が多すぎる。これではキリがない。

そもそもなぜこうなったのかというと、僕がコラッタのしっぽをふんだからである。それに怒った仲間たちが一斉に駆けつけ、僕とヒノアラシを追いかけてきているということである。……要するに『自業自得』という言葉がふさわしい。

……こうなったら最終手段しかない!

「ヒノアラシ 逃げるぞ!!!!!!」

僕たちは、猛ダッシュで29番道路をかけあがった。

僕は、足は速いほうだから大丈夫だと思っていたが、コラッタも速い。おそらく体が身軽だからだろう。

て……そんなことを考えている場合ではない！！今は逃げない！僕は、走る速度をはやめようとした。しかし、ヒノアラシを見ると、ゼイゼイと息があがっていてつらそうにしている。……まずいな。

「戻れ、ヒノアラシ！」

僕は、ヒノアラシをボールに戻した。これ以上走らせたらトレーナ―失格だと思ったからだ。

だが、先のことを考えてなかった。

どうすればいいんだ！どうしたらとめることができるんだ！

僕は、コラッタから逃げながら、退ける方法を考える。しかし、全く浮かばない。

やられるのか……それは、それは                    さすがにかっこわるいだ  
る！！！！

そう思った瞬間……

ピンッ

頭になにかがよぎった。

……そうかその方法があったか、でもなぜ気づかなかったのだろうか？

僕がバカだから？……それは断じて違う！

まあ……とりあえず撃退するでしょう。

僕は、バッグからあるものを取りだした。

あるものとは、遠足の時にお弁当を詰めたりするようなバスケットケースだ。それは、一般にポフィンケースと呼ばれる。

でも、なぜ僕がもってるかって？

シンオウ地方の友達のジュンがくれたんだ。

まるやかポフィンを10個ほどケースから出して、コラッタたちのいるほうに投げた。

甘いおいにさそわれて、コラッタたちはポフィンのほうに集まっていく。

そして、次々に食べ始めた。様子を見ると、とてもおいしそうにしている。

……はぁーたすかった。一時はどうなることかと思っただよ……。

さあ、コラッタたちがポフィンを食べているうちにヨシノシティに行こう。

僕は、少し急ぎめにヨシノシティへ向かった。

〔ヨシノシティ〕

はあ………やっかついたよ。それにしても疲れたなあ……。おっといけない。はやくポケモンじいさんの家に行かないと。

僕は、30番道路の方へ歩きはじめた。いや、急いでいるので走り出した。

タツタツタツタツ……ドスンッ!!!!

いてて……僕は誰かとぶつかったみたいだ。

「あいつたあゝ……」

ぶつかった相手はどうやら女の子のようだ。

「ごめんっ」

僕はとっさに謝った。

「ううん、大丈夫だよ。心配しないで。」

女の子はそういった。

「わたしは、リナ、よろしくね。……あなたの名前は？」

「僕はエイト、よろしく。」

僕たちは、お互いに自己紹介した。

「ねえエイトくんは新人トレーナーなの？」

リナに問われた。

「うん。そうだけど……あつあとエイトって普通に呼んでよ。なんか堅苦しいじゃん。」



「じゃあエイトってよぶね。わたしのことはリナでいいから。それで、エイトも新人トレーナーなんだあー。実はわたしもそうなの。あのさ、いきなりだけど……い……一緒に旅しない?？」

リナは僕と一緒に旅をしようといったのである。

えっ……今のはいったい……マジでいつてるのかな?

「あのさ……」

突然のことだったために、少し行き詰まってしまった。

「やっぱりダメ?」

リナが僕の顔をまじまじと見ながらいう。

「いいに決まってるじゃん!……改めてよろしく!」

「いいの?やったあ!……!……!……ちこそよろしくね。」

こうしてエイトはいきなり出会ったリナと一緒に旅をすることにな

った。

これも、  
”運命”  
というものなのだろうか

**第三話 エイトVSロケット軍団+ヨシノでの出会い(後書き)**

リナがエイトと同行することになりました!!

リナ みんな、よろしくね

エイト 次回も楽しみにしてください!

第四話 ポケモンじいさんの家…？（前書き）

ポケモンじいさんの家に到着したエイトとリナだが…

## 第四話 ポケモンじいさんの家…？

僕とリナはポケモンじいさんの家の前にいる。

ハアツハアツハア…

息があがっている。

それは、ここまでくるのに多くのトレーナーにバトルをいどまれたからである。

僕は、まだバトルになれていないから、かなりつかれた。

「エイト、もうばてたの？」

リナはあまり疲れていないようだ。

…… 僕のほうがばててるなんてみっともない。

「…… たぶん大丈夫、はやく中に入ろう。」

僕は焦りながらいった。

「…… ねえ、わたしと一緒に入ってもいいのかなあ…？」

リナは不安げにいった。

…… そういわれてみればそうである。僕はウツギ博士に頼まれたわけだが、リナはそうではない。

「べつにいいんじゃない？細かいことはきにすんなよ。」

僕はおもったことをいった。

「それもそうだね。…… それじゃあはいるよ。」

リナは扉をあけようとしている。

…まったく遠慮という言葉を知らないんだから……困ったヤツだ。

リナはこんな風に思っている僕におかまいなく、中へはいつていく。僕はリナを追いかけるため、なかに入ろうとした。しかし、リナが外にでてきた。

……やっぱりおいだされたんだな……と思ったが、そうではなかった。

「ねえエイト、誰もいなかったよ。もしかして家まちがえたのかなあ？」

誰もいないだって？ウソでもついてんのかよ！と思ったが、それはいわずかわりに

「確かにここのはずだよ。

確認してくるから待ってて。」  
と聞いた。

「わかった、待っとくよ。」

リナは、意外とすんなり受け入れた。

……ギーンッ

ドアをあけるとなんともいえない音がする。

「失礼します…」

遠慮がちになかに入る。

…だれかさんとはおおちがいだ。

『だれかさんって誰よっ！！！！』

と声が出たような気がするが、気にしないことにした。

なかを見渡してみたら、渋いリングマの置物があったり、気味の悪い黄緑色の液体があったりするだけで、やはり誰もいなかった。リナはウソをいっていなかったようだ。

…まじで誰もいないじゃん。ウツギ博士はなにが良かったんだ？ポケギアでウツギ博士に連絡してみないとかなあ…と思ったが、テーブルの上に紙きれが置いてあるのに気づいた。手にとってみると、

『ただいま私は外出中です。　　ウツギ博士、タマゴをよろしくお願ひします。』

と、書かれているのが分かった。

近くにあったタンスの上にタマゴは置いてある。それはとても不思議な模様をしているため一体どんなポケモンが生まれてくるのか想像できなかった。

僕は丁寧に、

『タマゴをお預かりしました。

ウツギ博士の助手より』

と、自分の持っているメモ帳に書いて、テーブルに置いた。

…さあ一応おわったことだし戻るか。

リナを待たせていることがあるため、急いでポケモンじいさんの家を出ることにした。



第四話 ポケモンじいさんの家…？（後書き）

次回はお約束の展開です！！楽しみに

第五話      B a t t l e !      V S 赤髪の少年（前書き）

お約束の展開のはじまりはじまり〜

## 第五話 Battle！ VS赤髪の少年

ポケモンじいさんの家をでるとリナに、

「おそかったね。なにかあったの？」

といわれた。……おそかったのか？5分くらいで終わらせたつもりだったんだけど…と思ったが、あえて声にはださない。そして、

「ポケモンじいさんはタマゴをウツギ博士に預かってもらいたかったみたいだ。」  
「  
といた。」

「へえーポケモンのタマゴがあゝエイト見せてよ！」

リナは、目を輝かせていった。どうやらポケモンじいさんの家に入ったときにタマゴをみていなかったようだ。

「分かった。ちょっと待ってて。」

僕はタマゴをだそうとした。しかし、

プルルルルルル…

突然、ポケギアがなった。

僕は急いでポケギアをとりだした。電話してきたのはウツギ博士だ。

「もしもし、エイトですけど…どうかしました？」

「エイトくん、大変なんだ!!!」

ウツギ博士は焦っているようだ。

「あの…なにかあったんですか？」

僕は尋ねたが、

「とにかく大変なことになったんだ!!! だから、はやく研究所にもどってきてくれないかな？」

とだけいって電話をきってしまった。

僕はすぐに、

「リナ！急いでワカバタウンにもどらないといけなくなった。…ついでに来てくれるよな？」

と聞いた。

「もちろん!!!ダメっっていわれてもついてきてたよ!!!」リナはなんとも思わずにYesだと示した。彼女らしいこたえ方だ。

「まずはヨシノシティまで戻ろう！」

「うん！いこう、エイト！」

二人ははしりだした。

……それにしてもウツギ研究所でなにがあったのだらう？すごく気になってしょうがないな。

それと、さつきリナはなにも追求してこなかったな……気楽なヤツだ……

はしっているとき、頭の中にあるんなことがよぎった。

「ヨシノシティ」

「ちょ……ちょっと……休憩……しない？」

リナがいった。どうやら息があがっているようだ。そんなリナに僕は、

「……じゃあ5分くらいかな」

という。

実際あんまりのんびりしてられないのだが、一人で自分勝手に進むわけにもいかない。結局、僕たちはいったんベンチに座って体を休めることにした。

「なあリナはどんなポケモンもってるんだ？」

僕は聞いた。さっきまでのバトルはすべて僕とヒノアラシでやってきたから、リナのポケモンを知らないのだ。

「あっそっか。まだみせてなかったよね。でてきて、ミズゴロウ！」

「ガヤガヤー」

リナは『ミズゴロウ』というポケモンをだした。こんなポケモン今まで一度もみたことがない。

「リナ、このポケモンはジョウト出身じゃないだろ。」

僕はリナに尋ねた。

「あつたり〜 よくわかったね ミズゴロウは、ホウエン地方のオダマキ博士っていう人からもらったポケモンなの。」

リナはちょっと驚きながら話す。

へえーハウエン地方か。ずいぶん遠い場所だな。……待てよ。ということは…

「リナってハウエン出身なのか？」

僕はとっさにいった。

「えっそうだけど。いってなかったっけ？」

リナは平然と答える。…いってなかったっけって僕は初耳だぞ！いってやりたかったけど、ぐっところえた。

「…そんなこといってる場合じゃない！急いでもどらないといけなかったんだ！…！というわけで急ぐぞ！」

僕は叫んだ。

「ごめん、エイト。急いでいこう！」

僕たちは29番道路にいこうとした。……が、前方から見知らぬ少年がエイトの目の前にきた。

その少年は真っ赤な髪をしていて目付きが悪い。いかにもガラの悪そうさだ。

> i 1 8 1 6 3 — 1 0 6 1 <

「……………おまえウツギ研究所でポケモンもらってたよな。」

見知らぬ少年が口を開いた。

「……………」

僕はなんといっついていいかわからず黙りこんでしまった。

「弱いヤツがトレーナーだとポケモンがかわいそうだぜ。おまえみたいなのにはもったいないだろうな。」

赤髪の少年はケンカをうつてきたようだ。

「……！」

今の言葉には僕でも力チンときた。

「なによ！調子にのって……！ふざけないでくれる？」僕より先にリナがヒートアップしていた。

「……ふざけている？笑わせるな。……だがそこまでいうならわからせてやるのか？」

「バトルってことね！……のぞむところよ……！」

「ちょっと待てよりナ！おまえには関係な……！」

「エイトとめないで！あんなエラーなヤツはやいとこたおしてしまっただから……！」

リナは完全に戦うつもりらしい。

「ミズゴロウ、でてきて！」

「ガヤガヤガヤ……！」



「いけ、ワニノコ。」

「ワニヤワニヤワニヤワー!!」

…！ワニノコだと！！もしかしてこいつ……ウツギ研究所から

僕はウツギ博士が焦っていたワケを確信した。

「みずタイプどうか…でも負けないよ！」

リナは気合い十分だ。

「先攻は譲るぜ。」

赤髪の少年はいう。一言一言のセリフがいらだたしい。

「ミズゴロウ、体当たり!!!!」

ミズゴロウはワニノコに近づいていく。

「ワニノコ、かわせ！」

ワニノコは素早く移動した。

「くっ…正面からの攻撃は通用しないか…」

リナは悔しげにいった。

「こんどはこっちからいくぜー!!ワニノコ、ひっかくー!」

「ワニヤーツ!」

技の名のとおり、ワニノコはミスゴロウをひっかくとする。

「…今よミスゴロウ、泥かけ!!」

「ガヤーツ!!」

リナの指示でミスゴロウはワニノコに泥をかけた。

「なんだと!!」

赤髪の少年は驚いている。

ワニノコは目に泥が入ったらしくフラフラしている。…チャンスだ。

「ミスゴロウとどめの体当たり!!」

「ガヤ                      ツ!」

……ドカンッ!!

こんどは命中したようだ。

「ワニヤア〜……」

ワニノコは目を回していた。

「どつやらわたしの勝ちみたいね。…たいしたことないじゃない。」

リナは強気にいった。

「フンツ…勝ってうれしいか？」

少年はいう。

「負け惜しみなんてかっこわるいだけよ。」

リナは思ったことをいっているようだ。

「負け惜しみなんかじゃねーよ。ちょっと手を抜きすぎただけだ。やっぱりちよつとムカつくヤツだと僕は思った。」

「…次あったときはオマエの弱さをバトルで証明してやるよ。」

ヤツは僕をみていった。

「…おまえの名前はなんなんだよ。」

僕はぶつきらぼうにいった。

「…俺はシルバー。世界一のトレーナーになる男さ。」

シルバーはそれだけいってどこかへ行ってしまった。

「…ホントヤなヤツ！」

リナはシルバーに向かってさげんでいた。

僕もなにかいってやりたかったが、そんなことより研究所に急がないといけないことに気づいた。

「リナ、アイツが気になるのはわかるけど、研究所に急いでいこう  
！」

「うん、わかった。」

二人はウツギ博士の研究所へ急いでいった。

第五話

Battle！ VS 赤髪の少年（後書き）

エイト　　なんで、シルバーとのバトルは僕じゃないんだ！  
作者　　次はちゃんと考えるからゆるしてよ

エイト　　しょうがないなあ…

リナ　　（エイト、もしかして文句いつてるのかなあ…）

第六話 本当の旅のはじまり（前書き）

ワカバタウンに戻ってきた二人……

## 第六話 本当の旅のはじまり

僕とリナはワカバタウンに戻ってきた。

「ここがワカバタウンかあ、いいところだね。」

なにげなくリナはいった。

「ここに来るのははじめてなのか？」

「うん。ホウエン地方からヨシノシティに引っ越してきたのはつい最近だから。」

「そうなんだな。…はやく研究所にいかないと。いくぞ！」

僕は研究所があるほうに走っていった。

「…あつ待つてよー!!」

リナは僕を追った。

〔ウツギ研究所〕

「ウツギ博士！どうしたんですか！！！！」

僕はすぐに尋ねた。

「…エイトくん！もどってきてくれたんだね。……実はさっき…ワ  
ニノコが盗まれたんだ！」やっぱり！これは絶対シルバーの仕業だ。

「僕たちワニノコをつれた少年をみたんです。」

「なんだって！！ホントかいエイトくん！」

「わたしそいつと戦いました！」

「リナ！そいつって言葉づかいかんがえろ！」

僕はリナに耳打ちした。

「…キミは誰だい？」

ウツギ博士はリナにむかっていった。ウツギ博士はリナと初対面だ。

「ウツギ博士はじめまして。わたしリナっています。」

この前、ハウエン地方からヨシノシティに引っ越してきました。今はエイトくんと一緒に旅をしています。」

「…リナちゃんだね。キミはワニノコを連れていた少年と戦ったって  
いってたよね。」

「はい。そうですけど…」



「彼の名前はわかるかい？」  
ウツギ博士は尋ねた。

「……………シルバー……………」  
答えたのは僕だった。

「シルバーというんだね。」  
「はい！」

「……………特徴は？」

「真つ赤な髪をしていて目付きが悪いんヤツなんです。  
こんどはリナが答えた。」

「わかった。二人ともありがとう。」

… 本来の目的をおもいだした。

「ウツギ博士、ポケモンのタマゴを預かってきました。…ポケモン  
じいさんは不在だったのですが……………」

「あっそうだったね。こっちに渡してくれるかい？」

「はい。」

僕は預かっていたタマゴをウツギ博士に渡した。

「キミたち、よかったらこれを受け取ってくれないかな？」ウツギ  
博士は小型の機械をもってきた。

「これはなんですか？」

僕は尋ねる。

「これはポケモン図鑑しかも最新式だよ。」

「ちょっと待てよ。ポケモン図鑑といえば選ばれたトレーナーだけがもらえるものだよね……。」

「僕なんかがもらっちゃっていいんですか？」

「ボクはキミにお願いしたいんだ。やってくれるよね？」

「……ありがとうございます！！ぜひやらせて下さい！」

「あのぉ……エイトはともかくわたしがもらっていいんですか？」

リナはおどおどしている。

「それなら心配ないよ。何日前にホウエンのオダマキ博士から連絡があつてね、ポケモン図鑑を渡しそびれた女の子がジョウトに引っ越していったから、その子に会ったらボクのほうからわたしてもらえないかといわれてたんだ。」

「そうだったんですか！ありがとうございます……！」

リナはうれしそうにしている。

「エイトくんはジョウトのジムを巡るんだよね。」

ウツギ博士がいった。

「はい、そのつもりです。」

「それなら、ここから一番近いキキヨウシティに行くことをすすめるよ。キミの実力だったら勝てるとおもっよ。」

「はい、そうしようとおもいます。」

僕たちの行き先が決まった。

「ウツギ博士、本当にありがとうございました。∴そろそろ出発します。」

「わたしもはじめてでしたけど、ありがとうございました。」

僕たちはウツギ博士に感謝の気持ちをもってお礼をいった。

「いつらっしやい。エイトくん！、リナちゃん！頑張るんだよ。」

「はい、頑張ってきます!!!」

こうやって、僕たちの本当の旅がはじまったんだ。

……このときはまだ知らなかった。僕たちはジョウト地方全体を巻き込む大事件に関わることになるということ……。

第六話 本当の旅のはじまり（後書き）

エイト キキョウシティ目指して頑張っていくぞ！

リナ オー！！！！

エイト そういえば、リナもジム戦するのか？？

リナ 今はトップシークレット！！そのうち分かるよ

エイト 秘密なのかよ。

リナ 次回もお楽しみにね！

エイト はなしそらしたな！

第七話 波乱のポケモンGET大作戦!! (前書き)

二人の初ゲットはどうなることやら……

## 第七話 波乱のポケモンGET大作戦！！

僕とリナはヨシノシティに戻ってきた。

「ここに来るの何回目だよ……。」

おもわず思っていたことが声にでた。

「…12回目だよ。」

リナがいった。

…こいつ、真面目にこたえたな……

「それはいいから、出発しよう。」

僕は、とりあえずはなしをそらした。…キキョウシティにはどうやっていくんだっけな？

「あっエイト！」

突然リナが僕にはなしかけた。

「なに？」

「あのさ、わたしたちってさまだポケモン一匹ずつしかもってないじゃん？だから、30番道路でGETしようよー！」

…たしかにそうだ。僕は、ウツギ博士にもらったヒノアラシしかもってない。そして、今のはなしからすると、

リナの手持ちもミスゴロウ一匹だけのようだ。

「そつと決まったら、はやく30番道路にいくぞー!」

「うんー!」

〔30番道路〕

「ポケモンっポケモンっいないかなー」

リナは何かの音楽にのせてうっている。見るからにハイテンションだ。

…ガサッ

近くの草むらから音がする。

「あっコラッタだ!」

リナは指をさしている。

コラッタか…僕はちょっと前に大群に襲われたのを思い出した。



「さあGETするわよ！！できてミスゴロウ！」

「ガヤガヤー！！！！」

リナのミスゴロウが元気よくボールからとびだした。

「ミスゴロウ、体当たり！！」ドカンッ！

技はダイレクトに決まった。コラッタはフラフラしている。

「やった！チャンスかも？モンスターボール GO！」

リナはモンスターボールを投げた。…ちよつとまった。

おまえ、今なに投げてんだ。

リナはモンスターボールではなくなんと……………

ナナシの実を投げていた…。

ナナシの実はコラッタにクリーヒットしていた。

…ナナシの実つてとてつもなくかたいんだよな。僕はコラッタに同情した。

思った通りコラッタはナナシの実をあてられて怒っている。そして、

すぐに逃げていってしまった…。

「あちゃー…逃げられちゃったあゝ。」

リナはガツカリしている。

「おまえはバカか!!」僕はダイレクトにいつてしまった。…まずい。

「へっ???。」

リナはまわりをキョロキョロしている。…こいつわかってないな。僕はさっきリナが投げたナナシの実を拾いにいき、そしてリナにいった。

「さっきリナが投げたのはモンスターボールじゃなくてナナシの実…つまりきのみだろ!!」

「えっ…ウソ!？」

リナは僕の手からナナシの実を取りあげた。そして、

「ああああああ　　ッこれモンスターボールじゃないじゃん!?!?!?!」

と叫んだ。

「…リナ、今気づいたんだけどさ、僕モンスターボールもってないんだ。」

「……わたしももってなかったみたい……」  
「……ということで僕たちは、フレンドリィショップでモンスターボールを買ったことになった……。」

〔30番道路〕

「……モンスターボール買ったことだし、今度こそGETしなくちゃ」  
リナは僕にさっき買ったばかりのモンスターボールをみせびらかしながらいう。

「……今度も失敗するんじゃないの？」  
僕はジョーダン半分でいった。

「エイトヒドゥーイッ……！」  
リナは嘆いている。

……ガサガサガサッ

「あっちに何かいるぞ……い……い……い……！」

僕は草むらを指さしていった。

「うんっ!?!」

リナはうなずいて、僕を追いかけた。

草むらにはポツポとオタチがいる。

「僕はポツポをつかまえないな。」

「奇遇ね!わたしはオタチがほしいわ!?!」

「じゃあそれぞれGETするぞ!?!」

「りょーかいッ」

僕はポツポとの戦闘をはじめた。

「いけっ、ヒノアラシ!」

「ヒノーツ!」

「ヒノアラシ、ポツポを捕まえるぞ!?!」

「ヒノーツ!?!?!?!」

ヒノアラシは背中 of 炎をあげた。

「いくぞっ!ヒノアラシ、体当たり」

…ドンッ！

どうやら技がきまったようだ。

ポツポは少しくるしそうにみえる。

「ヒノアラシ、にらみつける！」

キッ！

ヒノアラシはポツポをおもいつきりにらんだ。

ポツポはビクツとした。おびえているんだな。

「今だ！いけ、モンスターボール！」僕はモンスターボールをなげた。ポツポはボールに吸い込まれていく。

クイッククイッ……モンスターボールは最初は揺れていてボタンが赤く点滅していたが、やがて、それが止まった。

「やったッ初ゲットだ！」

僕はうれしかった。

「エイトーツみてよ！」

後ろから声がしたので振り向いてみると、リナが走ってきた。どうやらうまくいったみたいだ。

「オタチGETしたよ……！」

「オター！」

リナのオタチはうれしそうだ。

「僕もゲットできたよ。いけ、ポツポツ！」

「ポツポー……！」

勢いよくポツポはモンスターボールからでてきた。

「ポツポこれからよろしくな！」

「ポツポーツ……！」 僕のポツポもうれしそうにしている。

「さあ新たな仲間も増えたことだし、キキョウシティにいこう……！」

「オオーツ……！！……！」

こうして波乱な(?)ポケモンゲットは幕を閉じた……。

第七話 波乱のポケモンGET大作戦！！（後書き）

エイト リナ……普通ナナシの実とモンスターボールまちがえな  
いだろ！！

リナ 似てるじゃん！！！！

エイト 全然似てねーよ！

リナ 次はやっどキキョウシティに到着します。  
でもその前にわたしのオタチGET編（番外編）をお楽しみに

**番外編 ドジッ子少女の初ゲット（前書き）**

矛盾していることに気づいたので、少し訂正しました。

内容はほとんどかわっていません。

初リナsideです。



番外編 ドジッ子少女の初ゲット

わたしはリナ。ホウエン地方出身の12歳。そして、同い年のエイトと一緒に旅をしているの。

今は初のポケモンGETの真っ最中…なんだけど、さっきモンスターボールと間違っってナナシの実を投げちゃったの。エイトにはとぼけてそのことを気にしてないふりしたんだけど、本当はけっこうグサツってきたんだ。でも落ち込んでられないよ…!

そう、現在わたしの目の前にはオタチがいる。さっきは失敗したけど、こんどは大丈夫なんだから!

準備OK…!!

「でてきて、ミスゴロウ!」

「ガヤーツ!」

わたしはパートナーのミスゴロウを繰り出した。

「ミスゴロウ、体当たり!」

「ガヤーツ!…!!…!!」

「うそ……!!」

体当たりはギリギリのところかわされていた。

「ならこれでどう?泥かけ!」

ズシャツ…!!

オタチは泥をもろにかぶってしまった。だが、オタチは身震いすると、ミズゴロウに向かって体当たりをしようとした。しかし、ミズゴロウがいる位置からそれた方向へ向かっていき、あげくのはてオタチは近くにある木に激突していた。

そう、泥かけの追加効果は相手の命中率を一段階さげること……！

木にぶつかってしまったからか、オタチはフラフラしている。……チャンス逃すわけにはいかないね……！！

「今よ！モンスターボールGO……！！」

オタチのモンスターボールボタンは点滅していたが、やがてそれがおさまった。

………もしかしてGETしちゃったの………！！！！

わたしはとまどいながらも興奮していた。そして、

「やったあ

っ……！！！！！！」

と叫んでいた。

「ミズゴロウ、おつかれさま。ゆっくり休んでね。」「少し時間がたつてからわたしはミズゴロウをボールに戻した。そして、別のボールを取り出した。」

「オタチでできて……！！」

「オターッ！」

オタチは元気いっぱいだ。

「オタチ、これからよろしくね。」

「オターッオターッ!!」

オタチはわたしに飛びついてきた。

「…あなたはかわいい子だね。」

あついけないエイトのところに戻らなきゃ!!

「オタチ、わたしの仲間のところへ連れていくね。」

「オターッ！」

「それじゃいくわよー!!」

こうしてわたしの初GETは大成功に終わりました……。

番外編 ドジッ子少女の初ゲット(後書き)

短くてごめんなさいm(――)m

バトル描写はどれも苦手のようです……(泣)

次回は本編に戻ります!!

**第八話 到着！キキヨウシティ&ある噂話（前書き）**

今回は説明が多いような気がします。

## 第八話 到着！キキヨウシティ&ある噂話

短い起伏にとんだ小道、31番道路をようやく抜けた僕とリナは最初の目的地であるキキヨウシティに到着した。

キキヨウシティは

『古き里の景色が今も残されている町』

と呼ばれている。その名の通り古い建造物がみかけられたり、昔ながらの家が多く見られたりする。

「やっとキキヨウシティについたな。…お腹すいたからポケモンセンターで夜ごはんたべるか。」

「うん。そうしよう!！」

僕たちが到着したのはもう太陽がしずんでからだった。だから今はちょうど夕食をたべる時間帯だ。

ポケモンセンターは傷ついたポケモンを回復してくれるだけではなく、レストランで食事ができたり、バトルフィールドでポケモンバトルができたり、宿泊施設があったりとトレーナーにはもってこいの場所になっている。しかも、ほとんどは無料で使えるため、多くの人に支持されているのだ。

そして、僕たちはポケモンセンターの中のレストランについた。

「さあ、なにを食べようかなー」

リナのテンションがあがっている。

「僕はキキヨウ風スパゲッティにするよ。」

「えっと…わたしは、ハンバーグセットかな？」

…リナは子どもっぽいよな。僕はそう思ったが、

「ハンバーグもなかなかおいしそうだね。」

といい、本音はいわなかった。

僕たちはレストランで最高の一時をおくっている…はずだった。あ  
るはなしをきくまでは……。

その時、ちょうど僕たちとなりで食事をしていたトレーナーたち  
の話が耳に入ってきた。

『最近、マタツボミの塔オバケがでるらしいな。』

『……オバケ？ゴーストタイプのポケモンでもでるのか？』

『…まあそういうことだとおもうんだけどさ、前、夜にマタツボミ  
の塔にいったやつ、相当ひどい目にあったらしいんだ。』

『結構ヤバそうだな。』

そんなやりとりを聞いていたエイトは、（ふーん。そうなのか…）  
という気持ちでしか聞いていなかった。しかし、

「ねえ！！マタツボミの塔ってどこにあるの？」リナがトレーナー  
たちに興味津々に聞いていた。

……コイツは行く気マンマンじゃないか！！…まずいな。

「うん、教えてくれてありがとう。」

リナはトレーナーたちにお礼をいうと、僕のところへ戻ってきた。

「エイト！今からマツボミの塔に行こう！！」

リナは目を輝かせている。…やっぱり行くつもりなのか。

「…リナはオバケをみたいのか？」

「うん。」

…予想通りの答えかただ。

「ひどい目にあったらどうするんだよ。」

「……………エイトお願い！！行こうよ！私たちなら大丈夫だって！」

…リナは怖いもの知らずだ。ある意味すごいと思う。

「絶対行くのか？」

「行く行く！！絶対いく！」リナはだだをこねる幼い子のようにいう。…僕はこれは断ることは不可能だと思えてきた。

「わかったよ。いけばいいんだろ！！」

僕は仕方がなくいった。

「やったー それじゃ行こうよ！」

リナは強引に僕を連れ出してマツボミの塔へむかった。



**第八話 到着！キキョウシティ&ある噂話（後書き）**

マタツボミの塔のオバケ。

すぐにわかるとおもいますが、やはりあのポケモンです。

ということ、今回はマタツボミの塔へ行きます。

第九話 マタツボミの塔とオバケ出現…？（前書き）

マタツボミの塔へlet's go!!

## 第九話 マタツボミの塔とオバケ出現…？

僕とリナは高さ30mほどの建物…つまりマタツボミの塔の前にいる。

「よし、さっそく突入開始だあ！！！」

リナはかなりご機嫌だ。そして、はやくも中に入ろうとしている。僕は仕方がなくリナについていく。

ギイ ツ……………

リナが扉を開け、僕たちはマタツボミの塔の中へ入った。

マタツボミの塔は見た感じ、古く長い歴史を感じさせられるような建物だ。その建物の中心部分には、一本の長い柱がたっている。柱の近くにいったみると、ギシギシときしむ音がするのでなにかと恐怖を生み出してしまうようだ。そもそも僕は怖がりというわけではないし、同行しているのは、あの怖いもの知らずのリナであるため全く心配することはない。

「人が全然いないね。」

リナは不思議そうにいうが、それは決して珍しいことではない。また、このマタツボミの塔では、昼間に修行が行われているので、普通夜には人はいないはずなのだ。

「このフロアではなさそうだね。上にあがるっか。」

リナがそうだったので、僕たちは上の階へと足を進めた。

上の階にきたものの、先ほどの階とあまり様子が変わったわけではなかった。人がいないため、辺りは恐ろしいくらいに静まり返っている。

…本当にオバケなんてでるのだろうか。僕は、ふと思う。さりげなくリナのほうを見てみたら、彼女は楽しそうな表情をしている。

……ハアッ

僕は、リナに対して思わずためいきをついた。

ッ!!

…その時突然不気味なものが僕たちの目の前に浮かんできた。紫がかつた霧のようにみえて全体がぼやけている。これがオバケなのか…？

「ついにオバケが姿をあらわしたよ!! ホントにいたんだ」

…リナは興奮している。

それにしても本当にオバケなのだろうか？

オバケ…？は僕たちに少しずつ近づいてくる。

そして 突然黒い光線をはなってきた!!

ドシュンッ!!!!!!

凄まじい音がする。僕たちは間一髪のところギリギリ攻撃をよけることができた。

「リナ、コイツはオバケなんかではない!!…ポケモンだ!」

「えっ？ポケモンなの！？」

「アイツをよーくみてみるよ。」

僕は驚くりナにいう。

「あ　　ッ！！」

リナもようやく気づいたようだ。そう、キキョウシティ中を騒がせたオバケの正体は、

ガスじょうポケモン　　ゴースであった。

ゴースは先ほどと同じ衝撃波を再びはなってきた。

「いけ、ヒノアラシ！！火の粉だ！」

「ミスゴロウおねがい！水鉄砲！！」

「ヒノーツ！！！！」

「ガヤーツ！！！！」

二匹はゴースの技をなんとかおしきることができた。

「…………このゴース強い！！勝てるのかなあ？」

「勝てる…………いや、コイツは僕が捕まえるんだ！！！！」

僕はオバケ正体を見極めてから、このゴースをなんとかしてでもゲットしたいと思っていたのだ。

「…わかった。エイトに協力するよ。」

リナは了承してくれたようだ。

「よし、じゃあ僕を援護してくれ！ヒノアラシ、もう一度火の粉！」

「ヒノーツ！！！！！！」

ヒノアラシは口から火の玉を発射させる。

対抗して、ゴースも技をつかってきたが、それはかわすことができた。そして、ゴースには火の粉が命中した。（よしっ！）

「ミズゴロウ、水鉄砲！」今度はリナが指示する…が、

「ミズゴロウ、ストップ！」

僕は大声で叫んだ。

「…ガヤツ？」

ミズゴロウは驚いたようで攻撃をやめていてくれた。

「エイト！どうして攻撃をやめさせたの？」

リナは僕に尋ねてきた。

「ゴースを見てみてよ。さっきの火の粉でやけど状態になっているのがわかるんじゃないかな？」

リナは僕の言葉を聞いて、ゴースのほうに目をむけた。苦しそうな表情をしている。そして、確かに火がついているようだった。

「状態異常のときはポケモンを捕まえやすいんだよね？」今がチャンスじゃないかな……！」

「……よしっいくぞ……いけ、モンスターボール……！」僕はゴースにむかってモンスターボールを投げた。

成功してくれ。

ボールが揺れている間、必死になって願った。

………パンツ。

しばらく揺れていたボールが止まった。ゲットした証である。

「やった……！！！！ゴース、ゲットだ！」

ポケモンをゲットしたときはやっぱりうれしいきもちになる。

「よかったじゃん！新しい仲間が増えたね。」

リナも喜んでくれているようだ。

「そういえばゴースはやけど状態だったよね？やけどなおしをつかわないと。」

「そうだな　　やけどなおしと……ん？……あれ？………ない………ない………！」

僕はやけどなおしを持っていなかった。

「えーッ！！！！！わたしも持ってないよ」

リナも持っていないようだ。

「とにかく、ポケモンセンターに戻ろう！！」

僕たちはマタツボミの塔の入り口に急いでいった。

外にでたら、視界に見覚えのある人の姿が目にはいった。

シルバー……。

「おい、夜遅くになにしてるんだ。まさかオバケでもさがしにいったのか？」

シルバーは僕たちに気づいたようで話しかけてきた。……実際にイヤらしいいいかたをする。だが、凶星なのでいい返しかたにまよい、僕は黙りこんでしまった。

「なにしたっていいじゃない！？私たちの勝手でしょ！！」案の定リナがいい返していた。

「フンツ。……別にお前たちには興味はないさ。ところで今何時なのかかわっているのか？」

「それが何よ！！……て………え　　ッ！！！！もうこんな時間？」

ポケギアをみて驚くりナ。現在の時刻はPM 11:30であった。



「こんな時間までウロウロしていたらいいバトルができないぜ。」

僕はカチンときておもいつきりシルバーをにらんでやった。

「……………なんだよ。不満でもあるのか？…フツそれなら次にあったときに相手になってやるよ。…じゃあな。」

シルバーはそういい残して去っていった。

(なんだよ、アイツ。あいかわらず偉そうな態度をとるんだな。)

僕はそう思った。いってやりたかったが夜だということがあってグツとこらえた。

「あいかわらずやなやつだね。…気を取り直してはやくポケモンセンターに戻ろう。」

「うん、そうだな。」

僕たちはポケモンセンターまで走っていった。

第九話 マツボミの塔とオバケ出現…？（後書き）

エイトはゴースをゲット!!

主人公がゴーストタイプをつかうのは、珍しいみたいですな

今回はジム戦の予感…お楽しみに!!

第十話 キキョウジム！華麗なる飛行ポケモン使い（前書き）

記念すべき（？）第十話！！

エイトたちはキキョウジムに向かう……

## 第十話 キキョウジム！華麗なる飛行ポケモン使い

ポケモンセンターに着いてから急いでゴースを預けた僕とリナは、先ほどの疲れがでたのかすぐに眠りについてしまった。

翌日

「ああああああ！！！！」  
僕は思わず叫んでしまった。なぜかというと、現在の時刻がAM 10:00であったからだ。  
……完全に寝坊である。……まあしょうがないことだ。昨日夜ふかししたのは事実なのだから。

ガチャンッ

「エイト、起きた？」

ドアがあいて、リナが部屋に入ってきた。……まさかコイツ起きてたのか……！！ちょっと信じがたかったが、問つめるのはやめておいた。

「エイト、今日はどうするつもり？」「リナは今日の日程についてきてきた。

「僕は今日ジム戦に行こうと思ってているんだ。リナはどうするんだ？」

僕は何気なくいったつもりだったが、リナはいきなり深刻そうな顔をした。

「……わたし、いろいろ考えたんだけどね……やっぱりエイトみたいにジム巡りしようと思ってるの！」

リナにどの道を進むつもりなのかこのあいだ聞いたときは曖昧にしか答えてくれなかったが、ついに決心したようだ。

「……だけど、ジム戦は明日にするつもり。だから、今日はエイトのジム戦を見学しようかなーって思ってるんだけど……ダメかな？」

「いいよ。それじゃ、行くか！」

「キキョウジム内部」

「うわぁ　　っ天井が高いな!!」

僕たちは中に入るなり驚いた。

キキョウジムは飛行タイプが専門らしく、空中戦に適したフィールドになっている。高い高い天井を僕は見つめていた。すると、

「やあ、君たちがチャレンジャーかな？」

突然、声が聞こえた。

僕たちが振り返ってみるとそこには着物をきた男の人が立っていた。おそらくこの人がジムリーダーだろう。

年は僕たちよりも少し上のようだ。…そして、僕がいうのもどおかと思うけどカッコいい。僕は返事をしようとした。しかし、

「ハヤトさん、お久しぶりです!!」というリナの声にかき消されてしまった。

……ん？ちょっとまってよ。リナはこの人のことを知っているのか？

「リナ、いったいどういうことだ!？」

僕はリナに尋ねることにした。

「ごめん、エイト! いうのを忘れてた!」

リナは僕に説明した。だが、それはやたら長かったので簡潔にまとめると、

・リナはホウエン地方の中のヒワマキシティ出身である

・ヒワマキシティのジムリーダーのナギが飛行使いである

・キキヨウシティのジムリーダーのハヤトは同じ飛行タイプ使いであるナギにたびたび会いに行っていた

………ということであった。つまり、リナはヒワマキシティのジムリーダーのナギという人と関わりがあったため、ハヤトのことも知っているということであろう。

長い説明が終わったあと、

「リナちゃん本当に久しぶりだね。…いわれなくても分かる。ジム戦をしにきたんだよね。」

と、ハヤトさんはリナに向かっていった。

………これじゃあ、リナが先にバトルすることになるじゃないか。僕は少し焦った。

「…待ってください。今日はわたしじゃかくて彼がチャレンジャーです!」

リナはそういつてくれた。

それを聞いたハヤトさんは、僕の方をみて、

「君はリナちゃんと旅をしているのかな?」と尋ねてきた。

「…ハイ、そうです。あつ僕はエイトつていいいます。ハヤトさん、今日はよろしくお願いします!」

少し声が震えている。…さすがジムリーダー。すごく迫力がある。

「エイトくんか、もうわかっているみたいだが、俺はキキョウシテイのジムリーダーハヤト。よろしくな。」

ハヤトさんと僕は、握手をする。

「ハヤトさん、さっそくですがジム戦始めましょう!!」  
僕はウズウズしていつもより大きな声でいった。

「…エイトくん、ちょっと提案があるんだけど聞いてくれるかい？」

ハヤトさんはそのようにいった。

……………???提案とはなんなのだろうか。

「この際、エイトくんとリナちゃんつまり、二人でタッグを組んでバトルしてみないかい？」

(……………!!!!!!)

ハヤトさんは思いがけないことをいった。

「リナ、どうするか？」

僕は戸惑いながら聞いてみた。

「もちろんやるに決まってる!!!いいでしょ？」

リナはやる気満々のようだ



僕は少しだまりこんだが、決心してうなずいてみせた。

「決まりのようだね。それじゃあ位置について。ジム戦をはじめよ  
うか。」

ハヤトさんがいった。顔構えが先ほどと全く違う。これはチャレン  
ジャーを迎え撃つ顔だ。

「絶対勝つぞー!!」「」

僕とリナはそういって、フィールドへ急いだ。

第十話 キキョウジム！華麗なる飛行ポケモン使い（後書き）

ついに次回、ジム戦が始まります！！！！

第十一話

キキヨウジム！エイト&リナVSハヤト〈前編〉（前書き）

ジムバトル

解禁！

## 第十一話 キキヨウジム！エイト&リナVS八ヤト〈前編〉

フィールドに着いた僕たちは、その場に待機している。

リナの様子を見てみると、どうやら足が震えている。…緊張しているのだろう。

僕だって同じだ。ジム戦なんてはじめてなのだからそうなるのは当たり前だと思っ。

…それにしても、タッグを組んでバトルだなんて本当ににできるのだろうか？ただでさえ僕たちは初心者なのに。

…でも、やると決めた以上やるしかない。迷ってられないな。リナもそう思っているはずだ。僕は、なんだかんだいろいろなことを考えていたが、

「エイトくん、リナちゃん。…さっそくジムバトルはじめようか。」

といった、真剣な目をした八ヤトさんの声が聞こえたので集中することにした。

「はい、お願いします」「」

僕たちは精一杯声をはっていった。

「これより、チャレンジャーエイト、リナとジムリーダーハヤトによるジムバトルを始めます。使用ポケモンは二体なお、チャレンジャーは一体ずつとなっております。また、ポケモンの交代は変則ルールにより、どちらにも認められておりません。先に二体戦闘不能にしたほうが、勝者となっております。」

審判が今回のルールを説明している。

……使用できるポケモンは一匹かあ。それならアイツでいくしかないな。僕はそう思いながらモンスターボールを取り出した。

「リナ、たのむぞ!!」

「わかってる！エイト、勝ちにいくからね!!」

リナは僕以上にバトルに燃えている。そして、準備も完了しているようだ。あとは、バトルが始まるのを待つのみだ……。すると、十秒もたたないうちに、

「…………バトル、はじめ!!」

審判のコールがかかった。

「行け、ポップ！ピジョン！」

すぐに、ハヤトは自分のポケモンを出した。

「ポツポにピジョンかあ…。」

僕は少し戸惑ったが、考え通りでいくことにした。

「いけ、ヒノアラシ!!」

「ヒノヒノー!!」

ヒノアラシが勢いよくでてきた。ヤル気にみちあふれているようだ。

「ミズゴロウ、お願い!!」

「ガヤガヤーツ!!」

リナは、やはりパートナーであるミズゴロウをだした。

相手は飛行タイプ。相性はいいとも悪いともいえない。だが、タッグバトルなので、バトルの技術だけでなく、トレーナー同士の協調性も試される。だから、こちらのほうが若干不利になる。

「専攻はゆるよ。」

ハヤトさんがいった。…まずは、『お手並み拝見だ』というところだろう。…僕はどう攻撃するか迷っていた。すると、

「ミズゴロウ、ポツポに体当たり!!」

リナは、はやくも指示していた。

ミスゴロウはポツポの方にむかっていく。

「ポツポ、かわすんだ！」

指示を聞いて、ポツポは素早く身を反らした。

「あたらないか……。」「リナは悔しがっている。しかし、直接攻撃がそう簡単にあたるはずもない。何しろ相手はジムリーダー。そう簡単に勝てる相手ではない。

「今度はこちらから行かせてもらうよ。ポツポ！ヒノアラシに風おこし！！ピジヨンは上昇だ！！！」

ポツポの風おこしでヒノアラシは今にも吹き飛びそうだ。

「……………ヒノアラシ、耐えてくれ！」

僕は必死になっていう。ヒノアラシは後ろのほうに後ずさりしてきた。……………これはマズイぞ。

「ミスゴロウ、水鉄砲！」

「しまった！」

ハヤトさんは叫んだが、もう遅かった。

水鉄砲はポツポに直撃していた。なぜ当てることができたのかというと、ポツポが風おこしをずっと続けていたからである。しかも、ピジヨンは上空にいるので助けにはいることができなかったのである。

「ナイス、リナ！ たすかったよ。」

「どういたしました。さあ、エイトも攻撃しなきゃ！」

「ああ！…いくよ、ヒノアラシ、火の粉！」

「ヒノーッ！」

「そうはさせないよ。ピジョン、戻ってこい！ 作戦変更だ。」

「ピジョー！」

ピジョンは降下してきた。

「ポッポ、ピジョン二匹で風おこし！」

ブオオオオオオオオオ

すごい音がする。

僕は再び耐えてくれ！と願ったが、ヒノアラシはミスゴロウと共に吹き飛ばされて壁に衝突してしまった。

「ヒノアラシ！ 大丈夫か？」

「ミスゴロウもしっかり！」 さっきの一撃は思ったよりもダメージがあるようだった。

「さあ、エイトくん、リナちゃん、どう攻略するのかい？」

ハヤトさんはまだまだ余裕そうだ。

……どうすれば勝てる？



僕は勝利を確信するための方法を焦りつつ考えていた

。

第十一話 キキヨウジム！エイト&リナVS八ヤト〈前編〉（後書き）

後編に続く！！

第十二話 キキヨウジム！エイト&リナVS八ヤトへ後編（前書き）

果たして勝負の行方は ！

## 第十二話 キキヨウジム！エイト&リナVS八ヤト〈後編〉

どうする……どうすればいいんだ……ヒノアラシのほうをみてみると、さっきのダメージが相当効いたのか、かなりきつそうだ。リナのミスゴロウも息があがっている。僕は黙りこんでしまった。

しかし、ふとある考えが頭によぎった。……よし、やってやるっじゃないか。

「…ヒノアラシ、火の粉！」

僕は、正面から技をぶつけることにした。

「ちょっと！エイトなにやってるの……」

リナはあきれぎみにいう。

「…そう簡単に決まる訳がないといっただろう？ポツポ、ピジョン、かわしてヒノアラシにダブル電光石火！」

二匹はひらりと攻撃をかわすと、ヒノアラシめがけてすごいスピードで迫ってくる。

きた！

八ヤトさんは僕の思ったとおりの指示をだした。

「ヒノアラシ、思いっきりやってやれ！煙幕だ！」

「ヒノッ！！！！」ヒノアラシの口から黒いケムリがでてき

た。それはフィールドに充満した。仕留める相手がどこにいるかわからなくなったポツポとピジョンは瞬時に攻撃を止めた……と思われたが、

「……そういうことか！でもまだ甘いッ！ポツポ、ピジョン、風おこしでケムリをはらうんだ！」

「ポツポー！」

「ピジョーッ！ー！」

二匹はケムリをはらいはじめた。

「エイト！このままじゃマズイよ……」

リナは心配そうにいう。

「……大丈夫だ。こうなるってことはよんでいたんだ。リナ、ヒノアラシのいるところをよーくみてみるよ？」

僕は、自然にニヤツと笑っていた。先ほどまでの緊張や焦りが一気に吹っ飛んでいったようだ。

「あんなところにいるのー！」

リナは驚いている。そう思うのも無理のないことだ。

ヒノアラシは空中にいた。しかも、ポツポとピジョンのいる位置よりもはるかに上のほうだ。

「……なんだとー！」

さすがにハヤトさんも驚いているようだ。まだ旅に出たばかりの少年がこんなことを考えるとは思わなかったのだらう。

「ヒノアラシ、次で決めるぞ！！急降下しながら最大パワーの火の粉だ　　ッ！」

「ヒノヒノヒノッ！」

「ミズゴロウ、ヒノアラシを援護して！水鉄砲！！！」

「ガヤ　ッ！」

「ポツポ、ピジョン急いで上昇、そして電光石火！」

ハヤトさんはそう指示した。

ピジョンがヒノアラシのほうに接近してくる。…マズイ。今は空中にいるため完全にこちらが不利だ。

「ヒノアラシ、予定変更！！一発勝負だ！　　ピジョンに体当たり！！いっけ　　ッ」

ドカ

ンッ！！

轟音が建物中にこだました。

爆発のせいで視界が悪くなっていたが、だんだんもやがはれてきた。

「ヒノアラシ!!」

僕は思わず叫んでいた。ヒノアラシは無事なのだろうか。

「ヒ……ヒノヒノー……」

ヒノアラシは目を回して倒れていた。

嘘だろ……………

僕はこの光景が信じがたかった。僕たちは負けてしまっのか……? 一体相手はどうなったのだろう。僕は、ピジョンのほうに目を向けた。

「!……!」

なんと、ピジョンも目を回して倒れていた。

ヒノアラシとピジョンの一騎討ちはダブルノックアウトという結果であった。そうと決まれば……………僕はリナのほうを反射的にみた。

「ミズゴロウ!倒れてないよね……………!」

リナはすごく深刻そうなかおをしている。

「…ガヤッ」

ミズゴロウは弱々しかったが、ちゃんとたっていた。

「…よかった。まだ大丈夫ってことだよな。ミズゴロウもう一度水

鉄  
「

「待ってくれ。…もう勝負はついているんだ。ポツポをみてくれ。」  
ハヤトさんはリナの指示を遮った。僕たちは、いわれたとおりポツポをみてみた。すると、そこには目を回してのびているポツポの姿があった。

「ヒノアラシ、ポツポ、両者戦闘不能。そして、ピジョン戦闘不能、ミズゴロウの勝ち。よって勝者チャレンジャーエイト、リナ!!!」

審判の声が聞こえてきた。

……僕たちはついに勝ったのだ。

「やったあ　!!!」

僕たちの勝利の雄叫びがジム全体に響き渡った。



## 第十二話

キキヨウジム！エイト&リナVSハヤト〈後編〉

（後書き）

なんか微妙なところでおわってしまいました……でも気にしないで  
くださいm（――）m

相変わらずバトル描写がヒドイですね……もっと上手く書けるよう  
になりたいです。

次回も読んで下さるとうれしいです……！

第十三話 バッジをこの手に！…！+ ……？(前書き)

今回はいつもよりちょっと短めです。

第十三話 バッジをこの手に!!+ . . . ?

「エイトくん、リナちゃん見事だったよ！はじめてのジム戦だったなんて思えないくらいだ！」

ハヤトさんは、僕たちのところへやってきてそういった。

「ありがとうございます！おかげでいいバトルができました。」

僕は丁寧にいった。

「ハヤトさん！わたし強かったでしょ？」

自慢気にそういつているのはいうまでもないが、もちろんリナだ。

「リナちゃん、確かにすごかったよ。でも、『アレ』はなかったのかい？」

「…えっ何のことですか？」

リナは一瞬ビクツと反応した。

「アレってなんだよ。僕はそう思ったが、なんだか聞いたらいけないような気がして問い詰めなかった。」

「ハヤトさん！はやくバッジをください!!」

僕はやはり興奮していて今すぐにバッジを手に取りたかった。

「…おつといけない。まだ渡してなかったね。」

ハヤトさんは急いで二人に渡すためのバッジをとりに行った。

「これが、ポケモンリーグ公認のウイングバッジだ。」

ハヤトさんは僕たちにバッジを手渡した。

「……ありがとうございます……！」

僕はウイングバッジをつけとり、それを空にかざしてみた。バッジはまるで宝石のように輝いていた。

「ウイングバッジGET　……！」

一方で、リナはバッジを手に持ちながらはしゃぎまわっていた。……あいかわらさずだ。

「ハヤトさん、次はどここのジムにいったらいいですか？」

僕は、次の目的地を決めるために尋ねた。

「……そうだね。ここから南にいったところにある『ヒワダタウン』に行ってみたらどうか？　なかなかいいところだよ。」

「……てことでリナ！　次はヒワダタウンに行こう……！」

「そうだね。」

「……それじゃあそろそろいくか！」

「うん……あつ、ハヤトさんまたバトルしましょうね！」

「望むところさ！　エイトくん、リナちゃん、気をつけて旅をつづけるんだよ。」

ハヤトさんはそういって、最後まで僕たちを見送ってくれた。

そして、僕たちはヒワタウンを目指すことになった

《キキョウシティポケモンセンター》

「お預かりしたポケモンはすっかり元気になりましたよ。」

「ありがとうございます。」

僕たちはバトルですっかり疲れてしまったポケモンを回復するために、ポケモンセンターにきていた。

「ハアーツ……………私も疲れたあー。エイトーなんか食べにいきましょう！」

「そういつと思って買っておいたものがあるからさっそくたべよう。」

「あ　　ッ！これはキキョウ名物のマタツボミ饅頭じ

ゃん！……………わたしはチョコ味食べるからね！！」

「…食べれるだけ食べてみるよ。」

僕は本音がポロツと出てしまった。……………マズイ。

「わかったよ！わたしは全部食べてあげる！……！」  
「……ちょーそうは言ってないだろ！……！」

結局エイトは十個入りのマタツボミ饅頭を一つしか食べることができなかった。そして、残りはすべてリナが食べたということはいうまでもない。

第十三話 バッジをこの手に!!! + . . . ? (後書き)

ついでに、マタツボミ饅頭はつぶあん・こしあん・チョコレート・カスタード・抹茶・イチゴ・生クリーム・チーズ・キャラメル味があります。

エイトが食べたのはイチゴ味でした(笑)

第十四話

泡立たしいお昼時　くアナタに一目惚れしました　く（前書き）

エイト　なにこのタイトル！

作者　読めばわかる！！

なんだか恥ずかしいタイトルですが、本文をどうぞ



## 第十四話

泡立たしいお昼時　くアナタに一目惚れしましたく

数分後、リナのマツボミ饅頭騒動はおさまり、僕たちは道具調達のためにブレンドリイシヨップにきていた。

まだPM1:00なので、僕としてはこのままヒワタウンへ出発してもよかったのだが、リナがショッピングをしたいといいだしたので、ここにいるのだ。

「エイト！約束通りマツボミ饅頭のイチゴ味買ってよね！」

リナはそういつてきた。……ハアーツ…懲りないやつだ。

「誰が約束なんかしたかよ！自分で買え！！！」

僕はそういつてそっぽを向いた。

「……エイトのイジワル?!」

「……ちょ…それはイジワルとはいわないんじゃないのか？」

「むう　　ッもういいよ!!自分で買ってやるんだから!!!!」

リナはどうとういじけてしまった。…こうなってしまったら、てのつけようがない。困ったもんだ。……マツボミ饅頭を買ってあげれば機嫌を戻してくれるだろう。でも、そうするのはごめんだ。近いうちに金がつきてしまう……ウーン…どうすればいいんだよ……。僕は、この危機から逃れるための方法を一生懸命考えていた。すると、

「……ねえあなたたち、こんなところでなにやってるのさ。」

という声が背後から聞こえてきた。

僕たちは反射的に声が聞こえてきた方を振り向いた。そこには僕たちと同じ年くらいの女の子がいた。

「……ねえ、あなた誰なの??」

いきなり話しかけられたので戸惑いながらリナが尋ねた。

「あっごめんごめん！あたしはクイナ。カントー地方のタمامシシテイ出身だ！！あんたたちは？」

クイナと名乗った少女は僕たちに問い返してきた。

「僕はエイト。ジヨウトのトレーナーだよ。」

「わたしはリナ。ヒワマキシテイ出身なんだ。クイナ、よろしくね！」

「エイトにリナかあ。こっちこそよろしくたのむよ。」

お互いに自己紹介が終わり、僕たちはすぐに仲良くなることができました。

「ところでさ、何でもめてたのさ？」

少し間がいたあと、クイナは僕たちにいった。

「…エイトがマタツボミ饅頭買ってこれかないの!!」

リナはさっきのことをクイナに訴えている。

…クイナまで敵にまわしたらマズイぞ僕はそう思って、

「クイナ、騙されるな！リナは食べ物ねだろうとしているだけだ  
！！」

と聞いた。

「…！！騙すなんてわたしはそんな人じゃないよ！」

今の言葉にリナは反応してしまった。ハアーツ。…これじゃあキリがないなあ。…僕はため息をついた。…その直後、

「なーんだ、そんなことだったんだ！ならあたしがおごってあげるよ。」

というオドロキの言葉をクイナは発した。

「えっ、ホントに！？クイナありがとうー！！どこかの誰かさんとはおおちがいだね！」

「どこかの誰かさんとは誰のことだー！！」

僕は、思わず反応してしまった。

「ほらほら、ケンカしない！！今すぐ買ってくるから。」

クイナは僕たちをなだめて、そのあとすぐにマツボミ饅頭を買いにいった。

「リナ買ってきたぞ。イチゴ味でよかったか？」

「うん！ありがとうー！！クイナ大好きー！！」

そういつて、リナはハイスピードで饅頭を食べていった。  
その様子を見計らったエイトはクイナに

「…ありがとな。」

と耳打ちした。

「あ…ああ！……たいしたことじゃないよ！！」

クイナは顔を赤くしながらいった。このときエイトは気づいていなかったが、クイナはエイトに一目惚れしているようだった

その後、近くの公園で三人は旅のはなしなどをしていたら、あつという間に夕方になっていた。

「エイト、リナ、あたしは明日の朝ジム戦に行くんだ。だからはやいとこポケモンセンターにもどることにするよ。」

クイナはまだジムバッジを持っていなかったらしかった。

「…じゃあここでいったんお別れだね。」

リナは、残念そうな顔をしている。

「そんな顔するなよ。またすぐに会えるさ。あつ……そうだ！ポケギアの番号教えてよ！！そしたらいつでもはなせるだろ？」

「そうだな。じゃあ教えておくよ。」

僕はクイナに番号を教えてあげた。

クイナは心の中で（……やった！！）と思っていたため、顔がニヤけていた。

しかし、僕はそのことをどうにも思っていなかった。

リナは、なぜか下を向いていた。…具合でも悪いのかな？

「…リナ、大丈夫！？」

僕は心配したので聞いてみた。

「…あつごめん！全然大丈夫だよ！！！」

そう答えたりナはいつもどおりだった。

「それじゃまたなー！！！」

クイナは僕たちに別れを告げて、どこかへ向かっていった。

「…さあ、僕たちもいくか。」

「うん！！！」

空にはもう星がちらついていたので、僕たちはポケモンセンターに

戻ることにした。

## 第十四話

泡立たしいお昼時 くアナタに一目惚れしましたく (後書き)

新キャラ出ました。クイナといます。男勝りな話し方をしますが、なんとエイトのことが好きになっちゃったみたうです…

そのせいでハプニングが増えそうですね……

次回も楽しみにしてもらえとうれしいです!!

第十五話 遺跡探検ツアーにいくところ!! (前書き)

何とか投稿出来ました!!

本文をどうぞ



## 第十五話 遺跡探検ツアーにいこう!!

ポケモンセンターに戻ってきた僕たちは、晩ごはんも食べずに寝てしまった。それは、朝からのジム戦で思っていたよりも体力を消費していたからであった……。

〔翌日〕

「おい、リナ!!朝だぞ」

僕は現在、AM7:00になっても起きないリナを起こしている。

「……ウン……あと二時間……。」

リナはそういつて起きようとしない。…奥の手を使うか。

「今すぐ起きたら何か買ってあげようかなー」

僕はムダに大きな声をだしている。……食べ物でつる作戦だ。

ガバツ!!

僕の思惑通り、リナはおきてくれた。…分かりやすいやつだ。

「エイト、おはよう！…！」

そういうリナの声は弾んでいる。

「さっそくだけど、キキョウシティオリジナルの和風クレープ買ってきてよー！」

…やっぱりそうだったか。でも、今日はマツボミ饅頭ではないよ  
うだな。

「いいよ、買いにいこうか。」

実は、僕も和風クレープを食べてみたかったので、今回はOKして  
あげた。

「やったー！！じゃあ急いで準備するからちょっと待ってて」

リナは起きたばかりだったので、髪の毛を整えにいった。

数分後

「準備完了 さっそく買いにいこ うー！」

リナの準備が終わったので、僕たちは、和風クレープを買いに行く  
ことにした。

僕たちは和風クレープ売り場にいる。まだはやい時間なのにもう店はオープンしていた。

「和風クレープを二つ下さい!!」

リナはさっそく注文をし始めた。

「いらっしやい!元気がいいねえ。…おや?君たちは旅の途中かい?」

「はい!そうです!!」

僕は、丁寧な言葉づかいで答えた。

「やっぱりそうだったか!…あっそういえば君たち『アルフの遺跡』は知っているかい?」

……アルフの遺跡??聞いたことないな。

「僕は知りません。でも、そこはどんなところなんですか?」

「アルフの遺跡はジョウトで一番有名な遺跡なんだけど、今ちようど遺跡探検ツアーをやっているらしいんだ。だから行ってみたらどうだい?」

そのように、お店の人にすすめられた。

遺跡探検ツアーか…なかなかおもしろそうだ。

「…それってどこにあるんですか!」

リナがいった。今はなしを聞いて、かなり興奮している。

「キキョウシティから西へ行けばすぐに着くよ。…はい、和風クレ  
ープ二つ。400円ね。」

「ありがとうございます。」

そういつて僕はお金を支払い、クレープを受けとった。

「クレープ食べたら、アルフの遺跡に行ってみよう。」

僕は念のためリナにいった。

「もちろんそのつもりだよ！……エイト、はやく食べてよね。」

そういつているリナはもう食べ終わっていた。……いくらなんでも  
はやすぎだろ！…！僕は、味わっているヒマもなくクレープを食べ  
る羽目になった。

〔アルフの遺跡〕

少し時間がたってから、僕たちはアルフの遺跡に到着した。

「……ここがアルフの遺跡かー！不思議な場所だね。」

意外にもリナが驚いている。

「そうだな。…はいところツアーの申し込みを済ませよう。」

僕たちは申し込みを済ませ、そのあとすぐにツアーの説明を聞きいくことにした。

「ようこそ、アルフの遺跡探検ツアーへ!!」

係員の甲高い声が響いている。

「このツアーは、四人一組のチームをつくって遺跡探検をしながら各ポイントごとに置かれているスタンプを押していくというスタンラリー形式になっております。また、一番にすべてのスタンプをゲット出来たチームにはステキなプレゼントをご用意していますので、頑張ってくださいね!!」

「プレゼントもらえるの!?!?!?! エイト、絶対一番とるよ!?!?!?! さっそく出発ッ」

「リナ待てよ! さっきの説明聞いていなかったのか? このツアーは四人一組のチームをつくらないといけないんだ!! 二人じゃダメだよ!?!?!」

「あつ! そうだった……。でも、どうする…?」

……たしかにどうしようか。周りに知っている人はもちろんいない。…困ったなあ。僕はオドオドしていたが、不意に後ろから、

「なあ、俺たちと一緒に組まないか!?!」

という声が聞こえた。

僕たちは驚いて振り向いてみると、そこには僕たちとかわらないくらいの子と女の子がいた。

「いきなり悪いな。俺の名前はリュウタ。ポケモントレーナーだぜ。」

「

私はレナだよ。リュウタと一緒に旅してるんだ。そっちは？」

レナと名乗った女の子が聞いてきた。

「僕はエイト。同じくポケモントレーナーだよ。」

「わたしはリナ！！ヨロシクね。」

僕たちはお互いに自己紹介をした。

「エイトとリナだな。今日はよろしくな！一番とってプレゼントもらおうぜー！！」

リュウタがいった。

「うん！頑張っていくぞー！！」

「「「「オーツ！！」」」」

リナのかげ声に合わせて僕たちは気合をいれた。

さあ、遺跡探検の始まりだ！

第十五話 遺跡探検ツアーにいくぞー!! (後書き)

今回のアルフの遺跡編はユウキさんとのコラボとなっています!!

次回もおたのしみに



第十六話

探検ツアーのstart!

そして・・・(前書き)

探検ツアーのはじまりはじまり

## 第十六話

### 探検ツアーのstart!

そして・・・

先に行ってしまった二人を追いかけるため、僕はレナちゃんと一緒に遺跡の大広間へ向かった。

僕とレナちゃんが大広間に着くと、すでにリナとリュウタが来ていた。二人してはしゃぎまわっている。リナは子どもっぽいからなあ。……て 自分もまだ子どもか。

「うおー！広いなー！」

「この文字なにかな？」

リナの前には、なにかの文字が書いてあった。…見覚えがあるのだが、一体何なのか思い出せない。

「確かこれはアンノーン文字だな、読めないけどな！」

リュウタは知っていたようだった。……でも読めないんだな。

僕はスクール時代に習っていたこともあり、少しアンノーン文字が分かっていた。しかし、文字がかすれていて読むことが出来なかつ

た。

「でよく肝心のスタンプどこだ？」

リュウタが周りをキョロキョロ見渡しながらいった。

「あそこじゃないかな？」

僕はある場所を指差した。

そこには古代のポケモンの像の下に、スタンプを押す台があった。

「スタンプはつけ〜ん！」

それを見るとリナがスタンプ台に向かって走り出した。相変わらずだ。

「オレが先だ〜！」

リュウタもスタンプ目掛けて走り出す。

「……………」

二人の様子を見て、僕とレナちゃんは黙り込んでしまった。

「レナちゃん、苦労してるんだね……………」

僕は遠慮がちにいった。

「ハハハ……………とにかく私達も行こう！」

僕は作り笑いしながら、スタンプ台へ向かっていった。

「まず一個ゲット！」

「やったね」

スタンプを台紙に押しして、二人はカナリ喜んでいる。…僕は、この二人のテンションにはついていけないな…と思った。

「次はどこかな？」

「近くにある壁画みたいね」

リナの質問にはレナちゃんが答えた。

遺跡であるから当然なのだろうが、普段見ることの出来ないものが僕の目に焼きつかれていく。

昔は一体どんな古代ポケモンが生息していたのだろうか…僕は自然にそう感じていた。

大広間を歩いて数分後、いろいろなポケモンが描かれている壁画のある場所に着いた。見たことのないポケモンばかり描かれているな……。

「不思議な絵だね……」

思わず僕はその言葉をこぼした。レナちゃんもそう思う。なぜかわからないけど、見てみると不思議な気分になった。

「スタンプは？」

レナちゃんがいった。スタンプ近くにあるはずなのだ。

「スタンプ見つけ！」

リュウタがそう言って、スタンプ目掛けて走り出した。

「待つてよ！」

レナちゃんは急いでリュウタを追いかけていた。

「私も！」

リナもスタンプに向かって走り出した。

「みんな元気だな……」

レナちゃんはおもわず呟いた。

僕は少し遅れてからスタンプに向かって走り出した。

「よっしゃ！スタンプゲット！」

「ハア……ハア……リュウタ速い……」

レナちゃんはなんとかリュウタに追いついていた。その様子からして、とてもつらそうだ。それにしてもリュウタは足が速いんだな。……僕だってホンキを出せばあれくらいは走れるだろうけど。そして、少し急ぎ目に走った。

「スタンプあった？」

遅れてきた僕とリナが同時に尋ねた。

「あったよ〜！」

リナが早速スタンプを台紙に押していた。

「早く次に行こうぜ〜！」

リュウタはまだまだ元気だった。でも、レナちゃんのほづをみると、息があがっている。

「少し休もうよ……」

レナちゃんは休憩する事を提案した。

「ええ〜？一番になれないじゃん！」

「そつだよ〜」

トーゼンのごとく、二人からは予想していた答えが返ってきていた。……相変わらず元気なんだな。僕は二人はどこから力がみなぎっているのか疑問に思った。そして、このままではレナちゃんが持たないと思ひ、

「結構ハイペースで来てるから休んでも大丈夫だよ」

といった。

「そつだな〜正直少し疲れたし、休むか〜」

そついいながら、リュウタはその場に座った。……なんとかなったみたいだな。

「所でエイト、なんで旅しているんだ〜？」

突然リュウタが僕に質問した。いきなりだったので少し驚いた。

「ジム巡りしているんだよ。そつちは？」

「オレ達もだぜ。まあバッジは持ってないけどな」

リュウタは苦笑しながらいつていた。  
じゃあ僕たちのほうが少し進んでいるというわけだな。

「見て見て！私達は持つてるよ！」

リナはレナちゃんとリュウタにバッジを見せびらかしていた。……  
イヤらしいやつだ。

しかし、本物のバッジをみた二人は目を輝かせている。

「キキョウシテイのハヤトさんは強かったよ。二人共頑張ってるね」

「おうよ！絶対勝つ！勝つたら勝ーつー！」

僕は、リュウタからすごい意気込みを感じた。……僕も負けてられないな！！頑張らないと！

「そろそろ行くか？」

リュウタがいった。結構長い時間休んでいたからだいぶ疲れが取れた。レナちゃんも大丈夫そうだし。……そろそろ出発かな？

「そうね。次は……」

レナちゃんは遺跡の地図を見て、

「大広間を出て個室の石版みたい」

といった。



「じゃあそこにレッツゴー！」

「っしやー！」

リナとリュウタは意気揚々と出発していった。休憩したことで力が有り余ってるのだろう。

「到着！」

僕達は大広間を出て、いくつかある個室の遺跡へいった。そこには古代のポケモンが描かれていて、所々にさっきも見たあのアンノーン文字があった。

「ここも不思議……」

レナちゃんが呟いていた。  
そうしていると「さる」

「ねえレナちゃん！一緒に石版見に行こうよ！」

とリナがちかづいてきた。

「うんっ！」

レナちゃんはうれしいそうに返事をした。

「じゃあ僕達は先にスタンプを押しに行くよ」

僕とリュウタは、近くにあるスタンプを押しに行った。

「これなんのポケモンかな？」

「ポケモン図鑑ならどうかかな？」

レナちゃんはポケモン図鑑で石板のポケモンを調べようとしているようだったが、なんの反応もなかった。：おかしいな。たしかポケモン図鑑は駄目だったらエラーって出るはず……。

「レナちゃん、電源入ってないよ？」

リナがすかさずいった。

「……あっ！」

レナちゃんはすぐに図鑑を見たが、やはり電源は入っていなかった。これだったら反応しないのも当たり前か。。

「レナちゃんってドジ？」

……！！ちよつとまった。ドジなオマエにドジといわれたら誰でも傷つくぞ！！！！

そう思った矢先、

「ドジって言わないでよ〜！」

リナは、涙目になったレナちゃんの頭をポカポカ叩かれていた。

「ゴメンゴメン！悪気はなかったの〜！」

リナは笑いながら謝っている。これは絶対ホンキで謝ってないな。

……僕はそう確信した。

「なんで笑ってるのよ〜！」

リナとレナちゃんがじゃれあっていると、事件が起こった。

リナとレナちゃんは石版にぶつかり、それをバラバラにしてしまったのだ。それはとてもマズイことだ。

「どづしよひ……」

リナとレナちゃんが悩んでいるのをみた僕とリュウタは、スタンプを押してから急いで戻ってきた。

「どづしたの？」

僕は二人を心配してきいた。

レナちゃんが二人にいきさつを話した。

「まずいんじゃないかね？とりあえず受付にいた人の所に行こうぜ」

「そう……だね」

レナちゃんは力なくそう答えていた。

…ああ、マズイことになったな。僕たち怒られるのかな……  
僕は不安な気持ちでいっぱいになった。

「それにしてもよくレナだけであそこまでドジするか？」

リュウタがいった。…レナちゃんもドジだったのか。

「……リナもかなりドジなんだよ」

僕はわざと大きな声を出して、皮肉たっぷりにいつてやった。

「……やっぱりな」

どうも、リュウタにはわかっていたらしい。

聞かれたらマズイ内容だったが、あいにく二人ともなにもいってこなかった。

僕達が外にでると、外は少し前よりも騒がしくなっていた。ツアーで賑やかだったからそれは当たり前なのかもしれないが、それとはまた違う感じがする。

「君達！早く避難するんだ！」

係員の人が私達のもとに駆け寄ってきた。すごく焦ってるようだ。……????? 避難？何でだろう。

「避難？なにかあったんですか？」

「大広間が大変なことになってるんだ！君達も早く……」

一体なにがあったのだろうか。……でも、僕たちのやることは一つだよ！

「よっし！行くぜ！」

「うん！」

リュウタの号令を合図に、僕達は大広間にいった。係員の人が止めようとしていたが、僕達は強引に突破することにした。

「なんだこりゃ……」

リュウタは正直に思ったことを述べた。僕もそう思った。なぜなら、

大広間に入ると、数えきれないほどのアンノーン文字にそっくりなポケモン（？）が飛んでいたからだ。

「これは……あのアンノーン文字の？」

僕ポケモン図鑑を向けた。名前は『アンノーン』。れっきとしたポケモンのようだ。それにしてもさまざまな形があるようだ。

「見て！」

リナが叫ぶと同時に、アンノーン達は、たくさんの色のエネルギー弾、目覚めるパワーをこちらの方に放ってきた

第十六話

探検ツアーのstart!

そして・・・(後書き)

アンソーンの封印をとりしてしまった四人は一体どうするのか……

第十七話 バトル！VSアンノーン(前書き)

アンノーンの封印を解いてしまった四人は……



第十七話 バトル！！VSアンノーン

ドカ                      ンッ！！

爆発音とともに光がでてきたため、今はなにも見えない。

「ま……眩しい！！」

リナが叫んでいる。

……みんな大丈夫なのか！！と叫びそうだったが、視界が悪い今叫んでも意味がないと思い、心の中で全員の無事を願った。

次第に視界が開けてきた。  
僕はとつさに周りを見渡した。  
みた感じ、みんな無傷のようだ。

「レナ、エイト、リナ、大丈夫か!!!」

リュウタが叫んだ。

「なんとかね……。」

「全っ然へーきだよ!」

レナちゃんとリナがそれに応答する。

「僕も大丈夫だよ。…でも、あのアンノーンたち、どうしようか…。」

僕は、アンノーンの大軍を指差しながらいった。

「うーん……。」

リュウタは考え込んでしまった。そうなるのも当然の事だが。

そうしているときに、アンノーンたちは再び攻撃をしかけてきた。  
やはり、『目覚めるパワー』である。

「わっ! こっちに来たよ!」

レナちゃんはビククリしている。

「……さあ、エイトはどうするのか!!!」

リナはナレーションっぽいことをいつている。…こんな状況で普通そんなこといわないだろ！！僕はリナを完全に空気を読めないヤツだと認識した。

そう考えているうちに、アンノーンの『目覚めるパワー』が僕たちのいる場所へ迫ってきていた。…どうにかして対処しないとだな。

「ブイゼル、水鉄砲！」

僕がボールからヒノアラシをだそうとした瞬間、リュウタがブイゼルの水鉄砲で目覚めるパワーを止めようとしていた。だが、アンノーンの数が多いため、かなり押されている。

「いけ、ヒノアラシ！！ブイゼルを援護、火の粉だ！」

「ミスゴロウ、お願い！ブイゼルと一緒に水鉄砲！！」

「エイパム、スピードスター！！」

僕に続いてリナとレナちゃんも自分のポケモンを繰り出した。

四体での一斉攻撃でも、すべてを防ぐことができず、防げなかった文の目覚めるパワーがそれぞれのポケモンを襲った。

「エイパム、大丈夫！？」

レナちゃんがエイパムのほうにかけよる。

「エイパツ…」

エイパムはつらそうに鳴いた。さっきのが、かなりのダメージになっってしまったようだ。

「ブイゼル、まだいけるな!！」

「ミスゴロウ、まだまだいくわよ!！」

「ブイブーイ!」

「ガヤガヤ!！」

ブイゼルと、ミスゴロウはまだまだ平気のようだ。

「なんで私のエイパムだけつらそうにしてるんだろ?」  
レナちゃんはげんな顔をしていう。

僕はヒノアラシのほうをみてみた。…やはり、まだ元気のようだ。なぜだ、なぜなんだ?僕の頭の中でその疑問が回っている。…いや、まてよ!たぶんそういうことか。

「レナちゃんは『目覚めるパワー』がどんな技か知っている?」

僕は聞いてみた。

「…うーん確か、技を使うポケモンによってタイプが変わるんだっ  
たっけ。」

「大体そういうことかな。それじゃあ、さっきの目覚めるパワーを  
思い出してみて。何色だった?」

「オレンジだよ!！」

僕はレナちゃんに聞いたのに答えたのはリナだ。やれやれ。

「さっき僕たちのポケモンが受けたのは、オレンジ色の目覚めるパウーだったんだ。つまり、そのタイプが『格闘』だったために、エイラムだけがダメージを受けたってことさ。…あくまでも予想だけだね。」

「…確かにつじつまが合うよな！エイト頭いいな」

リュウタが感心している。

「それはいいから、もう一度攻撃するよ！！ミズゴロウ、泥かけ！」

「ギャツ！」

「そうだな！！ブイゼル、もう一度水鉄砲だ！」

「ブイーツ！」

二人の攻撃はアンノーンたちに避けられてしまった。

「なんであたんないの！」

リナは悔しがっている。

「くっそー……………ん??？」

リュウタも悔しがっていたが、なにかに気づいた。

「おい、アレみてみるよ……」

リュウタが指差す方向には何匹かのアンノーンが規則よくならんでいた。

左から、K・A・B・U・T・O・O・M・U・N・A・I・T・

O

何を意味しているんだ？

そう思った瞬間、

ピカ

ッ

アンノーンたちの周りが光で溢れていく。

「眩しいッ!!」

レナちゃんが叫んだ。

確かに眩しい。でも、何が起ころのかはまったくわからないので僕は、

「視界が開けるのを待つんだ!!」

と叫んだ。

数秒後、視界がもとに戻ってきた。

「 「 「 「 「 ! ! ! 「 「 「 「 「

僕たちは唾然とした。なぜかというと、みたことのないポケモンが二匹現れていたからだった

第十七話 バトル！！VSアンノーン（後書き）

アルファベットのならびから出てきたポケモンはわかりますよね???

次回もお楽しみに!!



第十八話 Battle!! 第二ラウンド

「冗談じゃないぜ〜！」

リュウタは思わずそう言った。そう思うのもおかしくないだろう。

そう、僕たちの目の前には、アンノーンのほかに二匹ポケモンがいたのだ。

僕はポケモン図鑑を取り出して調べてみた。甲羅のようなポケモンはカブト、巻き貝のようなポケモンオムナイトというみたいだ。

「来るよ！」

リナが叫んだ。僕たちが前を見ると、オムナイトとカブトが、二匹同時に無数の泡を放ってきた。あの技は『バブル光線』だ。そんな考え込んでいる間にバブル光線がこっちのほうへ迫ってきた。

「エイパム！スピードスターで迎撃して！」

「ブイゼルはソニックブームで援護だ！」

エイパムとブイゼルの攻撃のおかげで、なんとかバブル光線を防ぐことができた。リュウタとレナちゃんに感謝だな。

でも事態はまだ良くなっていない。アンノーン達は、攻撃が終わったエイパムとブイゼルに目覚めるパワーで攻撃をしかけてきた。…

…これは避けきれないだろ！！僕が何とかしないと。

「ヒノアラシ！火の粉だ！」

「ミズゴロウ！水鉄砲！」

「ヒノー！」

「ギャー！」

ヒノアラシとミズゴロウの攻撃で、エイパムとブイゼルは目覚めるパワーを受けずに済んだ。リナもきちんと反応していて少しほっとした。…このことをリナにいったら怒りそうだな。

「この前じゃ防戦一方だ。オレがアンノーンを引き付けるから、その間にあの二匹を！」

「私もアンノーンと戦うよ！」

リュウタとリナがいった。確かに状況が悪い。ここは二手に別れた方が良さそうだ。

「じゃあ私とエイトくんでカブト達ね」

「わかった！ヒノアラシ！カブトに火の粉だ！」

「エイパムはオムナイトにスピードスター！」

「ヒノー！」

「ウキッ！」

エイパムとヒノアラシの攻撃は、直撃したようだったが、見た感じほとんどダメージになっていない。…二匹のタイプはたしか水と岩ノーマルタイプのエイパムと炎タイプのヒノアラシ、どちらの攻撃もいまひとつだ。

「……！？レナちゃん！危ない！」

「えっ？キヤアア！」

アンノーン達がレナちゃんに向かって目覚めるパワーを放ってきた。

……まずい！！

突然の出来事だったため、レナちゃんは動くことが出来なかった。しかし、

「ミスゴロウ！水鉄砲でレナちゃんを守って！」

「ガヤガヤー！」

幸いリナがミスゴロウに水鉄砲の指示をしていた。これでなんとかなったな。だが、僕がそう思ったのも一瞬だった。

……！！

徐々に水鉄砲が押されてきて、最後には目覚めるパワーに打ち破られてしまった。何とかしないと……でも今からだと間に合わない……

「レナーッ!!」

僕は危機感を感じていたが、リュウタがレナちゃんのもとに走ってきて飛びついていた。僕は、思わずその光景に唾然としたが、どうやらそのおかげでエネルギー弾が当たらなかったようで安心した。ついでにリナの方を見ると、怪しい薬でも作っている魔女のように顔がにやけている。……なに考えてるんだ??

僕にはさっぱり分からなかった。

「レナ!大丈夫か!」

心配してリュウタがレナちゃんに聞いている。

「うっうん。大丈夫」

何とか大丈夫だったみたいだな。……よかった。

「くそが!あいつら調子に乗りやがって!」

リュウタはかなりヒートアップしてきた。でも、このままだとやられるのは時間の問題だ。……一体どうすればいいんだ。そうこうしている間に、またアンノーン達が目覚めるパワーを発動した。

「もう容赦しねえ!ブイゼル!電光石火で回避してからアクアジェツトだ!!」

「ブイブイ！」

「一人で良いところ取らないでよね！ミスゴロウ！ミスゴロウでブイゼルの援護をして！」

「ガヤッ！」

リナとリュウタがそれぞれ指示する。

ブイゼルは目覚めるパワーをひらりとかわした後、アクアジェットでアンnoon達に突撃した。

アンnoon達も反撃するために目覚めるパワーを放とうとしていたが、ミスゴロウの水鉄砲で阻まれた。ブイゼルの攻撃は直撃し、アンnoon達は倒れた。

「っしやー！」

「やったね」

二人はすごく喜んでいた。だが、まだアンnoonはたくさんいる。気を抜く暇はないな。

レナちゃんはさっきのカブト達の方を向いてた。なにかを決意したような表情をしている。だが、少し気がかりだったので、

「レナちゃん！大丈夫！？」

と念のため聞いた。

「うん。心配かけてごめんね」

大丈夫だったようなので、僕は安心した。

「ウキー」

レナちゃんのポケモン、エイパムが彼女に寄り添って鳴いた。やっぱり心配なんだな。

「私は大丈夫よ」

レナちゃんはエイパムの頭を撫でながら言った。

そうしているうちに僕の頭の中何かがうかんできた。……やってみる価値はあるな。…新たな作戦を実行するとするか。

「ヒノアラシ！煙幕だ！」

「ヒノー！」

僕の指示で、ヒノアラシは黒い煙を出し、カブトとオムナイトの周りを包み込んだ。

「よし！ヒノアラシ！煙幕から離れるんだ！火の粉！」

ヒノアラシは煙幕から少し離れ、火の粉を放った。すると、火の粉が煙幕にぶつかり、火が煙幕に着火して爆発が起こった。

「うまくいったね」

……作戦は成功だ。

「凄い……」

「ウキ……」

レナちゃんとエイパムは驚いていた。……そんなにすごいことではないと思うけどな。

「えっ？」

煙が晴れると、レナちゃんは驚いていた。不思議に思ってみてみたが、僕にとって予想外の光景が目に入ってきたため僕も驚いてしまった。

カブトとオムナイトには傷一つついていなかったのだ。

あれくらいのことではダメだったのか。

「どういうことだ……レナちゃん、少し考えたいからカブト達の相手をお願いしてもいいかな？」

僕ははっきりと白黒をつけるために、レナちゃんにカブトのことを頼んだ。

「任せて！ヒメグマ！お願い！」

「ヒメー」

レナちゃんはヒメグマをボールから出した。さすがにエイパムだけはキツイのだろう。一方リユウタ達はなかなか攻めきれていなかった。やはり、アンノーンの数が多すぎるのだ。

「ブイゼル！水鉄砲！」

「ミズゴロウは泥かけ！」

「ブーイ！」

「ギャツ！」

二匹の攻撃はアンノーン達にかわされてしまった。

さすがに空中の敵は辛いだろうな。

「だーっ！めんどくせー！」

「どうすればいいのよ！？」

二人のセリフを聞いて、何だかかなりマズイ状況になっていることを察した。……焦っても勝てないだろ……

「……！これでいくぞ！ブイゼル！その場に待機だ！」

「えっ！？」



「ブイツ!?」

その指示には、リナだけではなくブイゼルも驚いていた。リュウタ、一体どうするつもりなのか?

その間にアンノーン達が目覚めるパワーで攻撃してきた。

「あの量は無理だ!リナ、何発か打ち消してくれ!」

さすがに無理だと悟ったのか、リュウタはリナに援軍を求めた。

「任せて!ミスゴロウ、水鉄砲!」

「ガヤー!」

ミスゴロウは水鉄砲で何発か目覚めるパワーを打ち消したが、まだ残っていた。

このままだとブイゼルが危ないだろ!

「今だブイゼル!しっぱで打ち返せ!」

「ブツブイ!」

まさかのリュウタの指示にブイゼルも驚いていたが、リュウタの指示通りしっぱで目覚めるパワーに対抗し、なんと跳ね返していた。リュウタの考えることはダイナミックだな……

「うまくいったぜ!」

「リュウタ凄い」

確かにすごいと思ったが、ブイゼルにも少しダメージがあるようだ。でも今の攻撃でアンノーンを何体か倒した。

多分リュウタ達は大丈夫だろう。

そんなことより、僕は集中しないと。…それにしても、気になることがあるな。

僕はあることを気にしていた。

……いや、もしかして　アレか!!  
僕は結論を下した。

「いくよエイパム、ヒメグマ!」

「ウキー!」

「ヒメー!」

二匹は元気よく答えている。レナちゃんには悪いけど、答えを見つけたわけだし、僕もいくか。

「僕もやるよ」

「なにかわかったの?」

「まだ確信はないけど、バトルの中で確信に変えるよ」

「エイパムはスピードスター!ヒメグマは……」

「ヒメー！」

ヒメグマはレナちゃんの指示を聞く前にオムナイトに自分の爪を硬化して攻撃した。あの技は『メタルクロー』だ。ヒメグマはメタルクローが使えるんだな。

「ヒメグマ凄いな！ヒノアラシ、僕達も負けていられないよ！」

「ヒノー！」

「よし！ヒノアラシ、あそこのアンノーン達に火の粉だ！」

さあ、決着をつけようか。

ヒノアラシは、さっきから綺麗にならんでいてまばゆく光っているアンノーンたちに攻撃をしかける。

「まさかあのアンノーン達がカブト達を出現さてるの？」

レナちゃんは僕に尋ねた。

……気づいたみたいだ。

「おそろくね」

攻撃したのはいいものの、ヒノアラシの火の粉はカブトのバブル光線で消されてしまっていた。…やはりそう簡単にはいかないか。

「私がカブトとオムナイトを引き付けるから、エイトくんはアンノーン達を！」

「任せて！」

さらに、ターゲットを二手に分けることにした。

「エイパムはカブトに引っかけ！ヒメグマはオムナイトにメタルクロー！」

「ウキッ！」

「ヒメー！」

二匹はカブト達に攻撃した。エイパムの攻撃はあまり効果がないが、ヒメグマのメタルクローなら効果はあるだろう。

「今だ！ヒノアラシ、火の粉！」

「ヒノヒノー！」

ヒノアラシは火の粉をアンノーン達に放った。それをカブト達は阻止しようとした。

だが、レナちゃんはちゃんと考えていた。

「エイパム！スピードスター！ヒメグマはメタルクロー！」

エイパムとヒメグマが、阻止しようとしていたカブト達に攻撃した。

何とかかなりそうだ。

「よし！行っけー！」

僕は思わずそう叫んだ。火の粉はアンノーン達に命中し、並んでいたアンノーン達はバラバラになった。それと同時にカブト達も光となって消えていった。

「やっぱりね。あのアンノーン達が綺麗にならんでいたから気になったんだ」

「なるほどね」

これで一安心といたかつたが、まだ安心できない。リュウタとリナはまだ戦っているからだ。

「そっちは終わったか？」

リュウタが僕たちに話しかけてきた。レナちゃんがリュウタを確認する。前方を見ると、まだアンノーンはたくさんいた。かなり苦戦しているみな……

「でもなんでこんなにたくさんいるの？」

リナがそう呟いた。確かにおかしいな。いきなり現れたわけだし、この数は半端ない。……なにかあるな。……んっ？もしかして……

！！！

「……まさか」

僕は気づいた。気づいてしまった。

「さっきレナちゃんとリナがバラバラにしてしまった石版……あれ

のせいかもしれない……」

原因はそれしかない！

徐々にリナの顔がひきつって来た。……当たり前だが。

「私たちのせい！？」

リナも驚きを隠さず、声に出た。レナちゃんも驚いている。

「まだ可能性だし、リナたちのせいじゃないよ」

僕は二人をなぐさめる。

「ならパズルを直せばいいんだな〜！」

「多分ね」

「ならオレはこいつらを足止めするぜ〜！頭を使うのは苦手だしな〜！」

「私も残るよ！」

リュウタとリナが残ると言い出した。二人ならきつと大丈夫、適任だな。

「なら僕とレナちゃんがさっきの部屋に行くよ」

「わかったわ。エイトくん、行こう〜！」

僕たちはさっきの部屋へと急いだ。

早くなおさないとー！ー！

第十八話    Battle!!    第二ラウンド（後書き）

果たしてアンノーンをとめることができるのか！

次回に続く！



第十九話 エイト&レナVS古代の石板(前書き)

エイトとレナは石板の部屋へと向かう………

## 第十九話 エイト&レナVS古代の石板

僕は今、レナちゃんと一緒に石板があった部屋に戻っている最中だ。

「エイトくん、場所どこだったっけ？」

レナちゃんに尋ねられた。リュウタによると、レナちゃんもドジだったみたいだから尋ねられてもしようがないのかな。

「ここから左に曲がったらすぐに着くはずだよ。」

「そっか、じゃあはやくいこう!」

数分後、僕たちは石板の部屋に到着した。

石板はバラバラになっていて、もとの形がよくわからなくなっている。

「……さっき私たちがばらまいたままになってるね。」

「そうだね。…いろいろ考えてないではやいところ片付けよう。」

「うん!」

こうして僕たちは、石板をもとに戻す作業に取りかかった。

30分後

「……全然分かんないよ！どうしよう……」

レナちゃんが嘆いている。さきほどから、石板のパズルにかなり苦戦しているみたいだ。

そういう僕自身もあまりはかどっていない。……このパズル、なかなか難しいぞ。

「とりあえず分かりやすい部品からはめていこう。」

僕はそう提案した。

「……分かりやすいところって例えばどこ？」

レナちゃんからは疑問がかえってきたので、

「端のほう分かりやすいと思うよ。」

といいかえした。

「わかった！頑張ってみる！！」

レナちゃんは意気込んだようだ。

さらに数分後……

石板パズルの枠の部分はすでに埋まっていたが、もとに戻すまでに、まだ時間がかかりそうだ。

……リユウタとリナは大丈夫だろうか。僕は心配になっていた。

「…ねえ、リユウタたち大丈夫かなあ？」

レナちゃんは僕が思っていたことをそのままいった。

「…大丈夫だと思うよ。いや、あの二人のコンビなら何とかなるさ。」

僕は明るくいった。

「そうだよね！あつ私たちははやくパズルをもとに戻さなくっちゃ

！！」

「そつだね。リユウタたちの負担を少しでも減らさないよ。」

僕は石板のカケラの一つを手にとって、それをじつとみつめてみた。

！！！！

石板をよくみてみると、アンノーン文字が刻まれている。

この記号はたしか……アンノーン文字の『KとO』だ。

僕たちが使う言葉だと『こ』と発音するはずだ。ちよつと待てよ。

…ということとはまさか!!

「レナちゃん、この石板パズルを解くヒントが分かったよ。」

「えっホント!?!」

レナちゃんは驚いているようだ。

「これをよくみてみてよ。」

「うん、分かった!」

僕は先ほどの石板のカケラを差し出した。

「あっ何かかいてあるね。」

「どうやらレナちゃんも気づいたようだ。」

「そう、この石板にはアンノーン文字が刻まれているんだ。だから、文字をたどっていけばもとに戻せる可能性があるよ。」

「へえー…エイトくんってすごいんだね。そうとわかったなら試さないよ! やってみようよ!」

「分かった! まずは文字があるものとなないものに分けよう。」

「ええー!!」

僕たちはまず文字の有無で石板を分類した。

そして数分後、文字を解読できるように並べすることに成功した。

「ここまでできたらあとは大丈夫ね！」

「それじゃあ残りのパーツをはめ込んでいこう！」

「おー！」

「あれ？全然はまらないよ」

「このパーツはここでいいのか？」

僕たちはいつこうに進めることができずに不安な気持ちでいっぱいだった。

残りの5つのパーツをいれるのには予想以上の時間がかかったのだ。

そして……

「やったあ!! もとに戻ったよ!」

僕たちはやっとの思いで石板を元通りにすることができた。

「ハアーツ何とかなってよかったよ。一時はどうなるかと思った。」

僕は思わずそういったが、リュウタたちのところに急いでいかないとだ。

「レナちゃん、リュウタたちのところへいこう!」

「ええ! もちろんそのつもりよ!」

僕たちはリュウタとリナのところへ急いで向かった。

石板には、

『わたしたち いちぞく ことば ここに きざむ』

と書かれていたが、真の意味を知る者は誰一人としていないだろう

第十九話 エイト&レナVS古代の石板(後書き)

今回は省略した部分があつてごめんなさいm( ) ( ) m

次回はもう少し頑張りたいと思います。



第二十話 第三ラウンド 激バトル！〜リナside〜（前書き）

今回は本編では初のリナsideです！！

第二十話 第三ラウンド 激バトル！〜リナside〜

エイトとレナが石板を直しにいつているとき、わたしとリュウタは、大量のアンノーン達とバトルをしていた。

正直、かなり苦戦している状態である。一匹ずつだつたら苦戦しないと思うんだけど、数が多すぎるよ！もう少しわたしたちのここと考えてくれないかな…

いろいろ考えていたら、アンノーンが『目覚めるパワー』を発動しようとしていた。

「またくるよ！」

わたしはリュウタに向かっていった。

「ブイゼル！かわせ！」

「ブイ！」

リュウタの指示でブイゼルは、軽々と右にステップして、アンノーン達の目覚めるパワーをかわした。リュウタに単調な攻撃はきかないんだから！！

「うっしー！」

リュウタは少し笑顔を見せた。でも、このままじゃまずいんじゃない？と思って、

「リュウタ、このままだと防戦一方だよ。どうしようっ？」

といった。

リュウタも焦っているのか徐々に顔が曇ったが、すぐに元に戻った。リュウタはちょっとしたことへこんだりしないよね！！

「リナ、ちょっと考えがあるんだ。ミスゴロウが巻き添いにならないようにしてくれ」

リュウタはいきなりわたしに向かっていった。何か作戦があるのかな…わたしはそう思いながら、

「わかった！」

と答えて、ミスゴロウに少し下がるように指示した。

…リュウタの作戦、見せてもらおうよ！！

わたしはリュウタの作戦がどのようなものなのか興味津々だった。ワクワクしてテンションがあがってきたが、アンノーンの攻撃が再びとんできた。

「来た！」

わたしはリュウタに合図を送った。チャンスだよ！

「ブイゼル、かわせ！」

「ブイ！」

ブイゼルは、さきほどと同じように軽やかにステップしてかわした。ブイゼルは技をよけるの上手いんだね。ミスゴロウにも見習ってもらわなきゃ！

「ブイゼル！回転しながらジャンプ！」

リュウタが続けて指示する。これが作戦なのかな…何をやるのだろう。

「ブ……？ブイ！」

ブイゼルは戸惑っていたが、すぐにリュウタのやりたい事がわかったようだった。すごいなあ！！

ブイゼルはリュウタの指示通り、回転しながらジャンプした。

「なにをやるの？」

わたしは、声に出してしまった。

「見てなって！ブイゼル！そのまま水鉄砲！」

ブイゼルは、回転しながら水鉄砲を打った。回転しながらなので、さまざまな方向に水鉄砲が放たれる。まるでシャワーのようだ。

「なるほど〜！これならあちこちにいっぱいいるアンノーンに攻撃できるね〜！」

「そゆこと」

回転させることによって、いろんな方向にいるアンノーンたちを攻撃することに成功したということだった。リュウタはやっぱりすごいよ……！！

「ナイスだぜ〜！」

「ブイツ！」

リュウタの言葉に、ブイゼルは片手を上げて答えていた。今の攻撃で、アンノーンの数は随分減ってるよ！

リュウタにまかせっぱなしじゃダメだよ。わたしも頑張らないと！！

「私だって！ミスゴロウ！水鉄砲！」

「ガヤー！」

ミスゴロウは、ブイゼルに負けなくらいの水鉄砲を放った。

「ブイゼル！アクア……」

リュウタは、ブイゼルにアクアジェットを指示しようとしたが、アンノーン達が、一斉に目覚めるパワーで攻撃してきた。数が多いため、エネルギー弾の数も半端ない。

「リュウタ！あれは無理だよ！」

わたしは正直にいった。

リュウタのほうをみると、よけるように指示しそうだ。

しかし、数匹のアンノーン達が光り出し、その光は、一匹のアンノーンに向けていた。その瞬間、突然そのアンノーンは、今までのものとは比べものならなくらいの特大の目覚めるパワーを放ってき

た。

「ハアアアア!?!」

リュウタは思わずそういつてしまっていた。そう思うのも、しょうがないよ。あんなの予想外だつて!!大きさはブイゼルやミスゴロウの五倍ちかくはあるんだから……。

「ミ、ミスゴロウ!水鉄砲で迎撃して!」

「ガ、ガヤガヤ!」

わたしは焦りながらもミスゴロウに指示した。

「ブイゼル!最大パワーで水鉄砲!」

「ブイ!」

リュウタもブイゼルに指示した。わたしが見たところ、今までで一番強力な水鉄砲で反撃しているみたい。なんとか食い止められるよね……。

「ブイ……」

「ガヤ!」

やばいよ!二匹ともすごく辛そう……このままだと破られちゃうよ!

「ブイゼル!中断してかわすんだ!」

「ミズゴロウもかわして！」

二匹とも水鉄砲を中断して、瞬時に目覚めるパワーをかわした。だが、直撃しなかったとはいえ、かなり大きなダメージを受けてしまったみたいだ。

ピンチ

この言葉がわたしの頭によぎった。

「ブイゼル！大丈夫か！？」

「ミズゴロウ！しっかりして！」

「ブイ……」

「ガヤ……」

二匹ともなんとか立ち上がったけど、ダメージは思ったよりも響いているみたいだね……。一体どうすればいいの……！！

「このままだとやべえぞ！」

確かに今の状況は最悪だ。でも、わたしたちがあきらめちゃダメじゃないの???

わたしはそう思ったので、

「あきらめちゃダメだよ！必ずエイト達がなんとかしてくれるよ！」  
と聞いた。

エイトとレナちゃんは石板を直しにいつてるんだから、わたしたちは、アンノーンを止めることで時間をかせがないと！！そして、あの二人との約束を守らないと！

「気合いだブイゼル！気合いで立て！」

「ブ……イ！」

「頑張つて！ミスゴロウ！」

「ガ……ヤー！」

二匹ともなんとか立ち上がった。わたしたちは二匹を信じているんだよ！わたしたちはわたしたちに来ることをするだけだよ！！

「ブイゼル！いくぜ！」

「ブイブイー！」

ブイゼルは大きく息を吸い込んだ。いったいなにをするんだろう？

「ブイー……！」



ブイゼルは、凍てつく光線をアンノーン達に放っていた。もしかして新しい技なのかな!!

確か『冷凍ビーム』っていうんだっけ……。

「ブイゼル凄い！ミズゴロウ！わたしたちも！水鉄砲！」

「ガヤガヤー！」

ミズゴロウは、今までで一番大きな水鉄砲を放った。

特性の『激流』!!

この激流という特性は、ピンチになると水タイプの威力が上がるというもの。なかなか心強いんじゃない??

「よっしゃー！」

「やったね」

今の一撃で、アンノーンの大半は倒すことができた。これで終わりにできるかも!!

「ブイゼル！水……!?!？」

リュウタはブイゼルに水鉄砲を指示しようとしたが、アンノーン達が一斉に光りだして、綺麗に並んだ。

それは『Y・U・R・E・I・D・O・R・U』と並んでいた。

……もしかして!?

「……嘘っ」

「……冗談だろ?」

わたしたちの前には、さっきエイトとレナちゃんが戦っていたカブトやオムナイトのような、一匹のポケモンが現れた、図鑑を向けてみると、ユレイドルという古代ポケモンだと分かった。

体つきからしてみても強そうだし、威圧感がある。正直怖いよ……。

とにかく……これは絶対絶命なんじゃない!?

「あきらめるかよ! ブイゼル! 冷凍ビーム!」

「ブイー! ……ブイ?」

あれっ? なぜか冷凍ビームが出ないよ! ……一体どうということなの?

「ミスゴロウ! 水鉄砲!」

「ガヤー!」

わたしはミスゴロウに水鉄砲を指示した。とにかくなんとかしなくちゃ!

「ブイゼル! アクアジェット!」

「ブーイ！」

二匹の技は、ユレイドルの顔にダイレクトに当たったが、まるでダメージはない。それに、ブイゼルもミズゴロウもそろそろ限界みたい。どうしよう……ここで終わりなのかな……。エイト、はやくきてよ……！

「どっすりゃ良いんだよ……」

リュウタもお手上げ状態のようだ。

「エイト……はやく……」

わたしは、知らずにそう呟いていた。やっぱりきにしちゃうんだよね……

「ブイ！？」

ブイゼルはなにかに驚いて反応していた。見てみると、ユレイドルはなにかの力を溜め始めていた。これで……終わっちゃうの？

「エイト……え？リュウタ！」

「なんだ……はあ？」

リュウタは気の抜けるような声を出してしまった。

するとそれが合図になったのか、アンノーン達とユレイドルが急に

光り出した。そして、ユレイドルはキラキラと光と化して消え、アンノーン達は、壁に吸い込まれて、アンノーン文字に戻った。

これってもしかして……

「レナ……間に合ったんだな……」

「エイト……私、頑張ったよ……」

わたしたちはそう呟いて、その場に座り込んでしまった。ブイゼルもミスゴロウも頑張ってくれたよ……

「リュウター！リナー！」

突然、わたしたちを呼ぶ声がした。わたしとリュウターが振り返ると、そこには、エイトとレナがいた。やっぱり間にあっていたんだ！！

「リュウター！？こんなにボロボロになって！また無茶したんでしょ！？」

「痛い痛い！」

レナちゃんは、リュウターの胸倉を掴んでブンブン振った。たしかに痛そう……

「もしものがあつたらどうするつもり!？」

「悪かつたつて!放せよ!」

「もう知らない!」

レナちゃんは頬を膨らましながらそっぽ向いた。レナちゃんかわいいな。きつとリュウタがすごく心配だつたんだよね。

「エイト!遅いよ!」

わたしはエイトをポカポカ叩いた。だつて遅いんだもん!なんかこのまま泣いちゃいそうだよ……

「ごめんね、遅くなって」

エイトは、わたしに優しい笑顔でいった。

……そんな顔しないでよ。

……リナは自然と顔が赤くなつていたようだった。

「とにかく外にですよ」

「だな」

わたしたちは、ポケモンをボールに戻して、激戦を繰り広げた大広間を後にした

第二十話 第三ラウンド 激バトル！〜リナside〜（後書き）

アンノーンたちをしずめることができ、よかったよかった……。

今回は事件のあとをピックアップします！！

第二十一話 解決！！アルフの遺跡は終わりを告げる

(前書き)

事件解決のあとのお話……

## 第二十一話 解決！！アルフの遺跡は終わりを告げる

僕たちは、それぞれの頑張りによってアンノーンと古代ポケモンたちの暴走を止めることができた。正直どうなるのかと思っただけど、どうにかなつてよかったよ。

そして、僕たちは今大広間から出たところであつた。

「そういえば、スタンプラリーは中止になっちゃつたのかな……。」

リナがそういつた。アンノーンたちの暴走でそれどころではなかつたからな……中止になつても仕方がないか。

……ん？ちよつと待てよ。何か忘れていることがあるような……

「あ　　ッ！！」

僕が少し考えていた矢先に、リュウタが突然叫びだした。

「リュウタ、どうしたの？」

レナちゃんも首をかしげているようだ。それにしても、リュウタはどうしたんだらう。

「スタンプラリーで一番だつたらプレゼントもらったのによ……！」

……それだ！

確かにスタンプラリーで一番だとプレゼントがもらえた。だが、中止になつてしまつた以上だれもが受けとることが出来ない。僕は、



少しがっかりした。

「スタンプラリーのプレゼントがもらえないなんてみんなが認めても、わたしは絶対認めないよ!!」

リナが、一気にヒートアップしてきた。プレゼント系には弱そうだから、仕方がないか。

「プレゼント欲しかったねちょっと残念だなあ……」

レナちゃんがそう呟いていた。

そんな気持ちになるのもみんな同じなんだな……

レナちゃん言葉の氣に、四人はだんまりしてしまった。

「おーい、君たち!!!!」

数分後、僕たちの沈黙を破ったのはツアーの係員のお兄さんだった。

……何かようでもあるのか？僕は不思議に思った。

リナもレナちゃんもリュウタもげんそうな顔をしている。

「君たちに渡したいものがあるんだ!!」

係員のお兄さんは、そうだった。

確かに手には小さな木箱を持っている。……それにしても、一体何なんだ？

「ありがとうございます……！！！！！！」

場の空気を破ったのは、やはりリナだった。強引にお兄さんから木箱を受けとっている。……やれやれ。

「なんかよく分かんねーけどいいんじゃない？」

リユウタは僕にそういった。だけど、理由は聞いておいたほうがいいな。

「あの……これは一体どういうことですか？」

僕は係員のお兄さんに向かっていった。

「君たちは石板のポケモンをとめてくれただろう？だから、お礼にツアーの景品をあげようってことになったんだよ。」

お兄さんはそう説明した。

……そういうことだったのか。でも、アンノーンたちを暴走させたのも僕たちだよ……。……僕がリナのほうをみると、ピクンと反応した。きつと同じことを考えていたのだろう。

僕はうれしいのか、申しわけないのか、複雑な気分だった。

「今すぐ開けてもいいと思うけど、せつかくだからポケモンセンタ―でゆっくりしながらにしない？」

レナちゃんが、そのように提案した。

ふと、空を見上げてみると、すでに淡いオレンジ色に染まっていた。太陽も光輝きながら沈みかけている。つまり、もう夕方なのだ。

「そうだね。そろそろ暗くなりそうだから、ポケモンセンターに戻って夜ごはんにしよう。」

僕は相づちをうった。

「うっし！そうと決まれば一番乗りだ！はやく戻ろうぜ！！」

「あ　　ッわたしが先だよ！！」

リュウタとリナは走り去ってしまった。相変わらず元気なんだな。

「エイトくん、私たちもいこう！」

レナちゃんが二人の姿をみて啞然としながらいった。

「急いでいるわけでもないし、僕たちはゆっくり行こうか。」

「ええ！」

こうして、遺跡探検ツアー

…否、古代ポケモン大バトルは幕を閉じた

〔ポケモンセンター レストラン〕

「うっめー!!」

「おいしいー!!」

僕たちの今回の夜ごはんは、リッチなことにバイキングである。…  
…この膨大なお金を一人で払えといわれたらひとたまりもない。もちろんお金は一人一人の自腹になっているからいいのだが。

「エイト、エビフライちょうだい!!」

リナがフォークをつきだしながらいった。

「自分でとりにいけばいいだろ!それと、食事のマナーを考える!!」

僕は行儀の悪いリナを注意した。…手のかかるヤツだ。

「エイトのケチ!!」

リナはすねてしまった。

「…リナちゃん、それはちょっと違うんじゃない？」

レナちゃんは僕をフォローしてくれた。感謝感謝。

一方リュウタはというと、さっきからハンバーグばかり食べている。

「リュウタ、ハンバーグがそんなに好きなのか？」

僕は念のため聞いてみた。

「ん？ハンバーグはうめえからな。それに、他のものも食ってるから大丈夫だぜ。」

「……ホントか？」

「そういえば、リュウタは昨日もハンバーグ食べてたわ。」

レナちゃんの鋭い言葉がとんだ。

「……嘘じゃないか……！」

「……細かいことは気にすんなよ……！」

結局、食事だけで、二時間くらい時間がたってしまったのであった。

〔ポケモンセンター 宿泊施設〕

「ハアーツ！このベッドは最高！！」

リナは部屋につくなり、ベッドに横たわった。

ちなみに今回はレナちゃんたちもいるため、四人部屋をとっている。

「そういえば、ツアーでもらったプレゼントまだみてないよな。」

リュウタはリナをみて、思い出したかのようにいった。

「あっ、忘れてた！」

リナは、プレゼントの入った木箱を持ってきた。

「開けるよ！！」

リナがそういって木箱を開けると、綺麗な宝石のようなものが四つ入っていた。

「うわあ、キレイ！！」

「すげえものもらったな」

レナちゃんとリュウタがそれぞれいった。

「だれがどの種類をもらうのか決めないとだな。」

僕がそういつた瞬間、

「わたしこれがいい!!」

といいながら、リナがぴよんぴよんはねていた。

リナが持っている石は、クリーム色をしていて、中は黄金にまばゆく光っている。

「…ということらしいけど、大丈夫か？」

「いいぜ! ……強いていうなら俺はコイツだな。」

リュウタが選んだものは、エメラルド色をしていて、稲妻の柄が中央にかかっていた。

「エイトくんはどうするの?」

レナちゃんに聞かれた。

「レナちゃんの好きな方を選んでいいよ。」

僕は少し遠慮がちにいった。

「…そっか。じゃあ私はこれにしようかな。」

レナちゃんが見つかった石は、アクアブルー、つまり海の色をしてい

る。その輝きは、サファイアのようにだ。

僕がもらうことになった石は、トパーズのような黄色い輝きをしている。そして、炎をおもわせる赤い模様が刻まれている。

「エイトくん、なんでこっちの石を残したのか分かる？」

突然、レナちゃんがいった。

「……何か意味があったの？」

僕はわからなかったので、聞き返した。

「私はエイトくんはいつもは大人っぽいけど、炎のように情熱的なところも一緒に持っているんだなって思うの。この石の雰囲気ピッタリね。」

……レナちゃんは僕のことをそんな風にみていたのか。

「そういわれてみると、リナやリュウタがなぜそれぞれの石にひかれていったのか、分かったような気がするよ。リナはいつもハイテンションで光のように明るいヤツだし、リュウタは少し軽いけど、稲妻のように一直線に前をみている。」

「確かにそうだね。エイトくんという通りかも！」

「あっ！……レナちゃんはサファイアの石言葉を知ってる？」

「石言葉……？」

「サファイアには『慈愛』という石言葉があるんだ。分かりやすくいうと、いつくしむこと。つまり、大切にかわいがること」



「『慈愛』かあ……」

「レナちゃんはポケモンのことをそして、みんなのことを大切に思っている。この石は、その象徴なのかもしれないね。」

僕たちが寝てしまった頃、外はマタツボミの塔を背景に満天の星がきらめいていた。

第二十一話 解決！！アルフの遺跡は終わりを告げる

(後書き)

エイトってホントに12歳なのか??

普通『慈愛』なんて知らないよ!!!

不審な点はあるかもしれませんが、気にしないでください。

コラボは今回で終わりと見せかけてあとすこし続きますよ!!!

感想やアドバイスお待ちしております。

第二十二話 出発く別れぎわのバトルマッチく(前書き)

ついに、コラボ完結!!

## 第二十二話 出発 〱 別れぎわのバトルマッチ

……僕が気がついたときはもう朝になっていた。

ポケギアで時刻を確認してみると、AM7:00

寝ぼうではないみたいだ。

だが、他の三人はもう準備ができていようだったので、僕は急いで身じたくをした。

「さっエイトも準備ができたみたいだから、食堂で朝ごはん食べにいこー!」

身じたくを終えた僕をみて、リナがそういったあと四人は部屋をでた。

朝ごはんはご飯に味噌汁に冷やっこという完全なる和食メニューだった。キキヨウシテイはその町並みから和食が適しているのだろうと思うのだが、きちんと和食を食べたのは今日が初めてだった。

「おかわり!!」リナは朝からも食欲がすごい。リュウタもリナに負けじと結構食べている。やっぱりなんか似てるな。

そんな二人姿をみてレナちゃんは苦笑いしてるよ……。

「ねえ、エイトくん。」

「ん？」

リナとリュウタの食べっぷりをみながらポヤーンとしていたら、レナちゃんに呼ばれた。

「エイトくんたちはもうすぐ次の町に出発するんだったよね。」

「そのつもりだけど、どうしたの？」

「せっかくだから記念にバトルしない？」

…バトルか。昨日は大変な目にあつてのんびりしていられなかったからな。

「いいよ。」

僕の答えはYes。レナちゃんとのバトルに承諾した。

「ありがとう！リュウタたちが食べ終わったらバトルフィールドに行こうね。」

「……そうだね。まだ時間がかかりそうだけど。」

僕とレナちゃんがバトルの約束をしている間も、リナとリュウタの二人はなにかしら食べていた。

リナはほっとしても大丈夫だろうけど、リュウタは大丈夫なのだろうか？

レナちゃんもリュウタのほうをみて心配してるよ。

けど、僕たちはそんな二人をずっとみていた。

「バトルフィールド」

「エイトくん！さっそくバトルをはじめよう！！」

「望むところだよ！」

僕とレナちゃんはそれぞれの配置についている。……準備完了だ。

「エイトのバカーツわたしがバトルしたかったのに！」

……でたよ。リナの八つ当たり。予想していたが、やはりこうなるのか。

「レナちゃん、次は相手になってあげるからガマンして。」

レナちゃんが、そういつてリナをなだめている。

リナは、一応おとなしくなった。

「うっし！俺が審判するからさっさとはじめようぜ……！」  
「……どうやらリュウタがジャッジをしてくれるようだ。」

「リュウタ、助かるよ。」

「ありがとう!!」

僕とレナちゃんがいう。

「準備は出来てるな! ルールは、使用ポケモン一体のシングルバトルだ。……開始!!」

「エイパム、お願い!!」

「ウツキー!!」

レナちゃんは、やはりエイパムを繰り出してきた。

……ゴースでいこうと思っていたけど、相性的にバトルにならないな。……それなら

「いけ、ヒノアラシ!!」

「ヒノヒノ!!」

僕はヒノアラシを選んだ。ヒノアラシがバトルの経験も一番あるからな。

「エイトくん、先攻はもらうよ! エイパム、スピードスター!!」

「エパー!!」

エイパムは軽くジャンプし、尾を振った。それにより、無数の星が

こちらに向かってとんでくる。

「ヒノアラシ、火の粉で応戦だ！」

「ヒノー!!!」

ヒノアラシの背中から、激しい炎が出てきて、口からはたくさんの小さな火の玉がスピードスターに向かっていく。

ドカーンッ!

小さな爆発がおき、ケムリが立ち込める。

視界が元に戻るが、エイパムもヒノアラシもまだまだ元気のようにだ。……さつきのは互角だったんだな。

「レナちゃんやるね!今度はこっちから行くよ。ヒノアラシ、電光石火!」

「ヒノヒノヒノーッ!!!」

ヒノアラシは徐々に加速して、エイパムとの距離を詰めていく。

「エイパム、影分身!!!」

「エパッ エパッ エパッ」

エイパムは分身していき、



10匹くらいにまで増えた。

そのため、ヒノアラシの電光石火は本体ではなく、分身のほうに当たってしまった。本体に当てることができる可能性は極めて低いからな。

くそ……。

僕は歯をくいしばった。正直悔しい。レナちゃんは相当な実力のもちぬしだ。

「エイトくん、なかなかいい考えでしょ？ エイパム、ヒノアラシを囲んで一斉に引っかく攻撃！」

「ウツキーー!!」

レナちゃんの指示でヒノアラシは囲まれてしまった。

それに、影分身の効果は一定ターン持続するため、数匹のエイパムが同時に襲いかかってくる。

……こうなったら

「ヒノアラシ、ジャンプして、回転しながら火の粉!!」

「ヒノーツ!!」

ヒノアラシは地面をおもいきりけって、空中で回りながら火の粉を放った。

「エパーツ!!」

分身は次々に消えていき、最後は本体にも当たった。

……よし！

「これって昨日リュウタがつかつてた戦法じゃない？」

おとなしく（？）試合観戦しているリナがリュウタにいう。

「おー……確かにそうだな。今度は炎のシャワーだぜー！」

どうやらリュウタも同じ戦法をとったことがあるようだ。

「エイパム、大丈夫？」

レナちゃんは心配そうな顔をしてエイパムに話しかけている。

「ウツキー……」

エイパムは地面に片手をついている。ちょっといけないような気もするけど、次で決めさせてもらおうか。

「ヒノアラシ、電光石火でギリギリまで距離を詰める！そして、体当たりだー！」

「ヒノヒノヒノー！！！」

ヒノアラシが盛んに炎をあげたあと、一気に加速していった。

そして、そのまま体当たりが当たり、勝負あった……と思ったのだが、

「エイパム、カウンター！」

「エパーッ！」

体当たりの倍返しだがヒノアラシにクリーンヒットしていた。

「カウンターか……そんな技が使えたなんて……。」

「エイパムの切り札なんだから!!」

レナちゃんは強くそういった。

「次で決めるよ!! エイパム、最大パワーでスピードスター!!」

「エ……エパーツ!!」

つらそうにしながらも、とどめの一撃はこちらに迫ってくる。一番はじめにうってきた時と、パワーが全然違う。

なにかしらして対処しないとまずいな……。だからといって物理技をつかうのは危険だ。カウンターで跳ね返ってくるからな。

「ヒノアラシ、最大出力で火の粉だ!! おもいきりいけ!!」

「ヒ ノ ツ!!」

ヒノアラシの背中からは、今までみたことのないくらい大きな炎があがっていた。

火の粉の玉のひとつひとつも最初についた時よりも大きくなっている。

ドカ

ンッ

大きな爆発音が、フィールド中に響き渡り、ケムリが立ち込めた。

「ゲホゲホ……」

ケムリのせいで咳き込んでしまう。

僕はヒノアラシの無事を願いながら、ケムリが晴れるのを待った。

徐々に視界が開けてきて、フィールドの様子がよくわかった。

ヒノアラシもエイパムも目を回している。

「ヒノアラシ、エイパム、両者戦闘不能。この勝負引き分けだぜ！」

リュウタのジャッジがくだる。

「よく頑張ったな。戻れ、ヒノアラシ」

僕は疲れきったヒノアラシを抱いて、話しかけたあと、ボールに戻した。

「エイパム、お疲れさま。戻って。」

レナちゃんもエイパムをボールに戻す。そして、僕のところへ歩み寄ってきた。

「エイトくん、いいバトルだったね。ヒノアラシ強かったよ。」

「レナちゃんのエイパムのほうがすごいと思うよ。僕もまだまだな。」

僕たちはそれぞれの感じたことを述べた。

「次バトルする時は決着をつけよう。」

「ええ。望むところよ!」

僕はレナちゃんに向かって手を差しだし、そのまま握手をした。

「エイト、俺のこと忘れてんじゃねーぞ!次は俺とバトルだ!」

「レナちゃん、わたしとバトルしてくれるんでしょ?」

リユウタとリナは僕たちに主張する。

「そう急がずに次会ったときにとっておこうよ。」

僕は提案した。

「それもそうだな。次会った時はもっと強くなってるから覚悟しとけよ!」

「しょうがないかあ……わたしたちそろそろ次の町にいかなきゃだしね。」

リュウタもリナも納得してくれたかな。

「それじゃ僕たちはそろそろ行くよ。二人ともジム戦頑張れよ。」

「ええ！もちろん！！」

「俺が負けるとでも思つか??」

レナちゃんもリュウタも気合がはいつている。僕と引き分けだったってことは大丈夫ってことだよな？

「じゃあ、元気でね！！」

最後にリナがそういって、僕たちは二人と別れた。

後ろをむくと、二人は笑顔で手をふっている。

次、会えるのはいつたいつになるのだろうか

第二十二話 出発（別れぎわのバトルマッチ）（後書き）

ひとまずコラボは終了して、次回からはヒワダに向かうこととなります。

ユウキさん、私が勝手に持ち出したコラボのはなしを快く引き受けてくださってありがとうございます！そして今後のレナとリュウタおよび、シヨウとキョウコの活躍を期待しています。

第二十三話 託されるもの(前書き)

遅くなつてごめんなさい!!  
本文をどうぞ



## 第二十三話 託されるもの

アルフの遺跡での一大事も解決し、レナちゃんとリュウタと別れた僕たちは、ヒワダタウンに向けて出発しようとして、キキョウシテイの出口に差しかかっていた。

「はあ〜アルフの遺跡では一体どうなるのかって思ったよ……」

さすがのリナでも相当大変だったんだな。

「確かにな。でも、そうだったのはリナのせいもあるんだったよな？」

「うっ……」

それは凶星であるため、リナはいい返すことができず、だんまりしていた。

リナがしゃべらなくなってしまったので僕は、

「さあ、今日こそはヒワダに行くぞー!!」

とわざと、いつもより声をはっていった。

「うん、はやくジム戦したいし行こう行こうー!!」リナはテンションがいつの間急に上昇していた。

……恐るべし。さすがに復活は早かったな。

それがリナらしいってことなんだろう。

僕は、そう思うことしかできなかった。

プルルルルル…

突然、僕のポケギアが鳴った。

かけてきた相手はウツギ博士だ。

「ウツギ博士、お久しぶりですね。今度はどうしましたか？」

「エイトくん、元気そうで何よりだよ。それで、なんで電話したかって？……エイトくんにおつかいにいってもらったことがあったよね。」

「はい、確かにありましたけど……」  
今ごろおつかいのはなしをするなんて、ますます気になることだ。

「その時、ポケモンじいさんからタマゴを受けとったよね。それを、エイトくんに育ててもらいたいんだ。」

「いいんですか!?!」

僕はうれしくて、ウツギ博士の言葉を少しさえぎってしまった。

「研究所で面倒をみるよりも、元気なトレーナーに育ててもらったほうがボクはいいと思ってね。今から、すぐにキキョウのポケモンセンターに転送するから、ジョーイさんから受けとるといいよ。」

「分かりました。すぐに受けとりにいきます!」

僕は堂々とした態度でいった。

「エイトくん、任せたよ。あっ……タマゴがかえったら連絡してほしいな。それじゃあこの辺にしておくよ。気をつけて旅を続けるんだよ。」

「はい！タマゴがかえり次第、連絡します。……それでは失礼します。」

ピッ

僕は、ウキウキしながら電話を切った。……我ながら、いつもの僕らしくないと思う。

「エイト、電話の相手はウツギ博士だったんだよね？タマゴがなんとかいってたけど、なんの話だったの？」

リナがそんな僕をみて、尋ねてきた。

「おつかいの時のタマゴを僕に育ててほしいって連絡があったんだ。出口の近くまで来たけど、ポケモンセンターで受けとる必要があるから戻るう。」

「あの時のだね！もちろん覚えてるよ。戻るんだったらはやくいこうー！！」

リナは、ポケモンセンターに向かってすごいスピードで走っていった。いつものことだから慣れてしまっているが。僕も駆け足でポケモンセンターに向かった。

「ポケモンセンター」

「ジョーイさん、僕はエイトです。ウツギ博士から預かっているタマゴを受けとりにきました。」

「あなたがエイトくんね。念のためトレーナーカードを見せてちょうだい。」

僕は、バッグからトレーナーカードを取りだして、ジョーイさんに見せた。

ちなみにトレーナーカードというのは、ポケモントレーナーやコーディネーターなどのための身分証明書のようなものだ。

「あなたで間違いないわね。……はい、これが預かったタマゴよ。」

「ありがとうございます。」  
僕は、お礼をいってタマゴを受けとった。確かにおつかいの時のものだ。真っ白なタマゴには、赤と青の模様がちりばめられている。

「これがあの時のタマゴかあ……初めてみたよ。どんなポケモンが生まれてくるのか楽しみだね。」

そういえば、リナはちゃんとタマゴをみていなかったな。みせよう  
と思っていたら、シルバーと対峙したというわけだし……。

「やっぱりリナも楽しみなんだな。……さっ遅くなつてごめん、外  
にしよう。」

「うん！」

僕たちはポケモンセンターを出て、先ほどいた位置に向かっていた。  
すると、見知らぬ人が向かってきて、僕たちの目の前で止まって

「あれまあ……そのタマゴはー!!」  
と叫んだ。

その人は、美しい花柄の着物を着ている。そして、髪には色とりど  
りのかんざし。おそらくエンジュの舞妓さんだろう。  
それにしても、なんで僕がタマゴを持っているってわかったのだろ  
う?……

謎だ。

「ふんふん、なるほど……ポケモンじいはんからウツギはんへ、そ

してウツギはんからあんさんへ。そうどすか……」

「あの一……どういことですか？」

僕はよくわからなかったので聞いた。

「……なんでもあらしまへんよ。独り言どす。……それはほんまに大事なタマゴ。しっかり育てておくれやす。よろしおすな？」

「は……はい。」

僕は、訳もわからずうなずいた。

「ほな、たのんますえー」

舞妓さんはそういい残して去っていった。

「今の……なんだったのかな？」

リナも動揺しているようだ。

「……わからないな。でも、いつかわかるはずさ。急がなくてその時を待てばいいんじゃないかな。」

「そうだね。今はジム戦のことを考えておかないと！はやく出発しよう！レナちゃんたちに追い抜かれちゃうよ。」

「わかってるよ。……じゃあ行くか！」

こうして僕たちは、長居していたキキョウシティをあとにした

後に、とんでもないことに巻き込まれてしまっ、ということをもち  
ろん僕たちは知らない

第二十三話 託されるもの（後書き）

キキヨウシテイ長居してたなあ……

次回は、やっとヒワダに向けて出発します。

感想やアドバイスお待ちしております！そうしてもらえたらうれしいです。



第二十四話 釣りの名所でfishing! (前書き)

皆さん、長らくお待ちしました!!

更新を再開します!

## 第二十四話 釣りの名所で fishing!

キキヨウシティをあとにした僕たちは32番道路にいる。

はじめは草むらばかりであったが、歩いていると視界に青く澄んだキレイな川が見えてきた。川には木でできた橋がかかっていて、釣りびとの姿が多くみられる。

「ねえエイト、みーんな釣りをしてるよね。ここは釣りの名所なのかなあ？」

リナが僕に尋ねた。

「見た感じそうみたいだね。」

僕は、一度周りを見渡してから答えた。

釣りかあ……

実際の話、僕は初めて釣りをしている人を間近でみた。

僕の近くで釣りをしているおじさんは、ニヨロモを釣り上げたらしく豪快に笑っている。

「せっかくだから、わたしたちも釣りしようよ！」

リナが提案した。……リナなら絶対そういうと思ってたけどやっぱり的中した。

実はというと、僕も釣りはやってみたかったのでうなずいたが、あ

ることに気がついた。

「……リナ、単刀直入にいうけど、僕は釣りざお持ってないんだ。」

……そう。僕は釣りざおを持っていない。釣りざおが無ければなんの意味もないのに。

「釣りざおを持ってないって？大丈夫！！わたし2つ持ってるから貸すよ！」

リナはバッグから釣りざおを取り出しながらいった。

1つは赤がベースのチェック柄の釣りざおでオシャレだ。

もう1つは黒がベースで、青でモンスターボールがかかれています、カッコいいデザインだ。

「リナ、ありがとう。たすかるよ。」

僕は、リナから黒がベースの釣りざおを受けとった。

……よくそんなもの持ってるよな。

実際、僕は受けとりながら心のなかでそう呟いていた。

一方のリナは、少し顔が赤くなっていたが、エイトがそれに気づくことはなかった。

「……よし、レッツフィッシングー！」

リナは、そう叫びながら釣りを始めた。無駄にテンションが高い。

……そろそろ始めるか。

僕は、少し戸惑っていたが、さおを思いっきりふった。

……チャポンッ

水の音がしたので、どうやら失敗はしなかったようだ。  
ここで、へんな方向に向けていたらカツコ悪いからな。

僕は、ふとりナのほうをみてみた。

「　」

のんきに鼻歌を歌っている。少しは集中した方がいいと思うけどな

……

おっといけない。よそ見しすぎた。

僕は、自分のものに集中することにした。

（約20分後）

……全然、釣れないじゃないか！

口には出さなかったが、さすがに僕でもイライラしてきた。……」  
こは釣りの名所ではなかったのか？

それにしても、リナは順調なのだろうか。

その時

「さおが引いてる!!」

リナの声が聞こえてきた。

どうやらリナのさおにヒットしたようだ。

「よし、それ　ッ！」

リナは歯を食いしばりながら、カ一杯さおを引っ張った。すると、水面からあるポケモンが飛び出してきた。

「やった、釣れたみたい!!!」

リナは、うれしそうにぴよんぴよんはねている。

「！！！！」

しかし、僕はそのポケモンをみて驚いた。

なんと、そのポケモンは、

ゼニガメだったのだ。

第二十四話 釣りの名所でfishing! (後書き)

リナが釣り上げたポケモンは、まさかのゼニガメ!?  
さて、どうなることやら……

次回に続きます!!

第二十五話 水辺のバトル！VSゼニガメ（前書き）

なかなか更新できない……

そして、最近は一ペースでごめんなさいm（| |）m

それではどうぞ



## 第二十五話 水辺のバトル！VSゼニガメ

ゼニガメが釣れたことに対して、僕は驚きのあまり、啞然としていた。ゼニガメのほうに目を向けると、リナに向かって水鉄砲を打っているではないか！！

リナは突然の出来事であったため、ポケモンをだして対抗することができず、水鉄砲はリナ自身にクリーヒットしていた。

「冷たいッ！！」

リナは体を震わせながらいった。全身びしょ濡れである。……大丈夫なのだろうか？

「ゼーニーツ！」

リナの心配をしている場合ではなかった。

ゼニガメは攻撃の対象を僕に変えたようで、水をまといながらこちらのほうへ突っ込んできている。……あの技は、アクアジェット？

「いけ！……」

僕は、ゴースを繰りだそうと思い、モンスターボールを投げようとしたが、遅かった。

バシヤ                      ンツ

僕は、バランスを崩し挙げ句の果て川に落ちてしまった。

「エイト……大丈夫！？」

リナは心配そうな顔をして、僕を見つめる。

「なんとか大丈夫かな……」

僕は、強がって大丈夫だといったが、実際そうではなかった。まず、僕はカナヅチというまでではないがあまり泳げない。だから、川や海には少し抵抗があった。

そして、もうひとつは川にダイブするという行為だ。リナだったらしょうがないと思えるが、僕がそんなことをしたら、否 なってしまったら……僕は一刻もはやく脱出しようとしたが、泳げないためにいくらかがいても前に進まない。……カツコ悪いな

「エイト、今助けるよ!! ミズゴロウお願い!」

「ギャ〜!」

ミズゴロウが川に飛び込んで、僕がいるところまで来てくれた。僕は、ミズゴロウにつかまり、栈橋に戻ろうとした。

「ゼニゼニゼニ ……!!」

あと少しのところだったが、ゼニガメが水鉄砲を打ってきた。……  
まずい!!

「ミズゴロウ、こっちも水鉄砲!!」

「ガーヤーツ!!」

リナの指示でミズゴロウは水鉄砲を放った。僕は水の中にいてモニターボールを取り出せない。

僕は、技を出すために動くミズゴロウに必死にしがみついた。ここで離れてしまうと、水を飲む可能性があるからだ。

ドカ  
ンッ

僕の近くで爆発したような音がした。下を向いてミズゴロウを見てみると、つらそうな表情をしていた。ゼニガメのほうも、体力をつかったようで息を乱していた。

どうやら水鉄砲同士の競り合いは相打ちに終わったようだ。

「……ミズゴロウ、辛いかもしれないけど、棧橋のところまで頼む。」

「……ギャツ！」

ミズゴロウは、疲れがたまっているようで返事が遅れていた。だが、すぐに棧橋に向かってくれて、僕はやっと元のポジションについた。

「エイト、二人してびしょ濡れだね……」

リナがさっそく僕にいった。

「うん、こうなるって思ってたよ。……それよりゼニガメゲツトしなくていいのか？」

「あっ！」

リナは急いでゼニガメがいるほうに目を向けた。

ゼニガメはつらそうだ。水鉄砲の打ち合いの前にもある程度行動し

ていたからな。

「今がチャンスだよな！じゃあ……ミズゴロウ、戻って！！」

リナはミズゴロウを戻した。これ以上戦わせるのは危険だと判断したのだろう。その判断は正しいだろう。

「オタチ、お願い！！」

「オタチ　　！！」

リナのオタチが元気よく出てきた。オタチはリナにどことなく似ているような気がする。

「オタチ、体当たり！」

「オタチ　　ッ！！」

ゼニガメは、かわそつと体制を整えていたが間に合わずオタチの体当たりはゼニガメにヒットした。

「モンスターボール、GO！」

リナは、力強くモンスターボールを投げた。しかし、モンスターボールは甲羅に当たって跳ね返り、リナの頭に向かって飛んできた。

「いたっ！」

案の定、モンスターボールはリナのおでこに当たっていた。……バカナやつだ。

「もう一回ッ！！モンスターボール、GO！」

今度はゼニガメの頭部にモンスターボールが当たった。

「よしっ！！」

リナは拳を握りしめた。

しかし、モンスターボールは再び弾かれた。

「！！！！！！！」

リナは仰天して、その場で呆然としている。  
なぜ、ゲットできないのか。……僕が考えられるのはただ一つ。

「リナ、そのゼニガメには持ち主がいる！！近くにポケモンセンターがあるはずだから急いでいくぞ！」

「…………えっ！？あっ…………うん！」

リナはパニックに陥っていたが、エイトがいったことを理解したよ  
うで、ぐったりしているゼニガメを抱えた。

「行くぞ！」

僕たちは、びしょ濡れのままゼニガメをポケモンセンターに運ぶこ  
とになった。

第二十五話 水辺のバトル！VSゼニガメ（後書き）

さて、ゼニガメの持ち主はいつたい誰なんでしょうか？

次回判明する可能性アリです！！

第二十六話　ゼニガメのトレーナーに迫れ！！（前書き）

今回はいつも以上に長いです

## 第二十六話　ゼニガメのトレーナーに迫れ！！

〔ポケモンセンター〕

「あなたたち、いったいどうしたの!？」

ポケモンセンターに着いた僕たちは、ずぶ濡れの姿を見られてジョーイさんに驚かれた。……驚かれるのもしょうがないけどな。

「……き……気にしないでください!……それよりはやくゼニガメをお願いします!！」

リナは、瞬時に弱っているゼニガメをジョーイさんにつきだした。

「……まあ!!これは大変ね!今すぐ治療するわ!」

ジョーイさんはゼニガメを見ると、よりいっそう目を見開いた。そして、ドタバタしながらゼニガメを治療室に運んでいった。

僕たちは呆然と立ち尽くすほかなかった。

「ねえ、エイト!私たちが……えっと……その……びしょ濡れだからさっ着替えにいこうよ!！」

リナはそう提案した。

「分かった。確かにそうだよな。それじゃあ……さっそくいくか。」



僕たちは、ゼニガメの治療にはそれなりの時間がかかると判断し、宿泊所の一室を借りて着替えることにした。

廊下で人にすれ違うたびに僕たちは注目を浴びた。理由はもちろんずぶ濡れだからである。中にはゲラゲラ笑う人や、僕たちを指さしてひそひそ話をする人もいたので、僕は恥ずかしくなって歩くスピードを早めた。

〔数分後〕

「準備完了!! さっそくゼニガメの様子を見に行こう!!」

リナは、シャワーを浴びてから異常にテンションがあがっていた。……まあ、それがリナらしいことなだけだな。僕はいわれるがまま、軽やかにスキップをしているリナについていった。先ほど僕たちを小バカにしていた人たちは、普通にしていたということはいまでもない。

「ジョーイさん、ゼニガメは!？」

僕は、身を乗り出していった。

「そんなに慌てなくていいわ。ゼニガメはすっかり元気になったわよ。少し疲れがたまっていただけだったみたいね」

僕たちが来たときには、ゼニガメはすでに元気になっていたようだった。

……ゼニガメが無事でよかったよ。

僕は、心のなかで呟いた。

僕がホッとしている時、リナはジョーイさんからゼニガメを受け取っていた。

これで一件落着だな……ってそうじゃない!!

僕は本当の目的を忘れかけていたが、すぐに思い出した。

「ジョーイさん、最近ゼニガメを連れてくるトレーナーを見かけませんでしたか？」

「えっ?……ここ一週間はみてないわね」

「……そうですか。ありがとうございます」

僕は、ジョーイさんにお礼をいって、すぐにポケモンセンターの出口に向かって走った。

「あっ！エイト待ってよ！！」

リナは、僕を追うように走った。

「一体なんだったのかしら……？」

その場に残されたジョーイは、エイト達がすぐに出ていってしまっただけな気がしたのか分からずじまいだった。

僕たちは、ゼニガメの持ち主をさがすべく、釣りの名所に戻ってきた。辺りは今でも釣り人でにぎわっている。

「ねえ、アナタのトレーナーは近くにいないの？」

リナがゼニガメをじっと見つめながらいった。僕も一緒にゼニガメを見ている。

「ゼニゼニ……」

泣き声からして分かる通り、この近くには持ち主はいないようだ。それにしても、ゼニガメがおとなしくなったというのは意外だった。バトルの時はカナリ攻撃的だったからな……。

「リナ、釣りの名所付近にいる様子はないから、ポケモンセンターの南に行ってみよう」

僕は、リナにむかって言った。ちなみに、釣りの名所は32番道路の北側つまり、キキョウシティ沿いにある。

「分かった!!そうと決めればさっそく行くよーッ!ゼニガメ、ついておいで」

「ゼニゼニーッ!」

リナとゼニガメは、僕を置いていってしまった。いつものことだから慣れているが、リナのメチャクチャなテンションに付いていけるゼニガメを少しだけ尊敬した。

〔32番道路南側〕

「もう!ゼニガメの持ち主はどこにいったのよ!?!」

さすがにリナもいらだっていた。それは当然のことである。もう三時間は探し回っているのだから。

「ゼニゼニー……」

リナがギャーギャー騒ぐのでゼニガメの顔が曇っている。

「おい、リナ!少しは静かにしないと!?!」

僕は、リナを注意した。しかし、

「黙っていられないよ!!こんなに探し回っても見つからないなんてトレーナー失格よ!!!」

かえってきたのはゼニガメの持ち主に対しての愚痴だった。

「それはいい過……」

「確かにそれはちょっと違うぜ」

リナの暴走を止めようとしたが、誰かが僕の言葉を遮った。反射的に声がした方を見ると、そこには僕やリナよりも年上だと思われる少年いや、青年がいた。

> i 1 8 1 7 1 — 1 0 6 1 <

「ゼニゼニゼニ!!」

ゼニガメは、うれしそうに声をあげてその青年に飛びついている。この人……どこかで見たことがあるような……。

「ゼニガメ、どこにいったんだよ!心配したんだぞ!!……ん? お前らはだれだ?」

青年は、ゼニガメの心配をしていたが、やがて、僕たちに気づいた。今は、僕とリナを交互に見ている。

……!!

僕は、彼が一体誰なのか思い出した。

「……もしかしてユウヤさん!!」

僕は、ついつい名乗る前に彼の名前を叫んでいた。

「おっ!? 俺のこと知ってるのか!! なんかうれしくなるな」

ユウヤさんは、頭をポリポリかいている。

「ねえ、ユウヤって誰よ?」

リナは、小声でいった。

「リナ、失礼なことをいっただめだ!! ユウヤさんはハウエンリ  
ーグベスト4入りしたすごい人なんだぞ!!」

「ウソツ!!」

やれやれ。様子からしてホンキで驚いているようだ。ハウエンに住んでいたくせに知らないなんて……。僕からしてみるとあり得ないことだった。

「そっちの女の子の方は知らなかったのか。……まあいいさ。俺はユウヤ。アサギシティ出身のトレーナーだ。お前らは……見た感じ新人トレーナーってとこかな?」

「ユウヤさん、はじめまして。僕はエイトっぺいいいます。あなたのいう通り新人トレーナーです」

「わたしはリナ。エイトと同じで新人トレーナーです。」

僕たちはユウヤさんに名前を教えた。有名な人だけあって、話す時ですら緊張する。

「エイトにリナだな。よろしく頼むぜ。それにそんなにかたくなるなよ。もつと気楽にいこうぜ！」

「ありがとうございます。……ところでゼニガメはユウヤさんのポケモンだったんですよね？それならば、なぜ川の中にいたんですか？」

「ああ……それか。ゼニガメはタマゴから孵ったばかりだったからバトルはまだできないんだ。だから川で遊ばせていたというわけだ。」

「川で遊ばせていた!？」

僕たちは二人揃って叫んだ。

「おいおい、そんなに驚くことではないだろ!?!?こんな普通だぜ普通!」

普通だと……!!

さすがトップクラスのトレーナー!。僕たちとは感覚がちがう。でも、あの川は危険だったんじゃないのか?

ユウヤさんは、僕とは違って随分とお気楽な人だ。

「ユウヤさん!!よければわたしとバトルしてくれませんか?」

リナは、僕が黙りこんだのをいいことにユウヤさんにバトルの交渉をしていた。

……先を越されたな。でも、せつかくだから頼んでみるか。

「僕もお願いします！！」

「いいぜ。相手になってやる。でも、今日は止めておこうぜ。もうすぐ夕方になるからな」

ユウヤは幸いOKしてくれた。でも、バトルは明日なんだな。

「バトルはお預けかあ……」

リナは悲しそうな目をしてそういった。

「そんな顔すんなよ！二人には迷惑かけたから今日のディナーおごつてやるよ！！」

「えっ！？やったー！！！！ユウヤさんありがとう」

リナは一気に元気になった。相変わらず単純だ。

「よし、俺がポケモンにのせて連れていくぜ！！チルタリス！」

「チル」

ユウヤは、チルタリスというポケモンをだした。水色の体をしていて、綿のような羽が気持ち良さそうだ。

見たことのないポケモンなので、きつとホウエン地方に生息しているのだろう。



「二人とも乗ったか？」

「はい!!」

「じゃあいくぜ!!チルタリスポケモンセンターまで頼む！」

「チルー！」

こうして僕たちは、ユウヤさんとともにポケモンセンターに戻ることに  
なったのだった

第二十六話　ゼニガメのトレーナーに迫れ！！（後書き）

ゼニガメのトレーナーはユウヤでした！！

実は彼、第一話に名前だけ登場しているんですよ

気づいた方がいれば凄い！！

あれ？文面が変わってない？と思った方、その通りです。誤字があったので修正しました。

でも、見落としているところがたくさんあると思うので、誤字・脱字を見つけたらメッセージでこっそり教えて下さい！！感想欄はできるだけ控えて下さいね。

第二十七話 優雅(?)なディナー(前書き)

予定より遅くなりました……あと、今回は若干どうでもいい話です。

## 第二十七話 優雅(?)なディナー

僕たちは、ユウヤさんのチルタリスのおかげですぐにポケモンセン  
ターに戻る事ができた。空を飛ぶ が使えるなんて、徒歩で旅を  
している僕たちからすれば、あこがれだ。ユウヤさんによると、秘  
伝技であるからなかなか身につかないとのこと。  
そして、今は夜ごはんを食べるためにレストランに来ている。

「よし、遠慮せずにどんどん食べよ！！バイキングなんだし。」

「わーい！！いったただっきまーす」

リナは、皿に盛ってある大量の料理を片っ端から食べ始めた。……  
たくさん食べてもお腹を壊さないということが、本当に不思議だ。

「エイト、お前も食べよ！元気でねえぞ！！」

ユウヤさんは、リナの皿と僕の皿を交互に見てからいった。……リ  
ナの皿と比べたらダメだろ！！

「ユウヤさん！リナと比べないでください！！僕はそんなに食べま  
せんから。」

僕は、正直に反論した。

「……悪い悪い。実際俺もあんまり食べないんだよ。」

ユウヤさんは、苦笑いしながら自分の皿をさした。

オムレツにキュウリとキャベツのサラダ、そして少量のご飯。

ユウヤさんは、意外と少食だった。僕よりも食べていないくらいだし。見た目では絶対に想像できないよな。僕的にユウヤさんは熱血に見えるので、ついそう思ってしまった。

「エイト、この食べ物おいしいよー!!」

リナはフォークにさしてあるピンクのものを僕にみせながら話しかけた。

「リナ、それなんなんだよ……」

リナがおいしいといっている食べ物は、僕からすると非常に気味悪くみえる。だから、つい怪訝な顔をしてしまった。

「うーん……そういわれてもわかんないなあ」

どうやらリナはどんな食べ物か知らずにたべていたようだ。まったく……

「おい、エイトよ。それはヤドンのシツポだぜ。」

ユウヤさんが僕が想像できないような発言を平然とした。

「ヤ……ヤドンのシツポ　　!?」「」

僕たちの声がレストラン中に響いた。

「……静かにしろ!ここは高級レストランなんだぞ!」  
ユウヤさんが、声をひそめて注意した。

「すみません……でも、ヤドンのシッポ……というかポケモンを食べるって、あり得ません!!!」

僕は、ユウヤさんに向かってそういった。

「確かにそうだよな。俺もな、はじめて知った時はお前ら以上に驚いたもんだ。でも、このモノは大丈夫だぜ。ポケモン協会から許可をもらっているからな。」

高級レストランだから心配する必要はないのか。ということ……

「ヤドンのシッポは高級食材なんですか？」

「ああ、そういうことになるな。ひとつであつても百万円くらいはするだろうからな。」

「ユウヤさん!!!……じゃあ今日の夕食代大丈夫なんですか!」

「大丈夫だぜ。たまには贅沢するのも悪くない。エイトもそう思うだろう?」

「は……はあ……」

……いい返せない。ユウヤさんは金持ちなんだな……

「でも……シッポを切られちゃったヤドンってどうなるんですか?」

リナが、控えめにいう。

……確かにシッポを切られたヤドンはどうなるのだろう。

「その事が。……ヤドンは再生能力が高いらしいんだ。だから、数日たてば、またシッポははえてくる。」

「じゃあ、ヤドンのシッポで億万長者になれるじゃない!!」

ユウヤさんの発言を聞いたリナは大はしゃぎしている。

「……それは無理だな。さっきポケモン協会の許可がいるっていったら？協会の審査はすっげー厳しいんだ。だから、普通の人があるヤドンのシッポを売ったりしたら警察に捕まるんだ。」

「……そうだよ。いくら再生能力があったとしても、ヤドンが可哀想。騒いでごめん。」

リナが僕たちに謝る。……ちゃんと分かってるみたいだったので、僕は安心した。

しばらくの間会話が飛び交うことはなく、沈黙が続いた。なにかいなければならぬことがあるような……

!!

……なにか忘れていると思ったら明日のバトルの話はまだしていないじゃないか!!

「ユウヤさん、明日のバトルのルールを決めましょう!!」

「……ああ、そうだったな！エイトはどうしたいのか？」

うーん……急にどうしたいといわれてもなあ……。

「ダブルバトルでいいんじゃない？」

リナが僕に目で合図しながらいう。

確かに一人ずつ相手になってもらうのはユウヤさんに悪いからな。

「ユウヤさん、ダブルバトルをお願いしますー！」

「おう！分かった。……となれば、使用ポケモンは一匹ずつな。明日のバトル楽しみにしてるぜ。」

ユウヤはそういって、立ち上がった。

「どこに行くんですか？」

僕がとっさに尋ねる。

「コンディションのチェックだ。お前らはまだ食べるみたいだが、俺は先に失礼するぜ。金は払っておくから心配するなよ。」

「……ちなみにいくらくらいですか？」

リナが案の定聞いた。

「うーん…… # 万くらいか？」

「え ツー！」

……高すぎだろー！というより、ユウヤさんお金の使い方間違っていないか？高級バイキング店に行くなんて、絶対損してると思っよ。

「じゃあ明日なー！」



驚きまくっている僕たちを置いて、ユウヤさんは平然としながらレストランから出ていった。

ユウヤさんって何者なんだ？憧れとともに、わずかな疑問が生まれました

第二十七話 優雅(?)なディナー(後書き)

バイクンクにかかった金額は皆さんのご想像にまかせます!!

## 第二十八話

Battle! エイト&リナVSユウヤ〈前編〉(前書き)

一週間もあけてしまいました(T^T)

トータルで三十話突破しました!!

一応夏休みなので、更新速度をあげていけるように頑張ります!

エイトとリナのタッグ再び、ユウヤとのバトル開始!

## 第二十八話

## Battle! エイト&リナVSユウヤ〈前編〉

僕たちは、朝ごはんを食べおえ、ちょうどポケモンセンターの近くにあるバトルフィールドに着いたところだ。

空を見上げると、太陽が容赦なく僕たちを照りつけている。今日の天気は快晴。最高のバトル日和だ！

「エイト、リナ準備はできたか？」

ユウヤさんが僕たちを交互に見る。

「はい、大丈夫です！」

「どこからでもかかってきてくださいっ！っ！」

僕、リナの順にいった。

「よし、さっそく始めようじゃないか！っ！」

……！！

ユウヤの顔が一気引き締まる。それも、今まで見たことのない表情をして。……それは、まさにバトルをするときのものだ。そしてものすごく威圧感を感じる。おそらく容赦はしないというあらわれだろう。

僕は身震いした。

「エイト、顔がひきつってるよ！もっと楽しまなきゃ！」

リナはいつでもお気楽だ。ユウヤさんを前にして緊張しないという

ことが本当に不思議に思える。

「エイト、リナ、作戦タイムはおしまいだぜ！キノガッサ、マイナ  
ンLet'sバトル！！」

「キノガッサ　　ッ！」

「マイマイ　　！！！」

ユウヤさんは、いきなりキノコを思わせる身軽そうなポケモンと、  
ほっぺにマイナスのマークのあるかわいらしいポケモンを繰り出し  
た。……どちらも見ることがないポケモンだ。

……こういう時にはこれだ！

僕はバッグからポケモン図鑑を取りだし、それぞれのポケモンにか  
ざす。

『キノガッサ　きのこポケモン　キノココの進化系　頭のかさのあ  
なから胞子をばらまく。草原や森林の草木を食べる。』

『マイナン　おうえんポケモン　仲間のポケモンを応援する習性が  
ある。両手から発した電気をショートさせて火花のポンポンを作る  
ことができる。』

ポケモン図鑑は、対象のポケモンのデータを詳しく説明してくれる  
機械だ。

今までは使っていなかったがかなり便利だったので、これからはち  
よくちよく使っていくことにしよう。

「お前らもはやくポケモン出したらどうだ？」

ユウヤさんが僕たちを誘っている。バトルが好きなことのあらわれだろうな。

「いけ、ゴース！」

「ゴースッ！！」

「ミズゴロウ、お願い！」

「カヤガヤ　　ッ！！」

僕が出したのはゴース。この頃、ヒノアラシに頼りすぎていると感じていたので、趣向を変えることにした。

……リナはいつもの通りミズゴロウみたいだな。

「エイトはゴース、リナはミズゴロウか。リナ、こっちは相性のいいポケモンばかりいるけど、本当にミズゴロウでいいのか？」

ユウヤさんは、気をつかっていう。

確かに僕からしてみても、少し気がかりだった。

「大丈夫！相性なんて関係ありませんよッ！」

リナはミズゴロウでのバトルを断念する気は全くないようだ。まあ、そのほうがリナらしいな。

「『相性関係ない』　かあ……リナはどうやら俺に似ているらしいな。先攻はお前らに譲るぜ！」

「リナ、作戦は僕が考えるから取りあえずどちらかに攻撃してくれ。

「  
僕は声をひそめてリナにいった。

「了解！」

リナは僕を見ながら軽くウインクして、正面に向き直った。

「ミズゴロウ、キノガッサに体当たり！」

「ガヤー！」

ミズゴロウはキノガッサに向かって一直線に走っていく。直接攻撃は危険じゃないのか！？

「直接攻撃には直接攻撃があるのみ！キノガッサ、マツハパンチで向かいうて！」

「キノーツ！」

キノガッサは手に光をともないながらミズゴロウのほうに向かっていく。

ドカ                      ン！！

体当たりとマツハパンチ、二つの技が激突し、衝撃音がした。

まだまだバトルは始まったばかり

## 第二十八話

Battle! エイト&リナVSユウヤ〈前編〉

(後書き)

バトルっていったってさわりだけじゃないか……!!

そう思った方には申し訳ないです。

続きは早めに更新出来るようにします。

感想やアドバイスよろしくお願いします。特に、バトル描写についてのアドバイスを下さったらうれしいです。



第二十九話 Battle! エイト&リナVSユウヤ〈後編〉(前書き)

さて、バトルの行方はどうなるのか？

続きをどうぞー！

## 第二十九話

## Battle！エイト&リナVSユウヤ〈後編〉

体当たりとマツハパンチのぶつかり合いによってケムリが立ち込めていたが、徐々に視界が開けてきた。

「あちゃー……思ったより効いてるなあ。」

はじめに口を開いたのはリナだった。

僕は、リナが発したセリフが気になったので、ミスゴロウに目を向けた。

まだまだいけそうにも見えるが、オデコが少し赤くなっていた。キノガツサのマツハパンチがそこに当たったのだろう。

対するユウヤさんのキノガツサは、全くダメージがなかったといえるくらい元気だ。

さすがホウエンリーグベスト4。直接攻撃は効かないみたいだな。

「エイト、お前も攻撃したらどうだ？」

ユウヤさんは、反撃を誘うような顔をして僕を見る。そのせいで余計緊張する。

「リナ、今からいうことを実行してくれ。」

僕は、できる限り声をひそめてリナに説明した。

「ラジャー」

リナの気さくな返事がかえってきた。多少心配なところがあるが、反撃といくとするか！！

「ゴース、マイナンにナイトヘッド!」

「ゴース!」

ゴースは不気味に笑いながらマイナンに迫っていく。

一体何を考えているのか分かりにくいので、ゴーストタイプの扱いは難しい。

「マイナン、電撃波でナイトヘッドをかき消せ!」

「マ…マイ……」

マイナンの顔は、青ざめている。どうやらゴースに怯えているようだ。

「おい、マイナン! しっかりしろ!」

ユウヤさんが、少し焦りながらマイナンを正気にもどそうとしている。

### 第一段階クリア

僕はリナに目を向けて、アイコンタクトする。

リナは、ニッと笑ってフィールドに視線を移す。

「ミスゴロウ、マイナンに泥かけ!」

「ギャ!」

ミズゴロウは泥をかける準備に取りかかる。

「お前らキノガツサを忘れてないか？タネ爆弾でマイナンを援護！」  
やはり一筋縄ではいかない。しかし、僕には対策があった。

「ゴース、サイコネシスでキノガツサの動きを止めるんだ!!」  
ゴースの目からサイコパワーが発し、キノガツサの動きが徐々に遅くなり、ついには止まった。

「……サイコネシスだと!？」  
さすがにユウヤさんであっても驚いている。僕がここまで考えているとはきっと思ってなかったんだろう。

## 第二段階クリア

「ミズゴロウ、連続で泥かけを決めて!!」

「ガヤガヤガヤ　　ッ！」  
ミズゴロウは次々に泥をかけていく。電気タイプに地面技は効果はバツグンである。

## 最終段階クリア

「マイナン、すぐに助けるからもう少し頑張ってくれ!!キノガツサ、サイコネシスなんか気合いで振り切ってやれ！」

「キノ　　ッ!！」

キノガツサがぐぐつとチカラをためている。まずい、このままだと本当に振り切られてしまう。

「ゴース、怪しい光！」

「ゴース！」

ゴースが発した不気味に光るいかにも怪しげな光がキノガツサを包む。

「キノ~~~~ガツサ~~~」

キノガツサはフラフラしている。これは、状態異常の一つ『混乱』だ。

「状態異常か。ゴースタイプなだけあるな……。」

ユウヤさんは悔しそうな目をして僕を見る。

「ユウヤさん、あっちは勝負あつたみたいですよ。」

「!!!！」

ユウヤさんはとっさにマイナンに目を向ける。

しかし、そこには目を回してのびているマイナンの姿があった。

「連続泥かけ攻撃強し!マイナンはもう戦えないですよ。」

リナが勝ち誇ったような表情をしていた。

「はあ、まさかこんな展開になるとはな……してやられたぜ。戻れ  
マイナン、ゆっくり休んでろ。」

ユウヤさんは、優しい表情になりマイナンをボールに戻した。そして、すぐにバトルするときの険しい表情に戻り、再び僕たちのほうに目をやった。

「エイト、リナ、正直驚いたぜ。だがな、俺を怒らせたらただでは  
すまないってことわからせてやるよ!!！」

ユウヤさんがヒートアップしている。これは、危険率120%級だよ。……やばいという感覚がたぎってくる。

「キノガツサ、ソーラービーム!!！」

案の定ユウヤさんは大技を指示した。  
でも、確か……

「キノガツサは混乱のはずじゃなかったの？」

リナが僕がいたかかったことを口に出す。  
なんで混乱がなおっているんだ？

「悪い悪い。キノガツサには『ラムの実』を持たせてたんだ。まっ  
公式な試合ではないわけだし持ち物もOKだろ？」  
「うっ……」

……いいかえせない。

「エイト、リナ、二人とも俺を相手によく頑張ったと思うぜ。でも、ここでジ・エンドだ！ソーラービーム発射！！」

「キノ ……！！」

辺りは光で一杯になり、目の前が真っ白になった

ソーラービームはゴースとミスゴロウに直撃していた。反撃の時間も与えなかった。  
光が消えたときには、目を回して倒れているゴースとミスゴロウの姿があった。

決着がついたのか。

「ユウヤさん、最後のは反則だよ!!」

リナはユウヤさんに文句をいっている。まあソーラービームで一撃ノックアウトだったわけだから、ついそういいたいくなるのだろう。

「しょうがねえだろ！俺はハウエンリーグベスト4だ。マイナンを倒されるとは思ってなかったからこうなっちまったんだよ!!」

ユウヤさんは、やけになりながらリナにいいかえす。

「ユウヤさん、バトルしてくださってありがとうございました。」

僕はバトルの相手になってもらったことに感謝して、ユウヤさんにそういった。

「なーに、そんなに改まるなよ。……あっそうだ。エイト、なんでゴースがサイコキネシスを覚えていると分かったんだ？普通ゴースはサイコキネシスは覚えなければ……」

ユウヤさんが僕に尋ねる。

「キノガツサやマイナンのデータを見たときにゴースが使える技も確認してたんです。」

僕はユウヤさんに説明する。

「そっか。それで、たまたまサイコキネシスが使えるってわかったわけか。」

「まあ……そういうところですね。」



僕が反応すると、ユウヤさんは納得するように頷いている。

「エイトみたいな頭脳派は俺の苦手なトレーナーだ。なんたって戦いにくいからな。お前はもつと経験を重ねて強くなったら俺を越える存在になるかもしれねえ。」

「ちょっと！わたしはどうなの！？」

リナがすかさず突っ込んでくる。

「ハハハ……リナは俺と同じようになるだろうな。」

ユウヤさんは苦笑いしながらいう。

「ユウヤさんヒドイ！笑わないでくださいよ〜」

リナが、いつものごとくわめいている。

「落ちつけ落ちつけって。あっそういえばお前らはヒワダタウンに行くのか？」

リナをなだめたあと、ユウヤさんは僕にいった。

「はい、そのつもりですけど……。」

「なら俺が連れていってやるよ。いいバトルができたお礼だ。」

「ありがとうございます！」

僕はユウヤさんに頭を下げた。

「やったー！！やっぱりユウヤさんやさし……………」

ぐう~~~~~ッ

突然、間の抜けた音がした。リナのお腹がなったのだ。

「でも、その前に腹ごしらえだ。ポケモンセンターに戻ろうぜ。」

ユウヤさんは、走っていつてしまった。元気なんだなあ……

「リナ、行こうか。」

僕は遠慮がちにいった。

「う…うん……。」

僕は全くきにしていたかったが、そのときリナの顔は真っ赤であった。

さあ、ヒワタウンはめのまえだ

第二十九話

Battle! エイト&リナVSユウヤ〈後編〉(後書き)

バトルはユウヤの勝利でした。きっとハウエンリーグベスト4の意地です。

バトル描写はまだまだ特訓が必要ですね……(泣)

感想やアドバイス待ってます！

第三十話 つながりの洞窟へ再び出会うものたち（前書き）

今回から、ユウキさんの「ポケットモンスター絆」と二回目のコラボです！！

……なのに出来がままでで一番最悪です……。ユウキさん、そして皆さん すみません！！

最近前書きが反省会化している……！！

それではごっごー！

### 第三十話 つながりの洞窟へ再び出会うものたち

僕たちは、バトルを終えてから昼食をとった。今日のランチも昨日のデイナーと同じくらい豪華なものであった。もちろん、ユウヤさんのおごりでありそれは喜ばしいことだったが、リナの食欲は相変わらずで、食事には三時間もかかった。

店の人には申し訳ないと僕は思うのだが、ユウヤさんはどうも気にしていないようだ。一応尋ねてみたら、

「こっちはお金出してるわけだからいいんじゃないの？」  
と返ってきた。

普通のトレーナーである僕とは感覚があまりにも違いすぎる。

そして今かというと、ヒワダタウンに行くための準備が整い、出発しようとしているところだ。

「ユウヤさん、早くヒワダタウンに行きましょうよ！！チルタリス出して下さい！」

リナは、一足でも早くヒワダタウンに行きたいようで、それが声に表れている。

でも、そう簡単に乗せていってくれないとおもっけどな。

「ちょ…待てよ！……確かにヒワダタウンまで連れていくとはいったけどよ、誰もチルタリスで行くとはいってないぜ。」

ユウヤさんからは、こう返事が返ってきた。やっぱりな。

リナの方を見ると、顔がだんだん曇っていき、あげくの果てにはその場でへなへなになってしまった。

「……………ということはやっぱり徒歩……………？」

先程とは比べ物にならないくらい小さくてか細い声でリナがいう。

「当たり前だろ！？楽しんでもいいことなんかないぜ。なあエイト？」

「リナ、ユウヤさんのいう通りだよ。」

「……………」

ユウヤさんと僕でリナを説得したつもりだったが、あまり効果はなかったようで、本人はだんまりしてしまった。

参ったな……………」

僕は、助けを求めるべくユウヤさんを見つめた。

「おい、リナ。ポケモントレーナーってのはなそんなに甘くなんかないんだぜ。俺は今まで旅を続けてきたからよくわかる。凄いトレーナーは皆努力してんだ。強くなりたければ、辛いことでも乗り越えてみせる！」

ユウヤさんは、さっきよりも真面目な顔つきをして、リナにいった。さすがユウヤさん。かっこいいことをいうな。

「……………ううっ…分かりました。」

リナはようやく口を開いた。まあ、さすがにユウヤさんの言葉は効いたみたいだな。

「でも、1つお願いがあります。……………出発は明日にしませんか？」

リナがそうだった。

「リナ、今日じゃダメなのか？」

僕は、リナに尋ねた。ちなみにユウヤさんは口をポカンとしている。

「実は、ミズゴロウの調子がよくないの。ジョーイさんには無理をさせたらダメっていわれていて……。」

リナがショックをうけていたのは、自分が楽をしたいという理由だけではなく、ミズゴロウの体調を考えていたからであった。

「だったらリナはそれを早く俺たちにいわないといけなかった。理由があるとは思ってなかったらな。でも、強くない過ぎて悪かったな。もとはといえば俺のせいだからよ。」

ユウヤさんは、先ほどリナを説得しようとした時の言葉に対してすまないな、とも思ったようである。その事を謝った。

「そんなに謝らないで下さい。ユウヤさんは悪くないです。」

リナは遠慮がちにいう。いつもとは大違いだ。

「取りあえず、出発は明日に見送るということだよな。」  
僕はそういいながらリナをみる。

リナは、コクンとうなずいた。

「ユウヤさん、それでいいですか？」

念のため、ユウヤさんに確認をとる。

「ああ。でも、明日はAM6:00出発にするから覚悟しとけよ。」  
ユウヤさんはOKしてくれたみたいだが、僕にとってはとんでもない発言をした。

「ちょっとユウヤさん！6:00って早くないですか？」  
僕は、ユウヤさんに抗議する。実際、僕もリナも12歳。6時起きは辛いというわけだ。

「いいや、それくらいに出る必要があるんだよ。ヒワタウンに行くには洞窟を抜けないといけないからな。一日で抜けるには早く出発する必要があるのさ。」

「確かにこここの近くに洞窟があったかも。早起きは辛いけど頑張っ  
て起きます!!！」

リナは、ユウヤさんがいう洞窟を目の当たりにしているようで、早起きすることにも賛同している。

「僕も頑張っ  
て起きるよ。」  
僕は、しぶしぶそういった。いつもは早起きじゃないから明日は大変だろうなあ……。

「じゃ、いったん部屋に戻ろうぜ。今日はのんびりす  
そうじゃね  
ーか!!！」

「オ  
ッ！」

ユウヤさんとリナは部屋に向かって走って行ってしまった。ユウヤさん  
もリナみたいな人だったんだと感じてしまう瞬間であった。…



…さてと、僕は明日に備えて早寝しようかな。

僕は、部屋に戻ってからすぐに寝込んでしまった

「エイト！起きてよ。」

誰かが僕を呼んでいるような気がする。でも、きつと気のせいだ。

「エイト　！時間だって。」

……いや、気のせいではない。この声はリナだ。

「……あと…一時間……」

「誰があと一時間よ！さっさと起きないと置いていくよ…！」

「わわっ…！」

僕は、ベッドから跳ね起きた。

「おはよーエイト。昨日は夜ごはんも食べずに寝てたのにまだ寝足らないの？」

リナがニヤニヤと嫌らしい顔をして僕を見る。

「本当ならもつと寝ていたかったんだけどね。さすがに置いていかれるわけにはいかないよ。」

「そうそう。よくわかってるじゃん。じゃあ早く準備済ませてね！わたしはユウヤさん呼んでくるから。」

「分かったよ。」

僕は、素っ気ない返事をした。

〔数分後〕

僕は、短い時間でなんとか身じたくを終わらせた。やっぱり早く起きるべきだったな……。

「よし準備ではきたみたいだしよ、さっそく出発するぜ！」

「レッツゴー」

リナとユウヤさんは、勢いよく外に出ていった。いつものことながら、まだ慣れることができないな。僕は、眠さもあるため、のんびりと外へむかった。しかし、二人はすぐに僕の所に戻ってきた。

「外は雨が降ってるみたいだ。」

「けっこう激しく降ってるよ。」

今は雨が降っているのか。昨日はあんなに晴れていたのにな。

「折りたたみ傘があるんじゃないのか？」

僕は、リナにいう。

「それが部屋に置いてきちゃったみたいでさ、アハハ」

「アハハ じゃないよ。早くとりにいかないと。」

「ハーイ……。」

リナは、猛ダツシュして廊下を駆け上がっていった。

「つながりの洞窟」

リナが、ハイスピードで傘をとりに行ったので、あまりタイムロスにはならなかった。そして、今僕たちはつながりの洞窟をさまよっている。

「薄暗いしジメジメしてるよな。雨が降っているからだろうけどよ。

「なんか、寒気がしない？エイトちよつと怖いよお。」

リナはビクビク震えている。意外と怖がりなんだな。

「大丈夫だよリナ。僕たちがいるんだからさ。ユウヤさん、今どの辺りにいるのか分かりますか？」

「悪い！悪条件が重なったせいで道がよくわかんねー！！」

「「え　　ッ！」「」

僕とリナは、同時に叫んだ。

「悪気はねえよ。まじでわかんねーんだ。……仕方ない。テキトーに進むぞー！」

ユウヤさんは、そういつてスタスタ歩いていつてしまった。

「ユウヤさん！待ってよ！」

リナがすぐにユウヤさんを追いかける。だが、リナが足を踏み入れたその時……

メキメキッ……バキッ！！

「！！！」

地盤が緩いのか、地面が音を立てている。そして、考える暇も与えず足元が崩れてしまった。

「「うわああああ！！！」」

不幸なことに、僕も巻き沿いになってしまった。

目の前が真っ白になった。

「……………あいたた。あれ？こじどこ……………」

リナは辺りをキョロキョロ眺めている。

「地面が崩れたわけだから、この洞窟の地下かも知れないね。」

「おい、二人とも大丈夫かー！！！」

頭上から声がする。上を見てみると、ユウヤさんが僕たちを心配そうに見ていた。

「大丈夫ですよ。打ったところはジンジンしますけどね。」

僕は、作り笑いしながらユウヤさんに向かっていう。

「今からそっちに行くから待ってる!」

「えっ今から向かうってどうやって……。」

リナが目を丸くしていう。

「そんなの飛び降りるに決まってるだろ!」

「止めてくださいよ!5メートルはありますって!危険ですよ!」

「そんなの全然大丈夫だぜ。よし、行くぞ!チルタリス、頼むぜ。」

「チルー!」

……その手があったか。こういうときに飛行タイプは便利だよな。  
ユウヤさんがうらやましいよ。

「よし、到着つと。チルタリスサンキューな。」

「チルー」

ユウヤさんは、素早くチルタリスをボールに戻した。

「……で、これからどうするのか?」

僕が、二人に向かっていう。

「わかんないものはわかんないよ！」

リナはやけくそモード突入中のようだ。

「困ったもんだな。誰か人がいればいいんだがな……」

ユウヤさんもお手上げのようだ。

「多分そう簡単には見つからないよ。」

僕は、地面をみながらいう。

「もっつ！ こごごこよー！」

リナはますますヒートアップした。やれやれ。

「リナが勝手に行くからだよ……」

ここは、あえて嘘をいつてみた。これで、『先になんかいつてないからわたしのせいじゃないもん。』とでもいうことを期待しよう。

「エイトひどい！ わたしのせいなの！？」

リナはよけいわめいて僕にそう返した。……そうくるのか。

「お前ら、ケンカしてる場合か？」

ユウヤさんが僕たちのなだめ役になっている。

いや、これはケンカではなくてリナを落ち着かせるためなんだけどな……とてもそうはみえないけど。

「リルリル！」

「「「!!!」」」

ポケモンの鳴き声が、僕たちに聞こえた。

「人かも知れないぜ！いくぞ！」

「はいっ！」

僕たちは、急いで声のする方に行った。するとそこには、僕が見覚えのある姿があった。

「……………？ エイト君？ リナちゃん？」

その人……………いや、その子は僕たちの名前を口にした。

「……………えっ？ レナちゃん？」

そこにいたのは、アルフの遺跡で出会ったトレーナー、レナちゃんとリュウタだったのだ



第三十話 つながりの洞窟へ再び出会うものたち（後書き）

レナとリュウタとの再開！

次回に続きます！！

第三十一話 つながりの洞窟〜一致団結 絆の力〜(前書き)

最近いつも遅くなってすみません！

さて、レナやリュウタと合流したエイトたちは……

続きをどうぞ！

第三十一話 つながりの洞窟〜一致団結 絆の力〜

「レナちゃん、それにリュウタ！久しぶりだね。」

僕は、興奮しながら二人にいう。

「エイトくん、リナちゃん元気だった？ここにいたのがエイトくんたちでよかった！」

レナちゃんもうれしそうにいう。

「先にいつちまってしばらく会わねーだろうと思ってたけど案外早く追いついたぜ！」

リュウタは僕たちに追いかけてよかったと思っっているみたいだ。つまり、無事にバッジをゲットできたということなのだろう。

「リュウタ、それは私たちが釣りをしたりバトルしたりしてたからだよ！」

「まあそういう訳なんだよね。」

僕は、苦笑いしながらいう。ここ何日かはそんなに動いてなかったからな……。

「ハハツ……そんなこというなよ！せっかく会えたんだしよ！」

そういえば、リュウタもリナみたいに楽しそうな性格をしていたんだっただな。これでまた賑やかになるな……。

「なあエイト、単刀直入にいうけどよ……あいつら誰だ？」

ユウヤさんが僕に耳打ちする。……そうか。ユウヤさんはレナちゃんたちとは初めて会うから知らないのか。

レナちゃんたちもそれに気づいたみたいで、ユウヤさんのところへ近づいた。

もう一人、僕たちが初めて会うであろうトレーナーもレナちゃんたちに続いた。一緒に旅をしている仲間なんだろうな。

「私はレナ。ワカバタウン出身のトレーナーよ。」

「俺はリュウタ。よろしくな。」

「……ボクはユリノ。会うのは初めてだけどよろしくね。」

レナちゃんとリュウタが、ユウヤさんに自己紹介をする。そして、レナちゃんたちと旅をしているらしいユリノちゃんは、僕とリナを見てモジモジしながら自己紹介をした。人見知りしてるのかな……。

「ユリノ、この二人はエイトくんとリナちゃん。私たちとはアルフの遺跡であったトレーナーよ。二人とも話しやすいから大丈夫！」

「……うん、レナがそういうなら……改めてよろしく。エイト、リナ……。」

「こっちこそよろしくね。……えっと、ユリノちゃんでもいいかな？」

ユリノちゃんはコクンとうなずいたので、OKということだろう。

「ゴホンゴホン……最後になったけど俺はユウヤ。一応ホウエンリ

「リーグベスト4の経歴はもってるぜ。まあよろしくな。」

ユウヤさんはいつもの通り、平然とすごいことをいった。

「リーグでベスト4！？それってすげーことだよな！！」

やはりリユウタもかなり驚いてる。そうなるのはあたり前だとおも  
うけどな。

「ねえ、リユウタ。ユウヤさんには敬語を使った方がいいんじゃない？」

「ボクもそう思う。」

レナちゃんとユリノちゃんが交互にいう。

「私たちは敬語で話してるよ！！ねっエイト！」

「うん、なんたってすごい人だからね。」

僕たちは敬語で話しているので、そのことをレナちゃんたちに伝え  
た。

「やっぱりそうした方がいいわね。……じゃあ、ユウヤさん、改め  
てよろしくお願いします！」

「ユウヤさん……よろしく……。」

「おう！レナ、ユリノ、よろしく頼むぜ！！」

レナちゃんとユリノちゃんは大丈夫そうだけど、問題は……。

「たあ　　ッ！敬語なんてめんどくせー！！タメ口じゃさすがにまずいよな。でもよ……あ　　ッわかんねー！！」

リュウタは、なぜかそうとう困っていた。普段あまり敬語をつかわないのだろうか……？

「リュウタ、そんなに焦るなよ。別にタメ口でもいいからよ。」

ユウヤさんは、リュウタにタメ口でもいいといった。

「まじでか！じゃあそういうことで頼むぜ！」

「おう！分かった。」

新しいメンバーがいたからだと思うが、自己紹介をするには時間がかかっていたが、それも、今やっと終わった。ここにどどまっているわけにもいかないのです、とりあえず僕たちは、先に進むことにした。

「レナちゃんたちはつながりの洞窟には何か目的があったきたの？」

僕は、ちょうど隣を歩いていたレナちゃんに聞いた。

「エイトくんはラプラスっていうポケモンを知ってる？」

「いや……聞いたことないな。ユウヤさん、ラプラスって知ってますか？」

僕は、レナちゃんの問いに答えることができなかったもので、この中で一番ポケモンを知っていそうなユウヤさんに話を振った。

「ラプラス？……ああ、何度か見たことはあるぜ。水タイプでけっこう大型でキレイなんだけどよ、珍しいポケモンで生息地は分かってないんだ。」

ユウヤさんは、大まかにラプラスについて教えてくれたが、抽象的だったため、あまりよくわからなかった。

「生息地が分かってないのか？今日、ラプラスがここを出るらしいけどな。」

リュウタが平然としてそういった。

「えっ！それホント!?!？」

リナが、思ったとおり話に食らいつく。

「ああ、ホントだぜ。金曜日につながるの洞窟でラプラスが出るって聞いたんだ。なあ？」

「うん。……ボクは直接は聞いてないけど、ラプラスを見てみたいんだ。……レナもそうでしょ?」

「ええ。ユリノがいうとおりよ。」

三人によると、ここつながりの洞窟では、金曜日になるとラプラスが出現するそうだ。ポケギアを見ると、今日は金曜日である。……探してみる価値は十分にあるな!

「ラプラスかあ! 私も見たい!! 皆でラプラス探そうよ!」

リナは興奮してウズウズしている。リナの場合、すぐに態度に出るからな……。

「うん! 六人いればきっと大丈夫よ。」

レナちゃんもリナに続いていう。レナちゃん、少しリナに影響されちゃったかな……。

「……でも、ラプラスがいそうなところ……探さないと……。」

ユリノちゃんが、心配そうな顔をしている。確かにそう思うよな。

「さっきもいったけど、ラプラスは水タイプ。あたり前だが水辺にしか生息できない。つまり、洞窟内で水があるところを探せばいいってことよ。」

ユウヤさんはそういった。なるほど……普通にそう考えればよかったのか。





第三十一話 つながりの洞窟〜一致団結 絆の力〜（後書き）

さて、エイトたちはラプラスを見つけることが出来るのだろうか？  
次回も楽しみに！

それと、今企画をやっているので、ぜひ参加してみてください！！  
詳しくはこの小説のアナザー版にあります！  
皆さん、よろしくお願ひします！

第三十二話 つながりの洞窟〜ポケモンレンジャー登場〜（前書き）

少し間があきましたが、続きをどうぞー！

第三十二話 つながりの洞窟〜ポケモンレンジャー登場！〜

レナちゃん達と合流してから数十分後、僕たちはまだラプラスを発見することが出来ずにつながりの洞窟をさまよっていた。

「地下にいるしか情報がね〜からな〜」

リュウタがいう。……確かに地下にいることは分かるけど他には全く情報がないからな……。

「ま、気長に探そうぜ」

ユウヤさんは気さくにいった。……まあ、急ぎすぎるのもよくないからな。

「……暗いね」

誰かが呟いた。僕は、きちんと聞いていなかったから誰が呟いたのか分からなかった。

それにしても、洞窟の地下にいるだけあって、ライトがないと暗いな。今日は天気もよくないからなおさらだ。……まあ歩くのにはあまり問題はなさそうだけどね。

「そつえばさ、なんでラプラスを探す気になったの？」

リナが、首を傾げながらレナちゃんに尋ねた。

リナがいう通り、僕もそう思っていたところだった。

「私はラプラスが見たいから……かな」

「ボクも」

「オレはもちろんゲット！」

リナの質問には、レナちゃん、ユリノちゃん、リュウタの順に答えた。

レナちゃんとユリノちゃんは、ただラプラスを見たいだけという理由だったか、リュウタはゲットが目的だったようだ。

珍しいポケモンをゲットしたくなる気持ちは僕にもよく分かるからね。

「そんなこと言うと、私も欲しくなってきたよ！」

ピョンピョンはねながら、リナがいう。

……やはり、リナも興味津々なんだな。でも、この調子だと騒ぎそうだから迷惑だよな……。

「まあとりあえず見つけなきゃ話にならないよ」

僕は、とりあえずリナを言葉でおさえることにした。これで少しは静かになるだろう。

「とりあえず行こーよー！」

「え、え？」

静かになると思っていた矢先、リナは、なぜかユリノちゃんを連れて先に行こうとした。

……まあ、そのほうがリナらしいか。  
でも、なぜユリノちゃんを連れていったのだろうか。……分からない。

「リナのやつ、なに考えているんだ？」

つい、思っていたことが口に出てしまった。

それを聞いていたレナちゃんは、意外そうな顔をして僕を見ていた。まあ、リナと知り合って旅した期間もまだまだ浅いから、知らない部分はまだまだたくさんあるってことだよな……。

「どこかなー？」

僕が考えごとをしているうちに、先をすたすたと歩いていくリナがいった。

確かユウヤさんが水辺をさがすとかいってたけれど、それもかなりの数があるのだからそう簡単には見つからないと思う。……それに加えて、ラプラスの個体数も少ないわけだから、今日中に見つかるのかどうか心配だ。

「あれっ？ リナ、うっ上……」

「どうしたのユリノちゃ……ん!？」

ゆうゆうと先歩いていたリナとユリノちゃんの動きが突然ピタんと止まった。

僕は不思議に思っ、二人の視線の先、つまり天井を見てみると、そこにはたくさんのコウモリのような生き物が天井に張りついていた。

「「キヤ　　！！」」

二人の絶叫が、洞窟全体ににこだました。それと同時に、そのコウモリのような生き物、（おそらくポケモン）達が驚いて、そこからバツバツバツ飛び回り始めた。

「うおっ！」

「キヤッ！」

リュウタとリナの口から、驚きの声が漏れていた。もちろん、僕も突然飛び回り始めるポケモン（？）に驚いた。

「こいつは……ズバットか！　悪く思うなよ！　キノガッサ、マツハパンチ！」

ユウヤさんは、ボールからキノガッサをだして”マツハパンチ”を指示した。

さすがユウヤさん。僕は、旅した年月の違いを感じる。

ユウヤさんの指示に従い、キノガッサは目にもとまらぬ速さでズバットにマツハパンチを決めた。それを見て、他のズバット達は驚いたよう、その場から一目散に逃げ出した。

「みんな、大丈夫？」

僕は、みんなの安否を気にかける。みんな大丈夫なのだろうか……？

「リナ、大丈夫？」

とりあえず、一番危なっかしいリナに大丈夫なのか聞いてみた。

「うわーん！ エイトー！」

リナは、やたらおおげさに僕の所に駆け寄った。

キキヨウシテイのオバケ（ゴース）に対してはびくともしなかった  
ので、今回、なぜ怖がったのか僕には不思議でたまらなかった。

……まあ、一応リナは大丈夫そうだけど、ユリノちゃんが心配だ。

「ユリノ、大丈夫」

「大丈夫か？」

僕が、大丈夫？という前に、レナちゃんとリュウタがユリノちゃん  
に声をかけていた。

「ひっく……レナア……リュウタア……」

地面に座り込んだまま、ユリノちゃんは目に涙を浮かべていた。

その様子からすると、そうとう怖かったのだらう。後でリナを注意  
しないとな……。

「ケガはない？」

レナちゃんが、ユリノちゃんに安否を問う。



「……うんっ」

ユリノちゃんは、涙をぬぐいながらいった。

「なら安心だな」

リュウタがホツとしたようにいう。

「そっちも大丈夫か？」

僕たちは、レナちゃんたちのほうへ近づいていく。

「なんとか大丈夫みたい」

その言葉からすると、ユリノちゃんも大丈夫だったようだ。

「なら良かった。あまり時間もないし、早く行こうか」

僕は、チャンスは一日だけだということ思い出して、そういった。

「じゃあ行きましょ……!?!」

レナちゃんは、『行きましょ』といおうとしていたが、急にセリフが途切れた。

「キヤアアアア!」

そして、数秒後には、悲鳴を上げていた。

さっきのこともあったので、みんな一斉にレナちゃんのほうへ駆け

寄っていった。

「レナ！？ どうした！」

「レナちゃん、大丈夫かい？」

僕とリュウタが、真っ先にレナちゃんの心配をした。

僕は、レナちゃんがなぜ悲鳴をあげたのか原因を探ろうとしたが、それは一目見るだけで分かった。

「レナちゃん、首筋に水滴が流れてるよ？」

僕は、レナちゃんに教えてあげた。……つまり、これはレナちゃんが突然落ちてきた水滴に驚いた……と見ていいのかな。

「まったくよく！ 人騒がせだな〜！」

リュウタが、あきれ顔でそういった。……まあ、ちょっとしたことだったわけだからな。

「……なありユウタ、レナって抜けてる所があるのか？」  
ユウヤさんがリュウタに尋ねる。……ユウヤさんも気づいてしまったようだ。

「おう。ドジだし抜けてるし、しっかり者に見えるけど、実際は……くほっ！」

リュウタは、ベラベラとレナちゃんのことをユウヤさんに説明して

いたが、レナちゃんは、とっさにハリセンを取り出してリュウタの頭を叩いていた。  
「いったいどこからハリセンを出したのだろうか……？」

謎だ。

「リュウタひどい！」

レナちゃんは、大声でリュウタにいった。  
確かにさっきのいい方はひどいと思う。

「悪かったって。ちょっとしたいたずら心ってやつ……ぐはっ！」

レナちゃんはもう一回リュウタの頭を、ハリセンで叩いた。

リュウタは反省する気があるのだろうか……？

「一体どこからハリセンだしたんだろう……」

「さあ……」

リナが、僕にボソツといったが、知るはずもないので適当に相づちをうつことしかできなかった。

「とつとにかく、ラプラス探しにレッツゴー！」

リナが、気を取り直して元気よくいって、僕たちの最前列を歩きだし、僕たちも自然とそれに続いて歩きだした。

まさか、この会話を聞いている存在がいたとは、まだ僕たちは知るよしもない。

しばらく歩いていると、僕たちの目の前から話し声が聞こえてきた。

「この辺りのはずですが……」

「気長に待つんだな」

その声の主は、すぐに僕たちの目に入った。なぜなら、とにかく特徴的な人だからだ。

一人は、身長が高くスラッとしていて長髪。そして、眼鏡をしている。

もう一人は、縦横共に大きく、ガツシリとした体つきをしている。

「どうしたんですか？」

レナちゃんはその特徴的な二人組に声をかけると、長身の人の方が応対した。

「おや、あなた達は……？」

「あっ私はワカバタウンのレナです」

「僕はエイト。同じくワカバタウン出身です」

レナに続いて、僕も自己紹介をした。それに続いて、みんなも自分の自己紹介をする。

「私はシン。ポケモンレンジャーをしています」

「オイラはヨウヘイなんだな。オイラもポケモンレンジャーなんだな」

僕たちが自己紹介し終わったら、二人も自分達が何者なのかを教えてくださいました。

長身の方はシンさん、ガツシリしている方がヨウヘイさんか。声の質からして、シンさんは男の人だ。でも、顔立ちからして、女の人とみ間違われそうだ。……ヨウヘイさんはもちろん男の人だろうけど。

それにしても、ポケモンレンジャーなんて初めて見たな。トレーナーズスクールでレンジャーについて少しは習っていたけど、こんな所で会えるとは思っていなかった。

でも、ポケモンレンジャーがこんなところで何をしているのだろうか。

「……で何を？」

僕は、シンさんに尋ねることにした。

「最近このラプラスを狙っているハンターがいるんですよ。」

「そこで、オイラ達がラプラスの保護をしに来たんだな。」

シンさん、ヨウヘイさんの順にここにいたわけを説明する。

まさかラプラスを狙ったハンターがいるとはね……。

やはり、珍しいポケモンだからだろうか？

「そうだ、見た所あなた達は腕が立ちそうだ。よろしかったら、私達の手伝いをしてくれないでしょうか？」

シンさんは、いきなり僕たちに助けを求めた。僕たちなんかでいいのだろうか？

「もちろん！！！」

一番に反応したのは、いうまでもなくリナ。正義感は一倍感あるってところだよな。

まあ、シンさんとヨウヘイさんがそういうのなら、断る理由はない。

「ありがたい。ラプラスの居場所はわかっているから、一緒に行こうか。」

「だな。」

シンさんは、上品にスタスタと歩いていった。その後ろをリュウタが追いかけて行く。

「じゃあオイラ達も行くんだな」

ヨウヘイさんが、間延びした声でいった。

「そうですね……ほら、ユリノ」

「うっ……うん」

レナちゃんは、後ろに隠れているユリノちゃんの後押しをしながら、僕たちと共に奥へと進んで行った

第三十二話 つながりの洞窟〜ポケモンレンジャー登場〜（後書き）

シンとヨウヘイ。エイトたちに心強いレンジャーが同行することになりました！

エイト 総勢八人か……。

リナ ちょっと多いね。

……次回もお楽しみに！



第三十三話 つながりの洞窟〜ターゲットクリア〜（前書き）

リナ    なんか調子いいね

……まあそうなんだけど出来がヒドイヒドイ。

読者の皆さんごめんなさい m ( ( ( m

### 第三十三話 つながりの洞窟〜ターゲットクリア〜

僕たちは、先に行ってしまったシンさんとリュウタのあとを追うかたちで歩いている。

さっきまでは、ただ黙々と歩いていただけだったけど、シンさんたちは、ラプラスの居場所を知っているようだから、安心して付いていける。そう考えると、自然と足取りも軽かった。

「エイトはポケモントレーナーなんだな？」

ヨウハイさんが、僕にヨウハイさんは、楽しそうにいった。

「ところでシンさん、ラプラスがいるところまでどのくらいかかるのかわかりますか？」

レナちゃんが、シンさんに聞いた。僕も聞こうとしていたけど、先を越されちゃったかな……？

「それなんですけどね……思ったよりも時間がかかりそうなんですよ。ラプラスが生息している部屋はここからは遠いですからね。」

「ええー！……じゃあまだまだ歩かなきゃってこと！？」

そのようにわめくのはもちろんリナだ。

「リナ、しょうがないだろ。……というか旅は基本徒歩だ！ちゃんと心得とけ。」

ユウヤさんから、キツイ（リナにとって）言葉がとぶ。

「リナ……ユウヤさんのいうとおり……。」

それに加えて、ユリノちゃんにも後押しされている。……全く。

「……はあ〜い」

リナは一応返事をしたが、あまり反省はしていないみたいだな。……といっても歩かないといけないには変わりがないので、これ以上考えることを止めることにした。

「とりあえず、先に進もうぜ!」

話を切り替えるようにリュウタが号令をかけた。……ナイス!!

「そうね、行きましょう!」

「おう!行こーぜ!」

「うん……!」

「行こう行こう!」

「行くんだな〜」

みんながそれにあわせてそれぞれ返事をするのだが、僕はタイミングを外してしまって対応できなかった。

「さあ、行きましょうか……?」

「あっ……はい!」

シンさんは、ちょっとショックを受けていた僕を気遣ってくれた。僕は、それをありがたく思いながらみんなのあとを追うことにした。

「ちょ……なんだよこれは!!」

僕たちは、順調に歩いていたのだが、突然先を行っていたリュウタたちの足が止まった。

「……どうしましたか？」

シンさんが、一目散に駆けつける。

「岩があるからこれじゃあ先に進めないよ……」。

リナが、状況を説明する。

要するに岩が行く手をはばんでいて先に進むことが出来ないということだ。

「困ったわね……」。

レナちゃんが首をかしげながらいった。

「ユウヤさん、なにか方法はありますか？」

僕は、ユウヤさんに助けを求めることにした。

「ちょ……なんで俺に話を振るんだよ！ここは普通あつちの二人に  
いづべきだろ……！！」

ユウヤさんは、焦りながらいう。その視線の先にいるのは、シンさんとユウヘイさんだ。

「みなさん、安心して下さい。私達はポケモンレンジャー、ターゲットクリアはお手のものですよ。……ユウヘイ！！」

「ここはオレに任せるんだな……！！」

ユウヘイさんは、ズボンに付いている小型の機械を外す。

「ねえ、あれ……何？」

ユリノちゃんが不思議そうな顔をしてその機械を見ている。

「あれは、おそらく『キャプチャ・スタイラー』だ。ポケモンレンジャーの必需品ってとこだな。」

「へえーキャプチャ・スタイラーかあ……。」

リナも興味津々のようだ。

僕も実物を見るのははじめてだから、ワクワクしてきた。

「みなさん、辺りにポケモンがないか探してもらえませんか？」

シンさんが、僕たちに呼びかける。

「うっし！みんな探そうぜ！！」

「ええ！」

僕たちは、一斉にポケモンを探し始めた。……でも、そう簡単に見つかるのかなあ。

「ポケモンー！でてこーい！」

リナは、大声で叫んでいるが、もちろんポケモンは寄ってこない。ただ迷惑なだけだよな。

「リナ、ちょっとは静かにしろ！」

思った通り、ユウヤさんに注意されている。

しかも、どうやらシンさんもイライラしているみたいだ。リナ、少しは場をわきまえてくれ。

「レナ、ポケモンいない……。」「

「確かにいないわね……。エイトくん、そっちはどう？」

「うーん……。全然見つからないよ。」「

僕は、レナちゃんにポケモンがいたかどうか聞かれたが、答えは”NO” 全くといっていいほど見つからない。

「なあ、ユウヤさんよ、これ怪しくないか？」

「ん……？リュウタ、どれのことだ？」

「これだよこれー！！」

「……！！！」

リュウタがユウヤさんに何かいつているみたいだが、僕の耳には届いていない。

「お　い、ポケモン見つかったぞ　……！！！」

ユウヤさんが一人、猛スピードで僕たちのところに来た。一方のリュウタは、意外そうな顔をして駆け寄ってくる。

「ユウヤさん、どこにポケモンがいるんですか？」

僕が、尋ねる。

「まあ、とにかくこっちに来てみるよ。」

ユウヤさんは、先ほどいた場所に僕たちを連れていく。

「ねえリュウタ、なんか意外そうな顔してたけどどうかしたの？いわなかったらハリセンで叩くわよ。」

「ちょ……ハリセンは勘弁してくれよ。で、なんでかって？……そ

れは見ればわかる!!」

レナちゃんとリュウタは、ユウヤさんを追いかけているとき、そんな会話をしていたらしい。

「……………なにこれ……………」

最初に言葉を発したのはリナだった。

周りを見てみると、当の本人であるユウヤさんと、シンさん、ヨウヘイさん以外は、みんな啞然としている。

それもそのはず。なぜならば、ユウヤさんが”ポケモン”だというものは、ただの少し小さめの岩だったからだ。

「ユウヤさん、これのどこがポケモンなの？」

レナちゃんがみんなを代表していう。

「……………まあ、確かにこれはポケモンには見えないよな。でも、これは真正銘ポケモンだ!……………そうだろ? レンジャーさんよ。」

ユウヤさんは、得意気にいった。さて、シンさん達は、何と答える



のだらう。

「……お見事ですな。あなたは観察力がよろしいようです。この岩は”ゴローン”というポケモンなんですよ。」

「ユウヤのいうとおりなんだな〜〜」

「おお、ビンゴー！お前らちょっとは尊敬しろよ！」

ユウヤさんは、一人楽しそうだ。何だかんだいってお調子者だからなあ……。

「さすがです。ポケモンリーグベスト4は嘘ではなさそうですね。」

「お……おう……。」

あまり信用していなかったような口ぶりだったのでショックを受けたのか、ユウヤさんの声がしぼんでいった。

「……コホン 本題に戻りますが、この中で水タイプを持っているかたはいませんか？」

「はいはい！わたしもってますよ　！」

「……ボクも持ってるよ。」

リナは大げさに、ユリノちゃんは控えめにいった。

「ならばそのポケモンを出して、水タイプの技でゴローンに攻撃してみてください。」

「わかりました！ミズゴロウ、お願い！」

「ガヤガヤー!!!」

「出てきて、マリル!」

「リルー!」

リナとユリノちゃんが、ボールを投げる。

リナはミズゴロウを出すと分かっていたけど、ユリノちゃんはマリルを持っているのか……。

「「水鉄砲!!!」」

「ガヤー!」

「リルー!」

リナとユリノちゃん、二人は同じ技を指示した。  
ファーストコンタクトなのに息がピッタリだ。

ズシャ      ツ

水鉄砲は、ゴローンに直撃した。……まあ、動かないわけだから当たり前か。

「……ゴローン!!!」

水鉄砲が効いたのがゴローンが今にも暴れそうにしている。

「リナさん、ユリノさん、ありがとございます。……ヨウハイ、

頼みますよ!」

「了解なんだな〜……キャプチャ・オン!……なんだな〜」

シュツ

ヨウヘイさんの間の抜けた声と同時に、こまのようなものがキャプチャ・スタイラーから出てきた。

「行くんだな〜!」

ヨウヘイさんは、キャプチャ・スタイラーをグルグルと回している。ゴローンのほうを見てみると、先ほどのこまのようなものから発せられている光の線で囲まれているではないか!

「これで終わりなんだな〜!」

ヨウヘイさんがさういうと、ゴローンは光に包まれた。

そして、だんだんおとなしくなっていた。

「キャプチャ完了なんだな〜ゴローン、さっそくあの岩を壊すんだな〜!」

「ゴローン!」

ゴローンは、ヨウヘイさんのいうことを聞き、岩に向かってものす

「ごいスピードで転がっていった。」

ドカ  
ンッ

ゴローンが岩にぶつかった瞬間、大爆発が起きた。

「みなさん、大丈夫ですか？」

ケムリが充満していて顔は見えないが、シンさんが気を配ってみんなの安否を問う。

「……ゲホゲホ、なんとか大丈夫よ」

「どづつてことねーな」

言葉からしてみんな大丈夫そうだ。

しばらくすると、ケムリがはれて視界が開けてきた。

「おー！岩が粉々だぜ！」

「すごいすごい！！」

リュウタとリナはおおはしゃぎだ。

「ゴローン！！」

そんなとき、ヨウヘイさんがキャプチャしたゴローンは、一声あげると奥のほうへいつてしまった。

「ゴローン！待つんだな~~~~！！」

ヨウヘイさんが、大慌てでゴローンを追いかける。

「リュウタ、私たちも行こうよ！」

「うっし！行くぞ！」

さっきまではしゃいでいたリナとリュウタもヨウヘイを追いかけていく。

「リュウタ！待ちなさいよ！！」

レナちゃんが止めようとしたが、無駄だったようだ。

「リュウタたち大丈夫かな……」？

ユリノちゃんの顔が曇っている。

確かにあのコンビは危険だ。

「……あいつらだけだと心配でたまんねーから俺が追いかける。お前らはあとからゆっくりこい！」

ユウヤさんは決断したかのようないい方をして、ヨウヘイさんやリユウタやリナを追っていった。

……本当に大丈夫なのか？

僕のなかで、そのような不安がよぎった

第三十三話 つながりの洞窟〜ターゲットクリア〜（後書き）

エイト リナたちが心配だな……。

さあ、このあとは一体どうなるのでしょうか？

次回も楽しみにしててくださいー！！

第三十四話

つながりの洞窟〜DASH!

DASH!

DASH!〜

(前巻)

今回はリナ視点でお送りします!

リナ やったあー!!

それではごっごー!



### 第三十四話

つながりの洞窟へ DASH！ DASH！ DASH！

わたしとリュウタは、ゴローンを追いかけて先へ行ってしまったヨウヘイさんを追っていた。

「どこまで行ったんだ？」

リュウタがわたしに向かっていう。

「もう少し先かも？」

いまだにヨウヘイさんの姿がみえないので、わたしはそう答えた。リュウタは、そうだなと判断したようで、わたしと共にもう少し奥のほうへ走っていった。

しばらく走っていると、わたし達の前にしょんぼりとしているヨウヘイさんを見つけた。見た感じ、顔が曇ってるけど大丈夫かなあ…  
…？

「ヨウヘイさん」

「あっリュウタはリナなんだな」

わたしが呼ぶと、ヨウヘイさんがこちらの方に駆け寄ってきた。

「急に走るなよ」

「悪かったな〜」

リュウタが冗談混じりでそういった。それをヨウヘイさんは、右手で頭をかきながら謝った。

「一応反省はしてるのよね？………そういえばヨウヘイさん、何でゴロインを追いかける必要があったんだろう？また別のポケモンをキヤプチャすればいいんじゃないのかな？  
う〜〜ん、よくわかんない。」

「でもなんで追いかけたんですか？」

結局わたしは理由を直接聞くことにした。

「この辺りにはあまりポケモンがいないんだな〜だからもう少し手持ちに残しておきたかったんだな〜」

ヨウヘイさんは、コクリコクリとうなずきながらいった。  
そういうことだったのね。………確かにそれはさっき実証しているからね。手元に残しておきたい気持ちはわたしでも分かるよ。

「ハアハア………おーい………」

あれ？ 今、誰かの声がしなかった？不思議に思って後ろをふり向いてみると、ユウヤさんがこちらへ走ってきた。ずっと走りっぱなしだったのか、すごく疲れているみたい。

「ハア………やっと………追いついたぜ………」

「ユウヤさん疲れすぎ」

わたしが少しユウヤさんを茶化す。

「お前達が速いんだよ！」

声をあげながらユウヤさんは反論する。……わたしはけっこう運動はできる方なんだから！！

「それより……ヨウヘイさんよ。随分……ハア……走ってきたけど……ラプラスの場所は……ハア……わかってるのか……？」

息が途切れながらも、ユウヤさんはラプラスの場所を確認しようとしている。やっぱりわたし達とは違うよね。

「任せるんだな〜ここからほとんど一本道なんだな〜」

ヨウヘイさんが、胸をはっていう。でも、間の抜けた声なので迫力がない。……失礼だけど。

そういえば、ここに来るまでに曲がり道は全然なかった。ここから先も一本道だということにも納得がいく。それに、道が複雑じゃないからすぐに全員合流できるよ！……よかったよかった。

「そういえばレナ達は？」

わたしが一人、自分の世界(?)に入り浸っていた時に、リュウタはユウヤさんに尋ねた。

確かに何でエイトたちこなかったんだろう？ユウヤさんと一緒に来ればよかったのに。

「あいつらにはゆっくり来るように言った。そのうち来るだろうよ」  
ユウヤさんは、何もなかったかのような態度で平然という。……ユウヤさんけっこうテキトーな人だからね……。……あっ！本人の前ではもちろんいわないよ！  
そんなことを考えていたら、等の本人と目があつた。わたしはビクツとしたけど、ユウヤさんはいつも通り。……よかつたあゝ。

「とりあえず待つてるのもなんだしなゝ先に進むんだなゝ」

ヨウヘイさんの、のんびりした声が洞窟に響いた。

エイトたちを待ったほうがいいようなきもするけど、わたし、正直待つのは退屈しちゃうよ！

ここは一本道だし大丈夫大丈夫！！エイトたちを信じよう！

わたしは、リュウタとヨウヘイさんに分かるようにうなずいた。

「じゃあ行くかゝ！」

リュウタがそういつて歩きだした。わたしとヨウヘイさんも後に続いた。

リュウタはわたし達の前を歩いてしたが、急に立ち止まった。あれ？……どうしたんだろう。

わたしは、不思議に思っていたけど、ヨウヘイさんは、リュウタの様子をみて苦笑いした。

「アハハゝ……リュウタ、それ……ポケモンなんだなゝ」  
そして、リュウタの足元を指しながらそういつた。

「はっ？」

えっポケモン……？もちろん、わたしもリュウタも驚いている。それにしてもヨウヘイさんってすごい。さすがレンジャーってだけあるよね。

……じゃあユウヤさんもすごいってことだね。調子に乗ってたみたいけど。

って余計なこと考えちゃダメダメ！！

……今度はいったいどんなポケモンなんだろう。

わたしもヨウヘイさんと一緒になってそのポケモン見る。そこにはさっきのゴローンに似ているポケモンがいた。でも、なんだかまずいような気がする。……なんてだろう。

「イツシー！！」

そのポケモンは、リュウタの足から鳴き声を上げながら移動した。

それを見て、リュウタは瞬時にポケモン図鑑を向けた。

名前はイシツブテというみたい。

なんで分かったのかって？……リュウタの図鑑の音声がこっちにも聞こえたってこと。ちなみにゴローンの進化前らしい。

「ちっ！　また追いついてやるぜ！」

「私も手伝うよ！」

ユウヤさんに続いてわたしも意気込んだ。だけど、それはすぐに無くなってしまった。なぜかというと、さっきまでいたイシツブテの数が、一匹から数十匹にまで増えていたからだ。

「……あつれー？」

リュウタが思わず気の抜けるような発言をしていた。

それもよく分かるよ。……だって全部のイシツブテが、怒りに満ちているんだもん！！どうにかして切り抜けないと……！

「これはマズイんだな〜！ 逃げるんだな〜！」

ヨウヘイさんが、洞窟が響くくらいの声でいった。それを合図に、わたし達は一斉に駆け出した。

「うおー！ 連続でダッシュはキツイなー！」

ユウヤさんは、さっきまでも走ってたんだっけ……。でも、今は逃げなきゃ！

「とにかく走れ〜！！！」

リュウタが、みんなに向かっていう。

「疲れたよ〜！！！」

わたしは早くもギブアップ宣告をしてしまった。いつもはこれくらいなら平気なんだけど今はすごくキツイ。

でも、このままだとかかなりマズイよね……どうしよう。

「リナ！ あいつらには悪いが、追い払うぞ！」

リュウタは、一か八かバトルに切り替えることにしたようだ。

「任せてー！ ミズゴロウ！ もう一回お願い！」

「ガヤー！」

「頼むぜブイゼル！」

「ブーイ！」

「水鉄砲！！！」

わたし達は、それぞれボールからポケモン出し、一斉に指示を出した。

ブイゼルとミズゴロウはそれに答えて、勢い良く水鉄砲を発射した。

「どうだ？」

リュウタがイシツブテ達を確認すると、まだ何匹かは立っていた。

一気に片をつけるのはさすがに無理よね……。

そんな思っていると、残ったイシツブテ達の体が突然光をまといはじめた。

……ちょ……これ危険度120%だよ！！

「なんなのこれ〜！」

「マズイんだな〜！」

わたしとヨウヘイさんは、思っていることが口にでる。……ってそれは、わたしだけかな？

「だな……やつら自爆するつもりだ！ 早く逃げるぞー！」

ユウヤさんは、いつもより焦った口調でトンデモ発言をした。

じ……じ・ばくくく！？それじゃあ危険度200%だよ！！  
確か、自爆は自分が戦闘不能になる代わりに、相手にとんでもない  
くらいのダメージを与えるすっごく危険な技。

わたし達がそれをくらったら……命の問題に関わるよ！！

「走るんだな〜！」

わたし達はヨウヘイさんのいう通りに走り出す。だってここでおさ  
らばなんて絶対絶対嫌だもん！！

だけど、走り出してすぐに道が二手に別れていた。

「どつするの？ どっちに行くの？」

わたしが、焦りつつヨウヘイさんに尋ねる。

「確か……左のはずだな〜！」

わたし達は、ヨウヘイさんの指示の通りに、左へ行く。  
それから間もなく、すぐに爆発音が聞こえた。  
なんとか間に合ったみたい。……よかったあ。

「逃げ切れたな……」

「疲れたよ……」

さっきので、すごく疲れてわたしもユウヤさんも声に元気がない。  
リュウタやヨウヘイさんは大丈夫なのかな？



「つてあれ？」

疲れていながらも、先頭を歩いてきたわたしが、あることに気づいて足を止めた。

「どうしたんだな？」

「行き止まり〜！」

そう。わたし達の目の前には、頑丈そうな岩の壁が行く手をはばんでいた。

さすがにここを進むのは無理だよね……。

「おっおかしいんだな……ちょっとシンに連絡を入れるんだな？」

ヨウヘイさんは、ポケットからトランシーバーのようなものを取り出してシンさんに連絡しようとする。

「……？ 電波が届いていないんだな。ちょっと電波が届く場所まで戻ってくるんだな？」

そっぴいなから、ヨウヘイさんはもと来た道に戻っていきこうとした。

「すぐに戻るからここで休んでていいんだな？」

ヨウヘイさんは、そっぴい残して走り出した。連絡が取れないならしょうがないよね。

「どっにするよ？」

「お言葉に甘えさせてもらおうぜ」

「私疲れたよ……」

リュウタがわたしとユウヤさんの二人に聞いた。

わたしはもうヘトヘトだから一刻も早く休みたい気分。

ユウヤさんも、休む気マンマンみたい。

「フウ……」

結局わたし達は、座れそうな岩もちろんイシソフテではないを椅子にして、とりあえず休んで疲れをとることにした。

エイトたち大丈夫かな……。

わたしは少しだけ不安になったのだった

第三十四話

つながりの洞窟〜DASH!

DASH!

DASH!〜

(後書

エイトたちはリナたちと合流できるのか!?

次回に続く!!

第三十五話 つながりの洞窟へ対面 そして突きつけられた真実へ（前書き）

長らくお待ちさせしました！！一週間ぶりくらいの更新になってしま  
ってすみません！

出来のほうは、一言でいうと残念な感じですが。いつも以上にひどい  
ような気がします……（泣）

おかしいところがあれば、ご指摘お願いします。

それではどうぞ

第三十五話 つながりの洞窟へ対面 そして突きつけられた真実へ

道をふさいでいた岩を壊すことが出来たのはよかったのだが、ヨウヘイさんは、逃げたゴローンを追って洞窟の奥へ行ってしまった。その直後、ヨウヘイさんを追いかけるかのようにリナとリュウタ、そして、ユウヤさんまでもが先に行ってしまった……。

ユウヤさんは、『俺が三人を追いかけるから後からゆっくりこい』といったのだが、不安な気持ちがどこかにある。

「リュウタたち大丈夫かしら……？」

レナちゃんが、ポツリと呟いた。

……心配に思う気持ちはみんな同じだよな。

「……ボクたちが早く追いかけないと！」

普段は大人しそうなユリノちゃんも、何だか気持ちが高ぶっている。

「皆さん、不安になるのはよく分かりますが落ち着いて下さい！」

シンさんが、僕たちの不安をなだめるようにいう。

さすがシンさん。大人の人にそんな風にいわれると、少し気持ちを押さえることができる。

レナちゃんとユリノちゃんの方を見てみると、二人の表情は少しばかり和らいでいたので、僕と同じように感じたのだらうと思いをホツとした。

「ここから先はほとんど一直線です。なので、余程の事がない限り

すぐに追いつくことができると思います。焦らずに前に進みましょう。」

「シンさんのいう通りね。行きましょう！」

「……うん……！」

レナちゃんが、シンさんの言葉に真っ先に反応して、先に進もうと  
いった。ユリノちゃんもそれに同意して返事をする。

「エイトくん、ボーツとしてるみたいだけど大丈夫？早くリュウタ  
たちを追いかけてましょ！」

その場に呆然としていた僕に、心配そうな声をしてレナちゃんがい  
った。

「そうだね。」

僕は、素っ気なく返事を返してしまった。

しかし、レナちゃんはそのことを気にしていないようで、少し先に  
行ってしまったシンさんを追っていった。

僕の心のなかは、今日の朝の朝の天気のような雨模様であった。

僕の中にある不安は消えることはない

しばらくたわいもない話をしながら歩いていると、道が二手にわかれていた。さつきシンさんが、”ほとんど一直線である”とあえていった意味はこれであったのか。

「シンさん、どちらに行くんですか？」

僕が尋ねる前に、レナちゃんが、シンさんにいった。

「地図を確認するので少し待っていて下さい……えー……この分かれ道は”右”へ行くようです。」

シンさんは、素早く地図を取りだし、行くべき方向を僕たちに教えてくださった。

「……右にいけばいいんですね。」

僕は、念のため確認をとる。

「間違えありません。ここをしばらく行くとラプラスの部屋へたどり着けるようです。ヨウハイたちも到着しているかもしれません。」

「

「リュウタたち、ラプラスの前でギャーギャー騒いでないかしら？  
ユウヤさんが止めてくれたらいいけど……」

レナちゃんが、リュウタたちの行動を読むような口ぶりであった。確かに、僕も気がかりである。リュウタはともかく、リナが心配だ。ラプラスは水辺に生息しているようだから、足をとられて溺れるか

もしれない。

……あ、リナは、僕みたいにカナズチではないから溺れることはないか。それは、僕の方が気をつけないとだな。

「じゃあ、右に行くわよ。」

レナちゃんが、そう切り出して、分かれ道の右の方へ歩いていった。シンさんもそれに続いていく。

「…ねえ、エイト……」

僕も行こうとしたが、ユリノちゃんに呼び止められた。彼女の方から話しかけるとは思っていなかったので、少し驚いた。それがあらわになりながら、僕は振り向いた。

「……ここ周辺、何かおかしいって思わない？」

ユリノちゃんは、そういった。いったい何を伝えてたいんだろう……。僕は、怪訝そうな顔をした。

「……この辺りには、大きな石や岩がたくさん落ちてる。それに、よく見たら少し天井が崩れてるような気がする。」

ユリノちゃんは、上を見ながらいった。

僕も、つられるように天井を見てみると、確かに崩れているのが分かった。でも、ラプラスには関係ないような気がするんだよな。

「ユリノちゃん、考えすぎじゃないかな？……とりあえず先を急ごうか。」

結局、僕は思ったことをいってしまった。



「……急に变なこつてごめん。……いじう。」

ユリノちゃんは、しばらくだんまりしていたが、口を開いてそのようにいった。

その言葉を聞いた時、申し訳ない気持ちになつたが、レナちゃんが早く来るようにジエスチャーしていたので、ユリノちゃんに謝ることはできなかつた。

ちなみにユリノちゃんが行つていたことには理由があり、僕たちは、それを後で知ることになる。

「  
}}  
}}}}  
）」

僕たちが、さらに先に進んでいくと、なんともいえない美しい歌声が耳にはいつてきた。

「キレイな声ね。いつたい何なのかしら？」

レナちゃんが、僕たちに向かつていった。

「……もしかして、ラプラス？」

ユリノちゃんが、シンさんにいう。

「その可能性はきわめて高いです。」

「「えっ!?!」」

シンさんの言葉に驚いた僕は、思わず声をあげた。しかも、レナちゃんとも声がハモっていた。……やっぱり驚いてしまうよな。

「皆さん、前をよく見てください。少し明るいのが分かりますか？」

……あそこにラプラスが生息しているのでしょうかね。」

シンさんのいう通り、奥のほうは、少し光が差しているのだろうか、明るみがある。僕は、何となくではあるのだが、ラプラスはそこにいるのだろうかと感じた。

「早くいこう!」

そう感じたせいなのか、僕は、興奮してみんなよりも先に足を進めた。

レナちゃんたちも、僕の後に続いた。

「わあ……キレイ……!!」

これは、僕の発言ではないのだが、もし思ったことが口に出たとしたら、きっと同じようなことをいつていただろう。

そう、僕たちはついに、奥地にたどり着いたのである。

そこは、まるで湖のような場所である。水が透き通っていて、みずみずしさや神秘さを演出しているかのようだ。

そして、そこに一匹のポケモンがいる。

「~~~~~」

そのポケモンは、いまなお美しい声で歌いつづけている。

僕は、ポケモン図鑑をとりだし、そのポケモンに向けた。ラプラスのりものポケモン　人を背中に乗せて運ぶのが大好き。人間の言葉を理解できる。

……ラプラスは、人の言葉を理解できるのか。

僕は、そのようなポケモンがいることを知らなかったので、驚いた。

「……シンさん、早くラプラスを保護しないと！」

レナちゃんが少し焦りながらいう。

「……………。そうですね。…………さっそく保護しましょうか！……！」  
シンさんが、迫力のある声でそういって、ふところにあるモンスターボールを掴んだ。

…………あの冷静なシンさんでも力強い声を出すのかと思うと、少し不思議な気持ちがあった。

「ドラピオン、破壊光線。」

「ドラ　　ッ！！」

シンさんは、ドラピオンというサソリのようなポケモンを出して、なんと破壊光線を指示した。…………破壊光線は、高威力の技のはず。いくらなんでもやりすぎだと思うけど…………。

「…………ラプーツ！」

ラプラスは、突然の攻撃につまどったのかよけるすべがなく、破壊光線が直撃し、苦しそくに悲鳴をあげた。

「シンさん、今のはひどいと思いますよ……！」

レナちゃんが怒りをあらわにしながら、シンさんに向かって怒鳴り付けるようにいう。

レナちゃんがそんなに強く怒るのもよく分かる。

さっきのシンさんの行動は明らかにおかしい。

現にユリノちゃんは、苦しむラプラスをみて、辛そうな表情をしている。

そもそもシンさんはポケモンレンジャーではないのか？

今の行動を見て、僕は、シンさんを不審に思った。

おそらく、レナちゃんとユリノちゃんもそう思ったと思う。

「フッフッフ……ハツハツハツハツハツ……！！」  
シンさんをは、いきなり今まで見せなかったような不気味な表情をしながら笑った。

……やっぱり、なにかある。

レナちゃんとユリノちゃんの方を見ると、僕をみてコクリとうなずいた。……真実は僕が聞きだそう。

「……シンさん、あなたはいったい何者なんですか？」

僕は決心して、単刀直入に聞いた。声は、震えながらも怒りがあらわれている。

「……あなたたちはここにくるまで気づかなかったのですね。……そこまでバカな連中だとは思っていませんでしたよ。もちろん、私はレンジャーではありません。……正真正銘の”ポケモンハンター”なのですよ。」

シンさんは、ニヤリと不適の笑みを浮かべながら、あり得ない、信じたくないような恐るべきことを口にした。

そう、彼はポケモンハンター。

僕たちは、騙されていたのだ

第三十五話 つながりの洞窟へ対面 そして突きつけられた真実へ（後書き）

今回、読者の皆さんを裏切ってしまった……。

シンとヨウヘイがはじめて出てきた時は、怪しんでいた方もいたようですが、キャプチャーシーンで信用させてしまったようです。

さて、エイトたちはシンを相手にバトルが出来るのか！？

無事にリナたちと合流出来るのか！？

次回もお楽しみに！

第三十六話 つながりの洞窟〜いざバトル！そしてピンチ〜（前書き）

今回は長いです。初めて6000文字をこえました（汗）  
自分でもびっくりです。

……それはいいとして、続きをどうぞー！

### 第三十六話

### つながりの洞窟〜いざバトル！そしてピンチ〜

シンさんは、ポケモンハンターであった。……その真実を叩き付けられた僕たちは、その場に呆然としたまま立ち尽くしていた。……ハンター、シンさんがハンターだなんて、信じたくない。

「なら……ハンターが狙っていて、保護するって話も……」

「ふむ、半分正解で半分ハズレというわけですね」

レナちゃん言葉に、シンさんが答える。

でも、シンさんたちに対しての疑問が余計増えてしまうだけであった。

「そんな……いや、ならなぜレンジャーしか持っていないスタイラーを持つている！それに、なぜラプラスを捕獲するのだけが目的なら、僕たちと一緒に行動したんだ！」僕は、普段の二倍以上の声をあげながら、言葉をぶつけた。僕の頭の中がモヤモヤしている現れなのだろう。

「なら順番に答えるところでしょうか。……まず一つ目の質問だが……私はスタイラーなど持っていない。」

「で……でもキャプチャしていた……」

ユリノのちゃんという通り、ヨウヘイさんはスタイラーを使い、ゴロンをキャプチャしていた。

この目で見ただから、間違いないはずだ。

なのに、シンさんはレンジャーではないだと……？ 一体どういう



ことなんだ!?

「わからないようですね。なら……」

「オレが説明するんだな」

僕たちの後ろには、ガツチリした体つきの男の人、ヨウヘイさんがいた。

「オレはもともとレンジャーだったんだな。だけど、任務に失敗してクビにされたんだな。自暴自棄になっていたオレはシンと一緒にハンターになったんだな。」

「まあもともと私はハンターでしたし、元レンジャーがいると、なにかと都合がよろしいんでね。」

ヨウヘイさん、シンさんの順で、僕たちに説明した。

でも、ポケモンレンジャーがクビになったら、キャプチャ・スタイラーは没収されるはずではないのか？

「まあオレはスタイラーを無事に確保したまま、ハンターになれたんだな」

ヨウヘイさんは、僕の心のなかを読んでいるのかのように入った。

「まあその辺は、私の頭脳でどうにでも出来ますよ。」

シンさんが、トントンと自分の右のこめかみ辺りを触りながら、ヨウヘイさんに続けていう。

……これは、シンさんが、頭がきれるのは事実であると改めて分かった瞬間であった。

僕は、自然にシンさんを思いっきりにらんでいた。

「二つ目の質問だが……お前達に会う前、お前達の会話を聞いていてまして、ラプラスを探しているとかいっていたじゃないですか。さすがにあの時に邪魔されるのは面倒でしょね、お前達の通るルートで待ち伏せし、レンジャーのフリをして、お前達を信用させたのですよ。」

シンさんは、冷やかに二つ目の質問に答えた。

……まさか、最初からはめられていたということ……？僕たちは、シンさんの手の内で踊らされていただけだったのか！！

「まあとりあえずラプラスは確認できた。捕獲に入る。ヨウヘイ、時間を稼げ」

「任せるんだな〜ヒポポタス、行くんだな〜」

シンさんが、ヨウヘイさんに向かってそっぴい捨てると、ヨウヘイさんは、モンスターボールから、黄土色をしたカバのようなポケモンを出した。

……初めて見るポケモンだな。

僕は、図鑑を取り出して、そのポケモンに向けた。

ヒポポタス カバポケモン 乾燥した土地で暮らす。汗の代わりに砂つぶを分泌する。

どうやら、ヒポポタスというポケモンは、地面タイプのようだ。

僕の、隣を見てみると、レナちゃんもポケモン図鑑でヒポポタスについて確認していて、ユリノちゃんは、それを覗きこむように見て

いた。

「さて……捕獲するか」

そういいながら、シンさんは右腕に付けていた機械のような物をラプラスに向けた。

「させない！ ヒノアラシ！ 火の粉だ！」

僕は、とっさにモンスターボールからヒノアラシを出し、技を指示した。

「毒針」

シンさんは、いったんその機械を向けるのをやめ、ドラピオンに技を命じる。

火の粉と毒針、二つの技はぶつかりあったが、だんだんと僕のヒノアラシの攻撃が押されてきた。

「ユリノ、私たちもやるよ！ エイパムお願い！」

「うっうん！ 行ってマリル！」

「ウキー！」

「リルー」

レナちゃんのエイパム、ユリノちゃんのマリルの二匹は、元氣良くボールから出てきた。

……無理なことはいわないけど、早く加勢してほしい。

「スピードスター！」

「水鉄砲！」

エイパムとマリルは、レナちゃんたちの指示通りの攻撃をした。エイパムは、星型のエネルギー弾を、マリルは勢いのある水を、毒針に向けて放った。

そのおかげで、三匹の攻撃は毒針を破り、それらはドラピオンに向かっていく。

「ほう……ミサイル針」

少し僕たちを関心したのかと思いきや、シンさんは、冷静に、なおかつ的確に技を指示する。

ドラピオンは、しっぽからたくさんミサイルを連想させるようなエネルギー弾を放ち、僕たちの攻撃をすべて相殺してしまった。

……やっぱりこの人はポケモンハンターの一人なんだ。

この人の前では甘ったるい考え方は通じない。……いや、してはいけないのだ。

「ラプラスは僕たちが守る！ シン！ あなたには絶対に渡さない！」

僕は、覚悟を決めて、ハンターの彼を”シン”と、今までとは違う

呼び方で呼び、怒鳴りつけた。

騙されたということもあるのだが、それよりも、ラプラスを狙う彼らに対しての怒りははるかに大きかった。

「ヒポポタスく捨て身タツクルなんだな」

「ヒポー！」

ヨウヘイの指示を聞き、ヒポポタスはものすごい勢いで突進してくる。

捨て身タツクルは、自分自身に反動がかえってくるというデメリットもあるけど、威力の高い技である。まともに攻撃を受けたら、いづまでもなくマズイ。

「マリル、アクアジェットつむかえうって！」

「リルー！」

ユリノちゃんは、マリルのアクアジェットで応戦しようとしている。……いくら相性がよくても無謀すぎるよ！

僕は、そう思ったのだが、だんだんとマリルが押してきて、最後にはヒポポタスは吹き飛ばされてしまった。

「すごい……。」「

レナちゃんは、思わずそう呟く。

僕にも衝撃的なことであつたため、驚きを隠せなかった。

「一気にいつて！ 水鉄砲！」

「リルー！」

マリルは、一度体制を立て直し、ヒポポタスに向けて水鉄砲を放つ。先ほどのアクアジェットのダメージが大きかったのか、それは、見事にヒポポタスに直撃した。

その後、ヒポポタスはその場で目を回し、のびていた。

「やられたんだな〜！」

ヨウヘイが、悔しそうにいう。

「ふむ……まあヨウヘイは戦闘は専門外だし、まあ上出来でしょう。では……お前達を倒し、ラプラスの捕獲をしましょう。」

シンは、何の問題もないのかのようにいい放つ。いわゆる”まだまだ余裕”だという現れなのだろうか。現に、その目からは、すごい威圧感を感じる。

……ダメだ！ゴチャゴチャ考えている場合ではない！

「エイパム、スピードスター！」

レナちゃんが、僕より先に攻撃をしかけた。

「ヒノアラシ、火の粉！」

僕も、それに続いてヒノアラシに指示を出す。

エイパムは地面を蹴りあげてジャンプし、軽くしつぽを振る。そこから星型のエネルギー弾が発生し、ドラピオンに向かって飛んでいく。その後を追うように、僕のヒノアラシの火の玉も飛んでいく。

「シャドーボール」

ドラピオンは、すぐに漆黒の怪しげな球体を作りだし、僕たちの攻撃に向けて放つ。

たった一発の攻撃であったのに、僕たちの攻撃はあっさり打ち消されてしまった。

「くっ……」

このような状況であるため、悔しさが表れてしまう。

「レベルが違うのですよ。クロスポイズン」

シンは、余裕の笑みを浮かべながらドラピオンに指示を出す。すると、ドラピオンは両腕を交差した。すると、そこから×の形をした紫色のエネルギーが、エイパムとヒノアラシに向けて放たれる。

「マズイよ！」

「電光石火で避けるんだ！」

僕は、この攻撃が危険だと判断して、電光石火を指示する。

レナちゃんも同じ指示をエイパムにしていたようで、それは上手くいき、完全には回避出来なかったものの、直撃はまぬがれた。

「強い……」

……そう、シンは強い。本当に僕たちで彼らを負かすことが出来るのか？

僕の中に、後ろ向きな気持ちが芽生えてくる。

「気持ちで負けちゃだめだよ……マリル、アクアジェット！」

「リルー！」

ユリノちゃんが、僕に向かってそういう。……気持ちで負けたら終わりだからな！！

「私たちだって……エイパム、乱れ引つかき！」

「ヒノアラシ、電光石火！」

ユリノちゃんに続き、僕たちは、指示を出す。それぞれの技でドラピオンに突進していった。

「やれやれ……受け止める」

その瞬間、ドラピオンは三匹の攻撃をやすやすと受け止めてしまった。

「毒針」

「ウキー！」

「ヒノー！」

「リルー！」

シンは、すぐに次の指示をだした。その結果、ヒノアラシたちは至



近距離で毒針を受けてしまった。威力はそこまで高くないから倒されることはないが、確実にダメージは削られていた。

「マリル、捨て身タツクル！」

「リールー！」

ユリノちゃんは、捨て身アタックを指示した。今のユリノちゃんは、かなり攻撃に積極的である。……気持ちが高まったからだろうか？

「学習しないですね……受けとめなさい」

シンは、あきれながらも指示を出す。

マリルの必死のタツクルも、簡単にドラピオンに防がれてしまった。でも、なぜかだんだんドラピオンの体が後ろに下がってきている。

……もしかして、マリルがドラピオンにパワーで勝ってるのか！？

「なるほど……特性の力持ちですか。」

……力持ちか。確かもとのパワーが高くなる特性だったはず。だから見た目よりパワーがあるというわけか。

「雷の牙」

シンは、接近戦で有利な技を指示した。

「っ！？ マリル、一回引いて！」

ヒヤっとしたが、ユリノちゃんのとっさの判断が上手いきき、ドラ

ピオンの攻撃は空を切った。……なんとか大丈夫だったみたいだから、よかったよ。

「甘いですよ。クロス……」

「させない！ 煙幕だ！」

僕の指示で、ヒノアラシは黒い煙を口から出した。よし、少しでも時間を稼げる状態になったぞ！

……さっそく作戦開始だ！！

「ふむ……なら……」

シンにもなにか考えがあるようで、なにか技の指示をしていたようであったが、その内容まではわからなかった。

「どっ……どうするの？」

レナちゃんが、小声で尋ねる。

「この煙幕を上手く利用して、一気に攻め込むよ。」

「でもどうするの？」

「マリルに、煙幕の中にいるドラピオンの場所を、音で感知してもらうんだ。わかったら一気に技を叩き込むんだ。」

僕は、作戦の内容を詳しく教えた。……様子を見ると、どうやら二人とも納得してくれたようだ。

「ユリノちゃん。頼めるかな」

僕は、作戦の要になるユリノちゃんに確認をとる。

「うっうん！ マリル、お願い！」

ユリノちゃんは、少し戸惑いながらも、力強くうなずき、マリルにOKなのか確認する。

「リル！」

マリルは、元気よくうなずきながら、マリルは周りの音に集中し始めた。

「……リルリル！」

目を開けると、マリルは音の聞こえてきた方を指差した。

「よしっ。ヒノアラシ、電光石火！」

「マリル、アクアジェット！」

「エイパム、乱れ引っかき！」

ヒノアラシ、マリル、エイパムの三匹は、それぞれの技の指示を受け、煙幕の中に入っていく。

そう、そこまではうまくいったのだが……。

「ウキー！」

「ヒノー！」

「リルー！」

急にみんなの悲鳴が聞こえてきた。煙幕のせいで、何が起こったのか、僕たちは判断することが出来なかった。

「なにがあつたの!？」

いきなりのことだったため、ユリノちゃんは少しパニック気味である。

しばらくして煙が晴れると、その場で苦しむみんなの姿があつた。

……一体なにがあつたんだ!!

「フフッ……」

シンが、僕たちを見下ろしながら嫌らしく笑う。

「なにをした!？」

僕は、シンの態度にいらだち、とっさに”何をしかけたのか”と、怒鳴りつつ尋ねた。

「なに……煙幕の中にいる時に毒びしを使ったのですよ。」

……毒びしか!!--この技は、交代するポケモンに毒のダメージを与えるもの。……くそっ!……あの煙幕を逆手にとられていたのか。

「これで終わりにしますか。毒々の牙。」

「ドラーー!!」

シンは、これでとどめだといいたいのだろうか。  
ドラピオンは、口にたくさん毒を溜め込み、一気に攻撃を仕かけて来る。

……まずい!このままだと、みんなやられてしまう! ……そんなのは嫌だ! ……でも、はっきり言ってだすすべがない。僕は、どうすることもできないのか……!!

「エイパム! みんなをかばって!」

レナちゃんは、覚悟を決めてそういったようだった。

「ウキッ!」

エイパムも、それを承諾したようで、ドラピオンに向かっていく。

でも、僕には、その行動の意味が分からず、驚き戸惑っていた。  
きっとユリノちゃんもそうだろう。

「レナちゃん!?!」

「レナ、無茶だよ!」

僕とユリノちゃんの口から戸惑いの声が漏れる。

「大丈夫……エイパムを信じて。」

レナちゃんは、穏やかにそういった。

僕は、多少心配はあるが、レナちゃんとエイパムを信じることにした。

「愚かな……ドラピオン、お望み通りにしてやれ。」

ドラピオンは、エイパムの右腕に毒々の牙を決める。当然ダメージは半端ではない。このままだと、ただやられてしまっただけである。……一体どうするんだろう……？

「エイパム！ カウンター！！」

「ウーキー！！」

「なっ！？」

痛みを耐えながら、エイパムは、しっぽでドラピオンを殴りつけた。ドラピオンは攻撃の反動で吹き飛ばされ、壁にたたき付けられた。これならかなりのダメージが期待できる……！

……それにしても、切り札はカウンターであったか。

僕は、レナちゃんとバトルをした時のことを思い出した。

「ドラピオン！？」

シンは、その声からして少し取り乱している。

まさか、カウンターで攻撃されるとは思っていなかったのだろう。

「……ドローラー！！」

相当なダメージを受けているので、倒れていてもおかしくはないは

ずなのだが、ドラピオンは、大声を上げながら立ち上がる。  
そんな……カウンターでもダメなのか？

「そんな……エイパム!？」

レナちゃんが、悲しそうな声でいった。僕は、気になってエイパムの様子を見る。

どうやら、今の攻撃に耐えきれず、その場に倒れてしまった、というところだろう。

「くっ……ヒノアラシ！ レナちゃんが作ったチャンスを無駄にするな！ 火の粉！」

「マリルも！ バブル光線！」

「ヒノー！」

「リルー！」

ヒノアラシは小さい火の玉を、マリルは今まで見たことのない、沢山の勢いのある泡を、ドラピオンに向けて放つ。

僕たちと同じように、ポケモンたちもヒートアップしているようだ。

「シャドーボールで相殺しなさい。」

「ドラッ！」

せっかく作ったチャンスも、シンの手にかかれれば簡単に潰されてしまふ。

どうすれば勝つことが出来るんだ……!!

僕は、かなり追い詰められていた。ユリノちゃんも、おたおたしている。

「私に勝つなど不可能ですよ」

シンが、平然とそういつている間にも、ドラピオンは僕たちに迫って来る。ここで終わりなのだろうか……。

「クロスポイズン」

ヒノアラシとマリルの目の前に迫ってきたドラピオンは、技のチャージをする。

僕は、その場に突っ立っていることしかできなかった。

リナ、リュウタ、ユウヤさん。一体どうすればいいんだ



第三十六話 つながりの洞窟〜いざバトル！ そしてピンチ〜（後書き）

続きが気になるかと思いますが、次回はリナたちになります。

感想やアドバイスを是非お願いします！！

第三十七話 つながりの洞窟へ休憩に会話はつきもの（前書き）

二週間も放置していたのか……!!

はい、言い訳はたくさんありますがあえていいません。

楽しみに待っていた方がいたら本当にごめんなさい！

それではどうぞ！

第三十七話 つながりの洞窟へ休憩に会話はつきもの

ゴローンを何とか退けることができた俺たちは、疲れがたまってきたため、洞窟の行き止まりで休憩することになった。

「はあ~~~~生き返るよーっ！」

リナが、カイスジュースを飲みながらいう。

確か、カイスジュースってのはかなり甘いものだから、俺はあまりたくさん飲みたくないな。

「それにしても、何とかなってよかったぜ。もう少し遅かったら俺たちは……。」

リュウタが、若干真剣そうな顔をしている。

「そんなこというなよ。助かったんだから、よかったじゃねーか！」

…… ヨウヘイが来るまでゆっくりしようぜ。」

俺は、楽しい雰囲気をつくろうとして、こっぴいった。

実際は、俺が一番走っていて疲れているから休憩したいってわけだけどな。

「ユウヤさんのいう通りだよー！リュウタ、ここはいつときのおんびりしようよー！」

リナが、ピョンピョンはねながらいう。

…… お前、疲れたんじゃないのかよ。

「二人もそういうんだし、ヨウヘイが来るまでのんびりするか。」

リュウタもゆっくりしたいのか、すぐにOKした。

「うんうん、そうしよう!……でも、ただ休むだけじゃ面白くないよね。」

リナが、はしゃぐのをやめ、首をかしげながらいった。

……確かに黙っててもつまらないだけだよな。

でも、おもしろい話題なんてすぐには思いつかないだろ……!

「なあ、リナはどうやってエイトと知りあったんだ?」

しばらく沈黙が続いていたが、リュウタがリナに向かって話しかけた。

「えっ? エイトとどんな風に出会ったかって?……確かヨシノシテイでぶつかったんだっと思ったよ!」

ふーん。たまたまぶつかったことで一緒に旅をしているのか。……面白そうだしちょっとからかってみるか。

「ぶつかったってどっちがだ?……どうせ、リナのほうだろ?」

俺は、わざとらしい態度でいった。

「ユウヤさん! それはヒドイよ! ぶつかったのはエイトの方だったもん!」

リナがやけになっという。……予想通りだ。

「それウソらしいよな。」

リュウタが俺に同意したようにいう。リュウタみかにもリナの性格がある程度分かるってことだな。

「リュウタまでヒドイよ！！わたし本当のこといってるのに……。」  
リナが必死に俺たちに訴えかけるようにいう。よく見たら涙をうかべてるじゃねーか！！……ちょっといい過ぎたようだな。

「悪い悪い、冗談だ。でも、あのエイトがぶつかってくるってのは意外だな。」

俺は、少し反省の意味を込めて、片手で頭をかきながらいった。

「冗談なら先にいってくださいよ！！本気にしちゃうんだから……。エイトがぶつかってきたこと、あの時は全く知らない人だったけど、今思えばホント意外だよ！」

リナの表情は、一気によくなり俺のセリフに食らいついてきた。……全く、お前らしいことだ。

「なあ、リュウタはレナやユリノとはどうやって出会ったんだ？」

俺は、リナが調子にのることを見越して、リュウタに話をふった。

「今度は俺か！？」

リュウタは、話をふられるとは思っていなかったらしく、驚きながら俺を見た。

「レナとは幼なじみだからワカバタウンから一緒に旅を始めたんだ

ぜ。」

「リュウタとレナって幼なじみだったんだな。」

俺は少し驚いたかのようないい方をした。

「私も初耳だよー！知らなかったー！！」

俺は、リュウタたちとは初めて会ったわけだから知らなくて当然だが、リナも知らなかったとはな……。

「それで、ユリノとはどうやって会ったの？」

リナがリュウタに尋ねる。

さっきの話からして、リュウタとレナは旅先でユリノに会っているはずだな。

「ユリノを初めて見たのはキキョウジムだな。俺達よりも先にバツジをゲットしてたんだぜ。」

「へえ……でも、私たちのほうが先だよ！」

リナがはっきりいってどうでもいいことで張り合う。やれやれ……。

「……確かにリナたちはアルフの遺跡で会った時にはもうバツジ持ってたよなあ。」

リュウタが少し悔しそうにいう。

……お前も気にしてるのかよっ……！！

俺は、二人を突っ込んでやろうと思ったが、ここはグツとこらえた。

「……というか俺何か忘れてないか？……なんかずっとベラベラしやべってたからだと思うけどさ。」

いったん場が静まりかえったが、リュウタがポツリといった。

確かに俺たちは休憩をしすぎたかもしれないな。

「ねえ、ヨウヘイさん遅くない？」

リナが深刻そうな顔をしている。

「それに、レナたちもこないよな。」

リュウタもリナに続いていう。

なんでこんなに暗い顔するんだよ……！

「なあ、考えすぎじゃねーか？ヨウヘイとか道に迷ってそうだし。

あ……でも、シンと連絡をとるっていつてたからやっぱおかしいか……。」

俺は、なるべく明るく考えたかったのだが、それは無理そうだった。

「リュウタ、ユウヤさん、私たちけっこう休憩できたし、いったん道を引き返そうよ。」

リナが俺たちに提案する。

「……そうだな、いこうぜ……！」

リュウタはそういって、俺たちが通った道の方に走っていった。

「ユウヤさん、行こう行こう!!」

「そうだな。」

俺とリナも、リュウタのあとを追って来た道を引き返すことになった。

「……ここ、分かれ道だったね。」

リナがポツリという。

確かにこの場所には見覚えがある。なにしろ、ゴローンに追われてひどい目にあっただからな。

「確か俺たちはあの時”左”にいったよな。」

リュウタが確認するようにいう。

「うん、たぶんそうだったよ。……でも、どの道にいくつもり？」



リナが首をかしげながらいう。  
そう思うのも当然だよな。

「そこでだ！左側は行き止まりだったから右側にいこうぜ！」

……一理あるな。

俺は、少しリュウタに感心した。俺みたいに考えるのは苦手だろうなーって思ってたしよ。

「うん！……じゃあさっそく出発しよーう！」

「いこうぜー！」

リナのかけ声で、俺たちは、左側の道に向かった。

俺たちは、いうまでもなく左側の道を進んでいる。  
しばらく歩いていて思ったが、だんだん道が明るくなっているような気がする。

「もしかしたらこの先にラプラスがいるかもしれないよね！」

リナがうれしそうな表情をしていう。

リナのいう通り、この先には本当にラプラスがいるのかもしれない。なんたってその気配がしなくもないからな。

「うっし、ラプラス見つけたらさっそくゲットだぜ！」  
リュウタは、両手でこぶしを作り、ギョツと力を入れた。どうやら、ラプラスをゲットする気にいるようだな。

……まあ珍しいポケモンなわけだし欲しくなるよな。

「ねえ、そろそろ出口じゃない？」

リナが、俺たちにいう。

「おお！そうだな。早く行こうぜ！」

リュウタが早く行くように催促する。

「うん！」

リナは、返事をして、俺は、うなずいた。

俺たち三人は、ついに水辺に到達したが、誰も目の前に広がる光景を瞬時に理解することができなかった。

第一に俺の目にとまったのは、ラプラスであった。

強大なダメージを負っているのかすごく苦しそうにしている。

……なんでこんなことになってるんだ？

リナとリュウタも、啞然とした様子で辺りを見渡している。  
パニックってるのは俺だけではないんだな。

「クロスポイズン」

ちょうど後ろの辺りから、聞き覚えのある声があった。紛れもなくシンのものだ。そのいい方は、いかにもとどめを指すのかのようなものである。

俺が、後ろを向いてよく見てみたら、エイトやレナ、ユリノがいることが分かった。

それは、喜ばしいことだったが、今は”クロスポイズン”に応戦出来ない状態に陥っているようだ。

……いくらなんでもまずいだろ！！

「いけ、ハッサム！ラスターカノン！」

危険を感じた俺は、ふところから急いでモンスターボールを取りだし、ハッサムに”ラスターカノン”を指示した。

……間に合ってくれよ！

第三十七話 つながりの洞窟へ休憩に会話はつきもの（後書き）

ユウヤ視点は初の試みでしたがかなり書きにくかったです（汗）

さあ、今回はバトルが激化する予感……！

楽しみにしてもらえたらうれしいです。

感想やアドバイスなど気軽にどうぞ。

第三十八話 つながりの洞窟〜激闘！〜VSシン〜（前書き）

本編の更新はかなり久しぶりです。

読者の皆さますみません！！

エイト 最近前書きで謝ってばかりだよね。

リナ そうそう。情けない……。。

……さあ、本編をどうぞ！！

エイト・リナ 作者スルーしたよ……。！

### 第三十八話 つながりの洞窟へ激闘！！VSシン

もうここまでだ……僕は、そう感じて直感的に目を閉じた。僕たちは、いったいどうなってしまっただろうか。

けれど、いつまでたってもドラピオンの”クロスポイズン”は来ない。

僕は、不思議に思っただけで目を開いていった。

そうすると、僕たちの目の前に、赤を基調とした丈夫そうな体をしていて、両手にハサミを持っているポケモンがいた。このポケモンがドラピオンの攻撃を防いでいたのだろうか。

「よう、三人とも大丈夫か？」

僕たちに声をかけてきたのは、ユウヤさんであった。それにリナやリュウタも続いている。うまく合流できてよかったよ……。

「エイトー！ 大丈夫！？」

真つ先にリナが僕のもとに駆け寄ってきた。なんかいつもより大きさだな……。というものの、僕たちは絶体絶命のピンチに陥っていたから、しょうがないといったらしょうがないかな。

「ユリノ！ レナ！ 大丈夫か！」

リュウタもすぐにレナちゃんとユリノちゃんの所に走っていった。リュウタたちが来たタイミングからして、やはり不安な気持ちになっただろう。

「うん、なんとか……でもエイパムが……」

レナちゃんの目の前でぐったりしているエイパム。おまけに顔色も悪い……まさか、ドラピオンの毒に……！？

「毒にやられたな。レナ、これをエイパムに」

ユウヤさんが、瞬時にエイパムの状態を確認して、レナちゃんに毒消しを渡した。

状態異常を見極めるのもお手の物のユウヤさんはやはりすごい。毒消しを受け取ったレナちゃんは、すぐにエイパムにそれを吹きかけた。

これで、一件落着だ。

「でもなんでシンさんが？」

リナが首を傾げながら、僕たちに聞いてきた。

確かにシンやヨウヘイと敵対したことは説明しないとイケないよな……。

「シンさんはポケモンハンターなの……」

ユリノちゃんが、いつもより力強い声でいう。

リナとリュウタは、その言葉に対して驚きを隠せなかったようだったが、ユウヤさんはなにかを決意したような顔をしていた。

「やるしかないな」

「レナ、ユリノは休んでろ。オレがやる」

「私だつてやるよ！ みんなを傷つけたなんて許せない！」

そういいながら、リュウタはヒトカゲ、リナはミスゴロウをモンスターボールから出した。

リナたちもシンと戦う決意をしたようだ。

「リナ、あんまり無茶するなよ」

「私無茶なんてしないよ！」

……リナはリュウタの言葉をムキになって返しているけど、結局は無理をするリナの姿が容易に浮かんでしまう。

僕も戦力になって少しでも役にたきたいけれど、さすがに手持ちを全滅させるわけにはいかないからな……。

「なんだリュウタにリナも。コイツは俺一人で十分だぜ？」

ユウヤさんは、自信に満ち溢れた顔をしている。

僕がいうのもどうかと思うけど、もう少し危機感を感じたほうがいいと思う。

「ユウヤさん一人に任せたくないよ！ 私だつてやる！」

「大切な仲間を傷つけた代償は払ってもらつつもりだからな。オレもやるぜ〜！」

強く意気込んだ三人は、戦闘体制に入る。ユウヤさんがいるとはいえ、強敵シンを相手にどこまで出来るのだろうか……。

「レナ、エイト。きつと三人なら大丈夫……」



僕とレナちゃんを見ながらいうユリノちゃん。

そうだよ、……あの三人なら絶対にやってくれる!!

「そうだね。リナ達を信じよう」「僕がそういうと、レナちゃんとユリノちゃんの顔色が少しよくなったような気がした。

「ふむ、なかなかの実力者がいるようですね……このままではきつい。行きなさい、テツカニン」

さすがに1対3では辛いのだろうか、シンは、新たに蟬のようなポケモンを繰り出してきた。

僕は、すぐにポケモン図鑑を取り出してそのポケモンに向けた。

テツカニン　しのびポケモン

高速で激しく動き回るため姿をとらえることが難しい。  
なきごえを聞き続けると頭脳がする。

どうやら素早いポケモンのようだ。厄介な相手になりそうだ。

「こっちから行くぜ！　ハッサム！　シザークロス！」

さっそくユウヤさんが攻撃をしかけた。

ハッサムと呼ばれたポケモンは、ドラピオンに向かってシザークロスを放つ。

ドラピオンはさっきまでの戦いで受けたダメージが貯まっているだろうから、これが決まれば……!!

でも、考えは甘かった。

「テツカニン、守る」

テツカニンは、もの凄く速いスピードでドラピオンの前に出ると、黄緑色の壁を発生させて、ドラピオンを庇ったのだ。

「ちっ面倒な」

攻撃を防がれてしまったため、ユウヤさんは悔しそうな様子をしている。

「ヒトカゲ！ テツカニンに火の粉！」

「カゲー！」

「ミスゴロウもドラピオンに水鉄砲！」

「ガヤー！」

今度は、ヒトカゲとミスゴロウが一斉に攻撃をしかける。だが、それはシンに読まれていた。

「テツカニン、高速移動。ドラピオンはクロスポイズンで弾きなさい」

二匹はシンの指示通りに動いた。結果的に、火の粉はクロスポイズンによってかき消され、水鉄砲はテツカニンの素早いスピードであっけなくかわされてしまった。

……ん？そういえば、テツカニンはどこいったんだ？

「シザークロス」

テツカニンは、いつの間にか後ろに回り込んでいた。そして、ミズゴロウにシザークロスで攻撃しようとする。

「ミズゴロウ！ 泥かけ！！」

ミズゴロウは後ろ足をつかって、テツカニンにありつたけの泥をかけた。テツカニンの目に泥が入り、声をあげてはいないものの、苦しんでいるようにみえた。

……リナもなかなかうまい戦術を使っただな。

「なるほど。ダメージはないとはいえ、泥が目に入れば、命中率は下がる……なら、剣の舞」

シンは、リナの戦術に対して少し感心していたが、すぐに他の技を指示した。

すると、テツカニンは摩可不思議に踊り始めた。

”剣の舞”は攻撃わざではないのか……！！

「あれはマズイ！ ハッサム、シザークロス！」

ユウヤさんは、何かを察したのか慌てて指示をした。

「遅い、バトンタッチ」

ハッサムは、瞬時にシザークロスを繰り出したが、それは、空を切ってしまった。

テッカニンはというと、徐々にシンのモンスターボールに吸い寄せられていった。

バトンタッチ……確か自分にかかっている能力値の変化のような効果を、控えのポケモンに引き継ぐことが出来る技だ。これはマズイことになりそうだ……。

「行きなさい、サマヨール」

シンが繰り出してきたポケモンは、黒っぽい体に、赤い1つの目を持つポケモンだ。その目はギラギラと怪しく光っている。

僕は、再び凶鑑を向けてみた。

サマヨール てまねきポケモン

からだの中は空洞になっている。

1つの人魂が燃えていると考えられているが、誰も確かめたことはない。

見た目からしても強そうなポケモンだ。大丈夫なのだろうか……。

「二人とも、サマヨールはオレがやる。ドラピオンは頼むぜ」

ユウヤさんは、胸を張ってそういった。

おそらく、ダメージを受けているドラピオンならば、リナとリュウタで撃退できる、と判断したのだろう。

「任せろ！ ヒトカゲ、引っかく！」

「ミスゴロウも！ 体当たり！」

二人は、ドラピオンの相手をすることをすぐに承諾して、それぞれ技を指示する。

二匹は一斉にドラピオンに接近していく。

でも、うかつに近づいたら……！！

「カゲー！」

「ガヤー！」

やはりな。……二匹はドラピオンが使った”毒びし”の効果で、ダメージを受けてしまっていた。

「なんだこりゃ！」

リュウタが怪訝そうな顔をして叫ぶ。

「毒びし。お前達はドラピオンに近づけるかな？」

そのようにいうシンは、冷やかな笑みを浮かべている。

「関係ねえ！ かんばれヒトカゲ！」

「私達だって負けないよ！」

二人は、折れることなく強く意気込んでいた。

一方、ユウヤさんはサマヨールと激戦を繰り広げていた。

「ちっ！ トレーナーの指示が無いのに技を出して来るとはな！」

ユウヤさんは、悔しそうにいい捨てた。

そう、シンはさっきからずっとドラピオンに指示を出していて、サマヨールは放置している。つまり、サマヨールは自分の判断で技を繰り出しているということになるのだ。それは、よほど戦い慣れていないと出来ないことだ。

シンは、ハンターの中でも指折りの実力者なのだろう……。

「ハッサム！ 剣の舞！」

ハッサムは、先ほどテツカニンが使った技を使う。

ユウヤさんによると、剣の舞は攻撃力を高める技らしい。

「よし、シザークロス！」

ハッサムにシザークロスを指示するユウヤさん。ハッサムは、サマヨールのお腹をクロススの形に切り裂いた。

それなりのダメージがあったようで、サマヨールは怯んでしまった。

「チャンスだ！ ギガインパクト！」

ユウヤさんは、なんと”ギガインパクト”を指示した。

ちよっと待てよ……！ゴーストタイプのサマヨールにノーマル技は効果はないはず。なのになぜ……？

でも、その考えは違っていた。ハッサムの攻撃対象は、サマヨールではなく、ドラピオンだったのだ。

そうか！シンは、リュウタとリナとのバトルに集中しているから今なら難なく決められる！！

「雑魚のくせにしびとい……」

シンが、鬱陶しそうな顔をしている。

「雑魚かどうかは自分で確かめる！ 火の粉！」

「水鉄砲よ！」

二匹の技は、全てドラピオンに命中したが、ダメージはほとんど無かったようであった。

「遊びは終わりです。クロス……なにっ!？」

シンは、ギガインパクトで迫り来るハッサムの存在に気づいた。

くそ……！あともう少し遅かったらよかったのに。察しのいいやつだ。

「気づかれたか！ 構わねえ！ やれハッサム！」

「返り討ちにしろ！ 炎の牙！」

ドラピオンは口に炎を溜め込み、ハッサムのギガインパクトに対抗する。

これまでの戦いをみてみてハッサムのタイプは虫と鋼だと分かった。……ということは炎タイプの技は物凄く効いてしまう……大丈夫だろうか。

二匹の技はぶつかり合い、やがて爆発が起こった。煙りが晴れて、視界がひらけると倒れているドラピオンと、ボロボロのハツサムの様子が確認出来た。

「……………」

シンは無言で、ドラピオンをボールに戻した。やっと一匹倒したことになるけれど、ハツサムもかなりのダメージを負っている。これ以上バトルさせるのは危険だ。それは、ユウヤさんにもよく分かっているだろう。

「ご苦労さんハツサム。休んでてくれ」

その声をかけながら、ユウヤさんはハツサムをボールに戻した。

「あと一匹だな！ 頼むぜキノガッサ！」

「キノー！」

ユウヤさんは、キノガッサを繰り出した。そういえば、リナとタッグを組んでユウヤさんにバトルを挑んだ時、も使っていたよな……………。

「……………私を追い詰めたつもりか？」

「どつという意味なの？」

「なに、お前達は六人、私は一人。圧倒的不利な状況ですが、私の最強のポケモン、サマヨールに勝つことは不可能だ」



シンは、クククツと不適な笑みを浮かべる。レンジャー面をしていた時の優しい笑顔を浮かべていた人とは、まるで別人だ。その姿は取り繕ったものだったけどね。

「余裕こきやがって。いけるか？」

「おつよー！」

「任せて！」

元気よく返事をするリュウタとリナ。

僕はというと、情けないことにヒノアラシで戦えないことから完全に戦力外になっている。

「ふむ、戦えるのは結局三人か……それで私に勝とうなど、愚かなことだ」

「うだうだ言っていないで行くぜ！」

リュウタが叫ぶと、三人は再び戦闘体制に入った。

……きっと三人なら勝てる！みんなを信じるよ。

僕は見守ることしか出来ない

第三十八話 つながりの洞窟へ激闘！！VSシン（後書き）

シン恐るべし！圧倒的な力の前で見守ることしか出来ないエイト。

次回はどうなってしまうのか……！！

ユウヤ・リナ・リュウタの頑張りに期待しましょう！

第三十九話 つながりの洞窟へ苦戦!! VS シンへ (前書き)

さて、シンとのバトルの行方は……？

続きをどうぞー！

第三十九話 つながりの洞窟へ苦戦!! VS シン

「キノガッサ、タネ爆弾！」

「キノー!!!」

ユウヤさんの先制攻撃で、バトルが再開した。

「サマヨール、かわして鬼火」

サマヨールは、瞬時に移動して避ける。その結果、タネ爆弾は、あちらこちらにある岩の一つにあたった。

そして、今はサマヨールのからだの周りで不気味な火の玉がぐるぐると回っている。

攻撃の準備段階とでもいうのであろう。

確か、鬼火はその技を受けたポケモンがやけど状態になってしまう技だ。

まともにくらってしまったらかなり不利になってしまう……!!

「なんとかしてでも鬼火を防いで!!!」

リナちゃんが三人に向かって叫ぶ。

「分かってるよ! ミズゴロウ、水鉄砲！」

「ヒトカゲ、火の粉だ！」

それに応えるかのように、リナとリュウタはそれぞれ指示をする。

「フツ……そんな技で防げるとでも思ってるのですか？」  
シンがいかにもバカにしたような笑い方をする。  
……僕たち、かなりなめられているんだね。

「俺のことを忘れるなよ！キノガツサ、もう一度タネ爆弾！！」

キノガツサは、先ほどと同じ要領でタネ爆弾を繰り出す。

「甘い！サマヨール、サイコキネシスで確実に鬼火を当てなさい」  
サマヨールは体からサイコパワーを発し、鬼火を自在にコントロールした。そして、それを三匹、すなわちミスゴロウ、ヒトカゲ、キノガツサに当てていった。

ミスゴロウとヒトカゲは、少し顔を歪めただけであった。それは、この二匹が元々毒状態に陥っているからである。状態異常が重なることは、まず考えられない。

しかし、キノガツサはしつぽに火がついてしまい、理性を失ってしまった。今は、フィールドをいつたり来たりしている。

「ちっ……やられちゃったな……。」

ユウヤさんは、悔しそうにいった。

ユウヤさんであつてもシンの策略にはまってしまうだなんて……。  
僕たちはラプラスを救えるのか？  
僕の中では不安が増えるばかりだ。

「状態異常だからって関係ないよ！ミスゴロウ、もう一度……」

「リナ、待て！やけど状態は治しといたほうがいいぜ」

ユウヤさんが、ミスゴロウに攻撃させようとしたリナを止める。

「でも、どうやって治すんだよ？」

リュウタが、首をかしげながらいう。

リュウタだけでなく、リナも不思議そう顔をしている。

「なーに、簡単なことだ。リナ、ミスゴロウで俺のキノガッサに水鉄砲をしてくれ。」

「えっ？……本当にいいんですか？」

リナは、ユウヤさんに、予想外のことをいわれたためあたふたした。でも、僕には分かったよ。

「水タイプの技を当てたらやけどは治る、そうですね？」

僕は、ユウヤさんに向かっていう。

「まっそういうことだ。分かったならさっそく頼むぜ！」

「わかった！ミスゴロウ、水鉄砲！」

「ガヤーー！！」

キノガッサは、ミスゴロウの水鉄砲を受けたことによってやけど状態を回復した。

「そういえば、毒状態を回復出来る道具を持っていないの？」

レナちゃんが、みんなに向かっていう。

確かに、毒状態も状態異常の一種だから、このままだとこちらがかなり不利な戦況が続いてしまう。

「リュウタ、リナ、これを使って……！！！」

ユリノちゃんが、バッグから桃色をした甘そうな木の実を取り出した。

木の実といえば、何日か前にリナがモンスターボールと間違えて投げていたよな……。

「モモンの実じゃねーか！ありがとな、ユリノ！」

「助かったよ……！」

リュウタとリナは、ユリノちゃんからモモンの実を受け取って、それぞれのポケモンに食べさせた。

先ほどまでは苦しそうに戦っていた二匹の顔色は、次第によくなっていた。

「よし、回復が完了したことだし攻めるぞ！ヒトカゲ、火の粉だ！」

「カゲー！」

「ミスゴロウ、水鉄砲！」

「ガヤー！」

リナとリュウタが、さっそく元気になった二匹に指示する。

「何度いっても分からないようですね。サマヨール、サイコキネシスで技を止めなさい！」

シンは、サマヨールに再びサイコネシスを使うように命じた。そのせいで、火の粉と水鉄砲の動きはピタリと止まってしまい、最終的にはキノガツサのいる方へ跳んでいった。サイコネシスで技を操っていることがよくわかる。

「キノガツサ、ジャンプして避ける！」

「キノツ！」

キノガツサは、高くジャンプして、跳ね返ってきた火の粉と水鉄砲をかわす。

「やつかいな……サマヨール、キノガツサにサイコネシス！」

イライラしているのか、シンの口調が強まった。

ちよつと待てよ。キノガツサ自身にサイコネシスされたらまずくないか……！！

「させるかよ！キノガツサ、ストーンエッジ！」

キノガツサはストーンエッジを繰り出す。

コウヤさんのキノガツサは岩タイプの技が使えるんだな。

「サマヨール、気にせずに続けなさい！」

サマヨールは、ストーンエッジを無視してサイコネシスを続けた。そのおかげでサマヨールにダメージを与えることは出来たが、キノガツサはサイコネシスをくらい、サマヨールによって中に浮かされてしまった。



「キノガツサ、タネ爆弾で脱出だ！」

ユウヤさんは、脱出を試みるが、キノガツサは、驚きのあまりあたふたしている。

「くそ……どうすればいいんだよ！」

ユウヤさんは、投げやりの気持ちでいう。

「あなたたちで私を止めることなど不可能です。ここは一気に畳み掛けてあげましょう……！」

シンがそういうと、サマヨールは、サイコキネシスを解いた。

「サマヨール、破壊光線……！」

「対抗するぞ！キノガツサ、ソーラービーム！」

「ミズゴロウ、水鉄砲！」

「ヒトカゲ、火の粉！」

四つの技は互いにぶつかり合い、やがて大爆発が起きた

第三十九話 つながりの洞窟く苦戦!!VSシンく(後書き)

バトルの出来がひどい、そして短い……!!

今回は反省すべき点が多かったです。すみません!

ちなみに、最後にユウヤのキノガッサがソーラービームを出せたのは、あの道具のおかげですよ。

**第四十話 つながりの洞窟へ決着！！VSシン（前書き）**

ついに第四十話です！

今回で長かった戦いも終幕を迎えます。

では、どうぞー！

## 第四十話 つながりの洞窟へ決着！！VSシン

リナ達の攻撃と、シンの攻撃がぶつかりあい、やがて爆発が起こった。今はその影響で煙りが発生し、前が見えない状況になっている。戦力はあまり変わらないと思うけど、技の多さならこちらのほうが上回っている。普通に考えれば、僕たちが勝っているに違いない。でも、相手は普通なトレーナーではなくシンだ。油断は出来ない。

「ちっとうなつた？」

舌打ちをしながら、ユウヤさんが、煙りが晴れるのを待っている。この時間はとてももどかしい。

やっと煙りが晴れると、そこには、悠然と立っているサマヨール、ボロボロのキノガッサ、ダウンしているヒトカゲとミズゴロウの姿があった。そんな……嘘だろ……！？

「なっ！？ ヒトカゲ！」

「ミズゴロウ！ しっかりして！」

リナとリュウタは、急いで自分のポケモンのもとに駆け寄る。その様子をシンは悠然と見ていた。

「クククツ……ハツハツハ！！ お前達では私には勝てない！！」

勝利を確信し、高らかに笑うシン。だからといって、『いい気に乗りやがって！』だなんていってられる状況ではない。このままで

はラプラスは連れて行かれてしまう……。どうすればいいんだよ！

「気合いだキノガツサ！ ストーンエッジ！」

「キツ……ノー！」

ふらつきながらも、なんとかストーンエッジを放つキノガツサ。でも先ほどのものと比べると、明らかに威力もスピードも落ちているのが分かる。

「鬼火」

シンが指示すると、サマヨールは青紫色の不気味な火の玉を発生させ、ストーンエッジにぶつけた。たったそれだけに、威力の高いはずのストーンエッジは消されてしまった。

「くそがあ！ タネ爆」

「遅い。接近しなさい」

苛立ったユウヤさんは、タネ爆弾を指示しようとしたが、サマヨールは一瞬の間にキノガツサに接近していた。サマヨールの動きが速いぞー！！

「なっ！ 馬鹿な！？」

「忘れたのですか？ サマヨールはテッカニンのバトンタッチによって出てきたのですよ」

シンが不適の笑みを浮かべながらいった。

そういえば……泥かけを受けてからボタンタッチで交代していたよな……。しかも、テッカニンの特性は……！！

「そういうことか……」

「テッカニンの特性は加速。時間と共に速くなる。更に剣の舞を使用した。このスピードとパワーを受けたらどうなるかな？」

シンの説明でかなりマズイ状況だということはよく分かった。ユウヤさん！早く指示しないと……！

「しまった！ 離れるキノガッサ！」

「遅い！ 炎のパンチ！」

「キノー！！」

ユウヤさんも、マズイ状況だということは分かっていて、キノガッサに距離を取るように指示したが遅かった。

キノガッサはサマヨールの炎のパンチをお腹に受け、あげくの果て岩にたたき付けられてしまった。

ユウヤさんがキノガッサのもとへ行くと、目を回している姿が確認された。

「もうお前達に勝ち目は無い。そこで私がラプラスを捕獲するのを見ているがいい。」

シンが冷やかにいうと、右腕に付けている僕にはよく分からない機械を、ラプラスに向けた。

「させるか！ いけ、ブイゼル！水鉄砲！」

「ブイブーイ！」

リュウタがとっさにブイゼルを出して水鉄砲を指示する。けれど、それはサマヨールによって簡単に防がれてしまった。

「やれやれ……サマヨール、サイコキネシス」

サマヨールの超能力の効果で、ブイゼルは空中に浮かべられてしまった。そして、ブイゼルは地面に叩き付けられた。

「ブイゼル！」

リュウタが叫ぶ。けれど、ブイゼルは全く反応しない。どうやら気を失っているようだ。

デコボコしている地面に叩きつけられたわけだから、気を失ってしまつのもよく分かる。

「レベルが違うのですよ」

余裕の笑みを浮かべるシン。……僕たちだとやはりダメなのか？ いや、まだ諦めるのは早い。でも……

「一体どうしたら……」

頭で考えているだけだともたなくなつて、ついには考えていることが口に出てしまう。だからといって、良案が浮かぶわけではない。

「レナア……」

目をウルウルさせながら、ユリノちゃんがレナちゃんに助けを求めているように見えた。  
きつとみんなも泣きたい気持ちになっているよ……。

「俺は諦めるかよ！」

「私だって諦めないよ！」

そういいながら、ユウヤさんとリナはモンスターボールを取り出している。そう、僕たちはまだまだやれるんだ……！！

「無駄だといっている。サイコキネシス」

シンが指示すると、サマヨールの目が怪しく光り、サイコパワーを発した。そして、それをもろに受けた僕たちの体は、ピクリとも動かなくなってしまった。

「さて……捕獲を開始するか……」

先ほどの機械を、ラプラスに向けるシン。その機械から一筋の光が発生し、ラプラスにヒットした。すると、ラプラスの体が一瞬で金色の像のようになった。

「一体どうなっているんだ……！？」

「ヨウヘイ」

「任せるんだな」

僕たちがわけも分からず目をパチクリさせていた時、シンはヨウヘ



イに話しかけた。

今までおとなしくしていたヨウヘイは、カプセルなようなものを取り出し、そのケースを開けた。するとラプラスの体は収縮し、やがてカプセルに吸い込まれていった。

「ラプラスが!!」

その様子をみて叫ぶユリノちゃん。なんとかしたい気持ちはもちろんあるけれど、サマヨールのサイコネシスのせいで見動きがとれない。ポケモンを出そうと思っても、体が動かないからそれも不可能である。僕たちは、ただ見てることしかできない。

「さて、仕事は終わりだ。ヨウヘイ、帰還する」

「わかったんだな」

ヨウヘイは、軽々とカプセルを持ちながら、シンのもとへ歩いていく。

シンの所に着くと、すぐにカプセルをシンに渡した。

「では……さらばだ」

そういいながら、シンはサマヨールをボールに戻すと、今までにシンがつかっていなかった新たなポケモンを出した。黄色い体をしていて、二本のスプーンを持つ人型に近いポケモンである。

「今だ!」

「逃がすな！」

僕とユウヤさんの叫びを合図に、僕たちはボールを出しながら、シンとヨウヘイの所へと走り出した。

「お別れだ……フーディン、テレポート」

フーディンと呼ばれたポケモンが持っている銀色のスプーンがギリと光ると、シンとヨウヘイは、僕たちの目の前から一瞬で消えてしまった。

僕たちは、二人がいなくなった場所を、ただ呆然と見ていることしか出来なかった

第四十話 つながりの洞窟へ決着！！VSシン（後書き）

エイト 「……………」。

リナ 「……………」。

ちよ ……この雰囲気止めようよー！！

とりあえず、次回も楽しみにしててくださいー！

あと、最近感想が少なくて悲しいのでお願いしますー！！

第四十一話 つながりの洞窟〜終わり〜と新たなる始まり〜（前書き）

長かったコラボもこれにて終了!!

やっぱりコラボが終わってしまうのは寂しいです。

では、続きをどうぞ!!

## 第四十一話 つながりの洞窟〜終わり〜と新たなる始まり〜

シンとヨウヘイによってラプラスは奪われてしまった……。その真実は、受け入れなくてはならない

シンたちが消え去ったあと、辺りは閑散としていて、しばらくは誰一人と口を開かなかった。

確かに、今はそういう状態である。皆のショックは膨大なものなのだから……。

リナは、ポロポロと大粒の涙を落としているし、レナちゃんは、バツグからハンカチをとりだしている。顔には、いうまでもなく涙をうかべている。

ユリノちゃんは、ただシンたちが消えた場所をじっと見つめているだけだけど、こみ上げてくる気持ちをこらえているようにもみえる。リュウタやユウさんは、悲しさというよりも、悔しさというものが大きいようで、それがよく表情に出ている。

もちろん僕だって悲しいし、悔しい。普段はあまり泣かないけど、今だったら悔し涙が出そうなくらいだ。

場の空気は重くなるばかり。どうやって話を切り出すべきなのだろうか？僕は、それを必死になって考えるけれど、全く思い浮かばない。

「なあ……とりあえず脱出しようぜ」

一番はじめに口を開いたのはリュウタであった。

「う……うん……。でも、どうやって脱出するの？……私たちのポケモンは……もう戦えないのに……」

リナが、言葉を途切れさせながら、リュウタに続いた。

「……確かにそうよね。」

レナちゃんが、頷きながらいう。

僕たちポケモンは、ほぼ全滅状態。僕のゴーストとポツポは戦いに参加させていなかったから元気だけど、皆は違う。

だから、ここは一度脱出したほうがよい。でも、いったいどうやって……？

「おいおいこういうときは先輩つてのに任せりゃいいんだよ。ほら、これを見ろ！」

ユウヤさんが、場の雰囲気や和ませるためか、わざと大きな声を出していった。

そのユウヤさんが取り出したのは手ごろな長さのロープのようなものだった。これはなんだったかな……。

「穴ぬけのひも……！これがあつたら外に出られる……！」

ユリノちゃんがうれしそうにいう。彼女の顔は、先ほどより少し明るくなっていった。

それにつられて、皆の顔色も少しずつよくなっているみたいだからよかった。

「よし、今から穴ぬけのひもを円上に置くから俺がかけ声をいったら一気に中に入れ！くれぐれもタイミングを損なうなよ。マジで帰れなくなるからな！」

「おう！皆、準備しようぜ……！」

「うん！いつくよー！！」  
リュウタとリナは、もう元通りのようだ。でも、リュウタはともかく、リナはさっきまで泣いていたよな……。  
僕は、そういうリナを少しだけうらやましい眼差しでみていた。

「ねえ、エイトくん？ボーツとしちゃて……どうしたの？」

レナちゃんが、僕を心配しているような口調でいった。  
どうやらレナちゃんには、ボーツとしているように見えたらしい。

「ごめん、大丈夫だよ。……じゃあ行こうか」

僕は、大丈夫だと伝えてユウヤさんが設置した穴ぬけのひもがあるほうへ近づいていった。

「よし！皆、いくぞ！ー！！」

ユウヤさんが、声を張り上げていう。皆、準備はOKのようだ。

「せーの！ー！！」

ユウヤさんのかけ声に合わせて僕たちは、穴ぬけのひもにダイブした。  
はじめはなににも起きていないかのようにみえたが、徐々に視界が歪んできて、やがて、目の前が真っ白になった。

「ここって入口じゃんツ!!」

呆れた声でそういうのは、いうまでもなくリナだ。そう、僕たちは、入口に戻ってきてしまったのだ。リナが呆れてしまつのも分からなくもない。

「悪い悪い……穴ぬけのひもは入ってきた場所にしか戻れなくてな……。でも、しょうがねーだろ!？」

ユウヤさんは、なぜかリナちゃんのほうを向いていつている。……助け船を出してほしいのかな……。

「確かにそうよね。リナちゃん、ここは黙っといてあげようよ。ねっ?」

レナちゃんは、すぐにそれを察知したようで、リナを説得していた。だいぶりナに慣れてきたみたいだね……。

「はあ〜い」

リナは、案外すぐに納得していた。

「ねえ、ポケモンセンターに行かないと……!」

ユリノちゃんが、皆に向かっている。



「あつ！忘れてたぜ！うつし俺が一番乗りだぜーッ」

「あ　　ッ一番乗りは譲らないんだから！」

リュウタとリナは、風のごとくポケモンセンターに向かっていた。やっぱりそこは変わらないんだな……。僕は、レナちゃんと顔を見合わせて笑った。

「レナ、ボクたちも行くぞ……。」「

「うん、そうね！リュウタたちを追いかけましよう！！」

ユリノちゃんが、レナちゃんに話しかけて、二人はリュウタたちを追いかけていった。

「エイト、俺たちも行くぞ！！」

僕は、結局最後まで残っていたユウヤさんと一緒にポケモンセンターへ向かった。

「ユウヤさん遅いな……。」「

僕たちは、すでにポケモンセンターでポケモンを治療してもらっていて、今はロビーで休憩しているのだが、ユウヤさんがいつまでたってもこない。いったいどうしたのだろうか？

「意外と迷ってたりしてるんじゃないの？」

そういうのはリュウタ。でも、一番迷ったりしそうなのはリナだと思っ。

だからといって、それを口に出したらリナが怒りそうだからいわないでおこう。

「皆　　ッ待たせて悪かったな　　！！」

ユウヤさんが、やっと戻って来た。でも、結構長かったな……。

「ユウヤさん、どうして遅かったんですか？」

リナが、皆が疑問に思っていることを尋ねる。

すると、ユウヤさんの顔が、みるみる暗くなっていった。

「実は、今回の件のことをジョーイさんに聞かれてよ……こっぴどく怒られちゃった。……皆、俺がいながらシンたちを逃がしてしまっでごめんな……。」

そういつてユウヤさんは、僕たちに頭を下げていた。

ちよっと待てよ……なにもユウヤさんだけの責任ではないのに……！

「ユウヤさん、自分を責めないで下さい！私たちだって戦力不足だったわけだし……。」

「……ボクたちはユウヤさんに頼ってばかりだったから……！！」

「それに、これは俺たち皆の問題だぜ。カッコつけてんじゃねーよ！」

「大丈夫！次は皆でシンたちを倒しちゃおうよ！」

レナちゃん、ユリノちゃん、リュウタ、リナの順にいった。

「みんな……！」

ユウヤさんの声が震えている。驚きを隠せないでいるのだろうか。

「ユウヤさん、”負ける”ということを経験してこそ強くなれる、そうですよね！」

最後に、僕がユウヤさんに向かっていった。

「ゴホンッ……そういうことだ。皆、今から力をつけていけばいいんだぜ！悔しさをバネに強くあれ！！まっもちろん俺も強くなるけどな……」

ユウヤさんは、いいことをいったつもりでいるみたいだけど、最後のはいう必要はなかったんじゃないかな……。

「ちょっとユウヤさん！もっと真面目にいえばいいのに……。」

「ちょ……リナ！お前にだけはいわれたくないな！！」

「アハハハハ……。」

少し前まで落ち込んでいた僕たちだったけど、今はもう大丈夫だね  
！！

〔翌日〕

「本当にいいのか？」

「あつはい！私たちはもうしばらくこの辺りで特訓したいので大丈夫です。」

問いかけたのはユウヤさんで、答えたのはレナちゃんだ。  
ちなみに、なぜこのような会話がとんでいるのかというと、僕たちは、今からユウヤさんにヒワダタウンまで連れていってもらおうからだ。方法は、あの時は実行してもらえなかった、チルタリスの”空を飛ぶ”である。

「そうか、それもありだよな。……ならこれをやるよ。」  
ユウヤさんは、レナちゃんたち一人ひとりに紙切れを渡していく。

「うおっ！？これって高級レストランのタダ券じゃねーか！ユウヤ、

ありがとうよ！」

「……リュウタ、ちょっとは かんがえないと……」

ユリノちゃんが、はしゃぎまくっているリュウタを止めるように促す。

「ユウヤさん、これもらっちゃっていいんですか？」

レナちゃんが、遠慮がちにいう。

「おう！どおってことねーよ。……またどっかで見かけたら声をかけてくれよな！」

ユウヤさんが、にこやかにいうと、レナちゃんは、

「ありがとうございます」

といて、チケットをバッグに入れた。

「じゃあ私たちそろそろ行くね！」

リナが、やけにうれしそうにいった。

きっと空中移動が楽しみでウキウキしているのだろう。

「そっか、もういつっちゃうんだね……」。

レナちゃんが、寂しげにいう。

「大丈夫。また会えるよ！」

「うん、エイトのいう通り……！」

そう、別れもあれば、出会いもある。旅はその繰り返しのだから

……。

「次に会うときまでバトルはお預けか……。まあ、その間に強くなつてやるから覚悟しとけよ!!」

「いや、勝つのは私よ!」

こんな朝早くからこの二人はいいあつてるよ……。やっぱりこれが普通なのかな。

「おい、エイト!リナ!準備が出来たぞ!」

ユウヤさんが僕たちを呼んでいる。

「それじゃあ、三人とも元気で」

僕は、そつといい残してチルタリスが待機している場所に向かった。

「チル……」

青空を背景にチルタリスの美しいソプラノのハミングが響いた。

目指すはヒワダタウン……!!



第四十一話 つながりの洞窟〜終わり〜と新たなる始まり〜（後書き）

最初の暗さは、ポケAD史上初でした。今までは明るい場面ばかりでしたからね……。

そして、前書きでも述べた通り今回でコラボが終了です！

コラボして下さったユウキさん、本当にありがとうございました！！

次回からは話が大きく変わります。楽しみにしてください！



第四十二話 ヒワタタウン、そして修行開始！（前書き）

ヒワタタウン編始動……！！

なのですが、今回はみじかいです（泣）

それではござい！

## 第四十二話 ヒワダタウン、そして修行開始！

ここは、ヒワダタウン。人々とポケモンとが素朴に仲良く暮らしている町だ。辺りを見渡してみると一面の緑が広がっていて、空気もいつもよりもおいしく感じられる。

「あー楽しかった楽しかった!!」

弾んだ声でそういうのはリナである。チルタリスでの空中移動が相当楽しかったのだろう。

僕としては、リナに振り回されただけでいい迷惑であっただけだったけどね。

「おいエイト……げっそりした顔をするなよな」

ユウヤさんが、顔に笑みを浮かべながら僕にいう。

ユウヤさんはあのスピードでも大丈夫だったんだな……。僕は、心のなかで溜め息をついた。

「ねえ！この町にはジムがあるでしょ？さっそく行こうよ!!」  
「リナは、僕たちにそのように催促した。でも、リナ……いくらなんでもそれはないだろ!？」

「リナ、昨日のことを忘れてないよな？」

ユウヤさんが、真剣そうな目つきをしてリナにいう。

「うん。忘れてないけど……どうして？」

リナは、キョトンとしながら尋ねる。

「昨日の出来事で、俺たちの力不足はよくわかったはず。だから、俺は今すぐジムに行くより修行した方がいいと思うぜ」

「確かにユウヤさんのいう通りだと思うよ」

ユウヤさんは、修行をすることを僕たちに勧めた。もちろん僕は、それに了承するような返事をする。

「修行かあ〜〜でも、いったい誰が相手をしてくれるのさ？」

リナは、少し不満げにいう。自分がしたいことを否定されたのがいやだったのだろうか？

でも、リナのいう通り修行をするとなったら相手を探さないといけない。

「なーに。相手なら俺がやるからよ！こういう時は先輩に頼るものだぜ！」

ユウヤさんが相手になってくれるといった。

本当にユウヤさんには感謝しないとだな。

「ユウヤさんが相手だったらすぐに決着ついちゃうじゃん！……」

リナは今になってもご機嫌ななめだ。どこまでも否定するようだ。

……まあそれはしょうがない事だと思っっているけど。

「そんなこといってないでいくぞ！！場所を取られるわけにはいかねーからなっ！」  
ユウヤさんはそういって、僕たちをなにか強制的にポケモンセンタ―付属のバトルフィールドへと連れていった。

「よし、さっそく始めるぞ！ポケモンを全部出してくれ！」

「いけ、ヒノアラシ！ポツポ！ゴース！」

「ミズゴロウ！オタチ！お願い！！！」

ユウヤさんのかけ声がかかった後、僕とリナはそれぞれのポケモンを……じゃあさっそく修行開始といきますか！」

そっつい終わったユウヤさんの目付きは鋭くなった  
バトルモードに突入した証拠だ。

よし、バトル開始だ！！

「ミズゴロウ、水鉄砲！」

「ガヤーツ！」

一番はじめに行動したのはリナのミズゴロウ。水鉄砲をキノガッサ

めがけて打つ。

「リナ、単調な技は効かないぜ！もつと考える！キノガッサ、上にジャンプしてかわすんだ！」

ユウヤさんの指示を聞いたキノガッサは、力強いジャンプをして、水鉄砲を回避した。

やっぱりそう簡単にはいかない。リナは考えるのは苦手そうだけど大丈夫なのだろうか……？

「エイトも攻撃してこいよ！！」

ユウヤさんが僕に向かって叫んでいる。

そういわれなくても攻撃はするつもりだったから！

「ヒノアラシは火の粉を真上に打ち上げる！ポツポは火の粉に向かって風おこし！」

「ヒーノー！」

「ポ　　！」

ヒノアラシが打ち上げた火の粉をポツポの風おこしでキノガッサがいる方向へと吹き飛ばす。しかし、軌道がずれてしまいキノガッサに当たることはなかった。

「考えはよかったと思うが、練習が必要だな……。」

ユウヤさんが難しい表情をしながら呟いた。

やっぱり、突然思いついた組み合わせはうまくいかない。当然とい

えは、当然だ。

「オタチ、ミズゴロウ、ダブル体当たり！」

「ガヤー！」

「オター！」

ミズゴロウとオタチは互いにキノガツサの方に突っ込んでいく。でも、ただ突っ込んでいくだけではなく、キノガツサを挟みうちしながらであるからリナも考えながらバトルをしているのだろう。

「おっ一歩進歩したな！……ならこれはどうするか？キノガツサ、回転しながらタネ爆弾！」

「キノキノキノー！！！」

キノガツサは回転しながらタネ爆弾を打っているため、どこへ突っ込んででもタネ爆弾が当たってしまう。だからといって急に二匹を止めることもできない。

現にリナは『助けて！』とでもいつているかのように僕を見つめている。

……しょうがない。ここは僕がどうにかしよう。

「ゴース、サイコキネシスで二匹を止めるんだ！」

「……ゴース！」

僕は、ミズゴロウたちを守るために素早く指示をした。

それが報われたのか、ゴースのサイキネシスでなんとかミズゴロウとオタチを止めることができた。しかし、大量のエネルギーを消費したゴースは、ぐったりとしていた。

「ここまで！まだ戦闘不能にはなってねーけど、いったんここできるぞ！」

ユウヤさんが鋭い声でいった。

こうして僕たちは一度バトルを終えることになったのであった。まだまだ修行は始まったばかり……！！

第四十二話 ヒワタウン、そして修行開始！（後書き）

エイトたちの修行はいつまで続くことやら……

次回もお楽しみに！！



第四十三話　メニュー発表！　いざ特訓！（前書き）

今回は短いです……というのは最近若干スランプなんですよ（泣）

というわけで、しばらく文が短くなると思いますが、ご了承ください。

## 第四十三話      メニュー発表！      いざ特訓！

「さっきのバトルで俺が感じたことをいうからよーく聞いておけよ」

「コウヤさんが、僕とリナとを交互に見ていった。

僕は、すぐにコクリとうなずいたが、リナは目の前にある食べ物にずっと気をとられていた。

そう、今はおやつ時で、ヒワダタウンの名物のヤドンケーキを食べている真っ最中なのである。ちなみにヤドンケーキというのは、ヤドンというポケモンを型どったホットケーキのような食べものである。

なぜヤドンなのかというと、ヒワダタウンでヤドンが多く見かけられるからというわけらしい。

それで、このケーキは僕にもおいしく感じられるんだけど、今はコウヤさんのアドバイスを聞かないといけないと思うんだけど……。僕は、夢中になっているリナを気づかせるために肩を突っついた。

すると、彼女は「わっ！」といって跳ね上がった。そしてその後、コウヤさんのいかひも真剣そうな顔を見て、申し訳なく思ったのか、いつの間にか黙りこんでいた。

「まずはエイトからいくぜ。エイト、お前の課題はポケモンに体力をつけることだ。さっきのバトルのコースがいい例だな……。それと、合体技は二の次だ。普通、ポケモンジムはシングルバトルだからな」

……体力をつけることか。

確かにさっきのバトルの時、ゴースは一度サイコネシスをつかっただけだったのにも関わらず、すぐに倒れかけてしまった。これは、ゴースが打たれ弱い証拠である。

それに、ヒノアラシやポツポだってまだあまり体力はないと思うからユウヤさんのいう通りだと思う。

「次にリナ。お前の課題は技の判断の仕方だ。さっきのバトルでは、ただ技をぶつけているだけに見えがちだったからな」

リナは、ポケモンの問題ではなく、彼女自身の問題があげられた。大丈夫だろうか……。

「よし！考えるのはちょっと苦手だけど頑張るよー！！」

僕は、少しリナを心配していたが、いつもと変わらずに元気な様子であったから、すぐに安心したりリナなら何とかして乗りこえていくはずだからね。

「ユウヤさん、早く行きましょう！」

僕が、早く行くように促すとユウヤさんは「おう！」と返事をし、立ち上がった。

「ちょっと待って！まだ全部食べてないんだけど！」

リナは、ヤドンケーキを口に頬張りながらいった。

全く、行儀のわるいことはやめてほしいものだ……。

僕は、そんな様子のリナを呆れた目で見るしかなかった。

結局僕たちは、リナがヤドンケーキを食べ終わるまで待っていない

といけなかったのであったのである。

「よし！特訓内容を発表するぞ！ まず、エイトはポケモンと一緒にフィールド回りを三十周走ってこい！ リナは、俺が作成したドリルで勉強してもらおうぞ！」

……『走ってこい』だなんてやはり体育会系のユウヤさんらしい。僕は、ヒノアラシたちの方をチラリと見てみたが、みんな顔を歪めていた。走れ！といわれて喜ぶやつなんてそういないよな……。

あっ……そういえば、僕とヒノアラシはいいとして、空に浮かんでいるポツポやゴースはどうするのだろうか？

「ユウヤさん、ポツポとゴースはどうするんですか？」  
結局、僕は、疑問に思ったことをそのまま聞くことにした。

「おっそれならこれを使ってくれ」ユウヤさんは、そう言って僕に少しズツシリするものを渡す。

「……一体何なんですか？」

「これは、浮遊ポケモンのトレーニングに使用するおもりだ。重い

ものを身に付けながら走ったら、力はずくと思っぜ」

トレーニング用のおもりかあ……。そんなものがあつたのか。はじめて知つたよ。

でも、これってお金持ちの人しか持つてなさそうだな。

「ありがとうございます」

僕は、ユウヤさんに感謝してそのおもりを受け取つた。

「ええええ???ツ!!勉強なんて嫌だよ!」

僕が走る準備に取りかかっている時、リナは、大声でわめいていた。……やはり嫌だつたか。

「しょうがねえだろ!?自分が強くなるためだ!頑張るしかないんだよ!……分かつたな?」

「はあーい……」

ユウヤさんが強く説得したのが効いたのか、リナは、すぐに返事をした。しかし、それがいかにも嫌そうにしていたのはいうまでもない。

「というわけで、エイト!俺はしばらくリナに付き添つからよ、三十周走り終わつたら俺たちの所にきてくれ」

「はい!!」

僕は、なるべく明るい返事をした。しかし、正直なところ僕とポケモンたちが三十周も走れるのかどうかとても心配であつた。

こうして、僕とヒノアラシ、ポツポ、ゴース三匹は、不安な気持ちを抱きながらフィールド回りを走りはじめるのであった

**第四十三話　メニュー発表！　いざ特訓！（後書き）**

エイト達の修行はまだまだ続きますよ！！

感想やアドバイスお待ちしております！

## 第四十四話

l e t · s s t u d y a n d f r e s h e n c o u n t

今回は主にリナ視点で進めていきます。



わたしとユウヤさんは、今ポケモンセンターのロビーにいる。なぜそうなったのかというと、それは、わたしが最も考えたくない理由の一つである。そう、勉強……。

ユウヤさんは、修行するにあたって、わたしには勉強するように要求した。

といつてもわたしは正直なところ勉強はニガテ。考えるよりも体が先に出ちゃうんだもん。

今ごろエイトはフィールドの周りを走ってるんだよね。

いいなあ〜三十周なんてちよろいじゃない……!!

「リナ、さっそく始めるぞ！」

ユウヤさんが、バッグから分厚い本を取り出しながらいった。

えーッあんなに分厚いの〜〜ッ！ありえないありえないありえな  
いつ！！

「はあくいつ……」

不満に思う気持ちでいっぱいなのを我慢して、わたしは返事をした。

「よし、ならまずは基本中の基本、相性の勉強だ。さっそくだけど水タイプの弱点は分かるか？」

ユウヤさんが問題を出してきた。でも、そんなの簡単簡単！

「草タイプと電気タイプでしょ？そんなの簡単だよ！！」

「悪い悪い……なら、エスパータイプはどうだ？」

エ……エスパータイプ！？う　　っ分かんないよお……。

「分かってねーみたいだな。エスパータイプの弱点は、虫タイプ、ゴーストタイプ、悪タイプだ。」

……へえ……っ虫にゴーストに悪かあ。なんか意外だなあ。

「ユウヤさん、質問質問！！じゃあゴーストタイプの弱点はなんなの？」

わたしはすかさず聞く。せっかく教えてもらってるんだから、ちゃんと理解していかなきゃだもんね！

「おう、ゴーストタイプは悪タイプとゴーストタイプが弱点だな。」

「自分自身のタイプも弱点なの！？」

わたしは驚きながら叫んだような声をあげる。

「そういうことになるな……。自分自身のタイプが弱点なのはなにかと珍しいパターンだからな。ゴーストタイプのほかにはドラゴンタイプがあげられる。」

なるほど。水タイプに水技を繰り出してもいまひとつだけど、そうならないタイプが存在するんだね！！

「ゴーストタイプとドラゴンタイプは自分自身のタイプが弱点！よしっ覚えましたよ！！」

「よし、そのいきだぜ！なら今度はちよつと質問を変えるぞ。鋼タイプに効果がないタイプは分かるか？」

えっ 鋼タイプに効果がないタイプってあったっけ……。わたしは首を傾げて考えこむ。

「正解は毒タイプ。強力な鋼のボディーに毒は通らないってことなんだろうな」

ユウヤさんは、分かりやすく教えてくれた。なるほどね。そう考えたら相性って分かりやすいかも！！

わたしの顔は、勉強特訓を始めた時と比べ物にならないくらい明るかった。

「だいぶわかってきたみたいだな。あつ今日の終わりに相性のテストするからしっかり勉強しとけよ」

えっ……テスト！？

「ユウヤさん！それは勘弁してくださいよ……！！」

「いや、もうするって決めたんだ。相性のことが書いてあるテキストを貸すから少し休憩したらそれで勉強な！」

ユウヤさんは無駄にニコニコしながらいった。

「ユウヤさんのケチーッスパルターッ！！！」

わたしはさんざんわめいたけど、ユウヤさんにはあっさりスルーされた。

ハア……わたしの勉強修行はまだまたつづきそうだよ……。

＼エイトside＼

「やっと……終わった……」

そう、僕たちはやっとフィールド周りを三十周走り終えた。僕は、リナほどではないが、一応体力はあると思っていたけれど、正直かなりきつかった。ユウヤさんもスパルタだよな……。

僕は疲れはてて肩で息をしながらヒノアラシたちを見る。ヒノアラシは、地面に寝転がっていて、いつもなら背中からメラメラと出ている火も消えていた。

ゴースは、身体中に汗をかいていてとても暑そうにしている。あとでシャワーを浴びないといけないかな……。

ポツポは、身につけているおもりが重いせいか、今は空中にはいなかった。そうだ、早くゴースとポツポのおもりを取らないと！！

僕は、まずポツポのほうを見たけれども、僕の目には、見知らぬ少

年がポップのおもりを取っている姿が映し出された。

年は僕やりナとあまり変わらないくらいで、黒と黄色が基調の帽子を後ろかぶりしている。いったい誰だろう……。

「君は……？」

僕は、少年に聞く。

「ああ、そっか、名乗っていなかったね。ぼくはヒビキ、ワカバタウンのヒビキ。君は？」

少年は、ヒビキと名乗った。しかもワカバタウン出身って僕と同じではないか。

「僕はエイト。ヒビキと同じワカバタウン出身だよ」

僕は、ゴースのおもりを取りながら、簡潔に自己紹介をした。

「あ、そうだ。ユウヤさんのところにいって終わったことをいわないと……」

僕は、ヒビキの方を申し訳なさそうに見て、ポケモンたちに休憩するようにといって、ポケモンセンターの方に行こうとした。

しかし、ヒビキが僕の腕をガッチリとつかんだため、それは阻止されてしまった。

何かいいたいこともあるのか……？

「エイト……君 君って今、修行中なの？」

「そうなんだ。ちょっとした事件で自分たちの実力不足を思い知っ

たからね  
」

ヒビキは、僕が修行中であるのかと聞いてきたので、僕は、事実を述べた。

でも、ちよつとした事件とはいってみてみたものの、全然そんな事件ではないと思った。現に今でも、シンと戦って呆気なく敗れた時のイメージが浮かぶくらいだ。

僕は、かなり考えこんでしまつたが、ヒビキも僕の言葉を聞いたあとは、顔が曇っていた。いったい何を考えているのだろうか？

「もしよかつたら……一緒に修行しない？」

唐突に発せられたその言葉に、僕は、驚きを感じたのであつた。

## 第四十四話

l e t ' s s t u d y a n d f r e s h e n c o u n t

はい、ということで今回からジエイさんの「ポケットモンスター インスター」とのコラボになります。ジエイさんには感謝です！

この小説ってコラボ多くない？と思ったかたもいると思いますが、気にしないでやって下さい！

次回もお楽しみに！！

## 第四十五話

ヒビキとコトネとサイカと

合同特訓始動！（前書き）

えっと、今日11月3日でポケADを執筆し始めて半年が経ちました！

私は飽きっぽいので、半年も続くだなんて思ってもいませんでした。自分としても驚いています。

せつかなので、人気投票でもやろうかと思っていましたが、キャラが少ないので無理ですね（泣）

またの機会にします。

半年も執筆していて未だにバッジが一つ。かなりペースが遅いですね……。

この調子だといつ完結するのか本当に分かりませんが、最後までお付き合いしてもらえるとうれしいです！

そして、ここまでやっていけたのは読者の皆様のおかげです。ありがとうございました。そして、これからもエイトたちの旅を見守ってやって下さい！

前置きが長くなりましたが、本編をどうぞ！！



## 第四十五話

### ヒビキとコトネとサイカと

### 合同特訓始動！

「どういう……事？」

僕は首を傾げながら尋ねる。

「ぼくたちも、いろんな事件に巻き込まれて、自分たちの実力不足を感じたんだ。だから、今のエイトくんみたいに特訓してるんだ」

ヒビキはそうのように説明したが、僕には彼の真意がまだわからなかった。

「だけど、一人でやるより、大勢で特訓すれば、お互いの実力を高めあえると思うんだ」

うん、ヒビキがいたいことはわかった。でも……。

「なるほどね……。だけど、僕は別に一人で特訓しているわけじゃないんだけど……」

そう、これからユウヤさんに見てもらうつもりだったんだよね。

僕が申し訳なさそうにいうと、ヒビキは僕の腕をはなす。

「ほかにも特訓している仲間たちがいるんでしょ？」

「そうだけど……」

「なら、その人たちも呼んで、一緒に特訓した方がいいかもね」

僕たちが考えこんでいたところ、突然後ろの方から声がして、女の子が歩いてきた。

おそらくヒビキの仲間だろう。

「あ、私はコトネ。よろしくね」

「あ、僕はエイトっていいいます……っつて、早いとこユウヤさんのところに行つてこの事をいわないと」

僕は、コトネに自己紹介をし、すぐにポケモンセンターに入つていった。

「ユウヤさん！三十周走り終わりました！」

僕は、ロビーにつくなり元気にいった。あれ？なんだか僕らしくないね。

「おう、お疲れ！俺が考えてたより早かったな」

ユウヤさんは、皮肉たっぷりにいった。きっと僕は運動音痴なんだと思われていたのだろう。僕としては、リナが驚異的すぎるせいだと思っけどね……。

「ユウヤさん、それより聞いてほしい事があるんですけど……」

「えっなになにッ？」

そう聞いてくるのはリナだ。僕はユウヤさんにいったんだけどな……。でも、いいや。リナにもいっておくべきだし。

「さっき、僕たちと同じように修行しているトレーナーに会ったんです。そして、一緒に特訓しないかって話になったんですけど……」

僕は、簡潔に説明した。リナもきつとわかるはずだよな。

「うん、わたしはいいと思う！大勢で特訓した方が楽しいし！！」

リナは即OKといった。

「ユウヤさんはどう思いますか？」

僕が、ユウヤさんの方を見ながら尋ねる。

「俺もいいと思うぜ？まっ俺の負担はちっと増えるけどよそこんところは気にしなくていいぜ」

「じゃあ決まりだね。さっそくそこに向かいますから付いてきてください！」

僕がそういったあと、みんなしてバトルフィールドのある方へ走っていった。

「リナ、ユウヤさん、彼と一緒に特訓しようって持ちかけてきたヒビキです」

僕は、ヒビキに手を向けながらいった。

「はじめまして！！わたしはリナだよ！！」

「ユウヤだ。よろしくな」

リナとユウヤさんは、ヒビキたちに自己紹介をした。

その直後、リナはヒビキの足元にいるピカチュウを見つけ、

「このピカチュウ、君の？」

といった。

「あ、うん。そうだよ」

ヒビキは平然と答えたが、僕は驚いていた。なぜなら、そのピカチュウは青色を身についたからだ。青色のピカチュウなんて見たことないのもちろん、聞いたことがない。

「しかし、珍しいな。青色のピカチュウか」

「そういえばそうだね。気づかなかった」

僕だけではなくユウヤさんが関心しているのには驚いた。リナはと

いうと、口をポカーンと開けて、啞然としていた。

「はい。なんか特殊変異で身体が青くなつたみたいですよ。ところでユウヤさん……ってホウエンリーグベスト4のユウヤさん？」

「おっ、知ってるのか」

ユウヤさんは、なにかとうれしそうにいった。

やっぱりユウヤさんは有名人なんだな。僕やリナとは次元が違う。

「そういえば、ジョウト・トレーナーズっていう番組にも出演していたわよね」

深緑色をした女の子がいった。といっても僕たちよりも歳上に見えるから、女の子というのは失礼かな……。それに、どこかで見たことがあるような気がするな。

「それで、この人は？」

リナが、ヒビキたちに尋ねる。

「私はサイカ。マサラタウン出身よ。よろしくね」

彼女は”サイカ”と名乗った。ちょっと待てよ？まさかこの人は……！！

「サイカさん……って、去年のセキエイ大会優勝者の？」

僕は、目を丸くしてそう聞くと、サイカさんはこくりとつなずき、

「うん。まあ、初出場で優勝だから、フロックって揶揄される時もあるけどね」  
「  
と聞いた。

サイカさんは控えめにいつていたけど、すごいということには変わりはない。

「でもすごいよね。一昨年のホウエンリーグ優勝者で、ホウエン前チャンピオンのダイゴさんも倒したライムさんを倒して優勝したんですもんね」

リナは、尊敬の眼差しを向けながらいう。

やはり、誰だってサイカさんのような強いトレーナーには憧れるものだ。

「とりあえず話を戻そう……。一緒に修行をするということだが…

…」

ユウヤさんが、僕たちを見渡しながらいう。

「私はいいと思うよ。その方がエイトたちもヒビキたちも高まりあえると思うし」

サイカさんは、賛成のようであった。

もちろん、僕たちも賛成だから、OKだということだよな？

「わかった。なら決まりだな」

ユウヤさんは、少し考えこんでいたが、決心したようにいった。

「「「「やつたー!!」「」」」」  
僕とリナ、ヒビキにコトネが声を揃えて歓喜をあげる。

サイカさんはそれを見て、両手を一回叩いた。

「それじゃあ、ちょうど三人ずつに別れているから、私はコトネちゃん  
とリナちゃんをみるわ」

そういうと、サイカさんは、リナとコトネちゃんを連れてその場を  
少し離れた。

「オツケー。リナの課題はトレーナーの知識だからな。サイカ、リ  
ナは夕食後にテストをする予定だから」

「えええええ!!そんなあ……」

先ほどまではハイテンションであったリナだったが、ユウヤさんの  
言葉を聞いてその場に座りこんでしまった。

いつ見ても大げさだよな……

「まあまあ、私も一緒にやるから元気だしていき。ねっ?」

コトネちゃんが、座りこんだリナの手を掴んで、立ち上がらせなが  
らいう。

「ホント?絶対だよ!!」

リナが、強い口調でそういうと、コトネちゃんはうなずいた。

「リナ、コトネとサイカを勉強部屋に案内するんだ」

ユウヤさんが、リナに近寄っていった。

すると、リナは先導してポケモンセンターに戻っていく。

コトネちゃんとサイカさんも後に続いてポケモンセンターに戻っていくのだが、サイカさんが戻り際に振り向いて、

「あ、ヒビキ。することは分かっているよね？」

といった。

ヒビキの課題については、きっとサイカさんがよく知ってるんだよね。

「もちろんです。ユウヤさんがいるから大丈夫です」

ヒビキが明るい顔をして回答したので、安心したのかサイカさんは笑顔でポケモンセンターに戻っていった。

「する事って？」

ユウヤさんが、ヒビキに尋ねる。

「今までの戦いで、僕のピカチュウはスピードはピカイなんですけど、パワーが全然なくて……」



ヒビキは事情を説明する。

……それが、君の課題なんだね。

「そうなんだ。それで、ユウヤさん。どうします？」

僕は、ユウヤさんにいった。

「サイカの事だ。ちゃんとメニューをかんがえてはいるんだろう。それじゃあ、ヒビキはそのメニューで。エイトは……コレな」

ユウヤさんは、そっぴいながら、懐からチューブを取り出した。一体どんな風に使っのだろうか？

「これをポケモンとあの木にむすびつけるんだ」

ユウヤさんは、近くにある一本の太い木を指差しながらいう。

「何を鍛えるんですか？」

やはり、目的がわからないので、僕はユウヤさんに聞くことにした。

「ジム戦はともかく、リーグは負けたら終わりのトーナメント形式だ。コンスタントに能力を発揮し続けるには、持続性が必要だ。」

「確かにそうかもしれませんが。でもこれで効果あるんですか？」

ヒビキが、首を傾げながら尋ねる。

「チューブのある部分に白い線が引っ張ってある。最初に伸ばしきったときに、俺が地面に線を引くから、その線から白い線を声ないようにするんだ」

ユウヤさんが、そのように説明する。

確かにチューブを伸ばしきらないと白い線は地面に引かれた線を越えてしまうからね。

「ですけど、これ一本ですか？」

「ああ。他のポケモンは……休憩だな。一匹三分間線を越えなければ合格。そうだなあ……とりあえずは全員一回は合格してくれ」

ユウヤさんがいうと、僕はうなずいて、まずはヒノアラシの身体にチューブをつけ、もう片方を木の幹につけた。

「俺が時間を計るからな。よいい……スタート!!!」

ユウヤさんのかけ声と同時に、ヒノアラシが走り始めた。そして、チューブが伸びきると、動かなくなった。

それを見て、ユウヤさんは右足をつかって地面に線を引き、持っていたタイマーのスイッチを入れた。

それを見ていたヒビキも、自分の特訓に入っていた。

僕も詳しくは知らないけれど、尻尾につけた重りを上げ下げするらしい。

果たして、僕たちはひとまわりレベルアップ出来るのだろうか



第四十五話

ヒビキとコトネとサイカと

合同特訓始動！（後書き）

次回はリナたちです。

感想お待ちしております！！

## 第四十六話

study time！～相性とは？（前書き）

今回はリナ視点。そして長いです。5000もじを超えたのは久しぶりです。

あと、今回はポケモンの技の相性テストがあるので是非といてみて下さい！！

ポケモンファンには難しくない問題のはずです！

それではどうぞ！

## 第四十六話

## study time！相性とは？

「相性」が今日のテーマ……ね」

わたしが案内した部屋の机の上に置いてあった紙を見ながら、サイカさんがいう。

そのとなりには、ユウヤさんがわたしのために用意したドリルが置いてある。あの分厚さはいつ見ても嫌気がさしちゃうなあ……。

「それで、リナちゃんはどれくらいの知識があるの？」  
サイカさんが、わたしに尋ねてきた。

「うーんと……。まあまあかな？」

本当はあんまり知識はないと答えるべきんだけど、サイカさんの前だとなにかと恥ずかしいから、わたしは曖昧な返事をした。

すると、サイカさんは、なにかを考えこむような表情をする。……  
ちよっと気になるけど、まあいつか。

「じゃあ……水・地面タイプのポケモンの弱点は？」

いきなり、コトネが問題を出してきた。ちよっと！まだ心の準備できてないよーっ！

「えっと……水・地面だから、電気技はダメだし……。なんだろ？」

わたしはそういって、首を傾げた。

「正解は草タイプ。水・地面タイプの唯一の弱点だよ。少し難しい表情をしながら、コトネが答えをいう。」

「そうなんだ。コトネはよく知ってるね。」

わたしは、笑ながらいう。

でも、コトネはというと、さっきよりも難しい表情をしていた。あれ？なにが悪かったんだろう……。

「それじゃあ、ポケモンのタイプは全て分かってるわよね？」

次は、サイカさんがわたしに尋ねてきた。

「はい！全部で17タイプあるんですよ。」

わたしは、瞬時に答える。

それ返答を聞いたサイカさんは、安堵の表情を浮かべた。でも、わたしにはよく分かんないからいつか。

「それじゃあ、コトネちゃん。リナちゃんの隣に座って。」

サイカさんがそういうと、わたしの隣からギーッと椅子を引く音がした。そこには、いうまでもなくコトネが座っている。

「早押しクイズの形式で問題を出すわね。コトネは問題をいい終わってから五秒待ってから解答すること。」

えっこれってハンデってことだよ……。つまり、これはわたしが

……いや、そんな風に考えるのはやめよう。

「それじゃあ、問題ね。ゴーストタイプに効果がないタイプを全部  
いってみて」

さっそくサイカさんが、問題を出してきた。

「えっと……」

わたしは、一生懸命考えるんだけど、ちっとも答えが出てこない。

「ノーマルタイプと格闘タイプです」

わたしがもたついている間に五秒経ってしまい、コトネが即答する。

「正解。それじゃあ、格闘タイプには、ゴーストタイプの攻撃は通  
じる？」

「通じない!!」

わたしは、次の問題には自信満々に答えた。

しかし、サイカさんは、首を横に振りながら、

「ううん。通じるわ」

といた。

「えっそうなんだ……」

わたしは、意気消沈しながらいう。今のはけっこう自身あったのに



！。

「じゃあ、次の問題。氷タイプが弱点なタイプは？」

うーん、氷タイプってけっこう弱点多いよね。……とりあえず分かるのからいつちやおっと。

「草と、飛行でしょ、ドラゴンには……」

「あとひとつね。コトネは分かってるよね？」

「はい、地面タイプです」

サイカさんが、コトネに解答するようにもとめると、コトネはスラリと答えをいった。

「コトネはすごいよね！」

わたしは、コトネをちょっと尊敬しているような眼差しで見つめる。

「ううん。まだまだだよ。トレーナーズスクールを首席で卒業したって、まだまだ頂点は遠いもん」

コトネが目標はまだまだ先だという。そういうコトネの視線はサイカさんのほうに向けられている。

そっか。サイカさんは、セキエイ大会ね優勝者だもんね。

「はい。じゃあ、次の問題にいくわよ」

サイカさんがそういうと、わたし達は再び問題に取りかかった。

「なんで僕たちまで……？」

エイトが不服そうにいう。

えっと、今の状況を説明すると、わたし達四人は一直線に並べられた机に座っていて、テストを受ける直前だということ。

でも、エイトとヒビキにはいきなりテストをするといったようなものだから、さすがに嫌に思ったんだろうね。

エイトがそんなに嫌そうな顔をするなんて意外かも。

「いーじゃん。せつかくだからやろうよ!!」

わたしは、エイトの愚痴を笑って吹き飛ばした。でも、一番笑ってられないのはわたしだよ……。あーっテストなんてやだよお……。

「そんじゃ、始めるぞ。時間は五分だな」

ユウヤがテスト開始のコールをすると、わたし達は一齐にテスト用紙を表にひっくり返し、筆記用具を持った。

はあ……。ちよっとは解けるようになってればいいけどなあ。

\*すべての問題で答えがない場合は無しと答えよ。

問1 エスパータイプの攻撃がいまひとつなタイプをすべて答えよ。

問2 ミカルゲに代表される悪・ゴーストタイプ。効果がバツグンなタイプをすべて答えよ。

問3 電気タイプの弱点は？

問4 飛行タイプを弱点とするタイプは？

問5 地面・飛行タイプの弱点は？

「はい、そこまで!!」

わたしがテストと格闘して五分が経過し、ユウヤさんがテスト終了のコールをかけた。わたしたちは一斉に筆記用具を机に置く。

サイカさんが、解答用紙を回収して、二枚をユウヤさんに渡す。きつとわたしとエイトの分だよね。

そういえば、みんなはいい点とってるのかなあ……。

「どうだった？」

わたしがぼんやりしていると、コトネがテストの出来を尋ねてきた。

「問2以外はバツチリ!!……だと思う」

わたしは自身なさげにうつむきかけながらいった。  
実際、問5とかも間違っただもんなあ……。

「そついうコトネは？」

今度はわたしが聞き返す。

「取りあえず全部書いたよ。あってるっていう確信はないけどね」

コトネはそついつてるけど、全問正解してそつだなあ。

そついえば、エイトとヒビキは大丈夫だったのかな？

わたしは、エイトたちにどうだったか聞こうと思ったけど、

「よし、丸つけ終わったぞ」

とユウヤさんがいったので、やめることにした。

サイカさんが、ユウヤさんから解答用紙を受けとると、一人ずつ名前を呼ぶ。

最初に呼ばれたのはエイト。エイトは立ち上がると、サイカさんのところへと行く。

エイトってなかなか頭よさそうだから、けっこういい線いつてるんじゃないかな？

「問2だけね。他は出来てるわ」

エイトは、解答用紙を受けとると、席にもどっていく。

エイトは「ミスかあ。わたし一点だったらどうしよう……。わたしの中で、不安に思う気持ちがどんどん広がっていく。」

次に呼ばれたのはヒビキで、ヒビキもエイトと同じ問2だけ間違えていた。

突然テストといわれた二人が好成绩だなんてなによ！

なんかわたしだけ孤独感があるような……。あーっゴチャゴチャ考えない考えない！！終わったことを考えても結果は変わらないしね！

次は、コトネが呼ばれた。

「さすがね。全問正解。」

サイカさんはそういって、コトネに解答用紙を渡す。コトネは一息つくど、席へ戻っていった。

「すごいね、コトネちゃんは」

エイトが驚きながらいう。

「コトネはスクール時代から成績よかったからね」

ヒビキが説明すると、エイトは、なるほど、といった表情をした。

「最後はリナちゃん。3問正解ね」

サイカさんがそういうと、わたしはばたつきながら立ち上がり、解

答用紙をもらいにいった。

それを見てみると、予想通り問2と問5を間違えていた。でと、3問あってたんだから上出来……よね？

「ま、そんな所だろ。タイプ相性表を確認して、間違ったところを復習するんだな」

「そうね。それじゃあ、解散！！」

ユウヤさんが、わたしたちに復習をするようにいって、サイカさんの一言で今日の特訓は終わった

その後、わたしはコトネと一緒に風呂に入って、部屋に戻った。今日はコトネと一緒に部屋で寝るんだよね！！  
エイトも今日はヒビキと一緒になんだろう。

「今日はお疲れ様。勉強はやっぱりきつかった？」

コトネがわたしに声をかけてきた。

「うん。すつごくきつかったよ……。でも、前よりは頭よくなったかな？」

わたしは笑ながらいう。

「確かに私もそう思うよ。リナちゃん頑張ってたもんね」

「ありがとう！……じゃあそろそろ寝ようかな。コトネ、おやすみ」

「うん。おやすみ」

こうして、わたしとコトネは眠りについたのだった。

時はすでに真夜中。

コトネはスースーと寝息をたてて寝ているんだけど、わたしはどうも眠れない。目を閉じてもいつもみたいに落ち着けないし……。なんでしょう。

わたしは疑問を抱きながら、ベッドから出る。

「ちょっと夜風に当たって来ようかな……。」

わたしは、ポツリと独りごとをいって、ポケモンセンターの外へと向かった。

「わあ、きれいだなあ！！」

今は遅い時間だから、辺りには漆黒の闇の世界が広がってるけど、ふと夜空を見上げてみたら、満天の星がちらついている。誰もわたしの感嘆を聞いている人なんていないのに、つい口に出してしまった。それだけ夜空の星々に魅了されているってことなんだよね。

ヒワマキで見た星空もキレイだったけど、ヒワダで見る星空も好きだなあ……。

きつと田舎町だから、たくさんの星々を見れるんだよね。

こんなことを考えるなんて、なんだかますますわたしらしくなくなってきた。

でも、なんでそんな風になってしまったのか全くもってわからない。

本当になんでなんだろう……。

わたしは、訳もわからずただぼんやりと星空を眺め、少しばかり冷たい夜風に当たっていた。



「おーい……こんなところでなにしてんだよ？」

突然、わたしの後ろから聞き覚えのある声がした。

「わっユウヤさんっ！！！」

わたしは、驚きのあまり声をあげる。そう、今わたしのところに向かってきてるのは紛れもなくユウヤさんだ。

「しーっ……夜中だから静かに。」

わたしは、ユウヤさんに大声を出さないように注意された。

「はい、気をつけます。ところでユウヤさんはこんな時間になんやってるんですか？」

わたしは、声を潜めてユウヤさんに尋ねる。

「特訓だ。今は休憩中だけだよ。」

「夜中に特訓なんて身体壊しますよ……！！！」

わたしは叫びそうになったが、ポリウムをなるべく押さええていった。

「なんかお前らしくないな。いつもの調子だと『ユウヤさんらしい』とでもいうと思ってたけど、どうした？あっ……さっきまでもボケ

「ッとしてたよな？」

ユウヤさんが、わたしの顔を覗きこみながらいった。

「大丈夫です。ちょっと眠れないだけですから……」

わたしは、遠慮がちにそういった。だってユウヤさんにはただでさえ迷惑をかけているのに、これ以上心配をかけるわけにはいかないし……。

「とても大丈夫には見えないな。テストのことを気にしてるだろ？」

「そ…そんなことはありませんよ……！！」

わたしは、あたふたしながらいう。

「図星だな。自分だけ知識があまりないのをコンプレックスに思ってる……そうなんじゃねーか？」

ユウヤさんが、核心をついたかのようにいった。

「……………」

わたしは、なにかいい返そうと思ったけど、言葉が出なかった。

ユウヤさんのいうとおりなのかもしれない。今日のわたしはヘラヘラ笑ってごまかしていた時が多かった。そして、自分の頭の悪さのことを無意識に感じてしまっていた。

気にしないようにって思っていて、それは無理だったんだ……。

「人は誰だって得意なことと不得意なことがある。だからあまり劣

等感を抱くな」

ユウヤさんが、わたしに励ましの言葉をくれた。

「ありがとうございます……」

「それに、リナは実技向きだ。筆記がダメなら実技でかっこいいところ見せつけてやるっぜ」

「でも、どうやって？」

わたしはユウヤさんに尋ねる。

「俺がお前のポケモンに新しい技を伝授してやるよ」

ユウヤさんは、声を潜めてわたしの耳元でいった。

「本当ですか！？」

「静かに！このことは絶対誰にもいっくなよ！よし、さっそく行くか。ついてこいよ！」

「はい！」

こうして、わたしは新しい技を獲得するために、ユウヤさんさんと一緒に、毎日夜中に特訓することになった。

長い長い一日がまた始まる。夜空の星々は、わたしたちを見守っているようだった。



## 第四十六話

study time！相性とは？（後書き）

今回はリナ視点だったため、エイト達の様子が分からなかったと思います。

そう思った方は、ジエイさんの「ポケットモンスター ツインスター」のほうも見て下さい。

それと、一応問題の答えを載せておきます！

問1…… エスパークタイプ・鋼タイプ

問2…… 無し

問3…… 地面タイプ

問4…… 草タイプ・格闘タイプ・虫タイプ

問5…… 水タイプ・氷タイプ

結果はどうだったでしょうか？

次回も楽しみにしていてください！  
感想などよろしくお願いします。

第四十七話 翌朝の朝食模様、そして仕上げ（前書き）

一週間ぶりの更新！

ですが、今回は都合により、本編＋番外編の二話連続更新です！！  
本編は、エイト視点、番外編はリナ視点になっています。

ちなみに、今回は場面転換が多いため、出来がひどいです（泣）  
すみません！

それでは、どうぞ！！

## 第四十七話 翌朝の朝食模様、そして仕上げ

翌日、日の光の眩しさを感じながら、僕が目を覚ました。時刻を確認すると六時半。

いつもはもう少し寝ているけど、今日の集合時間が七時だから、寝坊しなくてよかった。

気を利かせてヒビキを起こそうとヒビキのベッドに向かったのだが、そこにはヒビキの姿はなかった。

ヒビキは朝練でもしてるのかな……？

僕は、そう思っただけでポケモンセンターの外へ向かうことにした。

ポケモンセンターの裏側に設置されているバトルフィールドに来てみると、ヒビキが特訓に使っていたらしい赤色のコーンを片づけているのが見えた。

ちょっと来るのが遅かったな、と思いながら、僕はヒビキが使っていたコーンを次々とまとめていく。

「エイトくんおはようー！！」

ヒビキは、僕の姿に気づいたらしくあいさつをしたので、

「ヒビキ、おはよう」

と、僕もあいさつを返した。

「今の特訓は？」

集めたコインを一つにまとめながら、僕は尋ねる。  
どんな特訓をしていたのか興味深いからね。

「スラローム」っていう特訓だよ。瞬発力を鍛えるんだって」

……へえ、瞬発力を鍛える特訓なのか。素早いポケモンにはもってこいのものだってことなのかな。

「そうなんだ……。でも、ヒビキのピカチュウは速いね。こんなに素早いピカチュウは初めてみたよ」

これは、昨日から思っていたこと。正直な話、ヒビキのピカチュウの素早さにはものすごく驚いていた。

「うん。このスピードが僕のピカチュウの強みだからね」

ヒビキは、先ほどまで右肩に乗っていたピカチュウを自分の胸の前に移動させ、抱きながらいった。

「そうなんだ……。つてもうすぐ七時だよ!!」

僕が、相槌をうちながらふとポケギアを見ると、画面には六時五十七分と表示されていた。これはさすがにマズイ。なんといつても七



時までには集合しなかったら、ユウヤさんが罰ゲームだなんていいだしそうだし！

「まずいよ。遅刻なんてしたら……」

ヒビキは、驚いたせいなのかおどおどしている。

「ストップ！！早く片づけよう」

僕は、ヒビキを落ち着かせるために強い口調でいった。

そうして僕たちは、慌てて道具を片づけて、集合場所である食堂へと走っていった。

「よっ二人ともおはよう！遅かったな」

ユウヤさんが、僕とヒビキの顔をまじまじと見ながらいう。

「お……おはようございます……」

ゼーゼーと荒い息をしながら僕はあいさつを返す。

時計を見てみると、今は七時ジャスト。なんとか間に合ったようだ。

「さっそく朝ごはん食べようよ！」

リナは、みんなに早く食べようと催促する。いつものように食べる前はテンションが上がっている。

「リナちゃんがそういつてることだし、早いところ食べて特訓に移ろうよ」

コトネがそういつて、僕たちは朝ごはんを食べることになった。

ちなみに、今日の朝ごはんは野菜がメインのヘルシーなメニューだった。ヒワダタウンは、自然に囲まれている田舎町だから、野菜が豊富だということもよくわかる。

今回のメニューは、リナが嫌がりそうだと思ったけど、いつも通りバクバクと食べていて、僕は驚いたし、ヒビキたち三人も啞然としていた。

リナの食欲は無限大だ。

ちなみに、リナのせいで膨大に膨らむ食費代は、ユウヤさんが全てはらってくれている。本当にいろんな面で感謝しないとだね。

そういうユウヤさんは、あいかわらず少食で、ご飯と味噌汁くらいしか食べていなかった。これだけの食事であんなにも活発に動けるなんてすごいよな、とつくづく思う。

サイカさんは、上品に箸を動かしながら食べている。

サイカさんは、テレビで見ていた時から静かなイメージがあったからこんな感じなんだろうな。

ヒビキとコトネちゃんは僕とさほど変わらないような気がする。チ

ヨイスしたメニューも似ていたし、量も並みなほうだ。

朝ごはんの風景を少し観察しているだけで、僕は一人楽しい気分になっていた。

さあ、朝ごはんが終わったらさっそく特訓だ！

僕とヒビキは、昨日と変わらず、外で特訓をした。

僕は、いつもの通りチューブを使った特訓をこなしていたけど、ヒビキは、昨日とは違った特訓をしていた。

いったい何の特訓なのか聞いてはみたものの、曖昧な返事であったので、それ以上追求することは止めた。

もしかしたら、すごいことが起こるかもしれないからね。

今日の特訓が終わり、僕は部屋に戻っていた。

今は、ヒビキがお風呂に入っているから、僕一人だ。

一人だと、特にすることがないので、僕はバッグの中を探ってみることにした。

中には、キズぐすりやモンスターボールなどの道具や、タオルなどの必需品が入っていたが、僕は、その中にあまり気にしていなかったが、大切な物があったということに気づいた。

そう、それはウツギ博士からもらったポケモンのタマゴ。白を基調としていて、赤と青の模様が特徴だ。

僕が旅立ってから何週間かは経つが、まだ孵る気配は全くない。だけど、いつ孵るか分からなくても、今までみたいに放置しないようにしないとな。

そして、タマゴが孵る瞬間を楽しみにしていよう、とワクワクする気持ちがかみ上げて来るのだった。

数日後の朝ごはんの時間。

「そろそろ仕上げないといけないな」

トーストにバターを塗りながら、ユウヤさんがいった。

「仕上げ？」

コトネちゃんが、首をかしげながらいう。

「そろそろ特訓の成果を試したい頃じゃない？」

サイカさんが、牛乳が入っているコップを置いていう。

「確かに……。それで、何をするんですか？」

ヒビキがユウヤさんたちに尋ねる。

「丁度三人ずつだから……一人一匹の団体戦だな」

ユウヤさんがいう。

「それいいね!! エイト、やろうよ!!」

リナが僕に向かっていった。もちろんその気だよ。ヒビキたちとはバトルしてみたかったからね。

「そうだね。ユウヤさん、やりましょうよ、団体戦」

「おーし、それじゃあ九時半からな。その時まで誰が何番目に出るか決めとけよ」

ユウヤさんがさういうと、僕、リナ、ユウヤさんとヒビキ、コトネちゃん、サイカさんの二チームに別れてそれぞれ作戦を練ることになった。

さて、特訓の成果は出ているのだろうか



第四十七話 翌朝の朝食模様、そして仕上げ（後書き）

次回からは、ついにバトルです！

エイトたちの特訓の成果は出ているのでしょうか？

楽しみに待っててもらえるところねしいです。

番外編

&quot;characteristic&quot;特性

今回のはリナたちの特訓模様です。



「それじゃ、今日は特性についてな」

わたしとコトネは昨日と同じく勉強だ。ただ、今日はサイカさんじやなくて、ユウヤさんが教えてくれるんだって。

「ひとことに特性っていったって、特性はたくさんある」

「そうなんだ……」

ユウヤさんの言葉にわたしは相づちをうつ。……あつ、実際はあんまり特性のことが分かんないからそうするしかないんだ！

「例えば、ピカチュウの特性は”静電気”。身体に触れた相手をしびれさせることがあるんだ」

「それって狙って出来ることなの？」

わたしは、説明をきいて疑問に思ったからユウヤさんに聞いた。

ユウヤさんは、一瞬戸惑って、曖昧に頷きながら、

「基本的には狙って出来るわけじゃない。だけど、その確率を高めることぐらいは出来るんじゃないか？」

と聞いた。

これは、ユウヤさんの考えなんだろうけど、直感的に当たってるよな気はする。

「触れる部分で電気を集めれば……可能かもしれないね」

コトネが、なるほど、とでもいいたそうにいう。

「でも、地面タイプには電気技は効かないでしょ？なら、”静電気”も地面タイプには効かないんじゃない？」

わたしは、昨日の相性の勉強を思い出しながら、さらに質問した。

「いいや、特性にタイプ相性は関係ないんだ」

ユウヤさんは、そう答えて、ゴホンツと咳払いをする。

「それじゃあ、次な。ミスゴロウの特性は”激流”なのは分かるよな？」

「うん！だってわたしのパートナーだよ！わからなきゃ！！」

わたしは、ブイサインをしながら、得意気にいった。それくらいわかってるって！

「それじゃ、”激流”の効果は？」

「あっ……それは……」

ユウヤさんに、効果を尋ねられ、わたしは口ごもってしまった。

……実は効果はよくわかんないんだよね。

「”激流”は、体力が限界になったときに発動して、水タイプの攻撃が高まるんだよ」

わたしが、あたふたしていると、コトネが”激流”の効果を教えてくれた。

「そう、コトネのいう通りだ。ミズゴロウだけでなく、各地方の水タイプの御三家ポケモンがもっている特性だ」

なるほど。簡単にいうと、ピンチをチャンスに変えるってことか！

「それじゃあ、次は”根性”だ。この特性は、状態異常になると攻撃力が高まる特性だ」

「それに、状態異常になると攻撃力が高まる”空元気”を組み合わせてくるトレーナーっていますよね」

ユウヤさんが、”根性”の特性について説明したあとに、コトネが話を発展させてるみたいだけど、わたしにはサッパリ。

「へっ？ちょっとストップストップ！！」

わたしは、話が永遠に続きそうなような気がして、ユウヤさんとコトネの会話を止めた。

「っと、まだリナには分からない事だったか……」

ユウヤさんが、申し訳なさそうな顔をしていう。

うーん。……そんな顔をされたらちょっとショックだなあ。

「でも、気にする事はないよ。これから覚えていけばいいことだもん」

ちょっとショックに思ったことが顔に出ていたのか、コトネがフォ

ローしてくれた。

その気持ちはありがたいけど、わたしは、わたし自身もつと努力しないといけないなあ……。

第四十八話 第一試合！リナVSヒビキ〈前編〉（前書き）

一週間以上空いてしまってますみません（T^T）

最近は本当に忙しいもので……。

さて、今回からは団体戦！！今回はリナ視点でお送りします！

第四十八話 第一試合！リナVSヒビキ〈前編〉

「さて、と……どういう順番にするか？」

ユウヤさんがそういうと、わたしとエイトとを交互に見た。

今、わたし達三人が何をしてるのかって？

うーん、ヒビキたちとのバトルの作戦会議中ってところかな。

「まず、サイカさんと戦えるのはユウヤさんだけだということをおいときたいね。」

エイトが、落ち着いた声でいう。

「そっだよね！わたしやエイトがサイカさんに勝てるわけないし！」

「ならば、サイカの順番を予想する必要があるな……。」  
ユウヤさんが、頭を抱えながらいう。

うん、確かにその通りだよね……。でも、はっきりいって勘だよね？

「僕は、三戦目　つまり、ラストにもって来ると思いますがけど…」

エイトは、自分の考えをわたしやユウヤさんに伝える。

「なぜそう思うんだ？」

ユウヤさんは、エイトに問いかける。理由を聞きたいのかな？

「僕だったら実力者同士のバトルは最後にじっくり観戦したいです。学ぶべきことも多いですからね。……リナもそう思わない？」

「えっ、た…確かにエイトがいう通りかも？それに、ヒビキたちもそう思ってるんじゃないかなあ……」

わたしは、いきなり話を振られたため、どぎまぎしながら答えた。エイトもなんでわたしに話を振るかなあ。

「じゃあ、お前らの意見通り俺は最後に出るな。……あとは、二人の順番だ。どっちが先に出るのか？」

「はいはい！わたしが最初に出るよー！！」

わたしは、いつもよりもさらに元気よくいった。だって早く特訓の成果を見たいんだもん。なんたって、一週間の勉強地獄に耐えたんだからねー！！

エイトは、一瞬だけ顔を歪ませたから呆れられちゃったかな？……まあ気にしてないけどね。

「リナがスッゲーやる気あるみてーだから、エイトは二戦目でいいか？」

ユウヤさんが、エイトに『文句はないな？』とでもいいたそうな顔をして尋ねる。

「全然構いません。リナ、一戦目は肝心だから頑張つてよ」  
エイトは、うっすらと笑みを浮かべながら、そういった。

エイト、快く二戦目に回ってくれたし、さりげなく応援もしてくれ  
たし……うん、なんだか今日は気分がいいなあ。

「ところで、どのポケモンでいくのか決めてるのか？」  
ユウヤさんが、わたし達にいう。

「わたしは、ひ・み・つ！そのほうがおもしろいでしょ？」

わたしは、いたずらっ子のようにフツツと笑ってみせた。

「僕も、バトルがはじまってから明かすよ。」

エイトは、わたしの方をチラリと見ていった。  
「なんだ、教えてくれないんだ……。」

「なんだよ。二人揃って秘密とは……ん、じゃあ俺も教えてやん  
ねーからな！」

ユウヤさんは、不満げにそうい捨てた。

でも、なんだかんだいって、ユウヤさんも最初から教えてくれると  
は、とても思えないと思うのはわたしだけかな？

「作戦会議が終わった事だし、いくぞ！気張っていこうぜ！！」

「お　　！！」

ユウヤさんの掛け声で円陣を組んだあと、わたし達はバトルフィー  
ルドへと向かった。



わたし達がバトルフィールドに着いて、しばらくしたらヒビキたちがやって来た。

いつもと違って空気がピリピリしている。バトルの前だから当たり前なんだろうけど、わたしは苦手だなあ……。

「それじゃあ、第一試合を始めるぞ」

フィールドの中央に並んであいさつを交わしたあと、わたしは、バトルフィールドのトレーナーボックスに向かった。

反対側では、ヒビキがわたしと同じようにトレーナーボックスに向かっていて。

相手はヒビキかあ……。ヒビキの戦い方はあまり知らないけど、負けるわけにはいかない。

「悪いけど全力でいくよ!!!」

「そうこないと!!!バトルだもんね!!!」

わたしもヒビキもやる気は十分にある。うん、面白くなりそう!!

「それじゃあ、第一試合、ヒビキVSリナの試合を始める。使用ポケモンは一体。どちらかが戦闘不能になった時点で試合終了な」

ユウヤさんが、バトルのルール説明をする。今回はユウヤさんが審判をするみたいだね。うーん!わくわくするなあ!!!

「先攻はこっちからいくよ!!」

ヒビキが力強く叫んだ。

わたしは、それを見てうなずく。

「頼んだよ、ピカチュウ!!」

「ピカーッ!!」

青色のピカチュウは、ヒビキの腕を渡り、勢いよくジャンプしてフィールドへ着地する。

「オタチ、お願い!!」

「オターッ!!」

わたしは、ピカチュウがフィールドに出たのを見ると、手に持っていたモンスターボールを投げた。

そこから、まぶしい光とともにオタチが姿を見せる。

チラリとエイトがいる方を見てみると、いつもよりも目を見開いていた。きつとビツクリしてるんだよね!わたしがミズゴロウを出さなかったことを。

ミズゴロウを出さなかった理由だけど、一つは、ヒビキがピカチュウで来ることを考えていたから。だって水タイプは電気タイプに弱いでしょ?一週間の勉強地獄は役にたったみたい!

そして、もう一つは、まだミズゴロウで戦うべきじゃないから。

後者の理由が分からないって?……今は、いいのいいの!

「ピカチュウ、電光石火!!」

「ピカッ！」

ヒビキの指示で一氣にバトルが動いた。ピカチュウがものすごい速さで、オタチの方へ突っ込んでくる。

「速い！！かわしているヒマはないね……。砂かけ！！」

「オター！！！」

オタチは、自分の尻尾を巧みに使ってピカチュウに向かって砂を飛ばしていく。

よし、足止め成功！

しかし、素直に喜んでいられる展開ではなかった。

ピカチュウに砂が当たるか否かのところで、ピカチュウが突然五匹に別れた。そして、砂かけが当たったピカチュウは、跡形もなく消えてしまった。

「どーなってるの！？」

もうはつきりいってどうなってるのか分からない。ただでさえ攻撃したピカチュウが消えてしまったのに驚いてるに、今現在、オタチがピカチュウたちに取り囲まれてるんだもん！

オタチもわたしと同じように困っているようで、四方を取り囲むピカチュウ達を視線を左右に動かしながらみている。

「ピカチュウ、10万ボルト！！」

「ピイイカ、チュ　　！！！」

ヒビキの指示で、オタチの背後にいたピカチュウがひとときわ高くジャンプする。すると、さっきまでオタチを取り囲んでいた他のピカチュウ達が消えた。

そして、そのあと、ピカチュウが身体をピカピカに輝かせて、黄色い稲妻をオタチ目がけて放った。

ま…まずいよぉ…!!

わたしは、指示を出そうと思ったが、間に合わず、オタチは10万ボルトをダイレクトに受けていた。そのせいで、ぐったりとうつ伏せに倒れている。

「オタチ、大丈夫!?」

「オ…オター…」

わたしが、オタチの身体を揺すりながら問いかけると、先ほどまでとは全く違う弱々しい鳴き声ながらもすぐに立ち上がった。

それを見たヒビキは、難しそうな顔をしていたけど、これくらいの攻撃でやられちゃうオタチじゃないよ!

でも、このままじゃ不利だから反撃しないと!

「今度はこっちからいくよ!!オタチ、体当たり!!」

「オターッ!!」

オタチが、雄叫びをあげて、ピカチュウの方へ突っ込んでいく。

「ピカチュウ、電光石火だ!!」

「ピカ！」

ヒビキが指示すると、ピカチュウは持ち前のスピードでオタチに接近して、オタチのふところに潜り込み、最終的にはオタチを空高く吹っ飛ばした。

ピカチュウも、オタチを追う形で、地面を蹴りあげてジャンプする。

「そのままアイアンテール！！」

「ピカ　！！」

メタル化して鈍く光っているピカチュウの尻尾が、オタチの背中に振り下ろされ、オタチは、地面に叩きつけられてしまった。しかも、叩きつけられた場所が少しへこんでいた。

ピカチュウはというと、オタチの近くに悠々と着地している。

「なんてスピードなの……」

わたしは、悔しげにポツリと呟く。

こっちから仕かけた攻撃を逆手に取られたのは、紛れもなくあのスピードのせい。

だって、オタチが全然あのスピードに着いていけないんだもん……。

エイトの方を見てみると、わたしを心配そうな目で見つめていた。確かにわたしは不利だよ。……でも、絶対あきらめない。バトルは最後まで分らないってよくいうでしょ？

わたしは、エイトに向かって軽く微笑みかけると、エイトは、コク

りとうなずいた。

再びフィールドに目を戻すと、オタチは、フラフラになりながらも立ち上がっていた。ダメージはさっきのアイアンテールでけっこうたまってみたいだね……。

「そろそろ決めるよ、ピカチュウ!!10万……」

とどめを指そうと思ったヒビキの指示が、途中で途切れる。

なんでだろう?と、疑問に思ったけど、その理由はすぐに分かった。オタチの身体が急に真っ白に輝き始めたからである。

「これは……進化?」

わたしは、呆気にとられたような声を漏らす。だって、このタイミングで進化するなんて、誰が思っていたと思う?

真っ白な光は、ぐんぐんと縦方向に伸びていき、やがて、オタチはすっかりと姿を変えていた。

オタチは茶色を基調にしていた身体だったが、進化すると、ベージュ色の身体をしている。自慢の尻尾はさらに長くなり、茶色とベージュのシマシマがひときわ目立つ。

「このポケモンは……?」

わたしは、ポケットからポケモン図鑑を取り出して先ほど進化したポケモンに向けた。

『オオタチ どうながポケモン オタチの進化形 母親は細長い身体で子どもを包み眠らせる 早い動きで敵を追い込む』

オオタチっていうんだ!

それに、説明からして素早そうだから、もしかしたらピカチュウの

スピードに対抗できるかも!!

「まさか進化するとは……。だけど、ぼく達は負けない!!ピカチュウ、10万ボルト!!」

ヒビキが、驚きの表情、そして、強い意思をあらわにしながら叫ぶと、ピカチュウは、力強く地面を蹴って空に舞い上がり、身体中から黄色い稲妻を放った。

「オオタチかわして!!」

「タチヤツ!!」

わたしがヒビキの意思に圧倒されながらも指示すると、オオタチは身軽な身体を生かして10万ボルトを避けた。

「そのまま体当たり!!」

「タチヤツ!!」

わたしは、ピカチュウを指差しながらいい、オオタチは、徐々にピカチュウに接近していく。オオタチのときよりも格段にスピードが上がってるよ!!

「電光石火!!」

ピカチュウは、素早い身のこなしでオオタチの方へ向かっていく。

そして、二匹は激突し、爆発が起きた。

いったいこのバトルはどうなっちゃうんだろう





第四十八話 第一試合！リナVSヒビキ〈前編〉（後書き）

リナ オタチがオオタチに進化したよ〜〜

はい、この小説の中では初進化でした。

エイト ちょっと待ってよ。普通主人公の僕の方が先じゃない？

（怒）

わっ…珍しくエイトがキレてるよ……。

エイト それに、最近僕視点の話が少ないよね。

ちょっと！そこまでヒートアップしないでよ！！

エイトが暴走したら困るので、この辺で！

第四十九話 第一試合！リナVSヒビキへ後編（前書き）

今回でリナVSヒビキの決着がつきます！！

ということで、今回もリナ視点ですね。

全く関係ありませんが、今日12月4日は、わたし\*SNOW  
hite\*の誕生日です！！  
年をとつてもまだあまり実感がわきませんね（笑）

とりあえず、これからもポケADをよろしく願います！  
それでは、前置きが長くなりましたが、どうぞ！

## 第四十九話 第一試合！リナVSヒビキ〈後編〉

フィールドの中央で起きた爆発により、煙が発生しているが、中の様子がわからなかったけど、だんだん視界が開けてきた。

わたしのオオタチは、ザア　　ツと、滑るように後退してそれほどのダメージにはなっていないみたいだけど、ヒビキのピカチュウは、地面に叩きつけられていて痛々しい様子をしていた。

でも、ピカチュウはすぐに立ち上がって、オオタチを鋭い目つきで見ている。オオタチも、負けじとピカチュウをにらみ返す。

「進化して、パワーが上がっている……」

ヒビキは、驚きを隠せずに呟いていた。

進化してパワーアップしたことは、わたしから見たら当然プラスのこと。でも、今までの攻撃がたまってるから早く決着を着けないと……！！

「とにかく、スピードで攪乱するよ！！影分身！！」

「ピッカッ！」

わたしが、次の指示を考える前にヒビキが攻撃を仕掛けてきた。そのおかげで、オオタチは、無数のピカチュウ達に取り囲まれてしまった。

「オオタチ、ええっと……」

わたしは、反撃するためにオオタチに指示しようとしたんだけど、進化したことでつかえるように技が分からなくて口ごもってしまった。でも、その時、

「タッチャツ！」

オオタチは、徐々に加速してピカチュウに激突しようとしていた。指示してないのに動いてくれるなんて！！感激だよ！

わたしは、目を輝かせていたが、それもつかの間だった。オオタチが攻撃したのは、ピカチュウの分身体、つまり、不発に終わったってこと……。

「電光石火……」

ヒビキが、ポツリと言葉を漏らした。

そっか、今は”電光石火”だったんだね！

オオタチは、電光石火を繰り返すつかうことで、ピカチュウの分身をつぎつぎと消していった。

うん、いい感じいい感じ！！

「影分身じゃあダメか……。ピカチュウ、ジャンプしてアイアンテール！！」

「ピカッチュ！」

オオタチは、最後にピカチュウ自身に電光石火を当てるつもりだったみたいだけど、ピカチュウは、空高くジャンプすることで、攻撃をかわしていた。そして、尻尾がだんだん銀色を帯びていく。

今度はアイアンテールに電光石火をぶちこめば……！！

「ピツカツ！！」

「タツチャツ！！」

ピカチュウは、勢いよく空中から尻尾を降り下ろし、対するオオタチは、尻尾に直接身体をぶつけた。パワーを比べるならこつちが有利なはず！！

「ピカチュウ、オオタチの攻撃を尻尾で受け流すんだ！！」

ヒビキの指示で、ピカチュウは電光石火を軽く受けて、他の方向にそらす。

……ちゃんと対策があったのかあ。

「そのまま10万ボルト！！」

「ピイイカ、チュ　　！！」

ピカチュウは、身体中から黄色い稲妻を放った。

空中では、技を簡単には避けられないから、オオタチは、直接的に技をくらってしまい、ビリビリと電気を帯びたまま、フィールドに叩きつけられてしまった。

攻撃を受け流すだけじゃなくて10万ボルトを決めてくるなんて。ヒビキ、強いよ！！

「オオタチ、立って！！」

わたしが叫ぶと、少しヨレヨレしながらも、オオタチは立ち上がった。早く、早く決着を着けないと……！！

「電光石火！！」

わたしは、焦りながらも咄嗟に指示を出したが、ヒビキも同じタイミングで指示していた。

でも、これはチャンスだよ！

スピードはピカチュウの方が上だけど、パワーはオオタチの方が勝っている。今度こそ……！！

「ピカピカピカー！」

「タチャタチャチャー！」

二匹が、激突すると、予想していたように、オオタチが押しきってピカチュウは、吹っ飛んでいった。

「ピカチュウ、10万ボルトだ！！」

ヒビキはすかさず指示をだし、それを聞いたピカチュウは空中で体勢を立て直して身体に溜まっているありったけの電気を出した。

「オオタチ、ジャンプしてかわして！」

「タチャツ！」

オオタチは、地面を蹴りあげて空中に逃げる。

「そう来ると思ったよ！！もう一発！！」

「チュ　　ッ！！」

ヒビキは、得意気に右人差し指を突き出しながらいった。しまった！！これじゃあさっきの二の舞だよ～～～！

先ほどと同じように、オオタチは、10万ボルトを受けて地面に激突する。ダメージが重なったせいで、目は閉じられていた。

「そのままアイアンテール！！」

「ピカッチュ！！」

ピカチュウは、一度フィールドに着地すると、尻尾をメタル化させてオオタチの方へ接近していく。

「オオタチ、頑張つて！！」

わたしは、ありったけの声を出して叫んだ。顔からは、ひたりひたりと汗が流れていく。お願い、目を開いて……！！わたしは、必死に願った。時間が止まったとさえ思った。

その時、オオタチの身体がピクリと動き、やがて、閉じきっていた目をキリッと見開いた。

つらそうな様子をみせながらも、オオタチは、体勢を立て直した。そして、次の瞬間、オオタチ右手の拳に真っ白で強大なエネルギー

が集まりはじめた。

えっ？この技なんなの……!?

わたしは、助けを求めるように、エイトの方を見た。

エイトは、呆れた顔をしながら、自身のポケモン図鑑を指差している。

あつ……そっか！ポケモン図鑑で技を確認できること忘れてたよ！  
も……なんでさっき気づかなかったの!?

わたしは、さっそくポケモン図鑑でオオタチの技を調べた。

” 気合いパンチ ” 間違いない。でも、説明を見た感じこの技は発動前に攻撃を受けたら不発に終わるみたい!!しかも、相手はあの素早いピカチュウ。ウソ……でも、イチかバチかだよ!

「ピカチュウ、アイアンテールを保ったまま電光石火だ!!」

ピカチュウは、尻尾を銀色き輝かせながら、オオタチとの距離を詰めていく。そして、軽やかにジャンプして尻尾を振り降ろす。オオタチは、エネルギーが集まった拳をピカチュウの尻尾に撃ち込む。

しばらく競り合っていたけれど、やがて、大爆発がおきた。  
ゴオオオオツと音をたてながら、爆風がわたしをおそう。わたしは、腕で目のあたり覆い隠し、下を向いた。

ピカチュウは、フィールドに倒れていて、オオタチは、膝を突きながらも、わたしの近くにいた。ちなみに、息は乱れていて苦しそうにしている。



「ピカチュウ戦闘……」

勝負あったと思ったユウヤさんは、そういいかけたけど、いい終わる前にピカチュウは立ち上がった。

オオタチもピカチュウも体力は空前の灯火。……次がラストのはず。

「オオタチ……」

「タ……チャツ！」

わたしが、呟くと、オオタチは、つらそうにしながらもつなずいた。うん、次で絶対決めるんだから！！

「ピカチュウ、次で決めるよ！！」

ヒビキが叫ぶと、ピカチュウはコクリとうなずいて、徐々に加速していく。

「来るよ！！オオタチ、気合いパンチ！！」

オオタチは、右手の拳に真っ白なエネルギーを溜めていく。

「ピカチュウ、ボルテッカー！！」

ヒビキが、勢いよく人差し指を突き出しながら叫ぶ。

ピカチュウは、すさまじい青白い電気を全身にまといながら、オオタチの方に突っ込んでくる。

えっ！？ボルテッカーってまさか……！！

わたしは、焦りながらもオオタチが、気合いパンチを決めてくれることを願った。

そのまま、ボルテッカーと気合いパンチの強力な技同士がぶつかった。かのように思えたが、あと数メートルほどの近距離で、ピカチュウをまとっていた電気は消し飛んでしまった。

「っ！！そんな！！」

ヒビキは思いがけもなかったため、落胆としている。

こんなときにこんなこと思っちゃダメかもしれないけど　このバトル、もらった！！

電気が消しとんだのは近距離であったため、いくら素早いピカチュウでも、かわしきれず、オオタチが放った強大なエネルギーを直接的に受けた。

ピカチュウは、そのまま吹っ飛び、ちょうどヒビキの胸元に勢いよく飛び込んでいた。ヒビキは勢いあまって、ピカチュウとともに倒れていた。ピカチュウは、ヒビキの腕の中でピカチュウは、目を回していた。

「ピカチュウ戦闘不能！！オオタチの勝ち！！よって第一戦目はリナの勝ちだ！！」

勝った

わたしとオオタチは、激闘の末、勝利を手にしたのだった。

第四十九話 第一試合！リナVSヒビキ〈後編〉（後書き）

リナは辛くも勝利！

今回はようやくエイトの番です。

お楽しみに！

第五十話 第二試合！エイトVSコトネ〈前編〉（前書き）

リナ いつの間にか2週間以上開けてるじゃん！！

いや、それにはふかい訳がありました……

エイト 言い訳はいつでもいいから……それよりも今回は久しぶりに僕視点の話だからよろしくね。

ユウヤ それじゃ、本編スタートだぜ！

第五十話 第二試合！エイトVSコトネ〈前編〉

「リナ、やったね！」

僕は、いつもはあまり見せないような笑顔をつくってフィールドから戻ってきたリナにいった。

「エイト、ありがとう！……でも、進化してなかったら確実に負けちゃってたよ」

リナは、うれしそうでもありながら、しゅんとしている。なんだかリナらしくない。

「確かにそうかもしれないな。ピカチュウのボルテッカーが発動してたとしたらどうなっていたか……」

ユウヤさんは、考えこむような素振りでいう。

ユウヤさんがそんな風に思っただから、きっとボルテッカーという技はかなり強力なものなのだろう。

「わたしの話はもう終わり。次はエイトの番だよ！頑張って！！」

「気張っていけよ！」

リナは、明るい声で僕を励まし、ユウヤさんは、僕の肩をポンッと叩きながらいった。

「じゃあ、そろそろいつてくるよ」

僕は、そっくり残してベンチを去っていった。

「それでは、第二試合コトネVSエイトのバトルを開始します。ルールは先ほどと一緒に。いいわね？」

サイカさんがそういうと、僕とコトネは頷いた。

「それじゃあ……始め!!！」

「チコリータ、スタンバイ・ゴー!!！」

「チツコツ!!！」

「いけ、ヒノアラシ!!！」

「ヒノーツ!!！」

コトネが繰り出してきたポケモンは、チコリータ。ウツギ博士の研究所でも見た、ヒノアラシと同じ初心者用のポケモンだ。タイプは草タイプだから、こちらのほうが相性はいいけどコトネはきつとなにか考えている。……油断は禁物だね。

「ヒノアラシ、火の粉!!！」

「ヒノーツ！」

僕は、先制攻撃を狙ってヒノアラシに指示をした。すると、ヒノアラシはチコリータを目がけて無数の火の玉を放っていく。

「チコリータ、葉っぱカッター！！」

「チッコーツ！」

対するチコリータは、自身の葉を振って、たくさんの葉を繰り出していく。

火の粉と葉っぱカッターは互いにぶつかり合い、やがて葉は燃えて煙とともに灰が舞った。

「相性じゃあ、勝ち目は無いわね……」

僕の反対側で、コトネが呟いている。

やはり、相性のことは頭に入れているみたいだ。

「もう一度葉っぱカッター！！」

「チッコーツ！」

「ヒノアラシ、もう一度火の粉だ！！」

「ヒノーツ！」

遠距離技には遠距離技を

僕にはそれしか考えることができず、



再び同じ技同士が激突する。その結果、先ほどのように空気中で灰が舞った。攻撃力は互角。でも、相性がいいのにも関わらず、火の粉が当たらないことからあちらのほうが上だということが分かる。なにかほかの攻撃の仕方を考える必要があるな……。

「チコリータ、ヒノアラシに突っ込んで!!」

僕が、考えこんでいる時にコトネが新たな指示をだしてきた。でも、僕は、その内容に驚いた。

チコリータが、少しずつヒノアラシに近づいてきているのだ。接近戦ならば、炎技も当てやすく、こちらのほうが有利になるはず。なのになぜ……？

「ヒノアラシ、火の粉!!」

「ヒノー!!」

僕は、この指示になんらかの意図があるとは思いながらも火の粉を指示した。放たれた火の玉が、チコリータのほうへと飛んでいく。

しかしその瞬間、チコリータの動きがピタリと止まった。

「ソーラービーム、発射!!」

「チイイイコオオオ!!」

チコリータは、光のようにまばゆい光線をヒノアラシに向かって放ってきた。

リスクをおかしてまでも、大技を決めようとしていたのだろう。それにしても、ソーラービームがヒノアラシに貫くことは避けたい。

「ヒノアラシ、かわすんだ！！」

「ヒノッ！」

少し無理のある指示だと思ったけど、ヒノアラシは、地面を蹴ってジャンプし、身体スレスレのところまで、ソーラービームをかわすことができた。

「そのままスピードスター！！」

「ヒノヒノヒノッ！！」

ヒノアラシは、空中で、身体を縦回転させながら、黄金色の星々を繰り出していく。

「葉っぱカッターで防いで！」

「チッコッ！」

それに対応して、チコリータは自身の葉を一振りして、葉っぱカッターをぶつける。

両者の攻撃はぶつかり合い、やがて、小規模な爆発が起きた。

「ヒノアラシ、チコリータに反撃の隙を与えるな！！火の粉だ！！」

「

「ヒノヒノヒノッ！」

爆発の影響で視界が悪いが、僕は、それでも攻撃の指示を出した。

「チコリータ、ダツシュ！！」

僕のあとに、コトネの指示が飛んだ。

チコリータは、移動することに徐々に加速していく。

「そのまま居合い切り！！」

「チイツコオツ！！」

チコリータは、頭の葉っぱを白く輝かせながら、地面を勢いよく蹴りあげてジャンプする。

「空中じゃかわすことはできない！！火の粉！！」

僕は、叫ぶような声で指示する。ヒノアラシは、下に向かって火の玉を放っていき、それはまるで炎のシャワーのようにフィールドに降り注いでいく。

しかし、チコリータは、火の粉を突破してきて、最後は頭の葉っぱでヒノアラシをザシュツと斬りつけていった。

その結果、ヒノアラシは、空中から勢いよく地面にたたきつけられてしまった。

対するチコリータは、ヒノアラシの近くに軽々と着地する。

「火の粉を突破してくるなんて……」

僕は、さっきの攻撃に対して、かなり衝撃をうけた。

まさか、空中で放たれてスピードが増している火の粉を突破してくるとは思っていなかったからだ。

僕は、意識もせず拳に力をいれる。きっとこれは悔しさの現れなのだろう。

「空中で身動きがとれないから相性で勝っているヒノアラシが有利……。そう考えたでしょ？」

コトネが僕に尋ねる。

僕は、拳に余計に力が入るだけで、黙っていた。いい返そうと思っても、言葉が出てこないのだ。

「そこに隙が生まれる。相性だけじゃあ勝てないんだよ」

コトネの発した言葉は冷淡に聞こえ、それは僕に重く突き刺さった

第五十話 第二試合！エイトVSコトネ〈前編〉（後書き）

後編は今日中に更新予定です。

バトルの決着をお楽しみに！！

第五十一話 第二試合！エイトVSコトネ〈後編〉（前書き）

なんとか今日中に間に合いました……。

それでは、どつぞー！

第五十一話 第二試合！エイトVSコトネ〈後編〉

「相性だけじゃあ、勝てないんだよ」

僕の頭のなかでは、この言葉が繰り返し渦を巻いていた。確かに相性こそが全てではない。だけど、相手に有利なようにバトルが進んでいるのが悔しいのである。

「……………だけど、例えそうだとしても僕たちは勝つ！！ヒノアラシ、立つんだ！！」

「ヒ……………ヒノオ！」

僕が、演説をするのかのように叫ぶと、ヒノアラシは辛そうにしながらも立ち上がった。さらに、一歩前進したかと思うと、身体中に紅蓮の炎をまとい、回転しながらチコリータに接近していた。

「この技は……………火炎車？」

コトネが、驚きの表情をみせながら呟く。

僕は、僕自身の凶鑑をポケットから取り出して”その技”を調べる。

それは、コトネのいった通りの技、”火炎車”であった。

「ヒノアラシ、真っ向勝負で行くよ！！火炎車！！」

「ヒノヒノヒノー！」

僕は、凶鑑をポケットに直すと、すぐに指示を出した。

「火炎車じゃあ止められないよ！！チコリータ、居合い切り！！」

「チッコツ！」

チコリータは、自らの葉っぱを白く輝かせ、それをヒノアラシに直接振り落とした。

互いの技がぶつかり合い、やがて爆発が起こる。

二匹は、ともに空中に吹っ飛ばされて地面に叩きつけられた。

僕は、ちらりとリナとユウヤさんのいるベンチの方を向いた。

二人は何かを話しているのだけど、内容は聞こえない。でも、二人の顔は驚いているように見える。きっと僕が真っ向勝負に出たことについてなのだろう。

再びバトルフィールドに目を移し直すと、ヒノアラシとチコリータはほぼ同時に立ち上がった。

互角に見えるけど、相性が有利だということには変わりない。これまでの戦況はあまりよくなかったけど、まだいける。このバトル勝ちにいくよ……！！

「チコリータ、葉っぱカッター！！」

「ヒノアラシ、火の粉！！」

僕たちは、同じタイミングで指示を出したため、二匹は同時に技を繰り出し、小さな爆発とともにフィールドの砂が舞った。



「ヒノアラシ、火炎車！！」

「ヒノヒノヒノーツ！！」

ヒノアラシは、炎をまといながら回転し、加速していく。そして、そのままチコリータに近づいていく。

「チコリータ、ジャンプしてかわして！！」

「チコツ！」

チコリータは、上にとんでジャンプして、火炎車を避けた。

「もう一度葉っぱカッター！！」

「チツコツ！！」

コトネが叫ぶと、チコリータは再び無数の葉っぱを放ってきた。

「ヒノアラシ、火炎車で突破するんだ！！」

「ヒノヒノヒノー！」

先ほどの攻撃はかわされてしまったけれど、火炎車の技自体は止まっていなかったのである。

ヒノアラシは、放たれている葉っぱを次々と燃やしていき、炎をまといながらチコリータに接近していった。

「チコリータ、居合い切り！！」

葉っぱカッターを続けても意味がないと思ったのか、コトネは、技を切りかえてきた。でも、これは僕には予想できていたことだ。

「ヒノアラシ、火炎車を保ったまま煙幕!!」

「ヒノ　　ッ！」

その瞬間、ヒノアラシは口から真っ黒な煙を出した。

回転しながら行っているため、煙はヒノアラシの身体を覆うような形になっている。

ヒノアラシが煙に包まれたことで、チコリータは居合い切りを放つも、技を当てることができない状態に陥っていた。

「ええっ!?!」

コトネが、驚きを隠せずに声を上げている。

コトネがこんなにも反応するとは思っていなかったため、僕は、意外そうにその様子を見ていた。

「ヒノッ！」

ヒノアラシは、チコリータの身体の下の方から勢いよく火炎車をぶつけた。

草タイプのチコリータには効果はバツグン。今の一撃はけっこう効いているだろう。

よし、次で決めよう……!!

僕が、そう決意したあとにフィールドを見ると、チコリータは、地面に倒れかけたが、持ちこたえて立ち上がった。

「ヒノアラシ、もう一度火炎車！！」

「ヒノヒノヒノーツ！！」

ヒノアラシは、先ほどよりも多くの炎をまといながら、チコリータへと向かっていく。

「チコリータ、居合い切りで決めるよ！！」

「チッコツ！！」

対するチコリータも、先ほどよりも強大な光を伴いながらヒノアラシのほうへ向かってくる。

二匹の技は、しばらく競り合っていたが、最後には、大爆発が起きた。

爆風が吹き荒れたため、僕は、思わず目を覆った。

しばらく煙のせいで前がはっきりとは見えなかったが、しだいに視界が開けてきた。

そこには、目を回して伸びているヒノアラシとチコリータの姿があった。

「チコリータ、ヒノアラシ、両者戦闘不能！！よって第二試合は引き分け！！」

サイカさんによって、厳かに結果をいい渡された。

僕のバトルは、引き分けに終わったのだ



第五十一話 第二試合！エイトVSコトネ〈後編〉（後書き）

エイトのバトルは、引き分けに終わりました。

さて、次回はユウヤの番ですね。リーグ優勝者とのようなバトルをするのか？お楽しみに！！

第五十二話 第三試合！ユウヤVSサイカ（前書き）

クリスマス短編を除けば、久しぶりの更新ですね。

今回は、タイトルからも分かる通り、ユウヤ視点になっています。

前回は物凄く書きにくく感じましたが、今回は、大丈夫でした。

## 第五十二話 第三試合！ユウヤVSサイカ

「エイト、お疲れ様！」

エイトがベンチに帰ってくると、すぐにリナが声をかけた。

「ごめん、勝てなかったよ」

エイトは、顔を曇らせながら呟く。

確かに、俺も相性がよかったからいけるんじゃないかね？って思ってたけど、そうはいかなかった。コトネはなかなかやるよ。

「まあ気にすんなって！リナが勝ってお前が引き分けてるってことは俺が勝てば勝ちってことだろ？」

俺は、親指をグツと立てながらいう。

「ちょ…ユウヤさん！相手はサイカさんですよ！そんな簡単に勝てる相手じゃないよ……！！」

リナは、そういつて俺を心配そうにみている。

その声はだんだんしぼんでいつていたから本当に不安がつてるんだな……。

「俺は、”負ける”とは思ってないぜ。バトルはしてみないと分からないからな。」

俺がそういうと、エイトもリナもぼかーんと口を開けてしまった。

おいおい、俺がそうとう自信があるように見えるのかよ!？

「それに、バトルに勝つことだけがいいというわけではない。俺とサイカの試合しっかり見ておけよ！」

最後に、そっぴい残すと、俺は、フィールドに向かって走っていった。

ポケモンリーグの優勝者とバトルだなんてワクワクするじゃねーかよ！！

「これより、最終試合、サイカVSユウヤの試合を始めます。ルルは今までと同じ。両者、準備はいいですか？」

コトネが尋ねると、俺たちは同時に頷いた。

「サイカ、悪いけど勝たせてもらうぜ。俺のためにチャンスを作ってくれた後輩たちのために」

俺は、サイカに向かってそっぴい放つと、ちらりとベンチの方を見る。

リナは、キヤツキヤ喜んでるけれど、エイトは苦笑い。なんかひどくねーか？



「そうはいかないわ。こっちも私が勝つって信じてくれてるもん」

俺が、フィールドに目を向け直すと、サイカは言葉を返した。

サイカも俺たちみたいにな、ヒビキやコトネから信頼されているんだよな。

俺は、そう思いながら懐からモンスターボールを取り出した。

「行くぞ！！キノガッサ、let'sバトル！！」

「キノーツ！！」

「お願い、ゴマゾウ！！」

「パオーツ！！」

俺が繰り出したのはキノガッサ。対するサイカはゴマゾウ。相性はこちらに部があるが、油断は禁物だ。

「先手必勝！マツハパンチ！」

「キノーツ！！」

俺の指示が飛ぶと、バトルは始まりを告げた。

キノガッサは、右の拳を白く輝かせながらもものすごいスピードで接近していく。

「マツハ」というだけあって、そう簡単には避けられないはずだ。

「かわして目覚めるパワー!!!」

「パオオオオオ!!!」

ゴマゾウは、手際よくステップして難なくマツハパンチを回避し、無数のエネルギーの玉をキノガッサにぶつける。

超スピードで突っ込んでいたせいで、すべてが命中し、キノガッサはフィールドに叩きつけられてしまった。

「なに!!!?かなりのダメージを受けた!?!」

俺は、思わず驚愕の表情を見せた。

マツハパンチを軽々とかわされたことだけでも驚いたのだが、それに加えて、キノガッサがふらつき始めたのだ。

「目覚めるパワーは、ポケモン一匹一匹によってタイプが違ってくる……。私のゴマゾウは、エスパータイプなの」

サイカが、丁寧に説明をする。その顔つきは、平然としたもので、落ち着きが見られる。

「なるほどな……。伊達にリーグ優勝経験者じゃないってことか……。ならキノガッサ、タネ爆弾!!!」

「キノツ!!!」

キノガッサは、緑色をしたタネを次々と発射していく。

「ゴマゾウ、転がる!!!」

「パオーツ!!!」

一方のゴマゾウは、身体を丸めて、勢いよく回転しながらキノガッサに近づいてくる。

「タネ爆弾は、ゴマゾウの頭上スレスレを通過して、遠くで爆発した。」

くそ、不発に終わったか。でも……

「転がるなら対抗できる！ マツハパンチだ！！」

「キノーツ！」

キノガッサは、拳に白い光のパワーを集中させ、それを、ゴマゾウの額に思いっきりぶつけた。

「パオオオオオ！」

「キノオオオオ！」

二匹の技は、激しくぶつかり合い、バチバチと火花が散っている。

俺は、目を見開いて、それを見ているが、対するサイカは余裕な笑みを浮かべている。

しかし、競り合いを制したのは俺たちだった。

キノガッサは、ゴマゾウを宙に舞わせたのだ。

「おっしや！！キノガッサ、畳みかけるぞ！！」

俺は、思わずガッツポーズを作った。

「それで勝ったとおもってるの？ゴマゾウ、もう一回ー！」

「パオパオー！！」

サイカは動ずることもなく、冷静に指示を出す。

……サイカ相手にバトルしてるわけだし、調子に乗りすぎるのはよくないかもな。

ゴマゾウは、回転しながら、再びキノガッサに接近してくる。

俺は、迷わずマツハパンチを指示して、先ほどと同じ状況が再現されるのだが、今度は、ゴマゾウが、キノガッサを押しきった。その結果、キノガッサは、空中にとばされる。

「なんだと！？」

一回目は、こちらに部があったが、”転がる”の状態は持続していて、今のが二回目だということはわかっていて。しかし……

「転がるは、攻撃が続く限りその威力を高めていく技……。だけど、二発目で押しきられる……。か」

サイカが、ポツリと言葉を漏らす。

悔しいが、全くその通りだぜ……。

俺は、その気持ちからか、無意識に歯ぎしりをしていた。

「だったらこれなかどうだ！？キノガッサ、ストーンエッジ！！」

「キ……キノーツ！」

地面に倒れていたキノガッサは、辛そうにしながらも身体を起こし、

自身の周りに岩の欠片を浮かせる。そして、それは、ゴマゾウの方へと飛んでいく。

「ゴマゾウ、かわして!!」

「パオツ！」

ゴマゾウは、地面を転がりながら、次々と岩の欠片を避けていく。それは、全く無駄のない動きだ。さすがだな……。

「タネ爆弾だ！」

「キノツ！」

キノガツサは、岩の欠片を飛ばすのを止め、今度は、緑色の種を発射していく。

種は、こちらに向かってくるゴマゾウに命中し、爆発するのだが、逆にその爆風を利用し、ゴマゾウは、更なるスピードを身につけて向かってきた。

「爆風を利用して更に回転数を上げたのか……。キノガツサ、かわせ!!」

俺は、真っ向勝負では勝ち目がないと判断し、回避するように促した。

キノガツサは、素早くジャンプすることで上手く攻撃をかわすことができた。一方のゴマゾウは、勢い余って地面に激突し、今まで持

続していた回転が止まった。  
だが、サイカは驚く素振りも見せない。

「それじゃあ、私には勝てないよ!!目覚めるパワー!!」

「パオオオオオ!!」

サイカは鋭い口調でいい放つ。

「げ、これはカナリまずくないか!？」

そう、キノガッサは、ジャンプしているため攻撃を回避できない状態なのだ。

思ったとおり、球状のエネルギー驂、すなわち、目覚めるパワーは、全てヒットして、キノガッサは、地面に勢いよく激突した。

くそ……、やはり実力の差は大きい。だが、こんなところで諦める俺じゃないぜ!

「気合いだ、キノガッサ、ストーンエッジ!!」

「……キノーツ!!」

キノガッサは、俺の声に伝えてくれたようで、ふらつきながらも立ち上がり、岩の欠片を飛ばし始めた。

しかし、威力やスピードが格段に落ちている。

「ゴマゾウ、目覚めるパワー!!」

「パオーツ！」

二匹の技は、お互いにぶつかり合うのだが、結果は分かったも同然。球状のエネルギーの玉が、キノガツサに襲いかかる。

「キノガツサ、かわせ！」

俺は、すかさず反応して、指示を出す。

しかし、キノガツサにはほとんど体力が残されていないため、まともに攻撃を受けてしまい、地面にうつ伏せの状態で倒れた。

ここまでか

一瞬そう思ったのだが、かすかに動きが見える。まだ戦闘不能ではないぞ……！

「ゴマゾウ、転がるでトドメ！」

「パオパオパオーツ！！！」

サイカは、決着を着けに来た。ここは、どうにかしてでも反撃にでたいところだ。

「立て、キノガツサ！！ソーラービームだ！！！」

俺が、渾身の力を込めて叫ぶと、キノガツサは、閉じきっていた目をキリッと見開き、太陽の光を集め始めた。

「ソーラービームなら、間に合わな……！」

サイカは、そういいかけたが、ハッと驚いた。

キノガツサが、すでに必要なエネルギーを溜めていたからである。

確かに、ソーラービームは発動までに時間がかかる。速攻で出すためには、日差しが強くなければダメだ。ちなみに今は、晴れてはいるが、日差しは強くないというような天気。

それでも、すぐにエネルギーを溜める方法はあるんだよな。

「……パワフルハープね」

サイカは、その理由が分かったようで、ポツリと呟いた。

「……キノオオオオ！！」

そうしている間に、キノガツサは、太陽の力の宿った光線をゴマゾウに向けて発射していた。

「……だけど……。ゴマゾウ、回転しながらジャンプ！！」

「パオツ！」

ゴマゾウは、転がりながら、光線の当たらない範囲にジャンプする。

「なんだと！？そんなんありかよ……」

悔しさのあまり、拳に力が加わる。だが、まだできることはあるぜ……！！

「キノガツサ、角度を修正するんだ！！」

「……キノツ！」

俺が、そう指示すると、キノガツサは、光線の角度を少しずつずらしていった。

このままいけば当たるはずだ……！！



「ゴマゾウ、回転を保ったまま諸刃の頭突き！！」

「パオオオオオ！！」

ゴマゾウは、回転しながら水色を帯びた強大なエネルギーを身体にまとう。

その威圧感のものすごいもの。俺は、一瞬たじろぎそうになった。角度を修正したソーラービームは、ゴマゾウに当たったのだが、そのエネルギーは当たったところから拡散してしまった。

ゴマゾウは、そのままキノガツサに激突する。

キノガツサは、吹っ飛ばされて、フィールド外の岩に叩きつけられる。

岩は、衝撃で木っ端微塵になっていて、キノガツサは、岩があった辺りの場所に目を回しながら倒れていた。

「キノガツサ、戦闘不能！！ゴマゾウの勝ち！！よって最終試合はサイカさんの勝ち！！」

コトネによつて、バトルの結果をいい下された。

ここまでだったか

長かったバトルが終わり、ハアーツと溜め息をついた。

だけど、今の俺は、負けたのにも関わらずすがすがしい気分だった。



第五十二話 第三試合！ユウヤVSサイカ（後書き）

はい、団体戦は引き分けに終わりました。

次回でコラボは終了です

**第五十三話　また会える日まで……（前書き）**

今回は、二話連続投稿！

今回で、コラボは終了します。

ジェイさん、ありがとうございました！！

それでは、どつぞー！

第五十三話　また会える日まで……

結局のところ、今回の団体戦は、一勝一敗一引き分けで幕を閉じた。僕たちもヒビキたちも同じ成績だから、本当の意味で引き分けだ。

「さすがリーグ優勝者、歯が立たないな」

ユウヤさんは、笑い飛ばしながらサイカさんに話しかけている。こ  
ういうところはユウヤさんって感じがする。

「心許無いことをいわない。どうせ、『次にやるときは俺が勝つ！』  
なんて考えてるんでしょ？」

「なっ、どうしてそれを……」

核心を突かれたようないぶりにユウヤさんは、動揺する。

それがおかしいのか、サイカさんは、笑みを浮かべながら手を差し  
のべる。

「ちえ、笑うなっつての」

そういいながら、ゲラゲラ笑うユウヤさんと、サイカさんは、握手  
をした。

翌日、団体戦で疲れていたポケモンたちもすっかり元気になって、いよいよ別れのときがやって来た。

「それじゃあ、ぼくたちはコガネシティに行くね」

ヒビキがいう。

確か、ヒビキとコトネは、すでにヒワダジムに挑戦して勝利しているため、次の町に向かうのが、妥当なのだろう。

「なんだか、寂しくやっちゃうね」

珍しく、リナに元気がない。表情をコロコロ変えるリナであるからこそ、うれしいときと同じくらい悲しみや寂しさを感じるのだろう。

「これからも、みんな旅を続けるんでしょう？なら、何時かまた会えるよ」

コトネが笑いながらいう。

「そうだね。なら、さよならは合わないね」

ぼくも、それに続けて言葉を漏らす。

「そうね。……じゃあ、私はキキョウシティに向かうから」

サイカさんはもう出発するみたいだ。これからキキヨウシティに向かうんだな……。

「わかった。じゃあサイカ、またな」

ユウヤさんは、そういうと、右手を差し出す。

そして、二人は昨日のようにあつい握手をかわした。

「エイトくん、リナちゃん。二人ならこのジム戦も大丈夫。だって二人ともこのジムリーダーに勝ったヒビキとコトネちゃん相手に互角以上のバトルをしていたからね」

サイカさんは、握手をし終わると、僕とリナのいる方を向いてそういった。

「ホントですか！？やったよエイト、サイカさんのお墨付きだよ！」

リナは、サイカさんの言葉を聞いて、はしゃぎ回る。

さっきまでは、気持ちが沈んでいたのに、立ち直りが早いというか、単純というか……。

「ちょっとリナ、落ち着いて。……サイカさん、いろいろありがとうございました。」

「ありがとうございます！！」

まず、僕がお礼の言葉をいうと、リナもそれに続いた。

「ちえ、これじゃあ俺が何もしてねえみたいじゃんか」

ユウヤさんは、ふてくされたにいう。

その様子を見て、僕たちは笑い出す。

また、それを受けて、ユウヤさんが怒りだすものだから、おもしろいものだ。

……ユウヤさんにはちょっと失礼だけどね。

それからしばらくして、サイカさんは、キキヨウシティへと旅立っていった。

その後ろ姿が見えなくなるまで手を振って見送ると、今度は、ヒビキたちがコガネシティへと向かおうとしていた。

「それじゃあ、エイトくん、リナちゃん、ユウヤさん。僕たちも出発します」

「うん。ジム戦頑張ってね」

僕は、そういって、ヒビキと握手をかわした。

「リナちゃんたちも、ジム戦頑張ってね」

「ありがと！！コトネちゃんもたちも頑張ってね」

リナとコトネちゃんも、僕たちのように、握手をした。

そして、ヒビキとコトネは、コガネシティに向けて歩き始めた。

僕たちは、彼らが見えなくなるまでずっと手を振っていた。



「いっちゃったね……」

リナが、シユンとした声でいう。

「大丈夫だよ。旅を続けてたら、またどこかで会えるって」

「そうだよね……また会えるよね！」

出合いがあれば必ず別れもある。それが、旅をするってことなんじゃないかな……？

「よし、一段落ついたようだな。……分かっているとは思って、明日はジム戦だ！」

ユウヤさんが、声を張り上げていう。ユウヤさん、自分がジム戦するわけではないのに張りきってるなあ。

「えっ……今から行かないんですか？」

リナが、不思議がって尋ねる。

「今日は、最終調整の日に当たった方がいいと思っただけだよ。どうだ？」

「ユウヤさんのいう通りだよ。リナ、今日は明日に備えて準備しようよ。ねっ？」

「わかった！そうする！」

ユウヤさんと、僕に促されて、リナは、納得したようにうなずいた。

さあ、ジム戦に向けて最終調整だ！

僕たちのジム戦の日は目の前だ

第五十三話　また会える日まで……（後書き）

次回はついにジム戦です！

でも、相変わらずのスローペースですね。  
なので、冬休みの時間がある時はどんどん更新していきます。

第五十四話 ヒワタジム！動く虫ポケ大百科！？（前書き）

珍しいことに二日連続投稿です！

今回は、ヒワタジムです。

## 第五十四話 ヒワタジム！動く虫ポケ大百科！？

「ポッポーッポッポー……」

ポッポたちが盛んに鳴いている頃、僕の目は覚めた。

今は、AM7:00。いつも通りに起きることが出来たみたいだ。

僕は、ベッドからひょいっととびおり、まだ寝ているであろう、リナを起こしに行くことにした。

「リナ、朝だよー！！」

「ふあ~~~~起きてるって……」

リナは、起きてはいたのだが、盛大にあくびをしていた。昨日の疲れがあるのかな……？疲れ知らずのリナらしくないような気もするけどまあいつか。

僕が、いつもの服に着替え終わった時、コンコンッ、とドアをノックする音が聞こえた。

リナは、忙しく髪の毛を整えているため、僕が、ドアを開けにいった。

ドアを開けた先にいたのは、ユウヤさん。  
早い時間から起きていたのだろうか、身じたくはバッチリである。

「よっエイト！おはよう。今日はジム戦に行く日なんだし、早いところ準備しとけよー！！」

ユウヤさんは、親指をぐつと立てながらいう。

「ユウヤさん、おはようございます。僕は、もう準備は出来ているんですけど、リナを待ってやってくれませんか？すごく眠そうにしてますから……」

「ああ、分かった……うーん、今までのツケが回ってきたみてーだな」

「え？ツケって……？」

ユウヤさんは、頷いたあとに、ツケがなんとかといたので、不思議に思っただけで聞き返してみる。

「い、いやっ何でもない！ただの独りごとさ！」

ユウヤさんは、慌てふためきながらそういった。でも、何かを隠しているようないい方だった。よさげな気がして、僕は、思わず顔を歪めた。

「おーい！準備出来たよ……！」

僕が、ユウヤさんに何かしらいい返そうと思った時、リナが、手をブンブン振りながらこちらにやって来た。

「よし、リナの準備も完了だな。さっそく朝食食べにいこうぜ！」

「おおーっ……！」

ユウヤさんの無駄に大きい声にリナが反応して、二人はさつさと食堂へ向かって行ってしまった。

今日は、ユウヤさんもりナもなんか不自然だよな……。

僕は、そう思いながらも先にいつてしまった二人を追いかけた。

「このジャムおいしい！」

こう発したのは、いうまでもなくリナだ。

今、僕たちは、朝食の真つ最中である。今日の朝食メニューは、ロールパンに野菜サラダ、そして、オレンジジュース。

ロールパンにジャムが付いていて、それは、マゴの実とナナの実をブレンドした、甘い仕上がりになっている。

野菜のほうは、緑がキレイなヒワダタウンというだけあって、新鮮で色鮮やかなものが多く、味もおいしい。

問題なのが、オレンジジュースだ。

僕は、オレンの実が酸味が強いとおもっていたけれど、それは違ったのだ。

オレンジジュースを飲むと、辛かったり、渋かったり、甘かったりと不思議な味がするのだ。

リナは、難なくゴクリゴクリと飲みほしているけど、僕は、オレンジの実独特の不思議なテイストに参っていた。

「エイト、浮かない顔してるけどよ、どうした？」

気づいたら、ユウヤさんが、心配そうに僕の顔を覗きこんでいる。

「オレンジジュースが強烈だなあ、と思つて……」

僕は、正直にそういつた。

「ああ、オレンジジュースに参つてるのか！その気持ちよく分かるぜ！俺がはじめて飲んだ時は思わず吐いたからな……」

ユウヤさんは、ケラケラ笑ながらそういつう。

「ちょ……ユウヤさん！食事中に汚いことをいわないでくださいよ！」

今の話を聞いて、ジュースを吹いてしまったらとんでもない。

「悪い悪い………ついいつてしまったぜ。」

頭をポリポリかきながら謝るユウヤさん。周りにあまり人がいなくてよかったよ。

「まっ俺からいえることは、木の実の性質は知っておいたほうがいってことだ。俺なんか、何にも知らずにブリーの実食べて口のな



か真っ黒になったことあるからな……気をつけたほうがいいぜ」

「はい、ありがとうございます」

今のユウヤさんの話は、僕のためになったと思う。

なんとたつてスクールで木の実についてはあまり詳しく習わなかったからね。

僕は、なんとも思わずに木の実を好んで食べられるポケモンたちと、リナがすごいと思ったのだった。

「たのもーうー!!」

場所はかわって、ヒワダジムの前。

大声で叫んでいるのは、リナとなぜかユウヤさん。

リナはともかく、ユウヤさんはジム戦しないでしょ……!!

突っ込み所は満載だけど、ここはスルーすることにしよう。

僕は、堂々としている二人と一緒にジムの中に入ると、そこにはとんでもない光景が広がっていた。

「一言でいっただら森……だね」

「すっごーい！」

僕やリナは、驚きの声をあげた。

そう。このヒワダジムは、辺り一面が森であるかのように、木で覆われているのだ。

虫ポケモンが多く飛び交っているところから、このジムが虫タイプを専門にしていることが分かった。

「あれ見てよ！イトマルの乗り物だ！」

興奮しながらピョンピョン跳ねているリナ。その先には、イトマルの形をしたアスレチック風の乗り物がある。

ここのジムリーダーはどんな人なんだろう？と、考えてたくなってしまふようなものだ。

「あれに乗って奥までいくみたいだな。早く乗り込もうぜ」

ユウヤさんに催促されて、僕とリナは、イトマル型の乗り物にとび乗った。

すると、それは、ぎこちない音をたてながら、少しずつ動いていった。

余談だけど、実際イトマル型の乗り物は、二人用だったみたいでスペースがキツかった。

「チャレンジャーの方ですか？」

僕たちが、フィールドに入ろうとした瞬間、声が聞こえてきた。声の質からすると、僕やリナとあまり変わらないような気がするけれど、気のせいかな？

「はいっ！ジム戦に来ましたー！」

質問には、リナが答える。ただ、いい方が失礼なような気がしなくもない。

だけど、ここは軽く流しておこう。

「はじめまして。ボクがヒワダジムのジムリーダー、ツクシです」

> i 1 8 1 6 9 — 1 0 6 1 <

周りよりも一際大きい木から、突然、薄紫色の髪の毛の男の子が飛び降りてきてきた。丁寧な言葉づかいをしているのだが、どこかきこちなさを感じる。なぜだろう。

「僕は、ワカバタウンのエイト。よろしくね。あ…えっと……ツクシくんがいいかな？」

「わたしはリナ！ホウエン地方出身だよ！よろしくね！！」

僕は、どきまぎしながら、対するリナは、いつも通りのハイテンションで自己紹介した。

「よろしくお願ひします、エイトくん、リナさん」

ツクシくんは、丁寧に頭を下げた。でも、気になることがあるんだよね……。

「コホンッ俺はユウヤだ。今回は見学希望だ。……それにしてもよ、そうとう若いみたいだな。いったい何歳なんだ？」

僕が、考え込んでいたら、ユウヤさんが、僕が気になっていることをツクシくんToStraitに尋ねていた。  
なんともユウヤさんらしいことか。

「僕は、十歳です」

「ええっ！！」

ツクシくんは、平然としていったけど、僕たちは、ビックリ。

ツクシくんって年下なんだね。

僕は、パツと見て同じ年だと思っていたから、本当に驚いた。

「最初のチャレンジャーはどちらですか？」

ツクシくんが、先ほどまでとは違って、鋭い目付きをしている。

あ、そういうえば、どちらから挑戦するのか決めていなかったよね。キキヨウシテイでは、ダブルバトルだったし。どうしようか……。

「はいはい！わたし、リナがいくよ！」

リナが、手をブンブンと振り、さらにはピョンピョンと跳ねながら、アピールした。

やる気は十分みたいだから、先陣はリナに任せるとしよう。

「では、リナさん、フィールドに案内するので付いてきてください」

リナは、そういうツクシくんについていき、僕とユウヤさんは、応援席へ向かった。

僕たちのジム戦が今はじまる

**第五十四話　ヒワタジム！動く虫ポケ大百科！？（後書き）**

今回は、前置きが長すぎました……。

ジム戦は、次回からですな。

年が明ける前に更新出来るように頑張ります。

第五十五話 ヒワタジム！リナVSツクシへ前編（前書き）

2週間くらい更新できずにすみませんでした！！

こんな時期に今年初投稿になるとは……。

とりあえず、今年もどうぞよろしくお願いします！

今回は、リナVSツクシのジム戦です

## 第五十五話 ヒワダジム！リナVSツクシへ前編

「これよりジムリーダーツクシと、チャレンジャーリナとのジム戦を行います。使用ポケモンは一体。どちらかが戦闘不能になり次第バトル終了です」

わたしとツクシくんが、フィールドに対峙したのを確認して、審判は、つらつらとルールを説明し始めた。

調子に乗って先に戦うとはいったものの、かなり緊張していて手足はぶるぶる震えている。キキョウジムの時は、エイトがすぐ近くにいたけど、今はだれもない。

これが本来のポケモンジムなんだろうけど、やっぱりエイトと一緒にのほうがよかったかも。

「リナさん、いきますよ！」

ツクシくんは、そっぴいなながら、鋭い表情でわたしを見ている。さすがジムリーダー。

だけど、どうもツクシくんに『リナさん』と呼ばれるのがしっくりしないなあ……。

あっ……だったら……！

「ツクシくん！あのさ、わたしが勝ったら普通に『リナちゃん』とでも呼んでほしいんだけど？」

わたしは、ツクシくんに向かってブンブン手を振りながらいう。

「え？……それは、失礼ですよ！」



ツクシくんは、思わず表情がゆるんでしまい、慌てふためき始めた。

「いいのいいの！わたしは、その方がいいんだから！……じゃあ、始めよ！ジム戦！」

「……分かりました。でも、勝つたからですからね！いけ、バタフリー！！！」

「フリーッ！」

ツクシくんは、紫色の身体をした蝶のようなポケモンを繰り出した。図鑑で調べなきゃ……！

わたしは、懐から図鑑を取り出して、そのポケモンに向けた。

バタフリー　　ちようちよポケモン　　トランセルの進化系。花の

ミツが好物。僅かな花粉で花畑の場所を探しだすことができる。

ツクシくんは、やっぱり虫タイプ使いなんだね。

だからといって、使うポケモンをかえるわけじゃないけどね！

「ミズゴロウ、お願い！」

「ガヤッ！」

わたしは、モンスターボールを投げて、ミズゴロウを繰り出した。今回は、コトネちゃんたちとたくさん勉強したし、エイトたちにいとこ見せなきゃ！それに、今回は”とっておき”があるんだから！

「それでは、はじめ！」

審判が、両手に持っている旗をあげながらいった。  
さあ、ジム戦の始まりだよ！！

「こつちからいくよ！ミズゴロウ、水鉄砲！」

「ガヤアツ！」

「バタフリー、風おこして吹き飛ばすんだ！」

「フリーツ！」

ミズゴロウは、大量の水を放つのだが、バタフリーは、自身の羽をはためかすことで、それを吹き飛ばした。  
飛ばされた水は、散乱して太陽の光で輝く。

「単調な攻撃は通じないですよ！バタフリー、念力！」  
「フリーイイイ！」

バタフリーは、一心に思いを集中させ、全身から精神力を生じさせる。

「ガヤアアツ！」

わたしは、今までに見たことのない技に戸惑いを見せてしまい、指しを出すことができなかった。

ミズゴロウは攻撃をまともに受けてしまい、悲鳴をあげる。  
うーん、やっぱりツクシくんは強い。年がどうだとか関係ないじゃん……。そろそろ巻き返さないとマズインじゃないかなあ。

「ミズゴロウ、大丈夫？」

「……ガヤッ！」

わたしが、心配してミズゴロウに尋ねると、数秒遅れてはいたけれど、やる気に満ち溢れた声をしていた。

うん、まだまだいけるよ！

「ミズゴロウ、体当たり！」

「ガヤッ！」

ミズゴロウは、フィールドを一直線に駆け上がり、加速したところで地面を蹴ってバタフリーを目がけて突き進んでいく。

「バタフリー、風おこし！」

「フリーッ！」

バタフリーは、先ほどのように、自身の羽をはためかせて風をおこす。

風に阻まれて、ミズゴロウのスピードはみるみると落ちていく。

「ミズゴロウ、頑張って！！」

わたしは、熱い声援を送るんだけど、ついに、ミズゴロウは強風に耐えきれず、フィールドに落下、そして、激突してしまった。

「ミズゴロウ、ミズゴロウ！」

わたしは、必死になって呼びかける。

「ガ…ガヤア……」

ミスゴロウは、傷だらけになっていて、辛そうにしているけれど、まだ立っていた。

でも、このバトルは完全にツクシくんのペース。本当にどうしよう……。

「そろそろ決めます！バタフリー、影分身！」

「フリッフリッフリッ！」

バタフリーは、次々と数を増やしていく。

そして、最終的にはバタフリーたちが、ミスゴロウを取り囲む形になってしまった。

ミスゴロウは、慌てふためいて周りをキョロキョロ見渡している。

うわ……わたし達、かなりピンチじゃん！！

「バタフリー、念力でとどめです！」

「フリーッ！」

バタフリー達は、一斉に集中し始める。

この攻撃が通ったら、間違いなく終わっちゃっよ。でも、いったいどうすればいいの……？

『俺がお前ねポケモンに新しい技を伝授してやるよ』

そう思ったとき、ふとユウヤさんのこの言葉が頭によぎってきた。

そうだ、そうだよ！とっておきがあったんじゃない！！

今こそこの技をつかうべきとき。エイト、ユウヤさん、見ててよ！！

わたしは、追いつめられているとはとても思えないような笑みを浮かべていたのだった

第五十五話 ヒワダジム！リナVSツクシへ前編 (後書き)

短いですが、ここでいったんきらせてもらいました。

次回、秘密の特訓の技が判明します。

リナのジム戦の結果とあわせてお楽しみに！

第五十六話 ヒワタジムーリナVSツクシ〈後編〉(前書き)

《前回のあらすじ》

ついに始まったリナVSツクシのジム戦。

だけど、流れはツクシくんにある。

ミスゴロウは影分身でバタフリーに囲まれていて、念力でとどめを指されようとしているんだ……！！

いったいリナとミスゴロウはどうなってしまっただろうか？

続きをどうぞ！

今回は、僕、エイト視点でお送りしました。

というか、《前回のあらすじ》なんて初の試みだぞ！

## 第五十六話 ヒワタジム！リナVSツクシ〈後編〉

「水の……波動！」

「ガヤアアアアア！」

わたしが、不適の笑みをもらしながら思いっきり叫ぶと、ミズゴロウは球体の水の塊を出して、それを地面に叩きつけた。すると、水の塊は弾けとんで、波紋のように広がっていき、バタフリーの分身を次々と消していった。

そして、ついにバタフリーの本体だけがフィールドに残った。

ちなみに、集中力が途切れたため、念力は失敗に終わり、バタフリーは、ブルブルと身震いして、かかった水をとばしている。

「何だつて!？」

ツクシくんは、目を見開きながら叫ぶ。

ジムリーダーとはいえ、驚きを隠すことはできなかったみたい。なんとってわたしの”とっておき”だもん。

水の波動　そう、それが、わたしがユウヤさんに伝授された技だ。本来なら、直接相手に大量な水を浴びせる技なんだけど、あえて地面に打ちつけることで、広範囲に影響を及ぼすことができるの。

水鉄砲に比べて、威力があるというだけで喜ばしく思っていたわたしだったけど、ユウヤさんは、広範囲にダメージを与える方法をも教えてくれたんだ。

確かその時には、



『ジム戦は、予想できない展開になることのほうが多い。だから、少しでも多くのバリエーションをもってたほうが得するって思わねーか？』  
だなんて、笑みを浮かべながらいわれたよ。

その時は、曖昧な返事をしたような気がするけど、今となっては本当にありがたいことだ。

「ミスゴロウ、今がチャンス！体当たり！！」

「ギャッ！」

わたしは、バタフリーがいまだに身震いしているのを見ると、さすが次の指示を出した。

そうすると、ミスゴロウは、威厳に満ちた声で鳴くと、バタフリーに向かって激突していく。

「バタフリー、上昇して逃げるんだ！」

「フ…フリーッ！」

ツクシくんは、対抗するために指示を出すんだけど、バタフリーはいきなりの指示にどきまぎしていたみたいで、行動に遅れがみられた。

よって、バタフリーが空中の高いところへ逃げる前に、ミスゴロウが勢いよく突っ込む形となりった。

バタフリーは、ヒラヒラと舞いながら、墜落していく。

「バタフリー、風おこしで立て直すんだ！」

「……フリーツ！」

ツクシくんは、瞬時に状況を把握して、適切な指示を下し、それを聞いたバタフリーは、自身の羽を動かしはじめる。

「だけど、そうはさせないよ！ミズゴロウ、泥かけ！」

「ギャツギャツ！」

ミズゴロウは、前足を蹴って、ちょうどバタフリーが落ちてきそうな辺りに次々と泥をかけていく。

「バタフリーは虫・飛行タイプ……地面技は効きませんよ！」

ツクシくんは、人差し指でピシッとわたし達のほうをさして、核心をついたかのようにいう。

「技を当てることが目的じゃないよ！バタフリーをよく見てみてよ……！」

「え……そんな……！」

ツクシくんは、思わず顔を曇らせた。

なぜならば、バタフリーの頭が泥に埋もれていて、身動きがとれない状態になっていたからだ。

「ミズゴロウに泥かけを指示したのは、風おこしで吹き飛ばされないうようにするため、そして、バタフリーの動きを封じるためだったんだよ！」

わたしは、声を高らかにしている。

「リナさん、お見事です。やられちゃいましたよ……」  
ツクシくんは、バツの悪そうな顔をしながらいう。  
きつと悔しいんだよね。

「ただ、あまり感情的にならないようにしないと。なんたって、わたしはジム戦に勝つために来たんだから!!」

「一気に決めるよ! ミズゴロウ、最大パワーで水の波動!」

「ガ ヤ !!」

ミズゴロウは、大量の水のエネルギーを球状にためて、発射する。

「バタフリー、泥から脱出するんだ! ……念力!」

「フリーッ!」

対するバタフリーは、念力をつかうことで、自身を埋めつくしていた泥を飛ばす。

二つの技は、押し合っていたが、やがて、念力が途切れて、水の波動が、バタフリーにダイレクトに当たった。

水タイプと地面タイプでは、相性上、水タイプが勝っている。だから、こういう結果になったんだろうね。

結局、その後、バタフリーは伸びきって、目を回して倒れてしまっていたのであった。

「バタフリー、戦闘不能、ミズゴロウの勝ち。よって勝者、チャレンジャー、リナ！」

審判が、ジャッジを下し、ジム戦はわたしの勝利で終わった。

水の波動のこともだけど、最後の最後に相性が役にたったのだから、ユウヤさんをはじめとしたみんなに感謝しないとだなあ……と、わたしは、思っていた。

第五十六話 ヒワタジム！リナVSツクシ〈後編〉（後書き）

文章が酷いッ（泣）

書いてることちもワケわかんなくなってしまいました……もっと精進するべきですね。

それにしても、やはり、バトル描写は難しいですね……。どうも苦手意識が高いようで……。

リナは、なんとか勝利しました。

次はエイトの番ですね。

第五十七話 ヒワタジム！エイトVSツクシへ前編（前書き）

久しぶりの更新です。

というのはには理由がありまして、実はケータイが壊れていたんですね（泣）

それで、代わりのケータイはあったんですが、操作方法がわからず、なるうにログイン出来ない状態になっていたんです。

ですが、やっと復活したので、更新頑張っていきます。

さて、今回はエイトVSツクシの《前編》です。

少し短めですね。

それではごっぞー！

## 第五十七話 ヒワタジム！エイトVSツクシへ前編

「これよりジムリーダーツクシとチャレンジャーエイトとのジム戦を行います。ルールは先ほどと同じ。問題ありませんね？」

審判が、そのように説明すると、僕はコクリと頷いた。

「エイトくん、さっきは負けちゃったけど甘く見てもらおうと困るよ！」

ツクシくんは、威嚇するような口ぶりです。

「もちろん。油断するつもりはないよ！」

僕は、すぐにいい返すのだが、いつものようには落ち着いてはいられない。

ジム戦特有の緊張と、リナが勝ったあとでのバトルという状況が、僕を苦しめるのだ。

僕も、リナに続かないと……！という焦りの気持ちを自分でもよく感じていた。

「それでは始め！」

審判が、両手に持ったフラッグを真上に高々とあげて、バトルの始まりを告げた。

「いけ、ストライク！」

「ストライク！」

ツクシくんが、繰り出したのはストライクというポケモン。

僕は、ポケモン図鑑を取り出して、データを確認する。

ストライク　カマキリポケモン　両手の鋭いカマはかたいものを斬れば斬るほどきれあじを増していく

やはり、ツクシくんは、虫タイプできたか。見た目からしても素早そうなポケモンだ。それならば……。

「いけ、ポツポ！」

「ポツポーツ！」

僕が、繰り出したのはポツポ。そうしたのは、素早さに対抗するためだ。それに、相性もこちらの方が有利だ。

「相性は、そちらにぶがありますね……。でも、相性が全てじゃないですよ！こつちからいきます、ストライク、電光石火！」

「トライクツ！」

ストライクは、猛スピードで、ポツポに詰めよってくる。

「ポツポ、砂かけで視界を悪くするんだ！」

「ポツポツ！」

この攻撃をまともに避けるのは困難そうだと判断した僕は、ストライクの目をくらます作戦にでた。



ポツポは、フィールドの砂を起こしていき、砂ぼこりを立たせる。

「ストライク、銀色の風で吹き飛ばすんだ！」

「ストライクッ！」

ストライクは、白銀色に光る風を起こして、砂ぼこりを一掃する。

「もう一度電光石火！」

「トライクッ！」

視界がよくなると、ツクシくんは、すかさず指示を下す。

砂かけ作戦を破られてしまったから、僕も、対抗しないと……！！

「こっちも電光石火だ！」

「ポーツ！」

ポツポとストライクは、それぞれの標的に向かって、突っ込んでいく。

そして、お互いにぶつかり合うのだが、しばらくすると、ポツポだけが、突き飛ばされて、地面にうつ伏せになった。

「ポツポ、大丈夫か！？」

僕は、心配して声をかける。

「ポーツ……」

ポツポは、ダメージを受けたため、少し弱々しい返事をした。

それにしても、電光石火は威力がそこまで高くないのにダメージが大きすぎるような……。

「ダメージが大きすぎるとでも思っているんでしょう？」

僕が、怪訝な顔でもしていたらしく、ツクシくんは、確信をつくようにいった。

「……………」

僕は、言葉を無くし、だんまりしている。

「ストライクの特徴、テクニシャン。低威力の技を強化するものです」

ツクシくんは、不敵の笑みを浮かべていた。

第五十七話 ヒワタジム！エイトVSツクシへ前編（後書き）

まだあまり試合は発展していませんが、次回で決着がつきます。

次回もお楽しみに！

第五十八話 ヒワタジム！エイトVSツクシ〈後編〉（前書き）

前回のあらすじ

リナは、ジム戦に勝利し、今度はエイトの番となった。

ツクシのポケモンは、ストライク。素早い身のこなしをするポケモンだ。

エイトのポツポは、ストライクの特徴、テクニシャンが発動した電光石火によって大ダメージを負ったのだった……。

## 第五十八話 ヒワダジム！エイトVSツクシ〈後編〉

ストライクの特徴、テクニシャン。それは、低威力の技を強化するものであった。

リナは、特性について特訓のときに勉強していたらしいから、僕も、少しはしておけばよかったと後悔した。

「特性を活用したバトルの仕方……さすがジムリーダーだね！けど、まだどうなるかは分からない！ポツポ、風おこしで反撃だ！」

「ポーツ！」

ポツポは、体制をととのえると、自身の羽をはためかせて、風を起す。

「ストライク、電光石火で突破！そのまま連続斬り！」

「トライク！」

一方のストライクは、風が吹いている中、超スピードでポツポのいる方へ迫っていく。抵抗はあるものの、あまりスピードは落ちていない。

まずい、このままだとまたポツポがダメージを受けてしまう……！！

「ポツポ、風おこしを止めて上昇！上空から体当たりだ！」

「ポーツ……！」

僕の指示をうけて、ポツポは空中に上昇、そして、そこからストライクに向かって、激突していく。

「ストライク、そのまま連続斬りで迎え撃つんだ！」

「ストライクッ！」

そのまま二匹の技は激突、そして、二匹共にフィールドに落下していく。

ポツポの体当たりは、ストライクの腹部に、また、ストライクの連続斬りは、ポツポの背部に命中していたからだ。

「ポツポ、体制を立て直すんだ！」

「……ポーツ！」

「ストライク、こっちも体制を立て直して！」

「……トライク！」

僕のポツポは、なんとか空中でとどまることはできたけど、体力は残り少ない。

それに、ツクシくんのストライクも持ちこたえているんだ。

そろそろ勝負を決しないと……！！

僕は、たいしたダメージを負わせることも出来ないでいたため、内心すごく焦っていた。

「次でとどめといきます！ストライク、切り裂く攻撃！！」

「トライクッ！」

ツクシくんは、ここで勝負に出てきた。ストライクは、自身のカマを光らせながら、ポツポの方へ駆けていく。

ここで、僕は、迎え撃たないといけないんだけど、正直あの切り裂く攻撃に対抗出来そうな技は無い。

もうここで終わりなのかな……？

「ポオオオツ！！」

僕が、勝負を諦めかけたとき、ポツポは、僕の指示無しで、ストライクに向かっていった。

しかも、翼を真っ白に輝かせながら。

「あの技は、翼でうつ……！？」

僕は、驚きの表情をしながら呟く。

「この土壇場で新技ですか……。でも、ボクは負けませんよ！ストライク、そのままポツポに切り裂く攻撃！」

「トラアアアイク！」

「ポツポ、翼でうつで決めるんだ！」

「ポオオオツ！！」

お互いの、光り輝くカマと翼は交錯し、しばらくの間競り合った。

「ストライク、もっとパワーを出すんだ！」

「トラアアアイクツ！！」

ツクシくんの指示で、ストライクの力が強まり、ポツポが押されていく。

「ポツポ、……負けるなアアア！！！」

僕が、いつもは決して熱くなるような性格ではないのだが、声がかれそうなくらい力強く叫んだ。

「ポオオオオオツ！！」

ポツポは、先ほどに加えて、力を込める。すると、ストライクのカマを弾いて、自身の真っ白に光る翼を相手の腹部に当てるまでに至った。

「トラアイクツ！！」

ストライクは、悲鳴をあげて、フィールドに横たわった。

「ストライク、ストライク！」

ツクシくんは、必死になって名を呼んだが、ストライクは、すでに目をグルグルに回していた。

「ストライク戦闘不能、ポツポの勝ち！よって勝者、チャレンジャーエイト！」

その瞬間、審判のジャッジが下された。



うん、僕は、勝ったんだ……！！

「エイトくん、リナさん、おめでとつございます！」

ツクシくんは、ジムバツジが置かれているトレイを持ってきて、僕たちのほうへ歩み寄ってきた。

「ツクシくん！わたしが勝ったんだから敬語で話すの止めてよ〜」  
「それに、”リナさん”だなんて違和感しかないし……」

リナは、年下であっても敬語で話されるのはこそばゆいようだ。そういえば、ジム戦が始まる前に、『自分が勝ったら敬語無しにして！』って約束してたね……。

「俺も自然に話した方がいいと思うぜ。敬語ってのはやっぱり堅苦し  
いしよ」

ユウヤさんが、話に突っ込んでくる。ユウヤさんは、お気楽そうだから、堅苦しいのはあんまり好きではないんだろうな。

とはいっても、僕もリナもユウヤさんとは敬語で話してるけど。

「じゃあ、リナちゃん……でいいかな？」

ツクシくんは、どきまぎしながら呟く。

「うん、絶対そっちの方がいいって！わたし達の方が年上でもたいして変わらないんだからさっ！友だちってことでいいじゃん！」

うんうんと頷きながらリナは、ベラベラと話す。全く、話がいつまでも止まらないんだから……。

「ツクシくん、僕も普通に話していたいかな。君さえよければ友だちとして」

僕は、そういいながら、ツクシくんに向かって右手を差し出す。

「うん、友だちっていつてくれるだけでもうれしいよ！改めてよろしく、エイトくん、リナちゃん！」

ツクシくんは、トレイを一端預かってもらい、僕と握手をした。

「あ、それと、改めておめでとう！これが、ヒワダジムに勝利した証、インセクトバッジだよ！」

ツクシくんは、そういうと、トレイからバッジを取り出して、僕とリナの手のひらにのせた。

「インセクトバッジGET　　！！」

リナは、バッジを手にとると、元気はつらつと喜びの声をあげていた。

僕とツクシくん、ユウヤさんは、その様子を笑みを浮かべながら見ていた。

僕の手のなかでは、レディバを思わせるジムバッジが赤く光輝いていた。

第五十八話 ヒワダジム！エイトVSツクシへ後編（後書き）

あーっやっどジム戦が終わったよ！！

ヒワダジム、自分のなかでは本当に長かったです。

次回からはどうなるのか？

それは、お楽しみに！ということにしておきます。

第五十九話 事件発生、消えたヤドン（前書き）

前回でジム戦が終わったので、今回からは、少し話がかかります。

タイトルを見ればわかるって？

はい、確かにそうですね。

それでは、どつぞー！

## 第五十九話 事件発生、消えたヤドン

ツクシくんとのジム戦を終えた僕とリナは、ユウヤさんと共にヒワダジムを後にした。

そして、戦いで疲れたポケモンたちをポケモンセンターに預けた後、ジム戦勝利のご褒美として、高級レストランでの夕食を久しぶりに堪能した。

リナは、あい変わらずの食欲で、出される料理を次から次へと食べ尽くしていき、僕とユウヤさんは、いつものように、それを笑ってみていた。

そして、ジム戦に疲れた僕たちは、体を休めるために、眠りについた。

この時、僕たちは、明日何が起こるのか、決して知ることはなく、安心しきった表情をしていた。

「大変だよ!!!」

甲高い叫び声で、僕の目は覚めた。最悪の目覚めだ。いったい誰がそんなに叫んで……って

「ツクシくん!？」

僕は、目を見開いて彼を見る。

「エイトくん、おはよう!朝から騒いでゴメン。……だけど大変なんだよ!」

「ツクシくん!一回落ち着いて……」

僕は、興奮しきっているツクシくんをなだめる。

「ふあああ……おはようエイト……ってツクシくん?なんでここに……?」

ここで、爆睡していたリナが起きてきた。目を擦ってあくびをしているところから、眠たそうにしているのがよくわかる。

「あ、リナちゃん。おはよう!起きたらいきなりボクがいてビックリさせちゃったみたいだね」

「ねえ、ツクシくん。いったい何が大変なの?」

僕は、ツクシくんをまじまじと見ながらいう。

リナも、起きたばかりではあるが、興味津々とこちらをみている。

「それがね……今朝ある苦情が殺到したんだよ」

「ある苦情って……?」

リナが怪訝そうな顔をして、聞き返す。

「野生だとかトレーナーのだとか関係なく、ヒワダタウン周辺のヤドンがいなくなってしまうたらしいんだ」

ヤドン……。確かヒワダタウンに多く生息するポケモン。ヤドンがあくびをすると、雨が降るともいわれているため、ヒワダタウンでは特に大事にされてるポケモンだったはずだ。

「野生のヤドンならさ、どこかにいつちゃってもあんまり気にしないかもだけど、トレーナーのヤドンがいなくなるのはおかしいよね？」

リナのいうとおりだ。トレーナーのポケモンが一斉にいなくなるのはおかしすぎる。

「ツクシくん、ここ最近不審な人物がいたりしかった？もしかしたら強盗かもしれないからね」

「うん、僕はいなかったと思うよ。だけど、それはあり得るかも……だよな」

ツクシくんの顔が、徐々に曇っていく。

さすがに、強盗だと聞いて喜ぶ人はいないから、そうなるのは当たり前だろうけど。

「とりあえずさ、何か行動を起こさないとじゃない？何しろ、ツクシくんはジムリーダーなんだしね。それに、住民が苦情に来たのは事件を解決してほしいからなんじゃないかなあって思うんだよね」



リナが、ツクシくんの肩をポンツと叩いて、つらつらといった。確かになにかしら行動しないと……かだよね。

「エイトくん、リナちゃん。ボクがここに来たのは、事件と一緒に解決してほしいからなんだ！ボクは、ここヒワタウンのジムリーダーだけど、さすがに一人では無力なんだ！だから、お願いしてもいいかな……？」

ツクシくんは、ペコリと頭を下げる。

いや、ここまでしなくてもよかったのに。

「なーんだ。最初っから解決しようと思ってたんじゃん！いいよ！わたし協力するから！もちろんエイトもOKだよね？」

「うん、もちろん」

僕は、明るい声で返答する。誰が困っていることを放っておくわけにはいかないよ。

「二人ともありがとう！じゃあさっそくだけど……」

「ちょっと待って！」

ツクシくんが、なにかいいかけたのをリナが遮った。

「リナちゃん、どうかした？」

ツクシくんは、心配そうな顔をする。

別にたいしたことではなさそうだから、そんな顔をする必要はないと僕は思うけどね。

「わたしまだ起きたばかりだからさ、身じたくまでできるまで待つてほしいな！あ、そうだ。エイト、今からユウヤさん呼びにいつてよ！」

「わかった！じゃあ、準備が終わったらリナもユウヤさんの部屋に向かって。よろしく頼むよ」

僕が、そっぴい捨てると、リナは、コクリとうなずいた。

「ツクシくん、行こうか」

「うん！」

こうして、僕とツクシくんは、ひとまずユウヤさん呼びにいっくるところになったのであった。

第五十九話 事件発生、消えたヤドン（後書き）

まだまだ続くヒワダシテイ編。

いつまで続くんだよ！と思われている方もいることだと思いますが、  
どうぞ最後までお付き合いくださいな。

第六十話 検索！ヤドンの井戸（前書き）

久しぶりの投稿！

今まで更新がストップしていたのはテストだったからです。

とりあえず、最新話をどうぞ！！

## 第六十話 搜索！ヤドンの井戸

「ユウヤさん、入りますよ」

僕は、ツクシくんと一緒にユウヤさんの泊まっている部屋の前にいる。

そして、ドアをノックして、中に入ろうとすると、

「お、エイトじゃねーか。おはよう」

という声とともに、ユウヤさんが、部屋から出てきた。

「ユウヤさん、おはようございます！もう準備は出来てたんですね」

「おうよ！……で、なんでここにヒワダジムのジムリーダーがいるんだ？」

ユウヤさんは、ツクシくんを一瞥しながらいった。

「そ…それには理由があるんです！」

ツクシくんは、焦ったような表情をみせながらいう。

ユウヤさんが相手だから、少し緊張してしまったのだろうか。

「そんなに固くならなくていいぜ。とにかく、詳しい事情を教えてくださいませんか？」

「あ、はい！」

ユウヤさんの優しい言葉かけで、ツクシくんは安心したらしく、今度は、いつも通りの調子で返事をし、先ほど僕やりなに説明した事情を話した。

「つまり、ヒワダタウン周辺のヤドンが失踪したってことだな」

「はい、そうなんですけど……。ユウヤさんは、どう思いますか？」

僕は、一応ユウヤさんにそう尋ねてみた。

なにしろ、僕より年上で、旅の経験も長いから、なにか知っているかもしれない。

「うーん……悪いな、俺にも分からん！それよりジムリーダーであるえーっとツクシだけ……。のほろが詳しいんじゃないか？」

ユウヤさんは、ヒワダタウンのことはあまり知らないみたいだから、やっぱりもつとツクシくんから聞き出す必要があるそうだな。

「ツクシくん、ヤドンが多く生息している場所とかあったりしない？」

「ヤドンが多く住んでいる場所かあ……。あつたかなあ……。」

ツクシは、首を傾げて考えこむ。

「エイト、タウンマップとか役にたつかもしいないぜ」  
「ユウヤさんが、親指を突き立てながら僕の耳元でいう。」

僕は、ユウヤさんのいう通り、タウンマップを広げてみることにした。

”ヒワダタウン” 付近をみて見ると、僕たちが通ってきた”つながりの洞窟”があつたりしたのだが、僕は、マップ上にある、ある場所が気になった。

「ヤドンの井戸。ここには、ヤドンがいるはずだと思うよ」

僕は、さっそく二人に伝える。

「エイトくんのおかげで思い出したよ！ヤドンの井戸には、名前の通りヤドンが多く住んでるんだ！」

ツクシくんは、うれしそうに、そう叫んだ。

「なら、その”ヤドンの井戸”に行けばいいってことだな。ならさっそく行こうぜっていいんだけど、リナはどうした？」

「リナは、身じたくが終わってなかったから、あとから来るっていつてたんだ。……もうそろそろ来るはずなんだけど」

僕が、そういったとき、

「お待たせ〜〜！！」

と、元気な声が聞こえてきた。もちろんリナである。

「お、噂をすればやって来たな。リナ、俺たちは今からヤドンの井戸に行くことになった。事情は知ってるみてーだから、なんでかは

分かるよな？」

「うん、いなくなったヤドンがいるかもしれないからでしょ？」

「よし、大丈夫そうだな。じゃあ、さっそく出発しようぜ！」

「コッオ                    ツ」

コウヤさんの言葉に続いて、僕たちはかけ声をあげた。

こういうと、リナみただけど、なんだかワクワクしてきた。

なんとしてでも、消えたヤドンの謎を解き明かさないとだね！

「ツクシくん、あの人はヒワダタウンの人なの？」

僕は、ヤドンの井戸の入口の前に着いたらすぐにそう尋ねた。

なぜならば、一人の老人がヤドンの井戸を覗きこんでいるからである。

「うん、そうだよ。あの人はガンテツさんって言ってね、有名なポ  
ール職人なんだ。」

ツクシくんは、あの老人の説明をする。どうやら、ガンテツさんと



いうみたいだ。

「でも、なんでおじいさんがあんなところにいるんだろう？」

リナは、どうも不思議がっているようだ。

僕も、確かにそう思う。

「ガンテツさんの家にもヤドンがいたから、探しにきたのかもしれない。ここはボクが話を聞くよ。なんたってガンテツさんは頑固だからね。」

ツクシは、そういうと、ガンテツさんのいるところまでスタスタと歩いていった。

「ガンテツさん、ここで何をしていますか？」

「ああ、ツクシくんかい。何をしていますのかって？ヤドンを探しに来たに決まっておるだろう！見てわからんかね？」

ガンテツさんは、迫力のある大きな声でいう。

やはり、消えてしまったヤドンを探そうと思っているようだ。

「狭い井戸に単独で探しにいくなんて危険ですよ！ここはボクたちに任せて下さい！」

ツクシくんは、そういいながらガンテツさんに詰め寄る。

「ボクたち……というのは？」

ガンテツさんは、そういうと、僕たちを一瞥する。

「わたし達にお任せ下さいっ！」

「ちゃんと事件は解決するぜ！」

リナやユウヤさんは、目が合うと意気込みを語ったが、僕は、言葉が出ずに、ひきつった笑顔を向けた。

「ふん！最近の若者はちゃらんぼらんしておる！ツクシくんよ、こんな頼りなさげな連中で大丈夫なのかね？」

ここで言葉を発したのはガンテツさん。強烈な言葉に僕は、思わず目を見開く。

「ちゃらんぼらんってひつどーい！おじいさんのほうが危なっかしいし、頼りないよ！」

「ええい！うるさいわ！少しは老人をいたわろうとは思わないのかね！こんな事件、解決するのにはわし一人で十分よ！早くあっちにいった！」

なんとということが、リナとガンテツさんが、口げんかをしているではないか。

そんな場合ではないというのに。

僕には止められそうにはないし、どうしよう。

「ツクシから何かいってやったら、おさまるかもしれないんじゃないかねの？」

僕の隣にいたユウヤさんが、ツクシくんにむかってそういった。ガンテツさんを止められるのは、ツクシくんくらいだと思っしね。

「そうですね。ボクがガンテツさんを説得します」

ツクシくんは、そういい残ると、リナたちの間に入っていった。

「ガンテツさん！彼女たちは、ボクに勝ったトレーナーなんです。だから、ボクにとっては心強いんですよ。ガンテツさんからみたら頼りなく見えるかも知れないですけど……ボクを信じて下さい！」  
ツクシくんは、必死になりながら、ガンテツさんにむかって説得の言葉をいい放った。

「……ツクシくんがそういうなら仕方あるまい。だが、わしは事件を解決出来なければ認めてやらんからな！ふんっ！」

ガンテツさんは、その言葉を吐き捨てて、ズカズカと歩いていった。

はあ、これで一件落着かな。

「それにしても、ヒッドイおじいさんだったよ！」

リナは、しかめっ面でいう。僕としては、リナも相当失礼なことをいつていたと思うけど……。

「まあともかく、気を取り直して井戸に入ろうぜ」

ユウヤさんは、そういうと、一足先に、井戸の中に入っていった。

「ボクたちも追いかけよう！」

「「うん！」」

ツクシくんの言葉に、二人して返事を返したあと、僕たちは、ヤドンの井戸に入ってしまった。

ポチャン、ポチャン……。

水の音が、暗い井戸に響き渡っている。  
その音は、僕には不気味に聞こえる。

「意外と広いんだねー！」  
「うん、そうだね。実はボクも初めて来たんだ。ヤドンの井戸がこんな場所だってことは知らなかったよ。」

リナと、ツクシくんは、そんな中で会話をかわす。  
リナは、怖いもの知らずだから、お気楽そつな声をしている。

「この様子からすると、あまり人が立ち寄る場所ではないようだな。だが、こういう場所ほど怪しい。もう少し奥にいったらみるか。」

「そうですね。いきましょー！」

こうして、僕たちは、さらに奥に進んでいった。

しばらく奥に進むと、広いフロアが見えた。

そこは、行き止まりになっているようだったが、ただの行き止まりではなかった。

なんと、そこには、大量のヤドンと、コック帽を被った女性らしき人物がいたのだから

第六十話 搜索！ヤドンの井戸（後書き）

エイト 最後の人一体誰……？

それは、次回のお楽しみということぞで。

第六十一話 動きだすもの（前書き）

今回はわりと早く更新出来ました。

エイト達が遭遇した女性は、一体何者なのか！？

それでは、どうぞ。

## 第六十一話 動きだすもの

「あなたは……誰ですか？」

僕は、目の前にいるコック帽をかぶった女性に恐る恐る尋ねる。コック帽をかぶっているということは、シェフである可能性が高いとは思うのだが、こんな人が立ち寄りそうにない場所にいるのは、どう考えても怪しすぎる。

それに、やはり、山積みになっている大量のヤドン達が気がかりでしょうがない。

もちろん、僕以外の皆も不審そうな顔をしているのだが。

「フフツ……私が誰かって？高級料理店のシェフよ。見て分からないかしら？」

すぐに、女性は口を開いた。彼女は、やはり自分はシェフだといっているみたいだけど、それを信じてもいいのだろうか。

「ねえ、本当にシェフなの？じゃあ隣のヤドンたちは何！？」

リナが、山積みになっているヤドンたちを指差しながらいう。

よく見てみると、ヤドンたちは皆弱々しいではないか！

「あら、お子さまはやっぱり”ヤドンのシッポ”をご存じないかしら？」

女性は、僕たちを小馬鹿にしながら、クスリと笑う。



僕には、その顔が異様に憎たらしく見えた。ただ、実際、僕たちはヤドンのシッポを目にしているんだよね。

「残念ながら、俺たちはヤドンのシッポがどのような代物であるか  
つてことは知っているさ。それよりも、あのヤドンたちの姿はなん  
だ!? 一匹たりともシッポが無いじゃねーか! これは、オマエがや  
つたものなのかよ!」

ユウヤさんが、叫ぶように言葉を発する。

声は荒ぶり、怒りが露になっっているのがよく分かる。

ユウヤさんがそういつて初めて気づいたのだが、ヤドンのたちは、  
弱っているというだけでなく、シッポは、皆無かったのであった。

「ヤドンのシッポを料理として出すのだから、シッポを切るのは当  
たり前の事よ。それに、ヤドンのシッポは再生するのだからいくら  
採っても大丈夫なはずよ」

女性は、そっぴい捨てて僕たちから目をそらす。

「……いいや、あなたは間違っています」

ツクシくんが、一歩前に出ながらいう。

「あら、いったい何がおかしいのかしら?」

女性は、瞬時にいい返す。

見ていて思うけど、強気な人だよなあ。

「ヤドンのシッポは許可がありませんと採取出来ません。それに、

「ここ最近採取の許可をおろしたという報告も聞いてませんか！  
あなたは十分おかしいですよ！！」

ツクシくんが、確信をつくようにいう。

ツクシくんは、ジムリーダーであるから、そのところも詳しいと  
いう訳なのだろう。

ということとは……。

「あなたは無断でここに立ち入ってヒワタウン周辺のヤドンを集  
め、ヤドンのシッポを採取したってことですよね？……あなたは何  
者なんですか！」

僕は、声を張り上げていった。

今の話からいくと、この女性には何かしらの思惑がある。だから、  
それを暴かなければならない。

リナたちも、険しい目付きで、女性を見ている。

「フフフフ……ハハハハ……！」

女性は、しばらく黙っていたが、突然高笑いをし始めた。

「おいッ何がおもしろーんだよ！」

ユウヤさんが、鋭い口調でいいう。

「おもしろい……ねえ。というよりは驚いたっていうべきかしら。  
まさか、お子さま集団に見破られるだなんてね」

女性は、うっすらと笑みを浮かべながら、そういった。

「それで、バレたからには正体を明かしなさいよ！」

リナが、女性を指差しながらいう。

リナが、怒鳴るような声をあげているのは初めてだ。

「いいわ。教えてあげる。私は、ダーク・ヴァイスの幹部の一人、名前はビオラ。あなた達がいう”悪の組織”とってもらって構わないわ」

女性　ビオラは、コック帽と、料理服を脱ぎ捨てた。  
そして、そこに露になったのは、漆黒の衣装であった。

この世界は、まだ平和といい切ることは出来ない

第六十一話 動きだすもの（後書き）

悪の組織、ダーク・ヴァイス。

悪の組織が出てくるにここまでかかったよ 遅ッ

お正月に、少しオリジナルになるといったのは、ここだったという訳です。

第六十二話　　ダーク・ヴァイスのピオラ（前書き）

久しぶりの投稿になってしまいました。

というのは、ちょっと行き詰まっていたからですかね……。

というわけで、最新話も短いですがどうぞ！

## 第六十二話　ダーク・ヴァイスのピオラ

「ダーク・ヴァイス……」

「悪の組織……」

僕たちは、目の前にいる女性　ピオラの発した言葉に驚き、呆然としていた。

「……ロケット団に代わる悪の組織が活動していたんですね」  
ツクシくんが、少しいいにくそうに言葉を発する。

「ええ。その通りよ。数年前にロケット団が解散したことで平和になったとも思ったのかしら？」

ピオラが、ニヤリと笑みを浮かべながらいう。

ロケット団。数年前まで、ポケモンをつかって悪事を目論んでいた組織だ。

僕は、まだスクールに通っていた頃だから、あまり知らないんだけどね。だから、多分僕たちの中でロケット団をじかに知っているのは、ツクシくんぐらいだろう。

「おい」

僕が、そんな風に思っていた時に、ユウヤさんの声が聞こえた。普段のおちゃらけた声とは違って、低く、野太い声だ。

僕は、鳥肌がたった。

「ダーク・ヴァイスってのはロケット団と接点があるのか？……答  
えろよ！」

ユウヤさんは、ビオラに近より、怒鳴ったようにいう。

「さあ？そんなこと知らないわよ」

ビオラは、そんなユウヤさんの言葉をあっさりと流す。

実際のところ、悪者が簡単に情報を漏らすとは思えないしね。

「それよりも、ヤドンのシッポをどうつかうのか、わたしはそれが  
知りたいよ！」

リナが、ヤドンたちを一瞥して、ビオラに向きなおる。

「そんなこという必要はないわ。それに、あなたたちのようなお子  
さまにはいったところでも何にもならないわ」  
「ビオラは、そういう捨てる。」

僕たち、子どもだからって相当舐められてるみたいだ。

「舐めてもらっちゃ困りますよ。ボクは、ジムリーダーですし、ボ  
クに勝利したトレーナーたちもいますからね！」

ツクシが、誇らしげにいうと、僕たちは、頷く。

「ふーん。でも、所詮ジムバッジを何個か持っているだけでしょう。」

そんなことじゃ幹部の私に勝てるわけないわ」

ビオラは、相変わらず余裕そうにしている。

「それは、バトルしてみないと分からない！ビオラ、ポケモンバトルだ！……僕たちが勝つたらヤドンのシッポは諦めてもらおうよ！

」

ビオラの言葉に対して、僕は叫び、リナたちは戦闘体制に入る。

「へえ。バトルする気なの？……ふふふ、残念ね。私はバトルを受ける気は全くないわ」

ビオラがサラリという。

「ちょっと待てよ！……ここは正々堂々とバトルで決着を着けるべきだろ！？」

」

ユウヤさんが、納得がいかないことを訴える。

「私は、ヤドンのシッポを採取するためにここに来たのよ。それももう達成したこと。それに、どうせあなたたちに勝ち目は無いのよ！もうここに用はないわ！」

「でも、ここは一本道だから脱出は出来ないよ！」

リナが、ビオラを指さしながらいう。

「ふふふ、普通はそうよね。でも、私は普通ではないわ。ネイティオ、行きなさい！フラッシュユー！！」

」



ピオラが投げたモンスターボールから、鳥のようだけど、なんだか不思議な感じのするポケモンが出てきて、突然、発光した。

ピカ                    ツ！

「まぶしいッ！！」

僕たちは、フラッシュの光のせいで、目を閉じてしまっていた。

そして、光がおさまった頃には、ピオラの姿は跡形もなく消えてしまっていた。

そう、逃げられたんだ

第六十二話　　ダーク・ヴァイスのピオラ（後書き）

バトルシーンを書いていたら、いっこうに話がすすまないの、こ  
ういう形になりました。

さて、ようやくヒワダタウンを出発できそうです。

それでは、次回もお楽しみに！

感想などお待ちしています！

第六十三話 事件のあとの波乱（前書き）

三週間以上も空けてしまった!!

はい。今までで一番間が空いてしまいました。

地震のせいだと思われるかたもいるかと思いますが、私の住んでいるところは被害を受けていないので、そうではないです。

はい、前置きはこのくらいにしておきます。

それでは、どじぞー！

## 第六十三話 事件のあとの波乱

「結局逃げられちゃったね……」

そんな風に落胆の声をあげるのはリナだ。

そう、僕たちはダーク・ヴァイスという組織の幹部に遭遇したのだから、あっけなく逃げられてしまった。

それに、高級食材であるヤドンのシツポも大量に採取されてしまっている。

幸い、ヤドン自体はそのままの状態であったのだが、シツポを斬られた状態が痛々しい。

「ツクシくん、ヤドンたちは大丈夫なの？」

僕は、心配になって尋ねる。

「確かに見ているのはつらいけどね、ヤドンのシツポは再生するんだよ」

ああ、そうか。そういわれてみると、いつかユウヤさんが同じことをいっていたような気がする。

「それならよかったよ。でも、これからどうする？」

僕がそういうと、辺りは一気に静まりかえる。

やはり、重たい空気が流れているのだろう。

「……ボクは、ヤドンたちを保護してヒワダの皆さんに事情を説明

します。だから、エイトくんたちは先にポケモンセンターに戻って  
もらっていいよ」

そんななか言葉を発したのはツクシくんだ。

その言葉からは、ジムリーダーとしての責任があるんだ、という気  
持ちが込められているように思えた。

「ツクシくんは何でも押しつけるなんて出来ないよ！わたしもついで  
ていく！」

リナが、納得できないといったような顔をしながらツクシくんに迫  
る。

「リナのいう通りだよ。僕も一緒にいかせてほしい」

リナに続いて、僕も頼み込む。

「じゃあ三人でいってこい。ツクシもそれでいいよな？」

ユウヤさんが口を開き、ツクシくんに了承を得ようとする。

「エイトくんたちがいっていうなら一緒に来てもらっていいよ」

「やったーっ！」

リナは、その言葉を待ってましたといわんばかりに、はしゃぎだす。

「ユウヤさんは、三人でっついていましたよね？ユウヤさんはどこに  
いくんですか？」

僕は、先ほどのユウヤさんの言葉に疑問をもって、尋ねてみる。

「ああ、俺か。俺は警察に行くつもりだ。お前らが行くよりも俺がいった方がいいだろうよって思ってたな」

僕に向かって笑いながらいうユウヤさん。

「ここは、頼ってもいいのだろうか。」

「そ…それは、ボクの仕事ですからいいですよ！」

そういいながら、ツクシくんは、ユウヤさんを遠慮がちにみている。

「いやいや、気にすることないぜ！じゃあ行ってくるな！」

ユウヤさんは、そういい残すと風のように駆けていってしまった。

「なんか申し訳ないなあ……」

ツクシくんが、僕たちを見ながらいう。

「まあ、ユウヤさんのことだから、気にしないでいいんじゃない？」

「

「帰ってきたらお礼をいえばいいしね」

僕たちは、次々と言葉を返す。

僕もリナもユウヤさんと出会ってからまだ何日かしか経っていないけれど、ユウヤさんがどんな人であるのかは大分わかってる。

だからこそ、このように返すことが出来たんだと思う。

「うん。そういうことにしておくよ。じゃあ、ボクたちも行くか」

「

「うん！行こーうっ！」

こうして、僕たちは、ヤドンたちをポケモンセンターに連れていき、ヒワダタウンの人たちに事情を説明して回ることになった。

「あとは、ガンテツさんのところだけだね」

僕たちは、ヤドンたちをジョーイさんに預けて、事情を説明して回っていた。

それも、あとはガンテツさんのところだけになっていた。

「ガンテツさん怒ってないといいんだけどな……」

僕は、不安げな顔をして、リナを見る。

この間の口げんかがどうも気がかりだ。

リナは、何かいいたげだったが、プイツと顔を背けた。

「エイトくん、リナちゃん。ガンテツさんの家に着いたよ。」

「じゃあ、ノックしてもらえないかな？」

僕は、ツクシくん に耳打ちする。

「ああ、この前のことがあるからね」

ツクシくんは、そっぴいながら、ドアに手を伸ばした。

コンコンッ

「ガントツさん、いらっしやいますか？ツクシです」

しばらくたってから、中から人が出てきた。

うん、間違いなくガントツさんだ。

「おお、ツクシくん。ヤドンはどうなったのかね？」

「ヤドンはみーんな無事だよ！シッポをみんな採られてただけだね」

ツクシくんに向かつての質問であったのにも関わらず、リナがおおざっぱに答えた。

「おまえは、この間のちゃらんぽらんっ！何しにきた！」

ガントツさんは、リナを指差しながら叫ぶ。

あれ？いつの間にか”ちゃらんぽらん”がリナを指す言葉になっているような……。

「はあ！？まだちゃらんぽらんっていうんですかッ！あいかわらず失礼なおじいさんなんだからー！」



「何をいつておる！お前の方がよっぽど失礼じゃ！」

あーあ。予想通りの展開になってしまったよ。

僕の手には負えないような気がしたので、僕は、ツクシくんにごうにかして、と目で訴えた。

「リナちゃんも、ガンテツさんもスト　　ツプッ！」

ツクシくんは、今でも、ギャーギャーもめている二人の間について叫んだ。

「リナ！今はそんなことしてる場合じゃないよ」

僕は、そういいながら、リナの腕を掴む。

「エイト！邪魔しないでよ！」

と、リナは、地団駄をふんでいたが、僕は、それを無視して連れていく。

「ガンテツさんも落ち着いて下さい！」

「何を！こんな状況で落ち着けるわけなからう！」

ツクシくんは、ガンテツさんを説得しようとしているけれど、ガンテツさんは、ヒートアップしていて聞く耳をもっていない様子。

どうしようもない状況になってしまったな。

僕は、心の中でため息をついたのだった。

結局、ガンテツさんを説得するには数時間かかった。

そのあとは、ツクシくんが丁寧にヤドンの井戸でのことを話して、僕たちは、ポケモンセンターに戻ることにした。

ポケモンセンターで、僕は、リナをこっぴどく叱ったが、反省の色を見せていない様子だったので、思わず本物のため息をついた。

今日は、疲れたからヒワダを出るのは明日になりそうだ。

僕とリナは、ツクシくんと別れると、宿泊するための部屋に向かったのであった。

第六十三話 事件のあとの波乱（後書き）

何だかんだいって長引いてしまいました。

ヒワダタウンを旅立つのは次回ですかね……？

第六十四話　ウバメの森に潜む者（前書き）

皆さん、お久しぶりです。

エイト　なんか最近さ、いつも”久しぶり”っていつてない？

ギクツ………！

確かに、そうかもしれないけどさ、いやあ、学年が上がるとかなり忙しくなっちゃってます……。

とりあえず、これからはしばらく週1更新を目指します。

それでは、どうぞぞ！

## 第六十四話　ウバメの森に潜む者

「朝食も済ませたことだし、そろそろ出発かな」

「うん！」

時はたつて、今は朝。

僕たちは、朝食を食へ終わって、ヒワダタウンを出発しようとしている。

なんだけど、気がかりなことが一つあるんだよね。

「そういえば、ユウヤさん、戻ってこなかったよね……」

リナが、小声で呟く。

そう、まさにそれだ。結局、昨日ユウヤさんはここに帰ってこなかったのだ。

ユウヤさんは、僕たちよりも遥かに強いけれど、やっぱり心配だ。

「連絡とか入ってないのかな？」

僕は、ポケギアをバッグの中から手探りで探し、画面をしてみる。しかし、連絡があつた痕跡はどこにも見当たらなかった。

「どうだった？」

「連絡はきてないみたいだよ」

リナが、僕のポケギアを覗きこもうとするのを制止して、僕はいう。

「そういつことだったらさ、今から連絡しちゃうおつよー!!」

「ち…ちよっと待ってっ！」

リナは、僕の言葉も聞かずにポケギアをとりだし、操作をし始めた。

が、その時

ブルルルルル…

僕のポケギアが、大音量で鳴り出した。

誰からのものなのかを確認したが、それは、紛れもなくユウヤさんからのものであった。

「もしもし、ユウヤさん！今どこにいるんですか？」

『おいおい、そんなに興奮するなって！よし、今からいつことをよく聞いてくれ。』

「今から…いつこと…ですか」

『ああ。そうだ。…じゃあいうけどよ、まず、俺には”やらないといけないこと”が出来てしまったんだ。だから、お前らに付いていくことは出来ない。だから、俺と会う前みてーに二人で旅を続けてくれ。』

「え、今なんつて…!？」

『じゃあ、リナにもよろしくな!』

ガチャン、ツーツー…

ユウヤさんは、そういって、一方的に電話をきってしまった。

「ユウヤさん、ユウヤさん！！」

僕は、対応されるはずはないとわかっていながらも、ひたすら叫んでいた。

「いったい何っていつての！？」

そんな僕の様子を見たリナは、怪訝な顔をして尋ねてくる。

「ユウヤさんには、”やらないといけないこと”が出来たみたいで、僕たちと合流出来ないらしいんだ」

「え、それだけ？」

「うん」

僕が、即答すると、リナは、目を丸くする。けれど、すぐに、

「ユウヤさんのことが気になるのは確かだけど、私たちは次の町に向かおうよ！」

といて、ヒワダタウンの出口に突っ走っていった。

やれやれ、ユウヤさんがいなかったら大変になりそうだ。

僕は、そう思いながら、リナを追いかけていった。

ん？ちょっと待てよ……。

一番重要なことを忘れてた。

食費、べんじょ……。

「うわぁ！すっごく広いね〜〜！」

ヒワダタウンを出ると、ウバメの森という広大な森が、僕たちを待っていた。

周りはどこをみても、木、木、木。

それに、空が晴れているのに関わらず、回りは薄暗く、涼しさを感じる。

下手したら、道に迷いそうだな……。

あまり、考えたくないけれど、そう思ってしまう自分がいる。

「とりあえず、マップの通りに進もう」



「うん！そっだね！」

僕の言葉に、リナはすぐにうなずく。

今のリナは、いつもよりもおとなしい。

やはり、広大な森ではしゃぐと道に迷いかねないということは分かっているってことだね。

僕は、そんなことを考えながら、ポケギアを操作して現在地を確認する。

「エイト、早く早く！」

リナは、待ちきれないのか、うずうずしている。

前言撤回だ。リナは、今にも飛び出しそうにしているではないか。このままだと僕を置いて先へ

「リナ、少し落ち着いて！先を急ぐ気持ちは分かるけど、迂闊に動き回ったら、道に迷うかもしれない」

「大丈夫だって！勝手に遠くにいったりなんかしないんだから！」

リナは、顔をふくらませながらいう。

返ってきた返答やしぐさが、予想とは少し違っていたことから、さすがに心配のしすぎだったかなと思った。

「ごめんごめん。そういつつもりじゃなかったからさ。さて、ここは、右に行くみたいだから行こうか」

「分かった！じゃあ、さっそくLet's go~~~~!!」

こうして、僕たちはさらに森の奥深くに入っていった。

「あれは、何なんだろう……?」

ウバメの森を進んでいると、前方に何かが見えてきた。

「ここから見ても分からないよ。もっと近くに行こうよ!」

「ちょっと、リナ!」

僕は、リナにグイッと腕を掴まれ、そのまま前方にある”何か”の方へいく形となった。

が、突然リナの足がピタリと止まった。

そして、僕の腕を離して一歩後退りをする。

僕は、その行動が気になって、前方を見た。

「!?!?!」

その瞬間、僕の感情は、驚きというものでいっぱいになった。

それは、前方にある”何か”      もと、小さな祠の前には、赤  
髪少年、シルバーが立ちつくしていたからであった。

第六十四話　ウバメの森に潜む者（後書き）

シルバー（ライバル）って、ヒワダタウンで出てくるよね？

はい。ゲームでは、そうなのですが、さすがにエイトたちがヒワダタウンに居すぎてしまうので、ウバメの森で会う形をとりました。

さて、次回はどうなることやら……。

第六十五話　ウバメの森！エイトVSシルバー（前書き）

またしてもお久しぶりです。

やっと更新ですが、今回は短いです。

リナ　作者に悪気はないみたいだから、許してあげてね。

エイト　今回は、タイトル通りみたいだから、そういうことでよろしくね。

それでは、どうぞぞー！

## 第六十五話　ウバメの森！エイトVSシルバー

「お前らに聞きたいことがある」

見覚えのある赤髪の少年　シルバーは、僕たちを見つけると、即座に口を開いた。

「聞きたいことって……何？」

僕は、シルバーを睨み付けながら言葉を返す。

彼にいい印象はこれっぽちもないので、自然とそうなるわけだ。

「単刀直入にいうが、”ダーク・ヴァイス”という言葉に聞き覚えがあるか？」

「ダーク・ヴァイス……！」

僕とリナは、声をそろえて叫ぶ。

僕の中ではダーク・ヴァイスという組織はとても印象的だったため、つい動揺してしまう。リナもきつと同じ心境だろう。

「その様子だと知っているみたいだな。痛い目にあいたくなければ、ダーク・ヴァイスの情報を吐け」

シルバーは、そう吐き捨てて僕たちを睨む。

「ホントそういつとこ気に入らないよ！そう簡単にいつとでも思ったの？」

「チツ……調子に乗りやがって」

「調子に乗ってるのはどっちよ!？」

リナは、ケンカ腰で、シルバーと口論をし始めている。

まあ、リナは口は達者なほうだから、なかなか引き下がらないとは思うけど、止めに入らないと、永遠と口論をしていそうだ。

僕が止めないと……。

「シルバー。ダーク・ヴァイスの情報が欲しいなら、僕とポケモンバトルをしよう。もしお前が勝ったら、いさぎよく情報を教えるよ」

「エイト！」

「リナ、止めなくても大丈夫だよ。さあ、バトルするのか?しないのか?」

「フツ、そんなにオレの強さを知りたいのか?……いいだろう。受けてたつ」

僕たちは、その後お互いに距離をとり始めた。

「バトルは、1 vs 1。相手のポケモンを先に戦闘不能にしたほうの勝ち。文句はないよね？」

「ああ。構わない」

僕は、手短にルールを提示し、シルバーは、それを了承した。

「じゃあ、今からエイト対シルバーのポケモンバトルを始めるよ！」

リナの声で、バトルの幕が開けた。

「いけ、ヒノアラシ！」

「ヒノヒノヒノー！」

「コイル」

「ビビビビ！」

「コイル？……見たことがないポケモンだよ！」

リナが、はしゃぎたてるので、僕は、ポケモン図鑑を起動する。

コイル　じしゃくポケモン

左右のユニットから電磁波を出して、空中を移動する。電気を食べるポケモンである。

図鑑の説明からしたら、電気タイプで間違いないかな。



「先攻はもらっぞぞ！コイル、スパーク」

「ビビッ！」

僕が、正面に向き直ると、シルバーは、早速攻撃を仕掛けてきた。電気の火花が、溢れんばかり飛び散ってくる。

「ヒノアラシ、スパークを避けながら火炎車！」

「ヒノーツ！」

ヒノアラシは、迫り来る電気の火花を避けながら、コイルのほうへ向かっていく。

「近づけるな！金属音！」

「ビビビビッ！」

「うっ！」

金属のきしむ音が、僕たちを襲う。

僕は、ひとたまりもなく思って、つい声をあげてしまった。

「ヒノーツ……」

ヒノアラシも、辛そうにしている、今にもまとっている炎が消えそ  
うだ。

「コイル、ソニックブーム」

「ビビッ！」

ブーメランのような形をしたエネルギーが、高速で向かってくる。まずい、これだと避けきれない……！！

「ヒノーツ！」

僕が、何か指示を出す前に、ソニックブームは、ヒノアラシに命中していた。

「ヒノアラシ！大丈夫？」

「……ヒノーツ」

僕は、心配になってヒノアラシのほうへ駆け寄る。

ヒノアラシの息は、乱れてはいるものの、まだまだ大丈夫のようだ。

「一気に片をつける。コイル、電撃波！」

シルバーの指示が出て、バトルも大詰めであったのだが、

「「「！……」」」

僕たちの目の前に、誰もが予想できるはずのない人物が現れたのであった

第六十五話　ウバメの森！エイトVSシルバー（後書き）

一体誰が来たのか？

わかる人には、わかるかもしれません！

さて、活動報告の方で、アンケートをやっていますので、よろしければ参加してやってください！！

エイト・リナ　よろしくお願いします！

第六十六話　ウバメの森の舞妓さん（前書き）

ユウヤ　おっ2日連続投稿じゃねーか！珍しい珍しい！

はい、そうですね。GWは出来るだけ頑張ろうと思ひまして……。

ユウヤ　おおーじゃあ早く俺の出番の回まで進めてくれよな！

うーん……。そう簡単にいくかなあ。

ユウヤ　なんだよそれ！？訴えるぞ！

いや、訴えられても困るって！

ではでは、続きをどうぞ！

第六十六話　ウバメの森の舞妓さん

「迷子の迷子の舞妓はん、森で迷ってさあ大変」

「え　　ッ！！」

僕とリナは、思わず叫んだ。なぜなら、僕たちの前に現れたのは、いつしか出会った舞妓さんであったからだ。

「チツ、バトルは中止だ！今度会った時には情報を吐いてもらうからな！」

シルバーは、居場所が悪くなったと感じたのか、コイルをモンスターボールに戻して、森の奥へと消えてしまった。

「あのお……えっと、キキョウシティで会ったことありますよね？」

シルバーが消えていった方角を僕が見ているとき、リナは、遠慮がちに舞妓さんに話しかけていた。

「ん？なんどす？うちに見覚えがある？キキョウの町で？それは気のせいと違いますかー？」

「うーん……確かに会ったとおもっただけだなあ。エイトもそう思うでしょ？」

「えっ！何？舞妓さんに会ったことが会ったよねって？確かに会ったとは思っけどな」

僕は、いきなり話を振られたため、しどろもどろに返事をする。  
舞妓さんに会ったのは、キキョウシティを発する日だったよな。  
それに、なぜかウツギ博士にもらったタマゴのことを知っていて…  
…。

「ところであんさんたち、森の出口はどちらか教えてもらえまへんやろつ？」

「えっ出口ですか？それなら、ここから左に行くんじゃないかな？」

「地図で見ましたから、間違いないですよ」

僕は、考えことを止め、曖昧に答えるリナを助ける形で口を開いた。

「おおきに〜ほな、お先に失礼するどす〜」

舞妓さんは、そういうと、ヒラリと着物をひるがえして森の出口へと向かっていった。

「あ〜……行っちゃったね」

「うん」

シルバーも舞妓さんも去っていき、残された僕たちは、しばらくの間呆然としていた。

「そういえば、舞妓さんを見て思い出したんだけど、ウツギ博士にもらったタマゴってどうしてるの？」

僕たちは、森の出口へ向かって歩きながらたわいもない話をしていて、たまたまタマゴの話になった。

「ああ。ヒワダタウンにいるときには、ポケモンセンターで預かってもらってたんだ。僕も毎日様子を見ていたけど、まだまだ生まれるのには時間がかかるかもしれないって」

「へえ〜。そんなこと全然知らなかったよ。わたしにも教えてくれたらよかったのに」

「ごめんごめん。そんなに気に止めてもないんじゃないかなあって思ってたからさ……」

「何よそれーっ！」

いつものように、リナが、ギャアギャアと叫び、僕は、それを見ながら微笑む。

旅を始めた頃は、正直な話、少しうるさいなあとも思っていたけれども、今は、それが微笑ましいと感じるようになってる。

この旅で、僕の心境も何らかの変化があらわれているのだろうか。

「エイト、あそこが出口じゃない？先にいっちゃうよー！」

確かに、前方に光が差ししているところがあり、そこが森の出口だと

いうことも一目で分かった。

「僕も行くから、少しは待ってよ！」

「わたしを怒らせた罰よ！先に行くもんね〜〜！」

「ちょ…リナ！」

リナは、僕の言葉を聞かずに、身軽に駆けてゆく。

僕は、運動が苦手だというわけではないが、さすがにあのリナには敵わない。

自然豊かなハウエン地方のヒワマキシティで育っているのだから、あんな超人的なんだろうな。

僕は、そんなことを考えていたが、一度立ち止まって、リュックに入っているタマゴを見る。

カタンッ

タマゴは、僕の目の前で確かに揺れた。

もしかしたら、このタマゴが孵化するのは、そう遠い日のことではないのかもしれない。

おっと。このままでは、完全にリナとはぐれてしまう。

急いで合流しないと！

僕は、リュックをからいなおすと、薄暗い森の中を一点だけ差す光のほうへと走っていった。





第六十六話　ウバメの森の舞妓さん（後書き）

はい。今回も短いですね。

なんだか手抜き感を感じられている方もいるかもしれませんが、早く先を進めたちのでこうなりました。

エイト　しつこいようだけど、ただ今一周年記念アンケートをやってるから、参加してあげてください。

リナ　このままだと、全然集まってないみたいだから、作者がへこむかもね。

エイト・リナ　ご協力よろしくお願いします！！

あ、感想なども待ってます！  
それでは。

第六十七話　コガネシティ、思わぬ再会（前書き）

GWに思ったより更新できませんでした。すみません。

さて、今回からはコガネシティ編スタートです！

## 第六十七話 コガネシティ、思わぬ再会

ウバメの森を抜けた僕たちは、その日のうちにコガネシティに到着していた。

コガネシティ 人呼んで”人とポケモンが行き交う発展の大都会”。その通り、ここにはデパートやリニア、ラジオ塔などがあり、ジョウトーの大都会であることは一目瞭然だ。きらびやかな町並みは、訪れる人を魅了にする。

「うっわあ~~~~どこをみてもビルだらけ！大都会ってこんな感じなんだ！！」

「そっか。ハウエンのほうだと、珍しいんだよね？」

「うんうん！ハウエンにも、もちろんデパートはあるけど、ここまでは大きくないからさ。すごいビツクリ！」

リナは、目をキラキラと輝かせながら、周りのビルを見渡している。僕は、ジョウトの人間だし、コガネシティに訪れる機会もあったため、驚きはしないけど、リナにとっては、大都会は新鮮なものなんだろう。

「リナ、忘れないうちにジム戦の予約に行かない？」

「あ、そうじゃん。ジム戦のことすっかり忘れてた！行こう行こう！」

「うん、決まりだね。さっそくジムの受付に行こ……」

クイツ！

「わあっ！」

さっそくコガネジムに向かおうと一歩踏み出そうとしたとき、僕は、誰かに服を引っ張られ、危つくこけそうになったが、なんとか踏みとどまる。

それにしても、誰がこんなことを……と思っていたら、

「久しぶりだな、エイト、それにリナ！」

という、聞き覚えのある声でした。

「ク…クイナ！？」

そう、僕たちの目の前には、キキョウシティで出会ったポケモントレーナー、クイナであった。

「ちょっと！いきなり現れたらびっくりするじゃない！」

「いやいや、リナより僕のほうがびっくりしてるよ」

「ごめんごめん！久しぶりに会えたからつい嬉しくってさ〜〜！  
」

「ちょっと、なんでそこでやけるのさっ！」

「え？そんな顔に見えるか？気のせい、気のせいだって」

場所はかわって、今僕たちはコガネデパートの中にあるカフェで、三人してジュースを飲んでいるのだが、なぜか、クイナはにんまりしているし、リナは、いつも以上にあわただしい。

うーん、僕がなにかしたのかなあ……。

そんな風にも思っただけど、考えてもわからないと判断して、気にしないようにしようと決めた。

でも、このままロゲンカに発展したら困るから話を変えないとだな。

「そうだ、クイナは今バッジは何個持ってる？」

「おっ？あたしは三個だよ。昨日コガネジムに勝利したのさ！」

僕が話を振ると、クイナは、思った通りそれに食らいついてきた。だけど、バッジは三個。僕たちより多いじゃないか！

「えーっ！コガネジムもう勝ってたんだ……！」

ほら、リナがあんぐりしているよ。  
でも、やっぱり、いつの間にか追い抜かされていたとなったら悔しいよ。

「あれ？その様子だと、エイトたちはこのジムはまだみたいだな」

「うん、だってまださつき着いたばかりだし」

「そうそう！それに、キキヨウシティを出たあとは、ポケモンハンターに遭遇したり、いかにも悪の組織って感じの人にあったり大変だったもん！」

「ポケモンハンターに悪の組織？……ずいぶん信じがたい言い訳じゃん。リナ、頭大丈夫？」

「ポケモンハンター”やら”悪の組織”やらは、僕たちとは無関係な言葉だと思われたみたいで、クイナはクスリと笑ながらリナをからかう。」

「ちょっと！わたしをバカにしないでよ！」

案の定リナは、ムツとしてしまったので、

「確かに信じられないのはわかるけど、本当のことなんだよ」

と助け船をだした。

「ふーん。エイトがいうんだったら信じてあげるよ」

まあ、僕がいったほうが信憑性があるってことなのかな。

「だってさ、リナ」

「もう！エイトまでバカにしないでよ！！」

リナは、クスリと笑う僕とクイナを見ながらよりいっそうムツとした。

結局、僕が火に油を注ぐ形になってしまったな。

僕は、リナに対して悪かったなと思いながら、残りのジュースを飲むのであった。

「そうだ、せっかくだからジム戦の前にあたしとポケモンバトルをしないか？」

カフェを出て、僕とリナがコガネジムの予約をしたあと、突然クイナがそういった。

「そっか！クイナとはバトルしたことないもんね！」

「そうそう！エイトもいいだろ？」

「もちろん」

「それじゃあ、それで決まりだね！さっそくバトルしようよ！」



喜び回るリナは、駆け出そうとするが、クイナの

「バトルフィールドの場所知らないだろ？」

という言葉で静止した。

「リナ、ポケモンバトルは逃げないんだから、急がずに行こうよ」

「はあ〜い」

さて、クイナはどんなバトルをするのだろうか。

僕の心のなかでは、ウズウズした気持ちが込み上げてくる。

そんな気持ちを持ちながら、僕たちはバトルフィールドへと向かうこととなったのであった。

第六十七話　　コガネシティ、思わぬ再会（後書き）

クイナ　　やっほー！久しぶり！クイナだよ

はい。再会した相手はクイナでした。

本当、彼女の登場は久しぶりですよね。

念のため、キキヨウシティで会った時の回を読み返したのですが、内容が悲惨でしたね。

今もあまり進歩していないような気がします（笑）

さて、今回はクイナとのバトル、それに、コガネジムも控えていますので、バト続きになりそうですね。

私のほうがもつのか心配です。

第六十八話　VSクイナ！（前書き）

皆さん、半年ぶりです。

私を覚えていらっしゃるでしょうか。

もしも、私の小説を楽しみにしていた方がいらっしゃったらすみません。

何も連絡もなく放置してしまって申し訳ありませんでした。

それでは、反省はこれくらいにして本文をどうぞ！

## 第六十八話　VSクイナ！

「バトルするとはいつても、三人いっぺんには無理だね。どうする？」

「何いつてるのさ。あたしとエイトでバトルするに決まってるって！」

「はぁーッ！？」

誇らしげにいうクイナ、それに対してあり得ないともいいいたげなりナ。

二人を黙らせるには、僕が上手いことをいわないとだね。

「変則ルールで1VS2にするのはどうかな？」

「1VS2って、ハヤトさんとのジム戦のときと一緒ってこと？」

ここでいう1VS2というのは、一方はタッグを組み、それぞれが一匹ずつポケモンを繰り出し、もう一方は、一人で二匹のポケモンを繰り出すというバトル形式のことだ。

「うん、そうだけど……。クイナは大丈夫？」

「ああ。丁度いいや。私が二匹のポケモンで相手になるよ。なんたって、エイトとバトルしたかったからな！」

「もう！なんでわたしを含めてくれないのさッ！」

「なんだよ。リナとバトルするのも楽しみだよ。気にするなっ！」

「うーッ……」

クイナを見てプンプン怒るリナと、リナを見ながらケラケラと笑うクイナ。

楽しそうな二人を見てみると、僕も口がゆるんでくる。

「二人とも、そろそろ始めよう」

「うん！絶対負けないから！」

「いや。勝つのはあたしさ。手加減はしないからな！」

そうして、僕たちは、モンスターボールを構えた。

「いけ、ゴース！」

「ゴース」

「オオタチお願い！」

「タッチャーッ」

「おお！ゴースにオオタチかあ。……じゃあ、あたしはこうだッ！  
いけ、ニヨロモ、ハネツコ！」

「ニヨロッ」

「ハネーツ」

「このポケモンたちは？」

ニヨロモ おたまポケモン 内臓が透けて見えるほど皮膚が薄い。生えたばかりの足は歩くのがニガテ。

ハネツコ わたくさポケモン 風に流されて漂う。野山にあつまりだすと春が訪れるといわれている。

へえ、クイナはこんなポケモンたちなんだ。……楽しみだなあ！

「さあ、先攻は譲るよ！かかってこいッ！」

「じゃあ、遠慮なくいくよーッ！オオタチ、電光石火！」

「タッチャーッ」

「ニヨロモ、水鉄砲！続いて往復ビンタ！」

「ニヨローツ！」

ニヨロモは、突っ込んでくるオオタチをサラリと避けて、口から水を発射させ、そして続けて自身のシッポのようなものでオオタチを叩き始める。

「させないよ！ゴース、オオタチの前に出て！」

「ゴース！」

僕の指示で、ゴースはオオタチの前に躍り出て、代わりに攻撃を食らう。

「エイトツ、ナイス ナイス〜〜！」

リナが、僕の方を見ながら親指をグツと立てた。

そう、ゴーストタイプのゴースには、ノーマルタイプの技は効果がない。

コトネたちと特訓した回があっただな、と僕は心に止めておいた。

「それならば技のタイプを変えるまでさ！ ニヨロモ、水鉄砲！ ハネツコはタネマシンガン！」

「ニヨロツ！」

「ハネハネ〜〜！」

「ゴース、ナイトヘッドをぶつけるんだ！」

僕の指示でゴースは技を出す体勢になるのだが、間に合わずに二体分の攻撃をダイレクトに受けてしまった。

「ゴース、大丈夫！？」

「ゴ、ゴース……」

僕は、ゴースの身を案じて声をかける。

ゴースは、少し辛そうに答えたが、まだ戦えそうではある。

二体分の攻撃は辛かったけど、弱点ではなくてよかったよ。

「エイト、次はわたしが行くから後ろから援護して！」  
「タツチャーツ！」

横からリナとオオタチの勇ましい声が聞こえてくる。

さあ、僕たちも反撃しないとだね！

「オオタチ、電光石火で二匹の回りをぐるぐる回って！」

「タツチャーツ！」

オオタチは、高速で二匹のいる場所に駆け、その回りを同じ早さすなわち、高速で回り始めた。

いわゆる”攪乱作戦”とでもいう感じだね。

「ニヨロツ？」

「ハネツ？」

二匹からは戸惑いの色が見られる。

そして、そんな中、回りをせわしなく移動するオオタチを目で追っている。

「わわっ！こういうのってアリーツ！？……でも、まあしょうがないさ！ハネツコ、上空に逃げて！ニヨロモは回転しながら水鉄砲！」

意外な作戦に驚嘆しつつも、クイナは的確に反撃を行おうとしている。



る。

「エイト……」

リナが、パツと僕を見た。

「うん、そうはさせないよ！ゴース、上空から連続でシャドーボール！」

「ゴースツ、ゴースツ、ゴースツ！」

天から漆黒の球が槍のように降り注ぎ、それはクイナのポケモン二匹に確実に命中した。

「はあ、ここまでか……」

僕のゴースによる攻撃で生じた煙を見ながら、クイナはボソリと咳いていた。

「なーんだ。二人ともなかなか強いんだな！」

「そっけでしょ、そっけでしょー？」

「リナ、調子に乗りすぎだよ」

”強い”という言葉に反応したのかリナは、得意気な顔をしている。まあ、一応制してはおいたけどね。

「コガネジムを突破したあたしに勝てたんだ。ジム戦は大丈夫だろうよ！」

「うんうん、そういつてもらえたら自信になっちゃうね、エイト！」

「でも、過度な自信の持ちすぎは止めておいてよ」

「もう！またバカにするんだから〜ッ」

ギヤイギヤイとしながら、僕に抗議するリナ。でも、リナって結構自身の塊のように見えることもあると思うんだよね。

「ははッ前から思ってたけど、二人の会話は面白いよな。まあ、これから先もお互い頑張ろう！それじゃ、またな！」

そっさい残すと、クイナは風のごとく走り去ってしまった。

「わ、ちょっとクイナ待つてよ！！」

とリナがいていたが、クイナの耳には届いていないようだった。

いったいどこへ行くのだろうか。

「ねえ、エイト！明日はジム戦に行こう！」

目を輝かせて僕を見るリナ。これは、もし仮に”嫌だ”といったとしても絶対に行くことになるだろう、というような目だった。

「うん、そうだね」

僕は、一言そいつってクイナが去った方向とは逆に歩き始めた。

第六十八話 VSクイナ！（後書き）

久しぶりということもあってちょっとぎこちない感じだったかもし  
れません。

これからは、最低でも月1更新を目指して頑張りますのでよろしく  
お願いします！

第六十九話　コガネジムのジムリーダーは？　前編　（前書き）

最近いつもいつているようですが、お久しぶりです。

結局1ヶ月以上空けてしまってますみませんでした。

できるだけ最低月1には更新したいと思いますが、今後不定期更新になりそうです。

この小説を楽しみにしている方がいらっしゃるなら申し訳なです。

暗くなってしまうてすみません。それでは、続きをどうぞ！

第六十九話 コガネジムのジムリーダーは？ 前編

「たのも うッ！」

リナの勇ましい声が、朝っぱらからコガネ中に響き渡る。今回はいつも以上に気合いが入っているなあ。

「リナ、さっそくジムに入ろう！」

「うん！行くっ行くっ」

こうして僕たちはコガネジムへと突入することとなった。

のだが……

「ちょっと、ジムリーダーがいないってどうっということさー！」

「いえ、そういわれましも……」

そう、ジムリーダーは留守にしていたのだ。

それで、リナはジムトレーナーの一人に八つ当たりしているようだ。

ジムトレーナーの子がものすごく困っているから早く止めないと！

「リナ、ジムリーダーが留守にしているのはしょうがないよ。……あの、ジムリーダーはいつ頃戻ってくるんですか？」

「あ、はいツアカネちゃん……いえ、ジムリーダーはお昼過ぎには戻ってくるはずです。それに、今のところ他に予約はありませんからすぐにジムバトルを出来るかと……」

「そもそもジムリーダーはどこにいるのさッ？」

僕は、リナのためを思ってジムリーダー　アカネさんというらしいにバトルを申し込むことができそうな時間を聞いたのだが、ジムトレーナーの子の話にあまり聞く耳をもっていなかったらしいリナは、さらに彼女を問いつめた。

「ええつと、確か今日はラジオ塔へ行くといっていたはずですよ」

「ラジオ塔ね！どうもありがとう〜」

ジムリーダーの居場所を聞いたリナは、ジムトレーナーの子に軽くお礼をいうとすぐにジムの入り口のほうへと引き返していった。

おそらくあのままラジオ塔にいくつもりなんだろうけど、ラジオ塔の場所をリナは知っているのかなあ。

僕は、ジムトレーナーの子に迷惑をかけたことを謝って、リナを追いかけるために、コガネジムから出ていった。

「ハア、ここがラジオ塔……やっと着いたよ〜」

「リナ、随分遅かったね」「エイト、その素っ気ないいい方はひどいよー！」

「それは自業自得だって」

「むう〜」

僕たちは、ジムリーダーに会うためにラジオ塔の前へ来ていた。

僕は、コガネジムを出てからすぐにラジオ塔にたどり着いたのだが、リナは、僕の予想通りラジオ塔の場所を知らず、広い広いコガネシティ中を駆け回っていたらしい。

コガネシティはジョウトーの大都会だから、体力があるリナでもかなり疲れたに違いない。

「ハア、まだちょっと疲れてるけど、中に入ってジムリーダーを探そう！」

「そうだね。……じゃあ行こっか」

……ウィーン



ラジオ塔の中は、まだ朝早いぐらいの時間のためか、それほど騒がしくなく落ち着いているように見えたのだが、それも、

「あーっこの問題分からんわー！どないしようー！」

というコガネ弁の女の子らしい子の大声でそのようなイメージは一瞬で崩された。

「ねえ、いったい何をしてるの？」

リナは、僕が気づかない間にコガネ弁の女の子のもとへ駆け寄っていた。

恐るべし、相変わらず行動がはやいよ。

「ん？あんたは？……リナっていうんか。よろしくな。いまならジオカードがもらえるクイズをやっとるゆーてうちももらいに来たんやけど、このクイズの三問目が全く分からんで……あんたこの問題解いてみ？」

どうも、リナはクイズを解くのを押しつけられたみたいだけど、大丈夫なんだろうか。

僕は、不安そうな目でリナを見ていた。

第六十九話　コガネジムのジムリーダーは？　前編　（後書き）

今回は、都合上非常に短い＋中途半端なところできってしまった  
みません。

後編はできるだけ早く更新したいです。

第七十話 コガネジムのジムリーダーは？ 後編 (前書き)

どうもです！

予告どおり自分の中では早めに投稿できたと思います。

では、続きをどうぞ！

第七十話　コガネジムのジムリーダーは？　後編

「問題はどんな内容なの？」

「これを見てみー」

コガネ弁の女の子はリナを手招きして、リナに問題を見せる。

「問題　ボール職人のガンテツさんがモンスターボールの材料に使うのはボンゴレ？はいか、いいえ　で答えよ……　ってガ…ガ…ガ…ガンテツってあのおじいちゃん！？」

リナは、問題を読み終わると、大声を出して絶叫していた。

確かボール職人のガンテツさんは、ヒワダシティでのヤドン失踪事件のときに会ったおじいさんで、リナのことを”ちゃらんぽらん”と呼んでいた人だ。ジムリーダーであるツクシ君には心を許していたが、いわゆる頼りなく、ちゃらんぽらんな僕たちにはかなり冷たかった。

それに、リナとの相性は最悪で、ちょっとしたことでいい合っていたよな……。

「わたし、ガンテツさんのことなんて知らないよ！だからこの問題も分かんない！ねえ、エイト！代わりに解いてよ〜」

ちょ…ちょっと、リナ。今とんでもないことをいったよね。

「リナが解けへんといってがっかりしたやないかー。でも、今度は

あんたが解いてくれるんか！任したでー」

「だってよー」

期待の眼差しで僕を見るコガネ弁の女の子と、完全に僕に問題を解くことを押しつけているリナ。

この状態だと避けては通れないよね……。

そう思いながら僕の顔は、自然と曇っていつていた。

なぜならば、さっきの問題の答えを僕も知らないからだ。

ああ、本当にどうしよう。

でも、悩んだところで頼れる人はいない。

……しょうがない。本当はものすごく抵抗があるけど、ヤケクソだ。確率は二分の一。適当に答えてやる！！

「答えは”いいえ”をお願いします！」

結局僕は、”いいえ”を選択した。理由は問題文にある”ボンゴレ”というものが一体何なのか分からなかったからである。

ああ、お願いだからあっていて下さい！！

という言葉を中心になかで何度も繰り返しながら、目をつぶってお祈りをしていると、

「おめでとーうございます。正解です！」

というラジオ塔の職員の水の人の明るい声がした。

はあ、一かばちかの賭け事のようなものだったけど、答えがあっいて本当によかった。

「よっしゃー！これでやつとラジオカードが手に入るでー！なあ、あんたありがとな。あ、そういえば名前を聞いとらんかった！あんた何っていうねん？」

コガネ弁の女の子は、ラジオカードを即座に受けとると、僕のほうをみてお礼をいった。そして、名前も同時に聞いてきたので、

「僕はワカバタウンのエイトっていいいます。それよりあなたは？」  
といい、目の前の女の子の詳細が分からないので、僕も、彼女の名前を聞こうとする。

「えっ？うち？……あかん、まだ名乗っておらんかったんやな！うちはアカネちゃん！エイト、リナ、よろしくなー！」

「えっ、今アカネっていったよね？ってことは……」

「「ジムリーダー!?」」

僕とリナは、目の前にいる人がジムリーダーだということに驚き、二人声を合わせて叫ぶような声をあげていた。

「そんなに驚くことないねん！というか、あんたらトレーナーさんみたいやな」

「そうです、そうです！わたし達トレーナーです！アカネさん、今からジム戦をお願いしますー！！」

アカネさんの言葉に食らいついたリナは、さっそくジム戦をしてくれと頼んでいる。

「ちょ…ちょっと！それはいきなり過ぎるんちゃうか？」

「そこを何とかお願い〜〜！」

だんだん詰め寄ってくるリナにたじたじなアカネさん。でも、リナの諦めの悪さは天下一品なので、アカネさんが直に折れるのではないだろうか、と、僕は内心思っている。

「あーっ！もう仕方ないわ！昼からジム戦の相手をしたる！昼ごはん食べてからコガネジムに来るんやで〜〜！」

僕の思った通りアカネさんが折れ、リナは、ジム戦をする権利を得た。そして、アカネさんはそういい残したあと、小走りにラジオ塔から出ていった。

「やったっ！エイト、昼からジム戦できるって！」

リナは、うれしさのあまりかなりニコニコしている。

「リナ、アカネさんに感謝しないとダメだよ」

「わかってる、わかってるって〜〜」

おどけたようにいうリナ。

あまり心から感謝しているようには見えないなあ。

まあ、リナはそんな感じの人だからしょうがないといえましょうがない。

「じゃあ、今から最終調整をしてから昼ごはんを食べにいこうか」

「うん！そうしよう！」

こうして僕たちは、ラジオ塔をあとにすることになったのだが、  
そういえば、僕って今日ジム戦できるのかなあ……。  
という疑問が僕の中には残っていた。



第七十話　コガネジムのジムリーダーは？　後編　（後書き）

リナは何とかアカネとジム戦ができそうですね。  
エイトはどうなるのさ、というはなしですが。

それにしても、アカネのコガネ弁を書くのが難しい！  
私は関西人ではありませんし、もちろん回りにもいないのでホント  
苦労しますね。  
イメージをぶち壊していたらすみません。

そして、次回はやっとジム戦突入ですかね……。

第七十一話 タッグ再び！VSアカネへ前編（前書き）

今日は誕生日ということ、0時に更新させて頂きました。

ですが、今テスト期間中ということ、時間の都合上短いです。すみません。

それでは、続きをどうぞ！

第七十一話 タッグ再び！VSアカネ〈前編〉

「早速来たようやね！」

アカネさんの勝ち気な声が聞こえてくる。

そう、昼食を食べ終わった僕たちは、今コガネジムの中にいた。

「アカネさん！早くジム戦しましょうよー！」

リナは、やっとジム戦が出来るということ、かなりテンションが高い。

「ほなほな、そんなに急ぐことないでー。あ、そういえばあんたもトレーナーさんやる？」

アカネさんは、リナをなだめると、今度は僕に話しかけた。  
一体何なんだろう。

「はい、そうですけど……」

「ほな、今日はあんま時間がないっちゆうことで二人まとめて相手したるわ！」

「ええ　　っ！！」

アカネさんのいきなりな発言を聞いた僕たちは、口を揃えて叫んだ。

「……ということは、僕とリナがタッグを組んで戦うってことですよね？」

「そつやで。中々おもしろい考えやろ？」

うんうん、と頷きながら答えるアカネさん。本気でタッグバトルに持ち込むようだ。

というか、僕はいいとして、リナが納得するのかなあ。

「リナは、僕とのタッグでも大丈夫なの？」

僕は、心配だったので、リナに尋ねてみた。

「もっちらん！そういえば、わたし達ってハヤトさんと戦うときもタッグバトルだったし、昨日クイナともしたんだから大丈夫でしょ！」

リナは、意外と乗り気みたいだ。

嫌だ、といわれて面倒ごとにならなくてよかったよ。

「よし！決まりみたいやな。ほな、フィールドに移動するでー！」

「行こう、エイト！」

「うん！」

アカネさんに引き連れられて、僕たちはフィールドに向かった。

「今からジムリーダーアカネと、チャレンジャーエイト、リナとのジム戦を始めます。使用ポケモンはジムリーダーは二体、チャレンジャーは一体ずつになります。なお、ジムリーダー側、もしくはチャレンジャー側のポケモンが全て戦闘不能になった地点でバトル終了です」

フィールドに着いた僕たちは、審判の説明を聞いている。余談になるけれど、審判をしているのは、さっきリナに迫られていたジムトレーナーのようだ。

「よし、絶対勝つよ！」

「いや、うちめっちゃ強いんやから簡単には勝たせんでー！」

リナとアカネさんがフィールド越しにいいあっている。二人とも元気だなあ。

「エイト、サポートよろしく！」

「もちろん、わかってるよ。リナも攻撃はよろしくね」

「えっ？それってどういう……」

「ほな、そろそろはじめよか！ピッピ、ミルタンク、頼むでー！」

リナが、何かいいかけたが、それはアカネさんによって遮られた。一体何をいいたかったのだろうか。

そして、アカネさんが繰り出したポケモンはピッピとミルタンク。どうやらノーマルタイプが専門みたいだ。念のためポケモン図鑑で調べてみよう。

ピッピ　ようせいポケモン

月の光を背中の翼に集めて空中に浮かぶ。満月の夜ピッピが集まってダンスを踊る様子を見ると幸せになれるといわれている。

ミルタンク　ちちうしポケモン

ミルタンクのミルクを飲んで育った子どもは健康でたくましい大人になるといわれている。

「よし、わたしはお願い、ミスゴロウ！」

「ギャーッ！」

リナは、ミスゴロウかあ。なら、僕は……

「いけ、ゴース！」

「ゴース！」

「ええーッ！エイト、なんでゴース！？ノーマルタイプにゴーストタイプの技は効果が無いのに……」

僕がゴースを繰り出したために、戸惑うリナ。

そして、フィールドの反対側ではアカネさんが目を見開いている。

確かに普通はここでゴーストタイプを繰り出す人はあまりいないだろうから驚くのだろう。

「エイト、一体どうするのさ！」

「大丈夫。リナは、いつも通りに攻めていって。僕に考えがあるんだ」

心配そうな様子のリナを見ながら、僕は不敵の笑みを浮かべていた。

第七十一話 タッグ再び！VSアカネへ前編（後書き）

今回ジムバトルまで行き着けなかったな……。

今回は決着が着くところまでは書きたいです。



第七十二話 タッグ再び！VSアカネへ中編（前書き）

今回でジム戦終わりのはずが、中編という形になってしまいました。

今週は、あまり執筆時間をとれなかったので……。

とりあえず、続きをどうぞ！

第七十二話 タッグ再び！VSアカネへ中編

「こっちからいくで！ミルタンク、ミズゴロウに体当たりや！」

「ミルミルミル！」

早速アカネさんが動いた。

ミルタンクは、物凄い勢いでミズゴロウに迫っていく。でも、この攻撃は大丈夫……なはず。

「エイト！」

「わかってる！ゴース、ミズゴロウの前に出て攻撃を受けるんだ」

「ゴース」

ゴースは、その場からスイツと出てきて、ミズゴロウを庇う体制をとる。

実はこの判断は”賭け”なんだ。

「いったい何が”賭け”なのかというのは、ミルタンクの特性が”あついしぼう”と”きもったま”のどちらなのか、ということだ。

ミルタンクの特性が”きもったま”だと、ゴースタイプにもノーマル技が当たるので、僕たちが不利になる。

リナは多分特性のことをよく知っているとこのわけではないので、（ヒワダタウンで少しは身に付いているはずだが）僕が無茶な作戦に出ていることは知らないだろう。

ゴースがミズゴロウの前に出た直後、ミルタンクはゴースをすり抜

ける形となつて、体当たりは不発に終わった。どうやら賭けは僕の勝ちのようだ。

「あんたはうちのミルタンクの特徴を読んどったみたいやな。でもまだまだや！ミルタンクはミスゴロウに転がる攻撃！ピッピはゴースにコメットパンチャ！」

「ミルミルー！！」

「ピイイイ！」

ミルタンクは、自身の体を丸めて猛スピードでミスゴロウに向かってくる。

一方のピッピは、手に彗星を思わせるような力を溜めてゴースに飛びかかるうとしている。

やはり、ノーマルタイプ以外の技ももっていたか。

「エイト、今回は自分でどうにかして！ミスゴロウ、地面に水の波動！」

「ガヤー！」

水の波動の衝撃で、転がるを止めるのがリナの作戦のようだ。僕も、ピッピを何とかしないと。

「わかった！ゴース、ピッピに怪しい光！」

「ゴース」

「わっ、あかん！ピッピ、コースから離れるんや！ミルタンクは、水の波動を打ち破るで！」

「ピッ…ピッ……ぴい〜？」

アカネさんが指示を出すよりも、怪しい光が炸裂するのが早かったおかげで、コメットパンチを受けずにすみ、しかもピッピを混乱状態にすることが出来た。

しかし、ほっとできたのは一瞬で、

「ガヤーツ……！」

「ミスゴロウ、大丈夫？」

ミスゴロウの悲鳴のような声と、リナの心配する声が聞こえてきた。

僕たちが、ピッピを相手にしているときに、ミルタンクが水の波動を破ってミスゴロウに転がるがヒットしたのだろっ。「ミルミルー  
！！」

「ピイイイイ！」

ミルタンクは、自身の体を丸めて猛スピードでミスゴロウに向かってくる。

一方のピッピは、手に彗星を思わせるような力を溜めてコースに飛びかかるうとしている。

やはり、ノーマルタイプ以外の技ももっていたか。

「エイト、今回は自分でどうにかして！ミスゴロウ、地面に水の波動！」

「ガヤー！」

水の波動の衝撃で、転がるを止めるのがリナの作戦のようだ。僕も、ピッピを何とかしないと。

「わかった！ゴース、ピッピに怪しい光！」

「ゴオース」

「わっ、あかん！ピッピ、ゴースから離れるんや！ミルタンクは、水の波動を打ち破るで！」

「ピッ…ピッ……びい〜？」

アカネさんが指示を出すよりも、怪しい光が炸裂するのが早かったおかげで、コメットパンチを受けずにすみ、しかもピッピを混乱状態にすることが出来た。

しかし、ほっとできたのは一瞬で、

「ガヤーッ……！！」

「ミスゴロウ、大丈夫？」

ミスゴロウの悲鳴のような声と、リナの心配する声が聞こえてきた。

僕たちが、ピッピを相手にしているときに、ミルタンクが水の波動

を破ってミスゴロウに転がるがヒットしたのだろう。

僕のゴースは、ゴースト技が主体なので、ほとんど戦力外。リナのミスゴロウが倒されると、ほとんど勝ち目はない。

「うちとしては、先にミスゴロウを倒すべきやろうけど、あんたらにとってはそれは致命傷ってことやねん。ジムリーダー相手に不利なポケモンを出したこと後悔しィや！」

「エイト、本当に大丈夫なの……？」

止めを指すかのようなアカネさんの言葉が僕に突き刺さり、リナの今にも泣き出しそうな顔を見ると、やるせなさがおこった。

やはり、無謀な戦いなのだろうか。

第七十二話 タッグ再び！VSアカネへ中編（後書き）

次回こそはジム戦決着まで書きます！

この頃は週1更新できていますが、来週は更新できるか微妙なところです。ご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2015/>

---

ポケモン ジョウトADVENT

2011年12月11日16時49分発行